

四宮総司は変えたい

もう何も辛くない

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「もうやだこんな糞家系」

「ならお前が跡継ぎになって変えればいいじゃん」

「(?!□?;)!!」

年端もいかない少女に過酷な労働を強いる四宮家に生まれた麒麟児が頑張りながら妹の恋路を眺める話の予定。

目次

四宮総司は変えたい	1
四宮かぐやは選びたい	9
早坂愛は認めない	16
藤原千花は恥ずかしい	23
四宮総司は加わる	30
四宮総司のある日の朝	38
四宮かぐやは聞かせたい	44
四宮総司は対する	50
四宮総司は○○している？	56
四宮総司は気付きたくない	63
四宮総司は男である	71
四宮総司は羨ましい	78
石上優は相談したい	84
藤原千花は誘われる	90
早坂愛は一步踏み出す	97
そして二人は強敵(とも)となる	107
四宮総司は甘えられたい	114
ついにその日はやって来る	122
四宮総司は楽しみたい	129
藤原千花はまた行きたい	135
早坂愛は誘いたい	145
四宮総司は冷やしたい	151
四宮○○は仲良くしたい	158
早坂愛は近付きたい	166

藤原千花は会いたい

174

四宮総司は守りたい

180

白銀圭は諦めない

189

四宮総司は見届けたい

199

白銀御行は見上げたかった

206

早坂愛は言わせたくない

214

四宮総司は勉強したい

222

四宮総司は思い出す

230

藤原千花は呼ばれたい

238

四宮総司は手を出さない

245

伊井野ミコは地雷を踏む

256

早坂愛は吐露する

264

白銀圭は交換したい

271

四条帝は愚痴りたい

279

早坂愛は甘やかされたい

287

そして、藤原千花は目を閉じた

296

早坂愛は往く

304

白銀圭は見られたい

312

藤原千花は盗られたくない

320

少女達は邂逅する

328

四宮総司は身内に甘い

337

四宮総司は撫でたい

345

四宮総司は歌いたい

351

早坂愛は二人が良い

358

四宮総司は兄である

366

四宮総司は元気付かせたい	376
四宮総司は気付かされる	384
四宮総司は落ち着きたい	391
女の子達は話したい	398
四宮兄妹の憂鬱	406
四宮総司は誤魔化せない	415
四宮かぐやは誘いたい	422
後悔は先に立たない	430
四宮総司の奉心祭1	437
四宮総司の奉心祭2	444
四宮総司の奉心祭3	455
四宮総司の奉心祭4	464
氷の仮面は溶かされる	472
四宮総司の修羅場	478
四宮総司の奉心祭5	485
四宮総司の奉心祭6	494
四宮総司の奉心祭7	502
四宮総司は止まらない	511
四宮総司は変わりたい	523
四宮総司は背中を押ししたい	531
早坂愛は単純	539

四宮総司は変えたい

私立秀知院学園。かつて、貴族や士族を教育する機関として設立された由緒正しき名門校である。

貴族制が廃止された今で尚、富豪名家に生まれた将来の日本を背負うであろう人材が多く就学している。

そんな彼らを率い纏め上げる者が、凡人であつて許される筈がない。

「皆さん、ご覧になって！」

不意に声を上げた少女の視線の先から、二人の男女が歩いてくる。

一人は歩く男の一步後ろを優雅に歩く美少女。名前は四宮かぐや。

秀知院学園の副会長。総資産200兆円、ゆうに千を超える子会社を抱える四大財閥の一つ、四宮グループの本家の長女である。

芸事、武芸、音楽、そして学問と全ての分野に於いて他者とは一線を画す結果を残し続けてきた正真正銘の天才。

そしてもう一人、本を片手に歩く男の名は白銀御行。

秀知院学園の生徒会長であり、質実剛健、聡明英知を擬人化したとさえ言われるほどの秀才。学園内試験で一度、ある男から一位を奪い去った事で一気に周囲の生徒から注目を浴びた。

かぐやの様に多才ではないが、勉学一本で畏怖と敬意を集めるその姿は模範的かつ圧巻で、生徒会長に抜擢された。

「いつ見てもお似合いなお二人ですわ……」

「ええ……。神聖さすら感じてしまいます……！」

(神聖)

そんな二人を、人混みの外からこっそり覗く男がいた。

「もしかして、お付き合いなされてるのかしら？どなたか訊いてきてください……」

「そんな！近づく事すら烏澁がましいというのに！」

(近づく事すら烏澁がましい)

二人をこれでもかと持ち上げる言葉に吹き出しそうになるのを堪えながら。

かぐやと似た顔立ちをした男は、そつと、誰にも気付かれずその場から立ち去る。頭の中で、彼らが知らない普段の生徒会長、副会長両名の姿を思い描きながら。

今、日本には鬼才を持った高校生が二人いると言われている。

一人は四糸帝。元々は四宮の分家であったが、本家との方向性の違いから追放という形で離脱、現在はその四宮に迫る規模の企業にまで成長を遂げた四糸グループの跡継ぎである。

そしてもう一人。何という因果か、四糸とは因縁深い相手、四宮家の四男でありながら現当主雁庵から後継者としてすでに指名されている四宮総司。

長女であるかぐやとは双子であり、総司が兄。廊下を歩く白銀とかぐやを物陰から見ている張本人である。

さて、今説明した通り、同年代のトップと云っている二人は互いに因縁のある家同士の生まれだ。四宮と四糸、両家が分断した経緯も相まって、この二つの家の仲は冷え切っている。そしてその事はそうした事情に詳しい者なら誰でも知ってる、常識とすらいえる。

そんな両家の跡継ぎである二人は、今——

『親父がさあ、今度の模試で必ず総司に勝て、でなきゃ今後二度と家の敷居を跨がせないとか騒いでさあ。お袋も親父と一緒にギャーギャー言つてよお。：寿司奢るから負けてくんない？』

「ふざけんな。こつちだつてお前に負けたら本家の糞共が俺をゴミを見る目で見えてくるんだ。寿司程度で負けてなんかやらん」

勉強しながら通話アプリで仲良く会話してたりする。

家同士の仲は冷えきつていても、個人同士は関係なく、周囲には秘

密で二人は友人として付き合いを続けているのだ。

『あーあ、マジでいつまでこんな下らん事引きずってんだろうな。ま、洗脳染みた四宮憎しな教育受けてりやそうなるんだらうけど』

「…その割にはお前は全然そんな事ないよな。眞妃さんも」

『俺はほら、天才だから。周りがどうか基本、どうでも良いから。姉貴は…知らん』

「訳が分からないんだが」

帝と会話しながらも走らせるペンは止めない。ノートにはびっしりと問題集に載った問題の解答が書かれている。

『あ、そういえばさ』

「あ?」

『この前そっちはテストあったろ? どうだった?』

「…」

ぴた、と総司の手が止まる。

「別に。いつも通りだけど」

『いつも通り、ねえ…。白銀くん、だっけ。去年総司に勝ったの』

常に一番をとり続けてきた総司が最初に敗北したのは中学二年の時。まだ小学生から続いていた試験の連続満点記録が途切れてなかった頃。その全国模試で、総司は初めて満点を逃した。

といっても総司が間違えたのは五教科の中でたった一問。普通ならそれでも圧倒的一位に立っているはずだった。普通なら。

そう、帝である。初めて総司が満点を逃した試験で、帝は満点をとったのだ。これが、総司が人生で初めて喫した敗北である。

それからは総司と帝、二人は火花散る争いを毎度の全国模試で繰り広げる事となる。時には勝ち、時には負け。初めは勝って当然を義務付けられた自分に敗北を押し付ける帝を憎たらしく思っていたものの、今では良きライバル兼友人として関係を保っている。

話がずれたが、総司が敗北を喫した相手が帝以外にもう一人いる。それが秀知院学園現生徒会長、白銀御行だ。

その日、ある事情があり総司は寝不足だった。倫理のテストで解答が途中からずれていた事に気付かないまま提出した結果、総司は初め

て学園内で一位の座を他者に明け渡したのだ。

別に寝不足を言い訳にするつもりはない。第一、あとで知ったのだが、白銀もテストの日は必ず強烈な睡眠不足を抱えて臨んでいるのだ。あの日の試験も例外ではない。その状態で自分はミスを犯し、白銀はミスなく解答した。完敗である。

『いやー、あの時はマジで驚いた。総司が俺以外の奴に負けたってんだから』

「…俺だって万能じゃない。負ける事くらいある」

『その台詞、三年前のお前に聞かせてやりたいよ』
「うるせえ」

からかい混じりに言ってくる帝に短く痛烈に返してから、総司はペンを再び走らせる。

少しの間、総司の部屋にはペンが走る音しかしなかった。しかし不意に、総司のスマホからメッセージの通知音が鳴った。

「…かぐやから呼び出した。行くわ」

『んー、了解。じゃあ今日はここまでだな』

椅子の背もたれに寄りかかりながら両手を上げて体を伸ばす。今開いている問題集のページにノートを挟んでから閉じ、机に置かれたスマホに人差し指を近付ける。

「じゃあな。次の模試の景品はさっきのお前の案を借りて寿司でどうだ？」

『おう、それで良いぜ。つつても、模試はもうちよい先だけどなー。おやすみ』

「ん、おやすみ」

挨拶を交わしてから通話を切り、スマホケースを閉じる。そのままスマホはズボンのポケットに入れ、総司は部屋を出た。

「もう戻って良いぞ。〴〵苦労だった」

「かしこまりました」

直後、総司の部屋の前に立っていた壮年の男にそう告げる。スーツ姿の男は総司に一言返事を返した後で、腰を折って頭を下げる。

総司は男の綺麗なお辞儀を見もせずその場から立ち去る。

先程の男は本家、正確には父から遣わされた総司のお付きだ。部屋で帝と話す際はこの男に部屋の前で見張りをさせている。

いくら父から許可は貰っているとはいえ、その事実を知っているのは本家の中でもほんの一部。四条家に関して帝が総司と友好関係にあると知っている者は一人もないだろう。

そんな状況で、たとえば自分の部屋の中とはいえ警戒もせず敵(笑)と通話する訳にはいかなかったのだ。

「さて、今日はどんな笑える話を聞かせてもらえるかね?」

薄暗い廊下を進んだ先にあるのは、総司の部屋の扉と似た扉。この扉の向こうが妹、かぐやの部屋だ。

総司は扉の前に立ち、拳の裏で軽くノックする。

「おーいかぐやー。お兄様が来てやったぞー」

僅かな沈黙。その後、扉が開いた中からメイド服姿の少女が姿を現した。

「早坂。いたのか」

「ええ。かぐや様の愚痴に付き合わされていました」

「そりやまあご苦労なこつて」

「何をおっしゃっているのですか。これから貴方も付き合わされるのですよ?」

「…だよな」

無表情のまま淡々と告げる少女、早坂愛に総司はつい苦笑を浮かべる。

早坂が開けた扉を抜け、かぐやの部屋へと入る。

総司を呼び出した張本人であるかぐやは、壁際にある天蓋付きベッドに腰掛けていた。

学校では縛って纏め上げていた黒髪は今ほどいており、ネグリジェに短パンというラフすぎる格好で総司を出迎えた。

「来ましたか」

「ああ来たぞ。で、今日はどんな面白可笑しい話を聞かせてくれるんだ?」

「面白くなんてありません!可笑しくもありません!今日は本当にも

う少しだったのにつ！」

あーだのこーだの大声で愚痴るかぐやに、かぐやの隣に腰掛けた総司は言葉を挟まず、うんうんと頷きだけで相槌を打つ。きつと、早坂にも同じ事を愚痴ったんだろうななんて考えながら。必死に、鋼の理性で今すぐに笑い出したい衝動を抑え込みながら。

「全くもう、藤原さんは！いつもいつも後少しのところで…！」

「うん、そうだな。ホント困った奴だな藤原は」

そして一通りかぐやが鬱憤を吐き出し終えたところで総司はようやく口を開く。勿論、開いた口から笑い声が飛び出ないよう注意しながら。

（とつとり鳥の助って何？映画なの？聞いたことないんだけど。てか藤原の家ってそういうの禁止してるよな？かぐやが仕込んだチケツトはともかく、鳥の助のチケツトはどこから手に入れたの？）

藤原千花。かぐやと同じ生徒会メンバーで、書記を務めている生徒である。なお、書記として働いている所を総司は見た事はなく、聞いた事もないという謎多き生徒である。

かぐやの口振りから解る通り、かなりの頻度でかぐやと白銀を引つ掻き回している様で、今年中に藤原に振り回されるかぐやと白銀の姿を見たいというのが総司の目標の一つだったりする。

「大会会長も会長よ！会長が私に惹かれているのはもう解ってるの！これ以上意地を張ってないで告白してくれば良いのに！」

「…かぐやは違うと？」

「わ、私!?何で私!?私は違うわよ！別に会長の事なんて…」

「事なんて？」

「こ、事なんて…。す、好きなんかじゃ…！」

さすがに虐めすぎたらしい。顔を赤くして、両目を潤ませながら言葉に詰まるかぐやの姿を見て総司は芝居がかった所作で両手を上げる。

「あー、解った。かぐやは別に白銀の事を好きじゃない。もう解ったから泣くな」

「な、泣いてなんかないわ！わ、解ったなら良いのよ。別に私は会長な

んて…」

せつかくフオローしてやったというのに、どうして自分からループに飛び込んでいくのか。まあ先に問いかけた総司が悪いのだが。

「おいかぐや、もう10時半だ。そろそろおねむの時間だぞ」

「赤ちやん言葉を使わないでくれるかしら？…そう、もうこんな時間なのね。なら今日はお開きにしましょう」

総司の言葉を受け、時計に目を向けたかぐやも今の時刻を察する。普段かぐやが就寝する時間は11時前後。そろそろかぐやが眠くなり始めてもおかしくない時間である。

「おやすみ、かぐや。早坂も。おやすみ」

「ええ。おやすみなさい、総司」

「お休みなさいませ」

手を上げながら挨拶をする総司に返事を返すかぐやと早坂。総司に向かって手を振るかぐやと腰を折ってお辞儀をする早坂を横目で見遣ってから、総司はかぐやの部屋を出る。

それから足を向けるのは勿論、自室である。

今日はもうしなくてはならない事はない。父から受けた依頼はもう熟しているし、他派閥の動向の報告ももう受けている。

強いて言うなら残すは眠るだけ、というべきか。

「今日は早めに休めるな」

歩きながらポツリと呟く。普段は今頃、父からの依頼に追われているか、勉強のノルマに追われているかのどちらかだ。

だが今日は父から受けた仕事の量が普段よりも少なく、珍しく目を跨ぐ前に眠れそうだ。…父から仕事を請け負うようになってから初めてじゃなからうか。こんなに早く眠れるのは。

本家に多くいる糞共よりはまだマシな父でさえ、この遵法意識の無さである。

「マジで俺が後を継いだ時には四宮をホワイト企業にしてやる…」

総司と同じように、幼少の頃から激務に身を投じるあの少女のために。そして何より、同じように学生の身でありながら社蓄同然の生活を送る自分のために。

四宮総司は変えたい。

自室の前まで来た総司は流れるように扉を開け、部屋の中へと入っていった。

四宮かぐやは選びたい

四宮総司。

言わずとも知れた四宮の麒麟児。勉学、芸事、武芸、音楽と全ての分野に於いてトップクラスの功績を残した、四宮最高傑作とも呼び声高い鬼才。

弱冠15才で四宮家当主であり父、雁庵から次期後継者と指名され、いずれ来る当主受け継ぎの日に備えて日々修行中である。

そんな彼だが、一つ、自分ではどうしようもない欠点というべきか、弱点というべきか、そういった要素を抱えていた。

「…懲りもせずのままあ」

「如何なさいますか」

「いつも通りで。誰にも知られず、犯人一味には寂しくご退場願おう」
光が届かないその瞳に映るのは、一枚の白い紙。そこには新聞紙を切り取って作った文が書かれていた。

———今すぐに次期後継者を辞退しろ でなければ貴様も大切な妹も命の保証はしない

典型的な脅迫文である。四宮の次期後継者に向かって、何と命知らずな輩だろうか。

だが、こんなのは別段珍しい事ではない。総司が後継者に指名されてから、こんな事は日常茶飯事である。

先程の総司の欠点の話に戻るが、総司とかぐやは正妻の子ではない。所謂妾の子なのだ。

総司が生まれ成長するまで、四宮の後継者は長男の黄光だと言われていた。長男であり、正妻の子であり、そして四宮の教育を受けて能力も申し分ない。

次期後継者は、黄光で間違いないと言われていたのだ。

だが、四宮総司は生まれた。

四宮の教育を受けながら、それ以上の能力を自力で身に付け、15才の時、中等部卒業と同時に当主から次期後継者の指名を受けた。

当主雇庵の判断は間違っていない。より優秀な方が当主として相応しい、それは至極当然の事と言えるだろう。

それでも、人間というものは理屈だけでは納得できない生き物だ。

総司は雇庵がある日突然見つけてきた妻の子供。ただでさえ、雇庵が総司とかぐやの母を妾にしようとした時も騒ぎになったというのに、その子供を次期当主に指名するなど、その時の比ではない騒ぎが起こった。

決して総司を支持する者がいない訳ではない。基本、雇庵の近くにいる使用人達は総司派の上、四宮傘下の企業の殆どが雇庵の決断を支持している。

しかしそうは思っていない者も多くいるのも事実。現に、黄光が総司の傍にスパイを送り込んでいる。まだ全面戦争をする気はないためある程度放っておいているが、やがて総司派と敵対体制をとっている派閥とのいざござは避けられないだろう。

いずれ来るだろう大きな騒動に憂鬱になりながら、総司は脅迫状を背後に立つ壮年の男に手渡す。

先日、総司が帝と話す最中に見張りを任せていた男だ。

初めは総司自身が犯人を突き止め、犯行の証拠とついでに犯人の家系が抱える黒い事情を突きつけて四宮の奴隷にするか海外に島流しにするかしていたのだが、今ではそういった制裁はこの男に任せている。

無論、制裁を加える際は総司にこの方法で良いか確かめるのだが。

「はてさて、今回は誰の息が掛かっているのやら…」

溜め息と共に吐き出される言葉。大体の予想はついてはいるが相手もさるもの。犯人との繋がりやの証拠などないだろうし、何よりいようがいまいが影響が少ない相手を選んで送り出している。

犯人はすぐに突き止められるだろうが、黒幕までは手が届かない。相手からすれば、どれだけ攻撃を加えても総司が揺るがない。

そうした鼯ごっこがずっと続いていた。

「…で？また雲鷹兄上がハッキング仕掛けてきたって？」

不意に総司が先程とはまた違った話を切り出した。

「正確には、雲鷹様の部下が、ですが」

「んなのはどっちでも良いんだよ。それよりも」

「はい。今回もダミーに引っ掛かったようです」

「…マジちよつろ」

かなり物騒な会話の内容だが、総司に困った様子や焦った様子はまるでない。それどころか、どこか面白気に笑みさえ浮かべている。

「如何なさいますか？今回も放置なさるのです？」

「うん。あれが俺の傍にいるものに手出しさえしなきゃ基本好きにさせてやるさ」

背もたれに寄りかかり、足を組んで、僅かな空白の後、総司は呟く。

「俺は身内には優しいから」

「…」

総司は知らない。総司の背後に立つ男が、小さく身震いした事など。

「ん？」

「何事だ」

直後、総司の部屋の扉をノックする音が室内に響いた。

総司は一旦机の上に置いてあつた報告書やデータを引き出しへと仕舞ってから振り替える。

「早坂です。総司様、かぐや様が御呼びでございます」

「そうか。少し待っていてくれ、すぐに行く」

ノックをしたのは早坂だった。何やらかぐやが呼んでいるらしい。

早坂を扉の向こうで待機させ、総司は立ち上がる。

「一時間後くらい、もっと早いかもしれないがそれまでには戻る。ここで待っている」

「承知致しました」

男の返事を背に、総司は部屋の扉を開ける。

「待たせたな」

「いえ」

そして部屋の前で待っていた早坂と簡潔に言葉を交わしてから、二人は歩き出す。

「それで、かぐやはどうした？今日は確か白銀と映画に行く日じゃなかったか？」

自分の一歩後ろを歩く早坂に問いかける総司。

思い出すのは三日前、ちよつとしたハプニングはあったが策が成功し、白銀に映画のチケットを渡せたところ機嫌に語るかぐやの笑顔。

マジで何で告白しないの？怖いの？実はフラれるのが怖いのか？という本音を心の中に留めたのは言うまでもない。

「総司様、間違えてはなりません。会長と映画館で偶然出会す日、です」

「…そうだった。今日は白銀と映画館で偶然出会す日だったはずだが、どうしたんだ？」

めんどくせ、と口から出そうになったのは秘密。

「それが、かぐや様が着ていく服に悩んでしまつて」

「は？」

「男性側の意見を聞きたいと、総司様を呼んでこい、と」

「…戻っていい？」

「ダメです。後で私が文句を言われてしまいます」

想像以上にどうでもいい相談内容だった。いや、かぐやにとってはとても重要な事なのだろうが。

「あー、ほら、あれだ。かぐやなら何着ても似合うし、白銀もそう思うと思うぞつて伝えてくれれば」

「シスコン発言乙です。ですが、それを総司様御自身から聞かなければかぐや様は納得しないでしょう」

「…俺、結構忙しいんだぞ？」

「御愁傷様です」

表情一つ変えない早坂と、沈んだ様子で溜め息を吐く総司。やがてかぐやの部屋の前まで辿り着き、早坂が総司の前に出て扉をノックする。

「かぐや様。総司様をお連れ致しました」

「入って」

中から聞こえてきたかぐやの声は微妙に震えていた。どうやら相当テンパっているらしい。

早坂が扉を開け、先に総司が中へと入る。背後からする扉が閉まる音を聞きながら、総司はかぐやの部屋の惨状を目にした。

「汚なっ」

床中服だらけだった。どんだけ迷ってたんだ。

「彼氏との初デートを控える彼女か」

「だ、誰が彼女ですか！それにデートではありません！今日は…」

「あー解ってる。今日は白銀と偶然映画館で出会す日なんだろう？知ってる知ってる」

顔を真っ赤にして言い返そうとしたかぐやを宥め、改めて部屋を見渡す。

私物が少なくいつも片付いていたあの部屋はどこへやら。散らかった服の中心にいるかぐやは、何も知らない者が見れば完全に片付けられない女である。

「着てく服に悩んでるって？にしたって散らかし過ぎだろ」

「し、しようがないじゃない！会長と会うのに、変な格好をしていく訳にはいかないんだから…！」

「…」

白銀と会うのは偶然の上の結果論で、別に予定にある訳ではないのでは？という突っ込みを総司は飲み込んだ。

「これは？」

「これ？…少しスカートが短くないかしら」

総司が手に取ったのは近くにあった白いワンピースだった。手に取ったワンピースを広げて持ち上げ、見せながら訝しげに総司が持つワンピースを見るかぐやに総司は言う。

「かぐや。男はな、短いスカートが好きな生き物なんだ。それはきつと、白銀も例外じゃない」

「なん、ですって…」

心の中で白銀に謝る。

勝手に短いスカート大好きな変態認定してすまん白銀。そしてかぐやがそれを信じちやつてすまん白銀。

「かぐやがこれを着ていけばきつと白銀もメロメロだ」

「めろめろ…」

「そう、メロメロだ」

顔を赤くして、目をぐるぐるさせて、かぐやは一体何を想像しているのだろうか。

いけない、少しやり過ぎたかもしれない。でも嘘は言っていない。男は短いスカートが好きだ。このワンピースがかぐやに似合っていると本気で思ってる。

だから早坂さん、そんな目でこっち睨まないでください。

「…解りました、これを着ていきます。早坂」

「…かしこまりました」

決心はついたらしい。かぐやはワンピースを総司から受け取り、早坂を近くに呼ぶ。

総司はすぐにその場から離れ、何も言わずに部屋を出る。これから行われるのは、男子禁制の儀式なのだから。

「あら、待っていたの？」

「まあな。俺が選んだ服なんだし」

総司が部屋を出てから約十分。かぐやが早坂を伴って部屋から出てきた。総司が選んだ白いワンピースを着て。

「うん。やっぱり悪くないじゃん」

「そう？なら良いのだけけど」

本心である。ザ・大和撫子なかぐやにはこうした白い服が良く似合う。

かぐや自身もそう思った様で、このワンピースを不満に思っている風は見られない。後は、白銀の反応だが――

(ま、こればかりは個人の好みだからな)

好き放題言っていた癖に、心の中で逃げ道を作る。まさにゲスの極みである。

「それじゃあ行ってくるわ。そろそろ行かないと最初の上映に合

わないわ」

「え？最初の…ああ、なるほど…」

何故そんな早くから？という疑問はすぐに氷解する。

つまり、白銀を待ち伏せるつもりなのだろう。かぐや本人は否定するだろうが。

「いつてらっしゃい」

「ええ。行ってきます」

いざ、出陣するかぐや。見送る総司。

「」

一瞬交わる二つの視線。総司と早坂はその僅かな間にアイコンタクトを交わす。

—— 解っているな？

—— はい。報告をお待ちください。

かぐやと早坂の姿が見えなくなる。それから、総司もその場から立ち去り、自室へと戻るのだった。

後に来るだろう、早坂の報告を楽しみに思いながら。

『会長とは無事に合流できたのですが、何故か前後の椅子に座ってました。本当に不思議で堪りませんでした』

早坂からこんな報告が来たのが総司が部屋に戻ってから五時間後。そしてその理由を知ってお腹が引き攣る程に大笑いしたのがそれから更に二時間後の事だった。

いや、本当にこんな調子で白銀を告らせる事が出来るのだろうか。前途多難だと思いながらも、笑いが止まらない総司なのだった。

早坂愛は認めない

「…どしたの、これ」

呆然と、目の前の光景を見ながら総司は隣のかぐやに問い掛けた。

「どうも料理人の興が乗ってしまったようで」

「…」

「何ですか？」

「いや別に」

今、総司とかぐやは学園の教室前の廊下に立っている。午前の授業が終わり、さて今日届く弁当は何だろな、と心なし楽しみにした所で総司の分と一緒に弁当を受け取ったかぐやが届けに来たのだが――

「俺のは何でこんなにでかいの？」

箱が異様にでかい。しかも何故か総司のだけ。なのでこれはどうしたのかとかぐやに問いかける。

「貴方はそれくらい食べるでしょう？」

「いや食べないから。こんなに食べないから。どうすんだよこれ…」

いつも朝食と夕食は一緒に食べているのに、食べられる量を把握されてないとか。…実は家の料理人、雲鷹兄上の息が掛かってる奴だったりするのだろうか。だからこれは実は俺に対する嫌がらせだったり？

「それより早く受け取ってください。私はこれから生徒会室に行かなければならないのですから」

「へいへい」

急かすかぐやから素直に弁当箱を受け取る。

生徒会室、いつもかぐやはそこで昼食を摂っているが、やはり今回は白銀絡みでこの弁当になったのだろうか。

立ち去るかぐやを見送ってから、いつの間にか集まってきた野次馬を見もせず教室へと戻り、自分の席に腰を下ろす。

机にかぐやから受け取った弁当を載せ、包みを開け、蓋を持ち上げる。

「…」

いや、いくら何でも興が乗りすぎていっているのではないだろうかかぐやさん。あなたホントに一体何があったんですか？

箱の中には美しいとすら思える料理の数々が並んでいた。伊勢海老に牡蠣、ホタテに鯛と見事なまでの魚介尽くしである。というか、これ――

(やっぱ白銀絡みじゃねえか)

何という事でしょう。箱に並んだ料理はどれも、白銀御行の好物ではありませんか。

うちの妹が生徒会長を好きすぎる件について。

「…」

パタリ、と蓋を閉じる。再び包みを結び、それを持って席を立つ。不躰に見てくる生徒達の間を通り抜け、総司は教室を出た。

「かぐやには申し訳ないが、生徒会に助けを所望しよう」

本当に、本当にかぐやには申し訳ないが。いや、そんな事これっぽっちも思っていないが、総司は生徒会に弁当消費の協力を仰ぐ事にした。

かぐやからの施しは受けられない白銀でも、総司からの施しは多分受ける。藤原は言わずもがな。完璧な作戦である。

「おっ？」

だが、総司が生徒会に向かっていている時だった。正面から明らかに校則違反の短いスカートにしたサイドポニーの金髪少女が歩いてきたのは。

「早坂、良いところに」

「総司様？」

周囲に誰もいない事を確認してから、総司は早坂に声を掛ける。恐らく、生徒会室へ行くかぐやを見届けてから戻る途中だったのだろう。

「何故ここに？」

目を丸くして、驚いた様子の早坂が問いかけてきた。その問いに、「これ。生徒会で食うの協力してもらおうと思って」

簡潔に答える総司。早坂は総司の手にある大きな包みを見る。

「…どうしたんですか、これ」

「知らん。スパイの嫌がらせかもしれない」

「その冗談、笑えませんよ」

「そうか。すまん」

溜め息を吐く早坂。謝罪しながらも、全く反省する様子がない総司。

「それで、私に何か用ですか？」

「おおそうだ。さっきまでは生徒会に行こうと思ってたんだけどさ、多分かぐやが何か企んでんだよな。邪魔するのも悪いし早坂。手伝ってくれ」

「私ですか。…別に構いませんが」

了承は得た。もう逃がさんぞ。

秀知院学園の屋上は基本、常に解放されている。無論、放課後は鍵を掛けているが。

そんな屋上に今、二人の男女の姿があった。総司と早坂である。二人は屋上で腰を下ろし、二人で同じ弁当をつついていた。

「本当に、何故総司様の分がこんなにも多いのでしょうかね」

「知らん」

むぐむぐと咀嚼しながら早坂の疑問に簡潔に答える。答えになつていないが。

「まあ、かぐやの分は白銀に分ける前提で作らせてるんだろうが」

「でしょうね。総司様のよりは小さいとはいえ、かぐや様のも少々おおき…すぎてる…」

早坂の返答に耳を傾けながら、牡蠣を堪能していたその時、早坂の様子がおかしい事に気付く。

何やら俯いて、何かを考えている様子。少しその顔が赤く見えるの

は気のせいだろうか。

「どうかしたか？」

「い、いえ。何も…」

声を掛けると、早坂は慌てたように勢い良く顔を上げ、ブンブンと頭を振る。何を焦っているのか。

「そうか。それならいい」

だかそこは四宮総司。総司はここで体調でも悪いのか？と女の子の額に手で触れたり、自分の額と触れ合わせたりするような鈍感系主人公ではない。きつと、何か他人に触れられたくない事でも考えているのだろう。早坂が携わっている仕事はそういった事が満載だ。

立場が上の者は、下の者を気遣い、扱わなければならぬのである。

「…っ！」

それは、突然の事だった。総司は牡蠣を飲み込み、屋上の入り口へと視線を向ける。

総司の目が、ドアノブが捻られる所を捉えた。

(まずい)

心の中でそう呟く。扉の奥から誰かの話し声が聞こえた気がして振り向けば、案の定である。

現在、空は今にも雨が降り出しそうな曇り模様なため、今日は屋上に来る者はいないだろうという考えは早計だったか。

(どうするどうするどうする)

総司の脳内で様々な考えが巡る。この危機を乗り切るにはどうすれば良いか。

すぐに物陰に隠れる——時間が足りない。

柵から飛び降り、捕まってぶら下がって自分だけ姿を隠す——

——弁当を片付ける時間がない。この量の弁当を早坂が持っているのは余りに不自然。

それを早坂にやってもらう——仮に、屋上に来た生徒が休み時間ギリギリまで居座る場合、早坂の体力が足りない。

その他にもおよそ30通りの作戦が総司の頭の中を過るがどれも不安要素があり、確実に乗り切れる保証がない。

(仕方ない、か)

やむを得ず、総司は最初にボツにしたはずのとある策を採用する事にした。これなら確実にこの場は乗り切れる。だが、この場を乗り切った後、どうなるかが不安だった。

しかし、この場を乗り切れなければ明日がない。早坂の。とにかく、何としても明日を守ってやらねば。早坂の。

ちなみに、この思考時間はコンマ5秒程である。

「すまん。文句なら後で聞く」

「え…、総司さま…っ」

一言断つてから、返事を待たずに腕を掴み早坂を立ち上がらせる。その際、今自分達がいる位置と屋上入り口との位置関係を確かめるのを忘れない。

そして早坂を柵側に立たせ、自分の方へと向かせる。総司は背中を入り口の方へと向けてから、顔を早坂の顔の至近距離まで近付けた。

「っ!?!っ!?!?!」

「すまん。マジですまん。今は我慢してくれ」

背後で扉が開いた音と、数人の足音、男子生徒達の話し声が聞こえてくる。

だがすぐ後、話し声が止み、静寂が流れる。かと思えば――

「二二も、申し訳御座いませんでしたあああああああ!!」「二二」

なんて叫び声を上げながら全員引き返して行ったのだった。どうやら作戦は成功したようである。

「ふう…。何とか誤魔化したか」

「…」

総司がした事を簡潔に説明するなら、キスをしているフリである。扉の傍に立つ生徒達からは総司の顔は見えない。早坂の顔も、総司の頭に隠れて見えないはずだ。強いて言うなら、早坂のサイドポニーまでは隠せなかったため、そこから特定されればもうお手上げなのだが…、そこまで詳しく見ている余裕は彼らにはなかったはずだ。

出来る限りの事はした。後は祈るだけ。

(もし失敗してたら、かぐやに全力で謝り倒さないとな…)

早坂から一步離れ、扉の方へ注意を向ける。どうやら本当に逃げていったらしい。とりあえず、一息吐いても良さそうだ。

「…早坂?」

だがどうにもおかしい。別におかしな事はないはずなのだが、おかしい。早坂がピクリとも動かない。呼び掛けても何の反応も示さない。

「おーい早坂ー? 早坂愛さーん?」

早坂の顔の前で手を振ってみる。すると、

「総司様」

「おっ? お、う。どうした」

急に口を開く早坂。いきなりの事に驚きながらも、総司は早坂に返事をする。

「用事を思い出しました。申し訳ないのですが、失礼させて頂きます」

「え? あ、え? ちよつと?」

言うや否や、早足で歩き出して屋上から去っていく早坂。ボタン、と扉が開く音が響き渡る。

「まだ弁当、残ってるんだけどなー!」

総司は昼食を食べ切る事は出来なかった。

「…」

少女の脳裏で、至近距離から見た男の顔が過る。

「~~~~~!」

立ち止まり、腕で顔を覆う。

熱い。どうしようもなく顔が熱い。

「違う…」

少女は呟く。

「違うったら違う…！」

少女は認めない。

「かぐや様もかぐや様だ…。変な気を回さないで会長の事だけ考えてれば良いのに…！」

矛先が少女の主人に向けられる。

本当に最初は何も気付かなかった。だが、総司の弁当がいつもより大きかった事。そして、今日のかぐやの弁当が白銀に分ける事前提で多目に作られている事を思い出し、かぐやのもう一つの狙いに気付く事が出来たのだ。

「私は何も思っていない…」

少女は何度も、何度も、自分に言い聞かせるように繰り返す。

「違…！」

早坂愛は認めない

藤原千花は恥ずかしい

本日の授業を全て熟して放課後。総司は今、生徒会室に向かっていた。目的はあれである。昼に残った弁当の処理である。生徒会室で食べさせてもらおうと考えたのである。

突然早坂が立ち去ってから何とか魚介類を使った料理だけは食べ切ったため、他の料理ならばまだ食べられるはずだ。

時刻は所謂おやつの間と呼ばれる時間帯であり、総司も小腹が空いている。残った量的にも丁度：良いんだろうか。夕食に影響出ないだろうか。

(まあ、不安だったら藤原にでもくれてやればいいか)

多分藤原なら喜んで飛び付いてくる。はず。メイビー。

「…?」

生徒会室の前まで来た総司だが、扉を開けようとした所で中から声がして動きを止める。

誰かが先に来ていたとしても不思議ではない。ないのだが、その先に来ていた誰かが学校のチャイムの声真似をしていたら動きが止まるのも仕方ないのではなからうか。

(何だ…、いやホントに何だ!?)

総司が動きを止める中、中から聞こえるチャイムの声真似はまるで壊れたラジオの様に繰り返され、かと思えば突然聞いた事のない歌が始まった。

ここで総司は限界を迎えた。悪いとは思いつつ、静かに扉を小さく開けて中を覗き見る。

(藤原…?)

中にいたのは、歌を続けながら桃色の髪を揺らして踊る少女の姿。生徒会書記、藤原千花である。その彼女が今、何故か踊っている。

元から色々と突飛な行動をする少女だったがこれは一体。

(何だその帽子…。あ、投げた)

物は大切にしなさい、と心の中でツツコミを入れる。そんな中でも藤原の歌と踊りは続く。

(…あ、終わったか？ならちよつと時間置いてから入る…、何をぶつぶつ言つて…え、それ間奏だったのか？うわつ、二番始まった!?)

一旦歌に区切りが付き、これで終わったと思いきや間奏へと入り、そのまま歌は二番へと突入する。勿論、踊りも継続中である。

(俺、何見せられてんだろ)

藤原は誰かに見せるために歌って踊ってる訳ではない。誰もいない生徒会室で退屈を紛らわせてるだけなのだろう。総司はただそれを覗き見してるだけ。

だが、想像してほしい。知り合いの女の子が、オリジナルの曲を作つて、それを一人で歌いながら踊ってる所に出会った自分の姿を。

そして一つだけ言わせてほしい。

「もう昼下がりにじゃないぞ…。バリバリ夕方に突入してるぞ…」

「何をしているのですか？」

「うおっ!？」

突如背後から聞こえる声。驚いて振り返る総司。その際に手が離れた事で、音を立てて閉まる扉。

「あ」

「総司？生徒会に何か用か？なら中に入るといい」

総司の背後に立っていたのはかぐや、そしてその隣には白銀の姿も。

白銀は総司の中に入るよう促す。だが、総司は手を右往左往させるだけで何もできない。

もし、中でまだ藤原が踊ってたなら。音を立てて扉が閉まったものの、もし歌声に混じつて藤原が気付いてなかったら。

ここで中に入れば、総司だけでなく二人もあの踊りを目の当たりにする事となる。藤原の黒歴史が、更に大きくなるのだ。

(…守らなきゃいけないものが、ここにはある)

総司は扉に背を向け、かぐやと白銀に向き直る。
そして、ゆつくりと口を開いた。

「悪いけど二人にはついてきてもらいたい所が…」

「何をしてるんですか。早く入りなさい」

かぐやが扉を開けていた。かぐやが総司の熱い決意を粉々に踏み躪った。

「おいしいいいい！かぐやお前ええええええええ！」

「な、何ですか!?!急に大声を出して…」

叫び声を上げながら、戸惑うかぐやを押し退けて中の様子を見る。

「かぐやさん！会長！総司君も来たんですか？」

藤原がいた。いや、いるのは当然なのだが、ソファに座っていたのだ。つい先程まで、部屋の中央で踊り回っていたはずなのに。

藤原は普段の明るく柔らかな笑顔を浮かべて総司達を出迎えた。

「ええ。一体何をしに来たの?」

藤原の疑問符を含んだ台詞にかぐやが反応する。

「これだよ。結局食べ切れなかったからここで食べようと思って」

「お弁当ですか?凄く大きいですけど…」

総司は藤原の対面のソファに座り、鞆の中から包みを取り出す。まだ包みの中は露になってないが、総司の台詞から予想できたらしい。

藤原は総司が取り出した包みの中身を見事に当てた。

「あら。残してしまったの?」

総司の返答を聞いたかぐやが目を丸くして驚いた様子を見せる。

「いや、無理だろこれを一人で食べるのは。…まさか白銀なら出来るとかいうんじゃないだろうな」

「いやいや、俺だってそれは食い切れん」

驚くかぐやをジト目で睨みながら言う総司。そして巻き込まれた白銀が苦笑を浮かべながら総司の疑問を否定した。

「まあ、最初は助っ人と二人で食べてたんだけどな」

「その助っ人は?」

「用事思い出したって途中で戻ってった」

「…」

何故かかぐやが苦虫を噛み潰したような顔をした。

「どうしたんですかかぐやさん?」

「いえ、何でもありませんよ」

だがすぐに取り繕った。かぐやは藤原の問い掛けに笑顔で答える。そこまで気にはしていなかったのか、藤原はかぐやのその一言で引き下がり、かと思えば不意に体を乗り出して顔を総司の方へと寄せてきた。

「総司君…」

「ん? どうした?」

「さっきの、見ました?」

「…」

さて、これは正直に答えるか否か。鬼才、麒麟児等と呼ばれる総司でさえその答は解らない。

藤原の事を思うなら、やはり見てないと嘘をつくべきか。しかし生徒会室の前で何かをしていた事はかぐやと白銀に知られている。

それに、藤原も半分察しているだろう。そのはず、多分。

「…あれだ。なかなか可愛い踊りだったぞ、うん」

「うわああああああん! やっぱり見てたんですね! 信じてたのに!」

総司の返答に絶望し、泣き叫ぶ藤原。

慌てる総司。何事かと振り向くかぐやと白銀。

「ど、どうした藤原書記?」

「総司君に私の恥ずかしい所を見られたんですう! もう責任とつてもらうしかないですよわああああああん!」

「総司?」

「ち、違う! いや、違わないけど違うんだ! あれはただの事故っていうか…、それに藤原の言い方には若干どころかかなりの語弊がある!」

白銀の問い掛けに泣きながら答える藤原。につこりと笑顔を浮かべるかぐや、そして狼狽しながらかぐやの問いに答える総司。

生徒会室はかなりカオスな事になっていた。

「…疲れた」

「何というか…、御愁傷様だ」

場が収まり、静かになったのはあれから20分も経ってからだった。何とかかぐやを納得させた総司は藤原を泣き止ませにかかり、苦勞した結果、総司が食べ残した弁当を全てあげるといふ条件の下、許しをもらえたのだ。

（あんだだけ泣き叫んで、なのに弁当で許すとか藤原ってやっぱ解んねえな。しかも食べ残しだぞそれ）

藤原ならリスのように頬を膨らませて舌鼓を打っている。いや、藤原自身が満足ならそれで良いのだが、何かちよつと複雑な総司だった。

（しかもそれ、俺の箸だし。洗ってたけど）

更に藤原が使っている箸は総司が昼食を摂った際に使用していたものだ。勿論洗いはしたのだが、何となくむず痒く感じる。

「総司、折角来たんだ。手伝ってけ」

「お前…。この疲労困憊の俺を見て容赦なく仕事させるとか鬼か。後、これ言うのもう何度目か知らんが俺は生徒会役員じゃないぞ」

「もう今更だろ」

「…そうだけどき」

白銀が紙の束を差し出し、総司が受け取る。

こうやって生徒会の仕事を手伝うのは初めてではない。

学園内で初めて首位の座を譲ったあのテストで白銀と交友関係を持つてから、何度も白銀、或いはかぐや、またある時は藤原から、はたまたある時はもう一人の生徒会メンバーからまで助けを請われて助っ人に来た事がある。

その度に先程のように自分は生徒会役員ではないと教えてあげているのだが、効果を見た事がない。

それどころか、校長にすら名前が載ってない5人目の生徒会役員と

して見られる始末。

おい誰だ、こいつに票を入れたのは。

(あつはつは。俺じゃん)

A. 四宮総司

これが答である。現実である。

「ごちそうさまでした。美味しかったですよ、総司君」

白銀から受け取った資料に目を通していると、横合いから布の塊が視界に飛び込んできた。

改めて見ると、それは総司の今日の弁当、そしてそれを覆う包みだった。

「ああ、そうか。なら良かった」

藤原から包みを受け取り、ソファに寄り掛からせていた鞆のフアスナーを開けて中に突っ込む。

そして再びフアスナーを締めようとしたその時、藤原が総司の耳元に顔を寄せてきた。

「さっきの埋め合わせ。私の方で考えておきますね？」

「え」

藤原の口から思わぬ言葉が聞こえてきた。戸惑い、顔を上げる。

「あの…、許してくれたたんじゃなかったんですかね…？」

「当たり前です。総司君は乙女の秘密を覗き見したんですよ？弁当の残りをくれた程度で許してもらえるなんて思わないでください」

総司の質問に答えてから、頬を膨らませる藤原。

許してくれたというのはどうやら勘違いだったらしい。さすがの藤原とはいえ、そこまでチョロくなかったという事か。

「ですから…、覚悟していてくださいいね？」

「…」

総司の耳元から顔を離れた藤原は、人差し指を唇に付け、総司にウインクをしながらそう言い残してかぐやの元へと歩み寄っていった。

先程の藤原の台詞が聞こえていたらしく、かぐやが藤原に「どうかしたのですか？」と問い掛ける声が聞こえる。その問いに藤原が「何でもありませんよー」と、ほわほわと答える声も。

「…何てこったい」

埋め合わせ、一体何をやらされるのか。心優しい藤原の事だ。そう無理な事を命じたりはしないだろうが、読めない藤原だからこそ何を言われるか怖いという思いもある。

「…しゃーないか」

しかし悪いのは総司だ。少し理不尽な気もするが、藤原の踊りをずっと覗いていたのは総司なのだから。本当に、少しだけ、理不尽な気もするが。

藤原が埋め合わせに何を要求するのか、今から覚悟しておくとしよう。

総司はかぐやと楽しげに話す藤原から視線を外し、手元の資料に目を通し始めるのだった。

四宮総司は加わる

「今日は寒いですねえ。早く夏来ないかなー」

「随分と気が早いな。まだまだ春は続くぞ」

こんな長閑な会話が行われているこの場所は生徒会室。今日も今日とて総司は連行され、生徒会の仕事を手伝わされているのだ。

今は一度仕事を中断し、かぐやが淹れた紅茶を飲みながら休憩している。

「いいえ！時間なんてあつという間に過ぎるんです！うかうかしてたらなくんにもないまま卒業ですよ？」

「ぶふおっ」

良かった。紅茶を飲み込んだ後で本当に良かった。もし口の中にまだ残ってたなら、正面に座っているかぐやと白銀に吹き掛けてたかもしれない。

「…睨むなよ」

「別に睨んでなんかない（いません）」

藤原の台詞で心にダメージを負ったであろう二人が目を細めて睨んでくる。しかし全く堪えない。むしろ微笑ましいくらいである。というか半年間何も無い二人が悪い。

「あつ、そうです！夏になったら生徒会の皆で旅行に行きましょう！」

藤原がそんな事を言ったのはその時だった。そしてこの言葉が、とある二人の戦いの始まりを告げるゴングだったという事を、まだ総司は知らなかった。

「それは良いですね。親睦も兼ねてどこか行きましょうか」

「わーいー！」

藤原の提案にかぐやが穏やかな笑みを浮かべて同意し、藤原は両手を上げて喜んでいる。

そして残る白銀は、二人の会話は聞こえていたのだろう。手を口許に添え、目を閉じ、何やら考えている様子。

(あ、目が開いた)

よく解らないが方針は決まったらしい。自信ありげな表情から察せられる。

「どこに行きましょうか！楽しみですよ」

「そうだな…行くならやっぱり山か「海」です。海以外あり得ません」っ!!?」

藤原の問い掛けに答えようとする白銀。だがそこにかぐやが割り込んだ。

かぐやに割り込まれて最後まで言い切れていなかったが、白銀が山と言ったのは聞き取れた。そしてかぐやは海と提案した。

海VS山

(定番中の定番じゃねえか。もつとコアな所で争ってくれないかなー)

なんて考えている総司だが、この話題については全く考える気はなく、案を出すつもりもなかった。

何故ならこの話題は生徒会メンバーでどこに行くかというものの。総司には関係ないのである。

そう、考えていた。

(てか何で白銀はそこまで海に行くの嫌がってんだ？かぐやが海に拘る理由はまあ、何となく察しがつくが)

かぐやが海に拘る理由は恐らく、白銀を水着で誘惑しようとかそういうものだろう。生まれてから16年、片時も離れず一緒に居ただ。そのくらい読み取れる。

だが、先程からかぐやと白銀の論争を耳にしていたがやけに白銀が海に行く事を避けようとしている風に思えた。

一体何故

「ああそうか。もしかして白銀って、か「スタアアアアアアアアアアアアップ!!」…痛いんだけど」

思いつき顔面を叩かれた。実際には白銀は総司の口を塞ごうと

したのだが、勢いよく振るわれた白銀の手は総司の顔面に衝突。見事な張り手音を奏でた。

「す、すまん…。だがな総司！」

「あーはいはい。黙ってりやいいんだろ解ったよ」

口許を拳で擦る。かなり痛かった。今もヒリヒリして仕方ない。

総司が口にしようにとした単語は、『金槌』である。白銀の先程の反応からして総司の予想は当たっているのだろう。そして、その事をかぐやに知られたくないのであろう事も。

（別にかぐやに知られても何もないと思うけどなあ。…まあ、好きな相手の前では強がりたくなるもんか）

一人で考え込み、勝手に一人で解決する総司。

その間にも、かぐやと白銀の論争は白熱していた。

（うちのプライベートビーチに鯨なんて出た事ないだろ。ハンターなんていらんだろ。…まあ、白銀の反論を磨り潰すためなんだろうけど）

しかし展開は一方的だった。何とか敵陣のデメリットをあげつらおうとする白銀だが、捻り出した案は全てかぐやに封殺されてしま

う。
（そういえばかぐやの部屋で見たな。『会長が言いそうな事VOL. 42旅行編』…。おーう…）

ふと思いつく、かぐやの机の引き出しにあったノート。その下にはそれと同じ種類のノートがまだあったはずだが、まさか…、と考えたところで総司は思考を遮断する。

考えてはいけない。VOL. 42という事はつまり、それ以外に最低でも41冊の——等とは考えてはいけない。

「山は夏じゃなくても良いじゃないですか。海は夏しか行けないのですから」

「ぐっ…」

続けざまに夏といえれば山派全員にダメージが入る強烈なストレートを叩き込まれた白銀。

「山は天气が荒れやすいですし、それに虫も多いですよ。蚊もいれば、

蛾も毛虫も、蜂だっています」

ここで、これまでではかぐやに何を言われようとも反撃の一手を探っていた白銀の表情が固まった。そして、総司は察した。

(あ、こいつ虫も苦手なのか)

どうやら白銀は色々弱点が多いらしい。普段の振る舞いからはそんな風には見えないのだが。まあ、かぐやだって普段の振る舞いからプライベートでのポンコツっぷりを想像できる者などいないし、何と似た者同士のカップル(予定)な事か。

「…水着買っておくか」

総司がそんな事を考えている内に、白銀は山を断念する決断を下した。その隣でかぐやが勝利の笑みを浮かべる。

この直後、有頂天にいるかぐやをドン底に突き落とす言葉が飛び出てくる事など露知らず。

「あ、そうですねえ。私も去年のサイズ合わなくなっちゃって。新しいの買わなきゃ…っ」

「？」

藤原は自身の胸を見下ろしながらそう言った直後、目を輝かせながら総司の方を見た。

…何故？

「総司君総司君！あのですねえ…」

すると藤原はニコニコしながら総司の方へと歩み寄り、耳元に口を近付けた。

…何故だ。何故かデジャブを感じる。

「二昨日の「山にしましょう」へ？」

「は？」

何かを言おうとした藤原だったが、それを遮る様な形でかぐやが口を開いた。

「か、かぐやさん？さつきまで海にしようって言ってませんでしたか？」

「いえ。海はベタつくし人も多いし鮫も出ます。山にしましょう」

「さつき大丈夫だって言ってませんでした!?!」

「いや海だ！山は雨も降るし虫も出る！海にしよう！」

「こつちもさつきと言つてる事違う!？」

「い、今起こつた事を話すぜ…。ついさつきまで海と山で争つた二人が何の前触れもなく突然意見を逆転させやがった…。何を言つてるのか解らねえと思うが俺も何が起きたのか解らねえ。超スピードとかそんなチャチなもんじゃ断じてねえ。もっと恐ろしいものの片鱗を味わつたぜ…」

「総司君はボケないでください！私を一人にしないでくださいい！」

突然意見を逆転させた二人に乗つかる形でボケてみたのだが、藤原に怒られた。それも涙目で。

「山です」

「海だ」

「山」

「海」

「や」

「う」

「ま」

「み」

「お二人とも、落ち着いてください…。ね？」

再び論争を白熱させる二人。いや、もう論争というか子供の口喧嘩みたいになつてしまつてているが。

すると、二人は総司の隣の藤原に視線を向ける。

「埒が明かないな。こうなれば藤原書記に決めてもらおう」

「そうですね。お願いします、藤原さん」

「え!?!わ、私ですか!？」

突然の事に戸惑う藤原。だが、藤原は二人の願いに答えるべく考え始める。

「えつとー…」

人差し指を口許に当て、斜め上を見上げながら、藤原は口を開いた。

「どちらかといえば海…ですかね？」

「っー」

「…」

ガッツポーズする白銀。他人を呪えそうなどす黒い視線を藤原に送るかぐや。その事に気付いたのかはたまたま否か、藤原は体を総司の方へと向けて更に続けた。

「でも、総司君の意見も聞きましょう！後々、石上君の意見も聞かないとですし！」

「…？」

首を傾げる総司。今、藤原は聞き捨てならない事を言わなかったか？

「藤原。石上は解るけどさ、何で俺？」

「え？そんなの決まってるじゃないですか。総司君も一緒に行くからですよ？」

「え」

「え？」

Why？

いや、本当に何で？

「俺も行くのか？」

「おいおい総司。何を当たり前の事を言ってるんだ。もうお前は俺達には欠かせない仲間だろう？」

「…」

体が震えた。寒いからではない。それなのに勝手に、体が震えた。

「…あれ？もしかしてそう思ってたのって俺だけか？」

「会長だけではありませんよー！私もです！」

「そうですね。私も同じ意見です」

言葉が出ない。

仲間。かぐやにならともかく、それ以外の人にそんな風に言われたのは初めてだった。

（ああ…。かぐやが変わったのは、きっと…）

総司はようやく理解する。今まで解っていたつもりで解っていない。去年までの氷のようなかぐやが変わったのは、きっとこの暖かさに溶かされたからなのかもしれない。

「俺は生徒会役員じゃないぞ」

「今更だろ」

「今更ですわね」

「今更だわ」

「…くくっ」

勝手に笑みが溢れる。本当に言う通り、今更だ。

「そうだな…。俺は——」

その後、今日の分の仕事の存在を思い出すまで議論は白熱し、結果夏が来るまで保留という事に相成った。

それからは、議論が終わってからやって来た石上会計を巻き込んで大急ぎで仕事をやる羽目になるのだった。

「それじゃあ、今日は御苦労だったな皆。石上会計も。本来の仕事以外の事をやらせてすまなかったな」

「いえ…。それは良いんですが、どうしてここまで仕事が遅れてたんです?」

「ああ、それはな…」

すっかり日も暮れ、辺りが暗くなり始めた頃、ようやく生徒会は本日の活動を終了し、解散となった。

途中から来た石上がいなければ更に遅くなっていた事だろう。どころか、まず下校時刻に間に合っていたかも知解らない。

「さて…。帰りますか」

「そうだな。じゃあ迎えを…」

「あ、総司君!」

これ以上ここにいる理由はない。総司がスマホで迎えを呼ぶべく番号を入力しようとした時、藤原に呼ばれた。

「ん、何だ藤原」

「あの、一昨日の埋め合わせの事なんですけど…」

「…かぐや。迎えはそつちで呼んでくれ」

「解りました」

くいくいと総司の制服の袖を軽く引つ張りながら、どこか言いづらそうにしている藤原。それを察した総司はかぐやに迎えを呼ぶよう頼んでから藤原に引つ張られるまま部屋の間まで行く。

そして藤原は背伸びして口を総司の耳元に近付ける。

ここでようやく総司は思い出した。先程の、今と似たシチュエーションで感じたデジャブの正体を。

完全に一致している、あの時と。

「埋め合わせですけど…。まだ先になりますけど、私の水着選びを手伝ってください」

「…は？」

呆けた声が漏れる。

みずぎえらび？

水着選び…。

(水着選び!?)

バツ、と勢いよく藤原を見る。藤原は悪戯気に、それでいてどこか少し恥ずかしそうに頬を赤く染めながら総司の顔を見上げていた。

「良いですか？約束ですよ？忘れないでくださいね？」

藤原はそう言い残し、鞆を手に生徒会室の扉へ足を向ける。

「それじゃあ、お先に失礼します〜！また明日〜！」

そう言う藤原に他の面々がまた明日と返事を返す中、総司は何も言えなかった。

「総司先輩、どうかしましたか？」

「は？…いや、何も」

言えるはずもない。藤原と藤原の水着選びを手伝う約束をしたなんて。そんな事を知られたら多分爆発する。総司が。

「…何てこった」

奇しくも、総司が呟いたのは一昨日のあの時と同じ台詞だった。

四宮総司のある日の朝

四宮総司の一日は朝6時から始まる。決してそれで固定されている訳ではないが、6時以前に起きた事はあっても6時以降に起きた事はない。

理由は簡単、起きるのが遅ければ一日の内に終わらせなければならぬ事が終わらないからである。

まず、目を覚ました総司は顔を洗い、身支度を整え近侍を呼ぶ。そして前日の報告からこれまでに起きた事柄を纏めた資料を受け取る。

受け取った資料を朝食の時間まで目を通し、使用人に呼ばれると食堂でかぐやと共に朝食を摂る。

広い空間の中、その場にいるのは総司とかぐやのみ。初めはどこか寂しげに感じたこの時間も今ではすっかり馴れたものだ。むしろ、一人じゃなくて良かった、とお互い思える様になった。

朝食が終わるとすぐに部屋に戻り、再び資料に目を通す。そんな短い時間で読み切れる程の量ではない。日によっては、学園に向かう車の中で、授業の合間の休み時間に身を隠して、この資料を読む事だつてある。

だが昨日はどうやら他派閥は大人しかかった様で、報告書の量はいつもより少なかった。お陰で登校の時間までに全ての報告書に目を通す事が出来た。

全ての報告書の内容を頭に叩き込んだら、受け取った報告書を近侍に返し、破棄させる。仮にこの報告書の内容が他に漏れれば惨事である。万が一にも、それを漏らしてはならないのだ。

今日はゆつくりと出来そうだと、思いながら、総司は欠伸を漏らし

ながら鞆を手の外に出る。

すでに屋敷の前では総司とかぐやが乗る車が止まっており、かぐやと早坂がその車の前に立っていた。

しかし、何やら様子がおかしい。

もうすぐ車を出す時間のはずなのだが、何故かボンネットが開いている。

「どうかしたのか？」

「総司様！申し訳ありません、エンジンルームに猫が入り込んでしまつて…」

やって来た総司に振り向くかぐや達。総司の問いに答えたのは、車の前で困った様子であたふたしていた運転手だった。

「猫？」

総司は車の前に出て、エンジンルームの奥を覗く。

そこには、毛を逆立てこちらを威嚇する猫が確かにいた。

「あらら。この様子じゃしばらくこの車は出せないな」

「はい。代わりの車を手配致しますので、しばしお待ち頂けませんでしょうか」

まあこれは仕方ないだろう。運転手のミスという訳でもないし、咎める理由は何もない。

総司は頷いて答えようとしたその時、かぐやが口を開いた。

「私は結構です。今日は歩いて向かう事にします」

「え!？」

戸惑いの声を上げる運転手。

「そ、それは如何なものかと…。せめて早坂と一緒に!」

当然の台詞だ。四宮の長女を学校まで歩かせる事自体割りと大きな問題だというのに、それを一人で行かせるなどもつての外だ。

これでかぐやの身に何かが起これば、この運転手の首が飛ぶ。

「まあ私は別に…」

運転手の言葉に早坂が構わないと賛同しようとする。

「…」

「…」

(お前…)

かぐやと早坂の一瞬のアイコンタクト。かぐやがパチパチと早坂に向けてウインクをして、何かの意図を伝える。

そのメッセージは早坂に伝わり、ついでに総司にも読み取られた。「…いやー、私の着替えを待っていたら遅刻ギリギリになってしまいますし、お一人で向かった方が宜しいかと」

「ほら早坂もこう言ってるし、大丈夫よ。総司はどうする?」

「俺は車にするわ。学校に着くまで寝たいし」

「そう。それじゃあ行つてきます!」

「ああ、かぐや様!」

足取り軽く、かぐやが門を潜る。自分の足であの門を潜るのは、初めてだったはずだ。

「…赤木」

「ここに」

「っ!」

かぐやの背中が見えなくなった所で、総司がある者の名を口にす。直後、総司の背後から呼び掛けに応える男の声がした。

「悟られないようにな。それと、なるべくかぐやの好きなようにやらせてやれ」

「承知しました」

早坂が振り返ったその視線の先にいたのは、総司の近侍の男。男、赤木は総司の命を受けると姿を消す。

「え、どこに…。というより、いつから…」

「どこについて、かぐやを追つてったに決まってるだろ。それと、初めからいたぞ」

「ええ〜…」

さも当然の様に言う総司に、戸惑いを隠せない早坂。

赤木家。代々四宮のお付きとして尽くしてきた家系で、早坂家と似ているが、歴史は赤木家の方が長い。

赤木家は現在、本家の雁庵の傍で働いているのだが、あの男は雁庵から総司の元に送り出され、今は総司の傍で働いている。

「嬉しそうだったな、かぐや」

「そうですね。：総司様はよろしかったのですか？」

「さつきも言ったけど眠いんだよ。昨日は遅くまで掛かってな…」

欠伸をしながら早坂と会話する総司。早坂はそんな総司をじっと見つめている。

「…なに？」

「いえ。いつも御忙しそうで、お疲れなのではないかと」

「もう馴れたよ」

心配してくれているのだろうか。表情からは全く読み取れない早坂の言動にふと思うが、まあ勘違いだろう。

今でこそマシになったが、数年前の早坂の総司に対する態度はそれは酷いものだった。

かぐやを冷遇する父親、雁庵。だがそんな雁庵はかぐやとは変わって総司にはあれやこれやと手を尽くしていた。そして今や、雁庵の後継者として大切にされている。

何だかんだでかぐやが大好きな早坂には面白くなかったのだろう。かぐやは父親との交流は碌にないのに、双子の兄である総司は違うという事が。

まあ総司が一つだけ言っておきたいのは、総司にも父との碌な思い出なんてないという事。仕事を押し付けられたり仕事を押し付けられたり仕事を押し付けられたり、そのくらいの事しか覚えがない。

「どうかしましたか？」

「ん？何が？」

「いえ。何やら笑っていらしたので」

昔の早坂を思い出している内に、無意識に笑っていた。最後に本当に碌でもない事を思い出していたのだが、それについてはすぐに忘却する事にする。

「いや、別に。さつきの早坂が俺を心配してる言葉を聞いて、昔の事を思い出してただけだよ」

「なっ…」

絶句する早坂。口をパクパクと開閉させ、目を見開いて信じられない

いと言わんばかりに総司を見つめる。

「いやあく、ホントあの時の早坂はツンツンしてたよな。俺には」

「…忘れてください」

「かぐやの前だと普通なのに、いなくなると敵意剥き出しにしてさあ」
「忘れてください！」

怒られた。でも、照れる早坂という珍しい姿を見ただけで良しとしよう。

もう少し追撃したかったが、それはただ早坂を傷付けるだけだ。そんな事はしてはいけないし、したくもない。

そうして早坂と話している内に、黒塗りの車が門から敷地内に入ってくる。手配した代わりの車が来たようだ。

「ほら、見送りは良いから着替えてこい。このままじゃ間に合わないぞ」

「いえ、それは…解りました。お言葉に甘えさせて頂きます」

早坂が一礼してから屋敷の方へと歩いていく。そして代わりの車が屋敷の前に止まり、運転席から出てきた運転手が総司が座る側の扉を開ける。

総司は早坂が屋敷へと入ったのを見届けてから、車に乗り込むのだった。

四宮別邸から学校まで車で15分の時間、総司はずっと眠っていた。

校門前に着き、運転手に呼び起こされ、意識を切り替えてから車を降りて周囲の視線を浴びながら校舎へと入る。

車のトラブルのせいでもより遅い到着だが、まだ始業時間までには余裕がある。急ぐ事なく靴を履きかえ、階段を上がり、二年の教

室が並ぶ三階の奥、E組の教室に入っていく。

総司の席は窓際にある。先日の席替えで勝ち取った中々の良ポジションである。

鞆を机に置き、椅子を引いて腰を下ろす。

鞆から教科書やノートを出し、机の中に入れる。

「ん？」

その際、鞆の中に入れていたスマホがちかちか光っているのを見た。この光り方は、アプリでメッセージが来ているのだろう。

スマホを操作してアプリを起動。メッセージは赤木からのものだった。

「何々…。『かぐや様にトラブル発生、監視を近くからに変更』…っ」
かぐやにトラブル。切羽詰まっていたのか、そのトラブルの詳細が書かれていない。

だが、メッセージには続きがあった。

『トラブルは無事解決、ですが始業には間に合わないと思われる。どうしますか』…すまん赤木、寝てて気付かなかった」

車でグースカ寝ている間に赤木からの応援をスルーしてしまっていた。帰ってから謝罪しておく事にする。

しかしどうやらかぐやは無事らしい。もう一つ赤木からのメッセージがあるが、文字はなく画像だけだ。恐らく、かぐやが無事であるという証明の写真だと――

画像の表示欄をタップし、赤木が総司に送った画像が表示される。

それは、少し遠く荒くなっているが、確かにかぐやの写真だった。かぐやは自転車の荷台に座り、笑顔を浮かべて空を見上げていた。

そして、かぐやを乗せた自転車を運転していたのは――

「…急げよ。三年間皆勤を狙ってんだろ？」

総司が見下ろす先。窓の外、駐輪場から急いで校舎に向かって走る二人の男女。

総司は堪らず、小さく呟いてから笑みを溢すのだった。

四宮かぐやは聞かせたい

「それでは、その様に」

「ああ、頼む」

総司の自室にて。総司が紙の束を差し出し、赤木がそれを受け取る。

それは朝の総司の日課と同じ光景だが、現在は夜。

総司は学校が終わり帰宅してからも、総司が登校してから帰ってくるまでに何が起きたかの報告を受けるのである。

更に帰宅してからは平行して雁庵から受け取った仕事の依頼も熟さなくてはならない。

総司の毎日はこうしたハードスケジュールで満たされているのである。勿論、定期的な休日等はない。さすが四宮、ブラック極まれりである。

「んー…っ、はあっ。で？明日か、相馬グループの会長が家に来るのは」

「左様でございます」

「…さてさて、何の用で来るのやら」

体を伸ばして力を抜いてから、背後の赤木に振り返り問いかける。赤木の返答を聞いてから、総司は机に頬杖を突き、どこか呆れた様子で呟いた。

相馬グループ。多くの子会社を抱える有名な団体。四宮含む四大財閥程の規模はないが、大きな影響力を持っている。

そしてこの相馬グループは、四宮と深い関係を持っており、特に黄光の派閥と親しくしているという。

「めんどくさいなあ…。明確に攻めてきてくれれば潰して終わりなのになあ…。どうせ牽制してくるだけなんだろうなあ…」

「総司様。いつかの様に、『こいつには話をする価値もない』等と言ってサボらないでくださいね」

「しねえよ。…したいけど」

明日の会談でどんな話をするか手に取るように解る。

どうせこちらに敵意はない事をアピールしつつ、遠回しに次期後継者を辞退するよう薦めてくるのだ。

総司様はまだ若い、ご成長なさるまでは黄光様に家をお任せになられては如何でしょう、なんて言っつて。

バカか。次期後継者の座をあの兄貴に渡してみろ。しがみついてもその座を守ろうとするに決まってる。別に再び奪い返すのは不可能ではないが、このまま次期後継者の座に居座った方が使う労力は少ない。

「…かぐやからだ」

長い溜め息を吐いていると、スマホがメールの着信音を鳴らす。画面を見るまでもない。総司と連絡先を交換している者は大抵スマホを持つている。メッセージのやり取りをする際はアプリを使うのだ。つまり、今のようにメールを送ってくるのはかぐやのみとなる。

届いたメールを見れば、やはり送り主はかぐやだった。文面には簡潔に、『今すぐ私の部屋に來なさい』とだけ書かれていた。

「下がっていいぞ。俺もかぐやの部屋に行かなきゃだし」

「承知しました」

先に総司が扉の前で立ち止まる。すぐさま赤木が扉を開けて総司を通す。

そのまま総司はかぐやの部屋に、赤木は別邸にて宛がわれた自室に別れて歩き出した。

「おーい、来たぞー」

かぐやの部屋の扉をノックする。数秒後、早坂が扉を開け、総司はかぐやの部屋へと入室。

かぐやはいつもと同じ様に、ベッドに腰掛けて総司を待っていた。

「待っていたわ、総司」

「…」

やって来た総司を見上げるかぐやの目は何やら真剣な様子。その空気につられて総司も表情を引き締める。

「何かあったのか」

「ええ。とても重大な事が」

重大な事。果たして一体何があったというのだ。まさか、学園の他の生徒に何か弱味でも握られたか。それとももしや、此方側絡みで何か巻き込まれでもしたか。

かぐやの口が開かれる。総司はかぐやの口から出る次の言葉を待つ。

「会長が、スマホを購入したわ」

「…」

目が点になった。

「…それだけ?」

「それだけって何よ。会長がスマホを購入したのよ?何か月も前から早坂や他の使用人にも頼んで会長にそれとなくスマホの便利さを植え付けてきた成果がやつと出たのよ!」

「お前そんな事してたの?」

総司が知らない間にいつの間にか白銀に洗脳を施していたらしい。まあ一番の決め手は、近頃の通信料の低価格化だろうが。

「で?それが俺を呼び出した理由とどう繋がるんだ」

「良く聞いてくれたわ…。貴方には、会長に私の連絡先を聞かせる策を考えるのに協力してほしいの」

「…」

流れる沈黙。何というか、うん。

「帰る」

「どうして!」

一言残して立ち去ろうとする総司。慌ててベッドから降りて総司にしがみつつかぐや。

「いやだって、そんなの自分で考えろとしか言えないし。早坂だっているし、大丈夫だって」

「私に押し付けなさいください」

かぐやの傍らに戻ってからその場から一步も動かず、一言も喋らなかった早坂が総司に言い返す。

「早坂とも考えたわよ!でも早坂も総司と同じ事言い続けて話が進ま

なかったの！」

「いや、あのさ、まずさ。かぐやから聞けば良い話だろ」

「私から…、きく…？」

しがみついたまま嫌々していたかぐやの動きが止まった。そしてゆっくりと総司から離れ、唇を震わせながら話し出す。

「そんな事…、そんな事したら…」

震える声で話すかぐや。黙って耳を傾ける総司と早坂。

かぐやは頬を染め、目に一滴の涙を溜めながら言い放つ。

「そんな事したら！私が会長といつでもお話がしたいって…、寝る前にちよつとしたメッセージのやり取りしたいとか、テスト前の深夜に通話を繋いだままにせずと無駄話したいとか、そんな事を思ってるみたいじゃないっ！」

「違うのか？」

「違うわよっ！」

違うらしい。なら無理して白銀と連絡先を交換しなくて良いのでは？と言ってしまうたくなるがそれを言うともた話が変な方向に行きそうなので止めておく。

「…待つしかないんじゃない？」

「やっぱり、そうなのかしら…」

少しの間考えてみるが、何も思い付かない。というより多分、白銀もまた、かぐやに自分の連絡先を聞かせようとしてくるはずだ。

…本当にこの二人は。ほんの少しでもプライドを捨てられたら、すぐにでもくっ付きそうなものを。

「後はまあ、あれだ。かぐやと連絡先を交換するメリットを白銀に思い知らせるとか」

「メリット…メリットですか…」

とりあえず適当にそれっぽい事をもう一つ言っておく。そんな大それたメリット、あるのかも解らないが。

「私といつでもメールができる。これ以上のメリットがありますか？」

「その自分への自信はどこから湧いてくるんだ」

本当に不思議だ。あれだけポンコツを晒しておいて何故そこまで自分に自信が持てる。外見が良く、家柄が良く、能力も申し分なし。自信を持って当然なのかもしれないが、少なくとも総司はかぐや程自分に自信は持てない。

「早坂、何とかしてくれ。お前の主だろ」

「かぐや様は総司様をご指名されましたので。私は捨てられましたので」

「そんな事ないって。かぐやはお前が大好きだって。だからさ、な？」
「私の押し付け合いをしないでください」

どうぞ、どうぞどうぞと譲り合う総司と早坂。だがその実は、かぐやの押し付け合いである。

即座にかぐやがその実態を悟り、真顔で二人を睨みながらツツコミを入れる。

総司と早坂が横目でチラリとかぐやを見遣った。

「いえいえ。かぐや様は何だかんだブラコンですから。総司様と一緒に話し合われた方が良いに決まっています」

「いやいや。かぐやはシスコンの気もある。姉妹の様に過ごしてきたお前と話してたいに決まってる」

「無視しないで！それと私の事をそんな風に思ってたの!？」

先程よりも更に激しいツツコミ。

総司と早坂は視線を合わせ、頷き合う。

やはり、かぐやをからかうのは楽しい。

「何二人で見つめ合っているのかしら…。そうね、それなら私はもう眠ります。会長の件は二人に任せましょう。早坂もその方g「かぐや様?」…ごめんなさい」

黒い。黒いよ早坂。かぐやが何を言おうとしたのかは解らないけど、そんな目をしないでほしい。

(まあ、俺と二人なんて嫌なんだろうな。…待てよ。前にいきなり逃げるように去っていったのももしや?)

黒いオーラを揺らしながらかぐやに歩み寄り、至近距離で睨みながら小声で何か言っている早坂と涙目で震えながらごめんなさいと繰

り返してるかぐやを眺めながら、何やら勘違いを加速させている総司。

誰だ、四宮総司は鈍感系主人公とは違うとか言ってた奴は。

「おい早坂。泣いてる。かぐやが泣いてるからそろそろ止めてやれ。何でそんなに怒ってるのか知らんけど」

「…仕方ありません。この辺で勘弁してあげます」

どちらが主人でどちらが従者なのか。少なくとも、胸の前で両手を握り、涙目でプルプル震えて「怖かった…」なんて言ってる今のかぐやは主人には見えない。

「で、だいぶ脱線したけどどうすんだ。このまま話し合っても多分碌な案が出てこないぞ?」

「…し、仕方ありません。この件は私一人で何とかします。二人はもう部屋に戻って大丈夫です」

この時、最初からそうして欲しかった、と総司と早坂の思考が重なったのは言うまでもない。

その後、かぐやの部屋を出た後に早坂と別れて自室へと戻った総司は後少し残っていた雁庵からの仕事を終わらせて就寝。

次の日はいつも通りの朝を過ごし、学校に行き、授業を熟してその日は真っ直ぐ家に帰った。

そしてかぐやから白銀と色々計算違いはあったがメアドの交換が出来たと報告を受けたのは夕食の時間直前の事だったという。

四宮総司は対する

「お久しぶりです総司様、かぐや様。お二人とも大きくなられて…」
「それはそうでしょう。相馬さんと前に会ったのは何年前だと思ってるんですか」

あはは、と笑い声がガラスに囲まれたインナーテラスに響き渡る。
隣同士で席に座る総司とかぐやの机を挟んで正面には、白髪が混じった壮年の男が同じ様に席に座っていた。

相馬稔。四大財閥には劣るものの、日本トップクラスの規模を誇る相馬グループの会長。

実家と本社は大阪にあるのだが仕事で東京に来たようで、今日はこちら四宮別邸に住む総司とかぐやに挨拶に来たという訳だ。

「しかし…、かぐや様はまた随分とお美しくなられましたな。これでは同じ学園の男共は放っておかないでしょう」

「いえいえそんな…。私なんてまだまだです。秀知院には私よりも可愛く美しい女性はたくさんいらっしゃいますわ」

「…」
かぐやと相馬のやり取りに黙って耳を傾ける。

よくもまあこの女はそんな言葉を吐けるものである。昨日、自分とメッセージのやり取りが出来る事がメリットなんて言い切った癖に。「総司様は近頃のお調子はどのようなのです？学園と普段の習い事に加えて、お父上の仕事もお手伝いなされていますか？」

「それは何とかやれていますよ。父も私が処理できるギリギリの量を見極めているようです」

「おお、それはそれは…」

いや、本当に凶つたようにギリギリを攻めてくるのだ。勿論、ちやんと休めるような量が少ない日もあるのだが、多い時は本当に徹夜寸前に終わられるよう調整されている。

(本当に鬼だよあの人は)

外向けの笑顔はそのままに、内心で静かに父への殺意を燃やす。いつか必ず、仕返しをするともう何度したか解らない誓いを立てながら。

「お待ちせしました。本日の御夕食でございます」

「おお、待つておつたよ。もう我慢の限界だ」

テラスに早坂が台車を押して入ってくる。その台車には三人分の前菜料理が載せられていた。

早坂は三人それぞれの前に皿を置き、一礼してから台車を押して去っていった。

それからは三人、話を弾ませながら料理に舌鼓を打つ。前菜の後にスープ、魚料理、肉料理と順番に出てくるフルコース料理は、総司とかぐやが京都の本邸からこの別邸に移る際に雁庵が選り送った選りすぐりのシェフ達が作る物。三ツ星の評価を受けた料理にも劣らない美味を以て、三人を唸らせる。

「長らくお顔を合わせずにはいましたが、堂々としていらつしやいますな」

相馬がそう口にしたのは、フルコースの最後の品であるコーヒーを飲んでいた時だった。

「しかし、総司様はまだお若い。周囲からの重圧等はお気になつたりしませんか」

その台詞は余りに唐突で、それと同時に余りに想定通りのものだった。

思わず吹き出そうになる笑いをこらえ、総司は口に付けていたカップをテーブルに置き、総司も口を開く。

「何を仰りたいのでしょうか？」

「いや、御気分を悪くさせたのならば申し訳ない。しかし、先程総司様は何とかやれている、と仰られましたか、やはりお若いその身には今

の生活はお辛いのではないかと」

「…」

総司は閉じていた両目を開け、真っ直ぐに相馬の両目を見据えた。直後、総司の強い視線を受けた相馬の体が僅かに震える。

「ご心配痛み入ります。ですが、その心配は無用なものです」

総司の目は、相馬の唇の端が僅かにひくついたので捉えた。

「しかしですな…」

「相馬さん。はつきりと仰られないとお分かりになりませんか」

「…何がでしょう」

「それでは、私から一つ進言を。…他人の心配をするより、まずは御自分の心配をした方がよろしいのではないのでしょうか」

「っ…」

完全に相馬の頬が引き攣った。

「若輩者の私ですら知っていますよ。最近、売上が落ちているそうですね」

「くっ…」

「私の心配をなさる前に、まずはそちらの方を何とかするべきではないのでしょうか？」

もう、相馬が抱く総司に対する敵意を隠す事すら出来ていない。そしてその敵意を、総司は笑顔で受け止める。

どちらが強者でどちらが弱者か、年齢という差を鑑みても明らかである。

総司は相馬の視線も何のその、そっちのけでのんびりコーヒを口にする。隣のかぐやもまるで対面に誰もいないかのごとく、空になったカップの縁を紙で拭いたりしている。

「…どうかなさいましたか？顔色が悪いようですが」

「…ええ。少し気分が悪くなってきました」

「ああ、それは大変だ。是非ともこちらで休んでいかれては如何ですか？」

「いえ、それには及びません。しかし、大変失礼なのですが、今日のところはこれでお暇させて頂けませんか」

「そう、ですか…。相馬さんとはもう少しお話していたかったです
が、仕方ありませんね」

相馬の皮肉には気付かない振りをして、少々大袈裟に驚いた動作を
してから宿泊の誘いの言葉を掛けるも断られる。その返事に対して
残念そうな表情を浮かべて返してやると、相馬の目が細まった。

「どうやら総司の丁寧な言葉遣いの中に含まれた皮肉に気が付いた
らしい。まあ、その方が総司にとっては都合が良いのだが。」

首に巻いたナプキンをテーブルに置き、三人は部屋を出る。部屋の
前に待機していた早坂に客人のお帰りの旨を伝え、使用人を集めさせ
る。

「では、私はこれで…。大変美味しい御夕食でした」

「そうでしたか。シェフにそう伝えておきます」

別れ際、総司と相馬はそう言葉を交わし、互いに一礼し合ってから
リムジンに乗り込んだ相馬を見送る。

「…良かったのですか。あそこまで挑発して」

かぐやが口を開いたのは、相馬が乗ったリムジンが走り去り、見え
なくなった時だった。総司は相馬のリムジンが走っていった方を向
いたまま、口を開く。

「むしろ、もうちよつとあのおっさんの神経を逆撫でしてやりたかつ
たんだけどな。逃げられた」

「…」

かぐやの呆れが籠った視線が向けられる。その視線は完全スルー。
「しかし、相馬が俺が若いからーとか言い出した時はマジで笑いそう
になって焦ったよ。…それを考えると、ある意味手強かったのか？」

結局あっさり撃退する事が出来た相馬だったが、何だかんだあの時
は焦ったものだ。こちらに絶対的な相手に対する手札があったもの
の、隙を見せたらどうなるか解らない。

総司が相手にしているのは、そういう輩達なのだから。

「…総司」

「ん？」

先程までとは違う、気遣いが籠った声が総司を呼ぶ。

振り向けば、深紅の瞳が真っ直ぐに総司を見上げていた。

「私は、何があっても貴方の味方ですから」

「…」

「手助けが必要な時は絶対に言いなさい」

かぐやの言葉に笑顔を返す。そして、かぐやの頭に掌を乗せて――

「ち、ちよつと！何するんですか！こらっ、止めなさいっ！」

「大丈夫だって、安心しろ。かぐやは今のまま、白銀との下らない意地の張り合いを楽しんでれば良い」

「く、下らないとは何ですか！こら総司！待ちなさいっ！」

ぐしゃぐしゃと頭を撫でられたかぐやが顔を上げるともうそこには総司はおらず、屋敷の方へと歩いていた。かぐやは慌てて追いかける。

ギヤーギヤーと言いかう兄妹の微笑ましい口喧嘩が敷地内に響き渡る。

そんな二人のやり取りを、ブルーの瞳はじっと見つめていた。

「…あの、こぞうっ」

リムジンの後部座席。血が滲むほど拳を握り締め、ギリツ、と音が出る程に歯を噛み締めるこの男は相馬稔。

相馬は車のミラー、先程まで自分を見送っていた四宮総司が映っていた場所を睨み付けていた。

「覚悟している…。いずれ、貴様をこの私が叩き落としてやる」

総司に対するこの男の憎悪は限界まで達していた。只でさえ、懇意にしていた四宮の長男から次期後継者を奪い取り、加えてあの自分に対する態度である。

たかだか高校生が、20も生きてない餓鬼が、相馬を四大財閥に割って入るのではと言われるまで発展させたこの相馬稔を見下した。

「だが、奴の能力は本物だ……。奴が事業に関わり始めてからの四宮の業績を見ればそれは明らかだ……」

しかしその恐ろしいまでの才能は相馬も認めざるを得ない。今の自分の力だけでは、あの忌々しい餓鬼を上回る事は出来ない。

それでも、いずれ四宮総司と対峙するという選択肢は変わらせない。変えられない。あの憎たらしい顔を絶望に染め、頭を垂れさせてやる。

そんな光景を幻視しながら、相馬は溜飲を下げていく。

その憎悪が自身の社会的寿命を早めているとも知らぬまま、相馬の機嫌は戻っていくのだった。

四宮総司は〇〇している？

「四宮君、丁度良いところに」

総司が呼び止められたのは放課後、鞆を持って玄関がある一階へと向かっている時だった。

今日は特に生徒会にヘルプを頼まれる事なく、何ならヘルプを頼まれる前に帰ってやろうとすらしていた。

何故なら今日は、久し振りに休みの日だからである。雁庵からの仕事が出来ない日だからである。そのため、早く帰ろうとしていたのだが。

「校長先生…。何ですか？」

振り返った先にいたのは、長い髭を携えた白髪の男。この男こそ今代の秀知院学園の校長、アドルフ・ペスカロロである。

校長は総司の前で立ち止まると、一冊の本を差し出した。総司はその本を受け取り、表紙に視線を降ろす。

「…これは？」

「先程、中庭で女子生徒から没収したものです。生徒会に届けて処分するよう伝えてくだサイ」

『ティーンズの恋☆バイブル』と、言い方は悪いが頭の悪そうなタイトルの本を生徒の誰かが読んでいたらしい。

だがそれを没収するのは良いが、何故その処分を生徒会に任せるのか。そして何故、生徒会に届けるのを総司に任せるのか。

「御自分で行かれては…？」

「私はこれから探し物をしなくてはなりませんカラ」

「…」

スマホを片手にキリツ、とした顔になる校長。まさかとは思うがこいつ、ピカ〇ユウでも探しているのではあるまいな。

校長が学園の敷地内でポ〇モン〇〇をしているのは教師と生徒の間で衆知の事実になっている。

大丈夫なんだろうかこの学園、これが校長で。

「それでは頼みましたヨ！私はこれから忙しいのデス！」
「…」

そして校長は走り去っていった。スマホを片手に。

「…あいつ、島流しした方が良いんじゃないかなろうか」

割りとは本気で悩む総司だった。

結局校長の頼みは断れず、まあ何の憂いもなく生徒会に遊びに行くのも良いだろうとポジティブに考える事にした総司は、校長から受け取った本を手に生徒会室へと向かう。

「しーろがーねくーん、あーそびーましょー」

そして生徒会室の扉を少しふざけながらノックする。すると中から女の声でどうぞ、という声がある。

ま、まさか白銀が女体化した!?なんて下らない冗談を内心で呟きながら遠慮なしに生徒会の扉を開ける。

「おーっす、来たぞ〜」

「総司…。今日は手伝いは頼んでないはずだが？」

「頼まれてなかったら来ちゃダメなのか？」

「いえ、そんな事は無いです！総司君ならいつでも大歓迎ですよ！」

「おー、藤原は優しいな。そこの会長と違って」

「勝手に言ってる」

容赦のないやり取り。だが気心の知れた者同士だからこそ、笑ってそのやり取りが出来るのである。

「さてと、冗談はこの辺にして校長先生からの伝言だ。これを処分してくれ、だ」と

「？それは本、か？」

ひらひらと手に持つ本を揺らすと、他の三人の視線が本に集まる。総司は本をソファに座るかぐやの前のテーブルに置いてから、かぐやの対面のソファに腰を降ろす。

「そのためにわざわざここまで？ 貴方、確か今日は…」
「ん、何だ？ 何か用事があるのか？」

紅茶を飲んで寛ぐかぐやが総司の顔を覗きながら問い掛ける。その声が聞こえた白銀と藤原もまた、本から総司へと視線を移す。

「別に何も無いぞ。俺はただ来たいからここに来ただけ」

「…そうですか」

「…なに？」

「いえ、別に」

自分の気持ちを偽りなく、素直に話したただけなのだが何故かかぐやが微笑んでいる。その微笑みがどこか子供の成長を喜ぶ母親の様に見える、一瞬寒気が奔った。

（気持ち悪）

「気持ち悪」

「なっ…。気持ち悪いとは何ですか、気持ち悪いとは！」

「あ、口に出てた？」

心の中だけで納めていたはずが、しっかりと口に出ていたらしい。そしてしっかりとその眩きを耳にしたかぐやが憤慨する。

「いやでも、さっきの笑顔キモかったし」

「何ですってえ!？」

「そんな顔で俺を見ないでくれ」

「…そおおうううじいいいい？」

「お、おい、落ち着け四宮…」

地の底から湧くかのごとき声を出すかぐやに堪らず止めに入る白銀。

「っ…ごほん。申し訳ありません会長。お騒がせしました」

「猫被ったな」

「…」

ぴきつ、と体を震わせたかぐや。一方の総司は知らん顔で棚からカップを取り出し、ポットからかぐやが淹れたと思われる紅茶を注ぐ。

「お、おい藤原書記…。何とかしてくれ」

「あー、大丈夫ですよ会長。いつもの事ですし、会長だって初めてじゃないですよね？」

「まあ、そうだけど…。何度経験しても慣れん」

黒いオーラを纏うかぐやに、素知らぬ顔の総司。こうした二人の兄妹喧嘩を白銀が見るのは初めてではない。総司が白銀と交遊を持ち、生徒会を手伝うようになってからすでに何度か目にしていた。

初めの頃よりはマシにはなってきたが、やはりこの空気は慣れない。藤原はすっかり慣れ切っているようだが。総司の対面に腰を下ろして、総司が持つてきた本を読んでいる。

「ひゃあああああっ!!」

藤原が叫び声を上げたのはその直後だった。総司と白銀、オーラを霧散させたかぐやが藤原の方へと振り向く。

「乱れ…いや淫れてます…この国は淫れてます！」

叫んだかと思えば顔を赤くして慌て出す藤原。果たして、藤原が見たページには何が書かれていたのか。

「初体験はいつだったかアンケート…？高校生までに、が34%ですか」

藤原が落とした本をかぐやが拾い上げ、藤原が見ていたと思われるページを読み上げる。

「嘘です！皆そんなにしてるはずありません！」

34%、つまり三人に一人はしているという割合。この室内にいる四人の中でまず一人はいるだろうという確率である。

「こ…こういうのはこういう本を読んでいる人がアンケートに答えるからこういう結果になってるだけですよね…？」

「ああ。サンプルセクションバイアスというやつだ。実際そんなに多くないはずだぞ」

サンプルとは例、セクションとは選択、バイアスとは偏り。つまり、回答者を選んでアンケートを行った末にこの結果になったのだと白銀と藤原は結論付けた。

二人は笑い合っている。どこか苦笑じみてる気がするが。

(いや、割と的を射てる結果な気がするが…。まあ、言ったら面倒臭く

なりそうだから止めとこ)

「そうですか？私は適切な割合だと思います。むしろ少ないんじゃない？」

「「？」」

かぐやがそう口にしたのは、総司が内心で呟いた直後だった。総司を含めた全員が驚愕の表情を浮かべてかぐやの方へと振り向く。

「し、四宮……。もしかして、お前は……」

「ええ、もう体験してますよ？大分前に」

恐る恐る問い掛ける白銀。即答するかぐや。目を見開く藤原。白目になる総司。

「か、かぐや？何を仰っているのでせうか？」

「おい総司！どうなってるんだ四宮家の教育は！」

「ま、待つてください！かぐやさんが経験済みという事はまさ、ま、まさか……総司君も!?!」

「ええ、勿論。総司もですけど？」

「なにいいいいいいいいいい!!?」

「ええええええええええええ!!?」

何が起きたんだこれは。何を言っているんだかぐやは。というよりどうしてこうなった。

「まずい。これはまずい。ここでこの件について追求される訳にはいかない。」

「まさかお二人はまだなのですか？高校生にもなれば経験済みだと思っていたのですが……。随分愛のない環境で育ってきたんですね」

息を呑む白銀と藤原。

しかし総司はそれどころではなかった。

(う、嘘だろ……。かぐやが経験済み？は？相手はどここの誰だ？何だかんだかぐやはチョロいからその相手に騙されたんだろうが……。よし。帰ったらまずは父上に報告だ。それで許可貰って、総力を上げてかぐやの過去の行動を洗い出す。そのためにはまず――)

「会長には妹がいるんですから、妹とガンガンしてると思っていました」「ははっ、それな!?!……っつてしねえよ!!バカじゃねえの!!何言っ

んだ四宮!!？」

「家族ですもの、変な事じゃないですよ？現に私は生まれたばかりの甥っ子としましたよ？ビデオで撮られながら」

「狂気!!」

総司が殺意の波動に目覚めている間に会話は混迷を極めていた。

(は？甥っ子と？何だあいつ、まだ小学生の餓鬼の癖にませて…いや待て。生まれたばかり？ビデオで撮られながら？…おいまさか)

誰にも気付かれないまま揺らめいていた総司の殺意が収まっていた。そして同時に、とある可能性が総司の頭の中に浮かぶ。

「藤原さんだって、飼^ペい犬^スとしてよっちゆうしているではありませんか」

「してんの!!？」

「してませんよ！巻き込まないでください!!」

「…」

かぐやは生まれたばかりの甥っ子としていて、藤原が飼^ペい犬^スとしていて、白銀が妹としていてとかぐやが勘違いしていた初体験。

…これはもう、あれではないか？

「…四宮。一応聞いておくが、初体験って何の事か解るか？」

どうやら白銀も同じ可能性に至ったらしい。総司よりも先に、総司が口にしようとしていた問いをかぐやに投げ掛けた。

かぐやは白銀に視線を向け、溜め息を吐いてから答えた。

「バカにしないでください。淑女としてそれくらいの知識はあります」

「キツスの事でしよう？」

「…」

ああ良かった。惜^甥しい命^子を亡くす事にならないで本当に良かった。

というか、先程の白銀の問いとはまた違う意味になるが、同じ事を総司は雁庵に投げ掛けたかった。

(四宮の教育はどうなってるんだ)

性教育に関しては、総司とかぐやは別々で受けていたため、総司はかぐやがどういった内容の教育を受けていたか知らなかった。

だが今日、総司は知る。かぐやは、碌な教育を受けていないのだと。

「四宮…」

「会長。ここは私から…」

ここで言う初体験が何なのか、白銀は言おうとしたのだろうか。しかし藤原がそれを遮り、自分がと名乗り出る。

藤原はかぐやの耳元に口を寄せ、かぐやに説明を始める。

5分、10分、15分。…いや、長くない？どんだけ詳しく説明してんの？

かぐやが聞き返してない所を見ると、しつかり理解はしているようだ。そして――

「」

真つ赤に茹で上がったかぐやが出来上がった。

「だ…だって！そういう事は結婚してからって法律で…！」

言い訳を始めるかぐや。だがどれだけ言っても過去は消えないのである。

『会長には妹がいるんですから、妹とガンガンしてると思っていました』『現に私は生まれたばかりの甥っ子としましたよ？ビデオで撮られながら』

『藤原さんだって、飼^ベい犬^スとしようちゅうしているではありませんか』
これらの台詞は決して消えないのである。

後々にかぐやをからかうネタにさせてもらおう。

「という事は、総司君の経験というのもキスの事だったんですね？」

総司がそんな事を考えていると、こちらに歩み寄ってきた藤原が問い掛けてきた。総司は藤原の顔を見上げる。

「…うん、そうどうぞ」

「…はあく、良かったあく。本当に驚きましたよ…」

胸に手を当てて撫で下ろす藤原。先程までの衝撃が凄すぎたせいで、総司の返答が僅かにおかしかった事に気が付いていなかった。

だが、まだ気が付かなくて良かったのだ。

(これにて一件落着、と)

この騒動にて、犠牲者が出る事はなかった。

四宮総司は気付きたくない

四条帝。海外を拠点とした大規模な多国籍企業を経営する四条グループの跡取りである。四宮と四条の仲は過去のある出来事によって冷え切っており、四宮は四条を見下し、四条は四宮を憎むという形になっている。

そして現在、たった今。四宮総司はそんな四条帝からある相談を受けていた。

「真妃さんが情緒不安定？」

この日、平均よりも少なかった雁庵からの仕事を終え、余った時間を勉強に充てていた総司だったが、帝から通話が掛かってきた。

すぐに赤木を呼び、部屋の前を見張らせてから途切れた通話を総司から掛け直した。帝はすぐに通話に出て、総司と挨拶を交わしてから単刀直入に通話を掛けた用件を口にした。

「…いつもの事じゃないのか？」

『失礼だなお前！…いやまあその通りではあるんだけどさ』

四条真妃。今、総司と通話をしている帝の双子の姉。総司とは社交界で何度か会っているし、話した事もある。

秀知院学園の二年であり、総司とかぐやとは同級生。総司と帝曰く

「真妃さんはかぐやと似てるからな」

『…まあ、そうだな』

かぐやと真妃は似ている。本人達の前では口が裂けても言えないが。

『ていうかそうじゃない。そうじゃないんだよ。確かに姉貴の情緒が

あれなのはいつもの事なんだけどさ、今回は様子が違うんだよ
』というとっ。」

『ベッドで尋常じゃないくらいえづいてた』

「…いつもの事じゃないのか？かぐやもたまにあるぞ？」

『あんの!?え!?…あ、何か考えてみれば前にも同じ事があったような
』どっちなんだ。

『でもさ、やっぱいつもとは様子が違うんだよなあ』

「そんな漠然と言ったって解んねえぞ」

帝にしては珍しく漠然としている。いつもならばつと物事をこ
うだと、こう思うと言いつ切っているのだが。

『何か人間関係で悩んでるみたいなんだよな。 どうして友情ってこ
んなに苦しいものなの…?』とか言ってたし』

「何それ重い」

適当に聞き流していた総司の表情が一変する。何だそれは、一大事
じゃないか。

「え、眞妃さん苛められてたりしてんの？俺が知る限りじゃそんな風
には見えないし、聞いた事もないけど」

『いやー、仮に姉貴が苛められてたら今頃秀知院の生徒誰か消えてる
ぞ』

「…だよな」

苛めの線は無し、と。

「後、人間関係で苦しむ事といえば…。恋愛とか？」

『はあく？恋愛いく？あっはっはっは！ないない！姉貴に恋とか！あ
り得ねえって！』

「だよなあ。俺も自分で言いながら無いなって思った」

『あっはっはっはっはっはっはっはっはっは』

結局二人で話続けても結論は出なかったため、眞妃の悩みの詳細が
解り、それがすぐに解決しなければならぬ問題且つ、互いの協力が
必要だと判断した場合また連絡するというオチで話は終わった。

その、翌日――

「恋愛相談…ですか？」

「はい！私、もうどうしたら良いか解らなくて…。かぐや様だけが頼りなんです！」

かぐやに頼まれて生徒会の手伝いに来ていた総司だったが、その人はやって来た。

柏木渚。大手造船会社「柏木造船」の会長令嬢であり、経団連理事の孫。成績は優秀で、前回の学園内テストでは5位だった。

かぐやや、学園四大美女に隠れているが、柏木も男子に人気があり、最近彼氏が出来たという噂が流れている。もしや、恋愛相談とはその彼氏絡みの事だろうか。

「俺は外した方が良いか？」

「あ、いえ…。その、男子目線の話も聞きたいので、総司様も残って貰ってもよろしいでしょうか？」

「ん、了解」

残ってても良いらしい。というより、総司にも相談に乗ってほしいらしい。恋愛経験なんてゼロなのだが、まあ同じく恋愛経験ゼロのかぐやが変な事を言い出さないか見張らなければいけないため、お言葉に甘えて残らせてもらう。

「して、どういった内容の相談なのでしょう」

かぐやが柏木にどんな相談なのかを問う。すると――

「円満に彼氏と別れる方法が知りたいんです」

総司が想像していたものより二、三段階上の内容が飛び出してきた。何かこう、良さそうなデートスポットとか、ルートとか、そんな事を考えていたのだが。

「お二人は凄くモテますし、恋愛についての知識は半端ないとか！そんなお二人なら凄く良いアイデアをお持ちなのでしょう！」

何か期待が重い。それと誰がモテるって？

「俺は別にモテてないぞ」

「え？そんなつ。女子の間では総司様は物凄く人気なんですよ？」

「…そうなの？」

そんな事ないと思うのだが。告白とかされた事ないし。

その事を柏木に告げると、こう返ってきた。

「それは、総司様が尊すぎるからだと言フアンクラブの会員の方が言っていました」

「何だそりゃ。てかフアンクラブって」

訳の解らない理由と訳の解らない団体の存在を知らされた総司。フアンクラブについては後日、使用人に調べさせよう。必要だと判断すれば、容赦なく潰そう、うん。

「それで柏木さん。どうして別れよう?」

かなり話が脱線したが、かぐやが話の軌道を戻す。

そして、かぐやの問い掛けに対して柏木がポツポツと話し出す。

何でも、彼氏から告白してきたそうなのだが、その告白の仕方が唐突且つ衝撃的すぎて、勢いでオーケーしてしまったらしい。それから付き合い始めたのは良いのだが、柏木はその彼氏についてよく知らず、接し方も解らず、恋人らしい事も未だに出来ていないという。

その彼氏とは気まずくなり、距離ができた。別れようとする理由は、彼に申し訳がないから、というのが柏木の話だ。

「そうですね…。付き合つたとはいえ、こないだまで他人同士だった訳ですから、そういう気持ちになるのは解らなくもありません」

「でもさ、告白は受けたんだから嫌いな訳じゃないんだろ?」

「はい。でも、これが恋愛感情と言われると解らなくて…。嫌いじゃないからこそ、私のせいで気まずくなつた事に申し訳なくて…」

如何ともし難い問題である。相手を嫌いでないから、円満に別れたいとは。だが――

「嫌いでないのなら、別れるのは早計なのではないでしょうか?ただ自分が本当に彼を好きなのか不安なだけでは?」

「そう言われれば…。そうかもしれません…」

「それなら、まずは相手の良い所を探してみるのはどうでしょうか?」

(か、かぐやがまともな恋愛アドバイスを送っている…。ちよつと感動…)

かぐやが柏木に示す一つの解決案。まだ別れる事はせず、付き合い合っ
ていきながら相手の良い所を探す。

これは中々に良いアイデアなのではないだろうか。柏木の反応

も悪くない。

「例えば真面目な所だとか、勉強が出来る所だとか」

(うんうん。良いぞかぐや)

「努力家な所とか、実はすつごく優しくて、困ってる人を放っておけない所とか…」

(…あれ、かぐやさん?)

何やら雲行きが怪しくなってきた。ちらりと横目でかぐやの様子を見遣る。

満ち足りた表情をしていた。

「目付きが悪い所とか…」

「目付きが悪いのは短所では?」

「違うの! 目付きが悪い事を気にしているのが可愛いの!」
「…」

出ました。出てしまいました、ポンコツかぐやちゃまが。

ほら、柏木が目を丸くして「目付きが悪い人が好きなんですか?」とか言ってる。「かぐや様の周りで目付きが悪い人は…」なんて考え出してる。知ーらねっと。

(それにしても…)

総司はかぐやと柏木の顔を見回す。完全に二人の世界に入って議論している。議論というより、かぐやが墓穴を掘りまくってるだけなのだが。

総司の事など忘れているのではなからうか? これ、出ていった方が良いのではなからうか?

「話は聞かせてもらいました!」

なんて考えていると、勢いよく生徒会室の扉が開かれる。そこから現れたのは、赤い帽子を被った藤原だった。

「藤原さん!」

「…あ、その帽子って「総司君?」ナンデモアリマセン」

生徒会室に来た藤原が被った赤い帽子に既視感を覚えた総司はすぐに思い出す。以前、藤原が生徒会室で踊っていた謎ダンスを。

それを口にする前に、藤原に封殺されたが。

何やらその帽子は演劇部から借りてきたらしい。あの時も借りていたのだろうか。あの帽子投げだけのために？

：やはり、藤原は解らない。

藤原が来てからは迅速に事は進んだ。

藤原はまず、柏木に今の彼氏が他の女子とイチヤイチャしている所を想像してみようと提案した。何故かかぐやも一緒になって、恐らく相手は違うだろうが想像していた。

結果、柏木は嫌な気持ちになり、かぐやは女子二人には悟られていなかったが、かなりムカムカしていた。

そしてそれは嫉妬だと、相手の事が好きだからこそ嫌な気持ちになるのだと藤原は言った。

うむ、まさにその通りである。好きでもない相手が自分以外の異性とイチヤイチャしようとしてようと、別にどうも思わないはずなのだから。

だからかぐやよ、ショックを受けるな。いい加減認めるといい。自分の気持ちを。

そうして柏木は自分にも相手を好きな気持ちがある事を自覚し、これにて一件落着：かと思えば、柏木は続いて相手ともつと自然に話せるようになるにはどうすれば良いのかという質問をした。

その結果――

翌日、総司は募金活動の手伝いをさせられていた。

あの質問の後、まずかぐやが二人の共通の敵を持つのはどうだろうかというアドバイスを送った。人ではなくとも仮想敵でも、二人で共有すれば愛情は深まるのではないかと。

確かにそうかもしれないが、その敵を探すのは難しいのではないか。と思われたその時、藤原が動き出した。

藤原は言った。二人が戦わなければいけないのは社会だと。終わ

らない戦争、無くならない貧富の差、これほど強大な敵はいない、と。その時、総司もかぐやも思った。何を言ってるんだこいつ、と。だが柏木は違ったようで、藤原の熱に感化されたのか、燃え出した。すぐに彼氏の元へと駆け出していった。

そして今日、この光景に繋がるのである。白銀が学校外で募金活動の要請を受け、その手続きを白銀の手解きを受けながら柏木とその彼氏（翼くんというらしい）が行い、生徒会＋総司と一緒に募金活動を行っている。

「やれやれ…?」

白銀と一緒に荷物の整理を行っていると、総司は視線の端で気になるものを捉えた。電柱の影に隠れてこちらを覗く人影。

総司は振り向き、その人影を注視する。

（あれは…、眞妃さんか?）

その人影の正体は、四条眞妃だった。眞妃は目に涙を浮かべながらこちらを、というより募金活動をする柏木達を見ていた。

（…ん?）

そう。泣きながら彼等を見ているのだ。

その事に気付くと同時、総司は一昨日のある会話を思い出す。

『姉貴が情緒不安定なんだよ』

（…んんん?）

次々に脳裏に過る総司と会話の相手だった帝の言葉達。

『今回は様子が違うんだよな』

『何か人間関係で悩んでるみたいなんだよな。 どうして友情ってこんなに苦しいものなの…?』とか言ってたし』

（んんんんん?）

総司の額から冷たい汗が流れ出す。

『後、人間関係で苦しむ事といえ…。恋愛とか?』

『はあく?恋愛いく?あつはつはつは!ないない!姉貴に恋とか!あり得ねえって!』

『だよなあ。俺も自分で言いながら無いなって思った』

『あつはつはつはつはつはつはつはつはつは』

(んんんんんんんんんんんん!!?)

自分達の言葉の数々を完全に思い出した総司。

まさか…、まさか…。

「…気付かなかった事にしよう」

「何がですかあ？」

「いや、何でもないよ」

さすがの総司でも何も思い付かなかった。いや、本当にどうすればいいんだこれ。帝に報告するべきか？いや、それは流石に眞妃が可哀想だ。自分の失恋を弟に知られるとか、あのかぐやと同じプライドの塊が耐えられる筈がない。

よって、ここでの最善策は何も知らなかった。何も見てなかったと自分に言い聞かせる事なのだ。

「よし。それじゃあ、俺達も行くか」

「はい！行きましょう！」

荷物の整理を終えた総司は藤原と並んで、すでに柏木達に加わっていたかぐやと白銀の隣に募金箱を持って並ぶ。

「募金活動にご協力お願いしまーす」

「しまーす！」

そして、道行く人達に向けて声を張り上げるのだった。

悲しい視線に気付かぬ振りを続けながら。

四宮総司は男である

「あら、これは…」

かぐやがそれを見つけたのは、自室で明日の授業の準備をすべく鞆を開けた時だった。教科書とノートの上にポツンと載ったそれ。

それを見た瞬間、今日生徒会室で起きた出来事を、ある人のある光景を思い出し、にやけそうになってしま——

パシイイイイン

張り手の音が鳴り響いた。かぐやの右の頬には綺麗な赤い手形が刻まれている。

「っ、そうだわ！」

そしてその瞬間、かぐやの頭の中でとある考えが浮かんできた。直後、時計を見る。平均的に見れば、まだ総司の仕事が終わっていない時間帯。

だがかぐやにとってはそれどころではない。

「早坂！早坂来て！」

早速考えを実行に移すべく早坂を呼び出す。

これがどの様な結果を生み出すか、かぐやは楽しみで仕方なかった。

「んで？何だ、それは」

仕事の途中、今日は遅くなりそうだななんて考えが過った時かぐやに呼び出された総司は断る事なくかぐやの部屋に行った。

かぐやの部屋にはいつもの様にかぐやと早坂が。そして何故かかぐやの手にはある物が。

「猫耳です。お二人に着けてもらおうと思って」

「は？」

呆けた声が漏れる。何を言っているのかこいつは。

「というか、何故かぐや様は猫耳を持っているのです？」

そう、まずはそこだ。早坂の言う通り、何故かぐやは猫耳なんて持っているのか。そういった俗物的物からは遠ざけられている筈なのだ。

「…実は」

かぐやは説明を始めた。

三日後に行われる、フランスパリにある姉妹校との交流会準備を生徒会で進めていたらしいのだがその際、藤原からコスプレをしてはどうかという案が出たらしい。

藤原は裁縫部から衣装を借りて持ってきたのだが、その中にかぐやが持っていた猫耳が入っていたという。どうやら間違つて持ってきてしまったらしい。

さて、これで総司と早坂が知りたかった経緯の説明は終わった。終わった筈なのだが、かぐやの口は止まらない。

会長が猫耳を着けたただのおかわわだの思い出すだけで口元が緩むだの、暴走が始まった。

「かぐや、どうどうどう」

「落ち着いてください、かぐや様」

「…そうね。とにかく、二人には猫耳を着けてもらおうわ」

いや、それが解らない。かぐやが猫耳を持っていた理由は解ったが、それが何故総司達が猫耳を着けさせられる事になるのかが。

まあ、かぐやの表情を見る限り只の悪戯なのだろう。総司と早坂の猫耳姿を見て面白がりたいたけなのだろう。

「ほら総司、着けなさい」

「はあ…。解ったよ」

溜め息を吐く。多分、ここで断つたら面倒臭い事になる。総司は素

限に引き出す組み合わせ、それが相利共生である。

早坂は動物が好きである。夜寝る前は動物の…まあ少し変わった動画を見ているが、勿論可愛い系の動画も好きである。

そして、早坂の目の前にはかぐやとよく似た整った顔立ちをした総司。猫耳と組合わさった彼が、早坂にはどう映ったか。

マリアージュ
奇跡的相性！

他者にはともかく、早坂にとってこれは最高の組み合わせなのだ。結果、キまる。

「は、早坂？震えてるけど、大丈夫？」

「大丈夫ではありません、問題です」

「問題なの!？」

何とか平静を保とうとする早坂だが、上手くはいかない。本音が声に出してしまう。

(これは駄目だ…。よし、かぐや様を見て落ち着こう)

早坂はこれ以上見てはいけないと総司から視線を外し、かぐやを見る。物凄い形相で。

「早坂…、早坂…？何で私をそんなに睨んでいるの…？」

「本当に申し訳ございません。ですが、私のためにもう少しだけ睨ませてください」

「え、ええ…」

「…」

そして一方の総司はというと、どうも面白くない。着けたくない猫耳を着けさせられ、かぐやにはからかわれ、早坂には何か微妙な反応をされ、これなら可愛いと大騒ぎされた方がまだマシだったかもしれないと思えてしまう。

「…っ」

だがここで総司は良い事を思い付いた。総司は猫耳を外し、未だにかぐやにメンチ切ってる早坂の背後に回り、彼女の力チューシャと猫耳を取り替えた。

「えっ!？」

「あっはっはっはっは！猫耳メイドのかんせ——」

猫耳メイド早坂が至近距離まで来た事により、更に総司の中で混乱が大きくなる。

「あっ」

このままではまずい、と一歩右足を下げようとした瞬間、早坂の左足と絡まった。

二人はバランスを崩し、下がろうとした総司の方へと倒れていく。

「総司！早坂！だいじょうぶ…ぶ…」

転倒した二人。その体勢はまるで、早坂が総司を押し倒したかのようになっていた。それを見たたかぐやの声が途切れていく。

「…」

「…」

先程よりも至近距離で見つめ合う二人。早坂は顔を真っ赤にして。総司は瞳をぐるぐるさせて。

まるで縛られたかのように身動きがとれない。言葉を発する事も出来ない。次第に、奇跡的相性^{マジアージユ}に対して耐性ができ始めた総司が正気を取り戻していく。

(…何でこうなった?)

その結果、呆然となる。勿論、こうなった経緯は覚えている。だが、何故自分はあるそこまで混乱していたのか、早坂に対して興奮を覚えていたのか。

いや、興奮は今も収まっている訳ではない。ただ、先程よりはまだマシになった分、思考できるようになっただけである。

「いつまでそうしてるつもり?」

「っ!」

早坂が勢いよく離れ、乱れた服装を整える。総司も即座に立ち上がり、同じく服装を整える。

そして、僅かに頬を染めたたかぐやが溜め息を吐いた。

「別に私は二人がどうなろうと構いません、というよりむしろ…ですが、そういう事は二人っきりの時だけにしてください」

「かぐや様っ!!」

途中、声が小さく聞き取れない部分があったが、とにかくかぐやは

勘違いしているらしい。だがその件に関しては早坂が正してくれるようだ。

しかし、何とも奇妙な体験だった。まるで何かに取り憑かれているようだった。正直、もう二度と御免である。

「…」

そのはずなのだが、何故だろう。猫耳メイド早坂を見ているとう、不思議な気分になるというか。先程の感覚が戻ってくるというか。そして、つい先程までもう御免だと思っていたのに、その感覚が心地好く感じてしまう。

(…かわええ)

内心で呟く総司。

総司も、どれだけ天才だ鬼才だと騒がれていても、結局は一人の思春期男子なのである。

四宮総司は羨ましい

「二間に合った〜…」

校舎内にある講堂、その外にて生徒会の面々は疲労困憊の様子でぐったりしていた。

それも当然だろう。突然校長からフランスパリの姉妹校からの交換留学生歓迎会の準備をするように指示されたのが三日前。そして今回、その準備に総司がほとんど参加できなかったため、本当に生徒会のみでこの交流会を準備しきったのだ。

「おう、ホントにお疲れだ」

「えエ、皆サマお疲れ様デス。急なお願いでしたが、よくぞ形にしてくださいませ」

今この場にいる三人、本当はもう一人、石上も交流会の準備を頑張っていたのだがこの場にはいない。そのため三人に労いの言葉を掛ける総司と校長。

「まあ、この位は…。ですが、これからは直前に言うのやめてください。他の役員達に負担をかけるのは俺の方針じゃありませんので」

白銀が校長の言葉を受け取りながらも、二度とこんな事がないよう校長に釘を刺す。いや、本当に大変そうだった。

交流会当日の直前準備だけは、参加者として大勢の生徒と共に準備を手伝った総司だったのだが、生徒会の四人は慌ただしく動き回っていた。当日なのに。

「ハッハー！わかってマスー！もうしまセンヨ！」

「…」

またするなこいつは、と総司は思った。きつと、白銀も同じ事を思ったに違いない。呆れたように溜め息を吐いている。

「これより、皆さまも楽しんでくださいーイ」

会場ではすでに日本にきた姉妹校の生徒と秀知院の生徒の交流が始まっている。校長は三人を押し出して会場へと入れさせる。

そのまま生徒会メンバー達は会場の奥へと歩いていった。

その背中を、総司と校長が見送る。

「…で、白銀は貴方のお眼鏡に適ったんですか？校長」

会場へと入っていった三人が各々行動を始めたのを見てから、総司が隣の校長へと問い掛けた。

先程、総司は今回の交流会の準備を手伝えなかったといったが、その理由がこの校長である。

校長が事前に総司に、交流会の準備を手伝わないようにと命じたのだ。

あの疲労ぶりを見ていて、相当忙しかった事が解る。白銀とかぐや、藤原や石上にも手伝って欲しいと頼まれた。だが、総司はそれを用事があるからと断っていた。

そして今日、無事に交流会は開かれた。これをこの男はどう思ったのか。

「…確かに能力は中々のものデス。ですが、私はもう一つ確かめなければならぬ」

「と、いうと？」

「ベツィー」

校長は白銀に対してある一つの評価を下すと、一人の女子生徒を呼んだ。

呼ばれ、姿を現した生徒に校長は簡潔に命じる。

『遠慮はいらない。あの白銀という男を…、全力で切り刻んできなさい』

フランス校副会長、ベルトワーズ・ベツィー。彼女の舌先は、いずれ人を殺すと云われている。

仏ディベート大会二年連続優勝という輝かしい功績を持ちながらも、相手の人格までも否定する論理展開を得意とし、多くの対戦相手を再起不能に陥れた。

そんな彼女についた異名が、”傷舐め剃刀”のベツィー。

「…で、それで何を確かめるんです？」

「簡単だヨ。彼の精神力。この学園の長に立つ者とシテ、その立場にあるプレッシャーに耐えられるかどうか」

そう言つて、校長は横目で総司を見遣る。

「君ならば解るだろう？」

「…」

黙り込む総司。それを肯定と受け取り、視線を外す校長。その後、

「いや、全く。プレッシャーとか感じませんでしたけど？」

「え、あ、そ、そう？」

総司はそんな事はなかつたと言いつつ切った。

戸惑う校長。若干恥ずかしげに頬を染めているように見えるのは気のせいか。

まあ、どや顔であんな風に同意を求め、結果否定されるというのは中々に恥ずかしいだろう。

「しかし、私はてつきりあの時から六年間、君の時代が始まるとばかり思つていたヨ」

「…まあ、あの時から色々忙しくなりましたから。会長の仕事やりながら今の生活をするのは無理です」

総司は四年前の自分を思い出す。まだ敗北というものを経験した事がなく、全てを自分一人で熟せると勘違い…いや、全てを自分一人で熟さなくてはならないと思つていた当時の自分を。

(ホント、俺の力になろうとしてくれた彼等には申し訳なかつたな)

自分を手伝おうという声を拒んだ。自分を支えようとした手を振り切つた。そして皆、離れていった。総司は一人になった。

だから総司は思う。今の生徒会の光景は本当に眩しい。あんな光景を、自分も作りたかつた、と。

「我々も行くかうカ。ベツィーが仕掛けるようダ」

「そうですね。そつちには興味ありませんが、ここで話してたら何のために来たんだつて話になりますから」

校長は白銀とベツィーの方へ。総司は一度辺りを見回してあぶれ

ている生徒がいないか探す。

『こんにちは』

『ん…。はい、こんにちは』

すると、総司の背後から女子生徒が話しかけてきた。

女子生徒からの挨拶に、総司も挨拶を返す。

話し込む二人。それから二人の周りには更に人が集まっていく。

いつの間にか大集団での談笑になった交流会は、あつという間に過ぎていくのだった。

「で？何でかぐやは凹んでんの？」

「さあ…。私は総司君と一緒にいましたし、解らないです…」

交流会は終わり、後片付けの時間。この後片付けは手伝っても良いとの事で、総司も生徒会と一緒に片付けを行っている。

そういえば、交流会が終わった後、会場を去る前に校長が言っていた『白銀御行は君に迫る逸材かもしれん…』とは一体どういう意味なのか。

あと、あのベツイーとかいう女子生徒もどうなったのだろうか。ちらりと、かぐやに肩を掴まれながら何か言われていた所は見たのだが、以降彼女の姿を見ていない。

まさか、かぐやが凹んでいるのはそれが関係しているのだろうか？

「総司くーん、これってあつちにまとめておいてほしいようぶですかねー？」

「…まあ、良いんじゃないか？多分」

俺に聞くな、白銀に聞け、とは言えなかった。

何故なら、白銀が凹んでいるかぐやに歩み寄っていたからだ。

藤原が段ボールを抱え、よいしょよいしょと運んでいくのを見届け、片付けを再開しながらかぐやと白銀の会話を耳を澄ます。

「だからな、最初にも言ったが俺はフランス語は付け焼き刃だ。だか

らお前が何を言ってたかなんてわからんし、聞かれなくなかったのなら聞かなかつた事にしよう」

フム…。白銀の話聞く限り、やはりあのベツイーという生徒にかぐやが何かを言っていたあの時が関係している様だ。

しかし一体、かぐやは何を言ったのだろう。自分で凹む程の事は一体。全く想像がつかない。

「ただまあ、俺の悪口に怒ってくれたって事だけは解る」

そして、耳に入ってきた白銀の台詞で総司の中で全ての合点がいった。あのベツイーという生徒は校長の指示で白銀に悪口を叩きつけていたのだろう。校長から聞いた異名を考えれば、相当きつい事を言っていたに違いない。

かぐやはその悪口を聞いて怒ったのだ。そしてベツイーのものは比べ物にならないおぞましい悪口をベツイーに向けて放つたに違いない。フランス語で。

だから白銀はかぐやが何を言っていたのか解らなかつたのだ。ベツイーが自身に悪口を言っていた事は雰囲気から読み取れたようだが。

「…ありがとな」

「会長…」

横目で二人を見る。何とも心暖まる光景だ。

かぐやが立ち上がり、作業をする白銀に向かって微笑む。

「会長？私、会長のそういう所が———ですよ」

「」

総司の思考が停止した。いや、元からかぐやの気持ちなんて知っていたのだが、実際にかぐやの口から聞いたのは初めてだった。

初めてだった故に、思考が沸騰した。

ここで言っておこう。四宮総司はシスコン気味である。だから総司は気付かなかつた。かぐやの台詞は飽くまで白銀の性格の一部分に対してのものだという事に。

それでも、かぐやがそう言った事は大きな進歩ではあるのだが。

「ん？何？何て言った!?!」

「内緒です」

「ちよつ、やめろよそういうの！気になるだろう…が？」

かぐやが何か、日本語ではない言語を言った事は解ったのだがその意味が解らなかつた白銀がかぐやを問い詰めようとする。

だがそこで、白銀は肩を掴まれた。

「そ、総司…？」

「白銀」

微笑んでいる。微笑んでいるのだが、目は笑ってない。更に何やらおぞましい何かを発生させている総司にたじろぐ白銀。

「俺の屍を越えない限り、赦さんぞ」

「何が!？」

「総司っ！」

「え？何かあつたんですかー？」

肩を掴む手に力を込める総司。総司に睨まれ震える白銀。総司を叱咤するかぐや。そして戻ってきて、何が起きたか解らないでいる藤原。

彼等是以降、ほとんど片付けが進まず校長に謝罪し、片付けを明日に持ち越す事になったという。

石上優は相談したい

「総司先輩、少し良いですか」

そう声を掛けられたのは、授業が終わり帰ろうと廊下を歩いていた時だった。振り返ると、そこには長い髪で片目を隠した男子生徒が立っていた。

「石上？どうかしたのか？」

「ええ。実は、総司先輩に相談したい事があって」

石上優。生徒会の四人目のメンバーにして、会計を務めている。彼は一年ながら白銀のスカウトにより生徒会に加入した優秀な人材。

普段は仕事を持ち帰り、打ち合わせ程度でしか生徒会に顔を出さないが、れっきとした生徒会のメンバーである。先日のフランス校との交流会の準備でも奮闘していたという。

「相談？俺に？白銀じゃなく？」

「会長にも後で相談しようと思ってます。でも、まずは総司先輩から話を聞こうと思って」

「…わかった。じゃあ屋上にでも行くか」

よく解らないが、表情を見る限り真剣に何か悩みがあるようだ。一度今日の予定を思い返し、少しくらいなら時間をとつても大丈夫だろうと判断した総司は承諾する。

どんな悩みかはまだ解らないが、あまり他人に聞かれないだろうと、この時間は人が来る事が少ない屋上で話を聞く事を提案すると石上は素直に従い、二人で屋上へと向かう。

秀知院学園ではすでに衣替えが始まっていた。生徒会長の証である純金の飾緒を身に付けている白銀以外は全員夏服へと衣替えしている。

外に出れば、つい少し前まではまだ寒いと思っていたのにと驚く程に夏の暑さが肌を包む。白銀はこの暑さの中で、あの制服を着たまま毎日自転車登校しているのか。そしてこれからもっと暑くなっていく。

…考えるだけで暑苦しい。

「それで？話って何だ」

屋上へと出た総司は、早速単刀直入に石上に問いかける。

石上は数瞬言い淀んでから、意を決したように口を開いた。

「僕、生徒会を辞めようと思うんです」

「へえ、生徒会を辞めるね」

フムフム、と石上の台詞を思い返す。

そうか、生徒会を辞めるか。生徒会を、辞める。

生徒会を――

「思い止まってやれ。お前が辞めたら白銀が過労死するぞ」

ハッキリ言おう。今の生徒会は石上が成り立たせているといっても過言ではない。

石上が入学するまで、会計の仕事は白銀がかぐやがローテーションを組んで行っていたのだが、正直見ていられない程に忙しそうだった。総司が生徒会を手伝うようになったのは実を言うと、それが切っ掛けだったりする。

今、生徒会はその頃以上に忙しくなっている。もうすぐ部活の予算案のまとめも行わなくてはならない。そんなタイミングで石上が生徒会を辞めれば、多分白銀が死ぬ。

「というより、理由は何だ。お前は今の生徒会を気に入ってるそばかり思ってたんだがな」

「…はい。僕はその場所が好きです。僕を生徒会に入れてくれた会長には感謝しますし、藤原先輩も何だかんだ話してて楽しいですし」

石上が生徒会を辞めたいと言い出した理由を問う質問の直後の総司の台詞に、石上は同意する。だが直後、石上はでも、と続けた。

「四宮先輩が…。僕、四宮先輩に殺されると思うんです…」

「はあ？」

素っ頓狂な声が漏れた。何をふざけた事を、とも思った。しかし、石上の表情と震えぶりを見て、笑い飛ばす事は出来なかった。

「何でそう思う?」

「…脅されているので、言えません」

「…」

かぐやに殺されると思う理由を問いかけるも、石上は口を割らない。

(よく解らん…。解らんけど、うん)

一つだけ解るのは、石上がかぐやの地雷を踏み、口止めされている事。そしてきつと石上が口外しないか、かぐやは監視しているのではないだろうか。

その時に漏れた殺気を石上は感じ、恐れているのではと総司は予想を立てた。

「とにかく、かぐやには俺から注意しとくよ。石上が悩んでるって」

「ほ、本当ですか…」

「ああ。だから辞めるなんて言うな」

微笑み、石上を元氣付ける。総司に話しかけてからこれまで、一度も固い表情を崩さなかった石上だったが、ほんの少しその表情が緩んだ。

「…ありがとうございます」

「でも、それでもかぐやの態度が直る保証はないから、白銀にも話しかけよ。…もしかしたらそっちの方が効果があるかもしれない」

「え?何か言いました?」

「いや、何も」

一応、白銀にも相談しておく事を勧めしておく。むしろそっちの方が効果がありそうだから。口が裂けても言えないが。

もし石上に言ったら、本当にかぐやに殺される事になりかねない。石上が。

相談も終わり、石上もとりあえず生徒会を辞める事を思い止まった。

その後、石上は生徒会室へと向かい、総司は校門前に待たせている

車へと向かう。

石上がこの後、再びかぐやへの恐怖を再燃させた事は知る由もなかった。

「かぐやー、入るぞー」

その日の夜。一段落つく所まで仕事を終わらせてから、総司はかぐやの部屋へと来ていた。理由は勿論、石上から受けた相談の件である。

総司は一度ノックした後、扉を開けてかぐやの部屋へと入る。

部屋の中ではいつもの二人が話していたようだ。会話を中断し、部屋に入ってきた総司を見ている。

「珍しいわね。総司から私の部屋に来るなんて」

「まあ今日は少しかぐやと話したい事があつてな」

話したい事？と首を傾げるかぐや。早坂も頭の上に疑問符を浮かべている。

「かぐや、最近石上を虐めてるらしいじゃないか」

「…は？」

呆けた声を漏らすかぐや。目を丸くしてかぐやの方を見る早坂。

「俺に相談しに来てたぞ？お前に殺されるくつて」

「…そうですか。石上君、総司にも相談していたのですね」

かぐやの瞳からハイライトが消える。何故？

「それで？石上君は何と言っていたのです？」

「え？いやだから、お前に殺されるかもしれないって」

「それだけですか？他にも何か言ってますませんでしたか？」

「いや？ああ、そういうえば脅されてるから理由は言えませんが言つてたな」

「…」

かぐやのハイライトが戻っていく。いやだから、何故――

(ああ…。石上が口止めを破ったんじゃないかって思ったのね)

かぐやは石上に勘違いをしていたらしい。それに気付いたかぐやの表情が元に戻っていく。

「そう、ですか。そうでしたか。それならよかつ…いえ、良くありません！本当にあの子は…！会長にも私に殺されるとか言ってたんですよ!?!」

「いや、石上にそう思わせる様な事をかぐやがしたんだろ?」

「そんな事はありません！ちよつと強目に口止めをしただけです！もうつ、失礼ね全く」

かぐやのちよつとはちよつとじゃないから仕方ないんじゃないか、とは言えなかった。総司は苦笑いするだけに留めた。

「かぐや様は会計君を虐めているんですか?」

「聞いている通りだ。本人に自覚がないのが厄介だ」

「だから虐めてませんっ!」

かぐやにはそのつもりはなくても、相手がそう思えばそれは虐めになるのである。勿論程度はあるが、今回のケースは完全に虐めになるだろう。

かぐやの方にも事情があるとはいえ、飽くまでそれは個人的なものである以上、かぐやに過失はある。

「酷いですね」

「全くだ」

「二人して私を虐める!」

総司は早坂と一瞬のアイコンタクトの後、息のあったコンボでかぐやを口撃する。かぐやは目の端に涙を浮かべながら言い返すも、二人に全く効いた様子はない。

「早坂! 貴方は私の近侍でしょう!?! どうして総司側にいるの!」

「まあ、主人の間違いを正すのも使用人の役目だと思いますし」

「…こつちに来ないと総司に言うわよ」

「総司様。あまりかぐや様を虐めないであげてください」

「掌返し速すぎねえか!?! 早坂お前かぐやに何を握られてんだ!?!」

あまりに突然すぎる早坂の裏切りに驚愕する総司。先程の意思疎

通はどこへ行ってしまったのか。

四宮別邸の夜はこうして慌ただしく過ぎていった。

ちなみに、かぐやの石上に対する態度だが、ほんの少し柔らかく
なったという。

石上本人には全く伝わっていないのだが――。

藤原千花は誘われる

「そういえば来週は期末テストですね。皆さん、勉強はなさってますか?」

生徒会室にて、かぐやはそう口にした。

そしてそれは、とある二人の頭脳戦開始のゴングでもあった。

「ピ、ピユ、ピユ〜…」

「吹けてないぞ藤原」

そっぽを向いて口笛を吹こうとする藤原はその事には全く気付いていない。この頭脳戦で一番被害を被っているのは彼女だというのに、その事に全く気が付いていない。

「試験勉強など必要ない。そんなもん、普段から勉強していれば必要ないもの。試験前に一夜漬けなんてもつてのほかだ。君らしくはれぐれも一夜漬けなんてするなよ。体調を崩すだけだ」

「…」

「そうですね。テストは自分の实力を見るものです。無理に背伸びをして良い点を取っても本来の自分は見えません。自然体で受けるのが一番でしょう」

「…」

ほら、テスト前恒例行事が始まった。かぐやと白銀の戦前暗闘が。

白銀もかぐやも互いに意識し合う様になってからは特に、一夜漬けしまくってる癖にこれだ。白銀なんてあの顔を見る限り十夜漬けくらいしててるのではないか。肌年齢が三十才程年老いてる気がする。

「でも、石上君は少し背伸びしないと不味いかもしれませんよ」

「大丈夫ですよ。今回は試験勉強バッチリなんで。じゃあ、僕は帰っ

て勉強でもしますので」

「…俺、一昨日偶然新作ゲーム買ってる石上見たんだけど」

「つつつつ!!?」

「石上君?」

「そそそそれじゃあ僕はこれで!」

慌てて帰っていった。あれは完全に勉強する気ゼロ、ゲームする気満々という感じだ。

別に本当にゲームを買う石上を見た訳ではない。ただカマを掛けてみただけだ。そしたら簡単に引つ掛かってくれた。

「…仕方ありませんね」

「何がです?」

「いえ、こちらの話です」

走り去る石上の後ろ姿を眺めながら、かぐやがポツリと呟いた。その呟きを耳にした藤原がどういう事か、かぐやに問い掛けるもかぐやはそれを誤魔化する。

それ以降、かぐやと白銀の足の引つ張り合いが再開される。やれ勉強量が点数に反映される訳じゃないから勉強しない手もある、やれテスト三日前からは勉強せず座禅している。よくもまあ、そんな口からデマカセがぼんぼこ出てくるものだ。

というより、この二人はいい加減この足の引つ張り合いは効果が無い事に気が付かないものか。

「むむ…、なるほど、解りました!私、勉強しません!」

「ほら、藤原が流されたよ。どうしてくれんだ二人とも」

「…」

じとーつとかぐやと白銀を睨む総司。同時にそっぽを向く二人。何が何だか解らず疑問符を浮かべる藤原。

「…はあく。藤原、明日から放課後図書室に来い」

「へ?どうしたんですかいきなり?」

「テストの日まで勉強見てやる。お前、一年の頃からだいぶ成績下がってるだろ。…どっかの誰かさん達のせいで」

「?」

「…」

そつぽを向いたまま動かず、黙り込んだままのかぐやと白銀。そして首を傾げる藤原。

藤原のどこまでも明るく純真な所は美点だと思っていたが、この様子を見て純真すぎるといふのも考えものだなと思ひ直した総司だった。

翌日、早速放課後に図書室で合流した二人は並んで席に座り、勉強を始める。

元々藤原は学習意欲が高く、性格以外は優等生なのだ。ただ、生徒会に入ってから例の二人の争いに巻き込まれ、被害を受けているだけで。

そのため、勉強は順調に進んでいた。藤原が解らないと言った所を丁寧に教えてやれば、一度で理解してくれる。普段の授業態度が思い浮かべられる。きつと、真面目に受けているのだろう。でなければ、一度説明しただけで理解する事など出来はしない。

「いやあく、助かります。今回のテストで成績下がったら、お小遣い減らすってお父様に言われてたんですよ」

「…なのに勉強しない気でしたのか」

「あ、あの時は本当にそうした方が良いんじゃないかって思っちゃったんです！」

ぽわぽわと微笑みながら矛盾する台詞を口にする藤原に、総司は苦笑を浮かべる。

ホントに、何というか――

(うちの愚妹が申し訳ない)

藤原に言ってもきつと解らないだろうから、心の中だけに留めておく。

妹の不始末をフォローするのも兄の役目なのだ。

「ねえ、彼処にいるの。総司様と藤原さんじゃない?」

「うわ、マジじゃん!二人で勉強してる…」

そうして勉強を続けている内に、何やら周囲からこそこそと話す声が聞こえてくる様になる。

総司は勿論、藤原もこの学園では有名人である。そんな有名人二人が、それも異性同士が二人きりで、放課後の図書館で、一緒に過ごしていれば注目の的にもなるだろう。

「あの二人、仲良くしてる所たまに見るけどもしかして…」

「ええっ、うそっ!でも、あり得ない話じゃ…」

「…何か、注目浴びちゃってますねえ」

ヒートアップしていく周囲の声は藤原の耳にも届くようになる。

藤原は僅かに頬を染めながら、苦笑いと共に呟く。

「すまん。こうなるかもと考慮すべきだった」

「そんな!その、私は気にしてませんから」

気にしてないとは言っているが、頬の赤みが藤原が感じている羞恥を物語っている。

勉強はここまでにすべきだろうか。少なくとも、今日はもうこれ以上ここにはいられないだろう。

そして、明日からは何処で藤原の勉強を見るべきか。まず図書室は除外、屋上も論外、あんな暑い中勉強など集中できるはずもない。

(…明日からは一人でやってもらうか?多分、もう勉強しないなんて事はないだろうし。…だが)

多分、学校の何処に居ても注目を浴びるのは変わらない。今のよう
に勉強どころじゃなくなるのは目に見えている。

しかし、一度テストの日まで勉強を見ると口にした以上、その言葉を
を違える事はしたくない。それならば、どうやって――

「総司君?どうかしましたか?」

「いや…。これじゃ勉強に集中できないから、丁度良い場所はないか
とと思って」

思考を巡らせる。学園内はどこでも人目に付くだろう。選択肢か
ら除外する。それならば、学園周辺の施設で都合の良い場所はある

か。

「そうですねー。それなら、総司君のお家はどうですか？なんてー…」

「あははー、なんて笑いながらそう言った藤原。その一方で、総司は雷に打たれたような衝撃を感じていた。」

生徒の目に付かず、勉強に集中しやすい場所。ああ、何という事だ。二つの条件を完璧にクリアしているではないか。そうだ、これ以上丁度良い場所なんてないじゃないか。

「藤原の家って門限どうなってるんだ？」

「え？えっとー、一応七時までには帰ってこいって言われてますけど？」

「…学園から家まで大体十五分。家から藤原家までは三十分くらいか？余裕をもつて勉強は六時までという事にして、それなら大体二時間くらい時間がとれるか…？」

「あ、あの、総司君？本当にどうしたんですか？」

「よし」

予定はまとまった。

総司は戸惑っている藤原の方を向き、その事について伝える。

「藤原。明日からは俺の家で勉強だ」

「…ふえ？」

「七時が門限って事だから、勉強会は六時までにしておこう。そうすれば家から藤原家の屋敷まで三十分くらいだから七時までには帰れ…おい藤原？聞いているか？」

総司の中で固まった方針を藤原に説明し、同意を貰えればそれでいいこうと考えていたのだが、何故か当の藤原が固まっている。

その事に気付き、総司は藤原の顔を覗き込みながら、目の前で手を振る。

「おい藤原く？藤原さくん？藤原お嬢様く？」

手を振り続け、同時に藤原への呼び掛けも続ける。

だが、一切の反応はない。

ただ一つ、唇が小さく動いているのだけは見える。何か呟いているの

だろうか？

聞こえない藤原の声を聞き取ろうと、耳を澄ましたその時だった。

「うええええええええええええ!!?!」

「

藤原が叫び声を上げる。至近距離で叫び声を受けた総司が仰け反る。

「あつ、あ……。う、ごめんなさい！大丈夫ですか総司君!？」

耳を塞いで蹲る総司に寄り添って、慌てて謝る藤原。聞き耳立てた総司の自業自得のだが、藤原には関係なく、苦しそうな総司に心を痛める。

そして、そんな二人の騒ぎによって更に注目を集める。完全に負の連鎖に嵌まってしまった。

「と、とにかく今日はここまでにしよう。明日からは…」

「はい……。その…。そ、総司君のお家で、ですよね?」

何やら呆けていたようだが、どうやら総司の話はちゃんと聞いていたらしい。それなら何故、あんな風に固まっていたのか。

「…藤原。嫌なら嫌って言「嫌じゃありません！大丈夫です！望むところですよ!」お、おう、そうか」

実は嫌がってるのでは、と疑ったがどうも違ったらしい。なら、呆けていた理由は一体？

(…まあいいか)

いくら考えても答えは出てこない。なら、もう考えるだけ無駄だ。

総司は思考を放棄して、机の上に並べた問題集やノート、筆記用具を靴にしまう。

「それじゃあまた明日」

「あつ、総司君！玄関まで一緒に行きましょう!」

同じく机の上の問題集などを片付けていた藤原に一言挨拶をする
と、藤原からそんな誘いを受けた。

断る理由もないため、総司は藤原が片付け終わるまで待ち、そして一緒に図書室を出ていった。

その際、並んで歩く二人に周囲の好奇のものは違う目で視線を送る一人の生徒には気が付かなかつた。

早坂愛は一步踏み出す

総司と藤原の勉強会が始まってから二日目。藤原が生徒会での仕事を終えるまではどこかで時間を潰そうか、と考えていたのだが、先に帰りのホームルームが終わっていた藤原が教室の前で待っていた。早速行きましようと言いつつ藤原に、仕事は大丈夫なのかと聞いてみると、今日は無いです、との答えが返ってきた。

いや、無いって何だ。

そうツツコミたかった総司だったが、思い返してみると、藤原が生徒会で働いている所をあまり見た事がない。特に藤原は書記の筈なのだが、書記として働いている所は全く見た事がない。

でも、藤原は生徒会の一員である。総司のようにたまに手伝いにくく臨時生徒会役員のような立場ではないのである。

ないっいたら、ない。

そんな二人は校門から少し歩いた所に待たせていた四宮家のリムジンに乗り込み、別邸へと向かう。

いつもは校門の前で待たせているのだが、昨日図書室であんな騒ぎになった次の日に、二人で一緒の車に乗り込む所を目撃されたらどうなってしまうか解らない。

そのため、総司は念のために校門から少し離れた人目のつかないところにリムジンを待機させていたのだ。

リムジンが四宮邸に到着し、総司と藤原は屋敷の中へ入る。

「それで総司君。勉強はどこでするんですか？」

「ん？俺の部屋だけど？」

「…」

藤原がそう質問してきたのは廊下を歩いていた時だった。藤原の問い掛けに簡潔に自分の部屋だと答えると、藤原の足が止まった。

「どうした?」

「…そ、総司君の部屋で、ですか?」

「そうだけど…。ああ…」

何をそんなに戸惑っている、と思ったが当然かもしれない。男の部屋で二人きり、勉強会のためとはいえ、女子からすれば抵抗はあるだろう。

この屋敷には他にも部屋はあるし、何なら来客用の部屋を使うと使用人に伝えておけばそこで勉強する事も可能だ。

「嫌なら他の部屋d「いえっ!総司君の部屋が良いです!行きましよう!」…」

先程までは戸惑っていた様子だったのに、突然意気込み始める藤原。更には場所も解らないのに先導し始める。

迷い、涙目で振り返ったのはこのすぐ後だった。

「お、お邪魔します…」

「どうぞ」

部屋の前に着き、総司は扉を開けて中に入るよう促す。

藤原はおずおずと総司が開けた扉を潜り、部屋の中へと入っていく。

藤原が部屋に入ってから、総司も部屋に入って扉を閉める。

「荷物はその辺に置いて良いぞ。ちよつとテーブル持ってくるから」

総司の部屋には作業用の机とベッド、衣服を入れるダンス、そして部屋の壁に立て掛けてある折り畳み式のテーブルしか家具はない。

昔、子供の頃はこのテーブルでかぐやと早坂と一緒に勉強したものだ。今ではすっかりそんな機会はなくなり、それぞれの部屋に別れる様になったが。

ほんの少し懐かしさを覚えながら、総司は部屋の中央で四本の足を立てたテーブルを置く。

「うし。それじゃあ藤原。単刀直入に聞くが、テスト範囲はどこまで

勉強した？」

「…」

「…おーけー、把握した」

「どうやら全く勉強していないらしい。ただ、それは飽くまでテスト対策という意味であり、普段の予習復習はしているはずだ。何だかんだ、藤原もレベルの高い秀知院学園で中間の成績を維持しているのだから。」

「それじゃあ、藤原の苦手な教科を重点的にやるか。藤原は…、国語とか英語の点数が低めだったな」

「はい…」

「うん。じゃあテストまでその二教科を中心に勉強していくか。他の教科は、自分で勉強して解らない所があったらここでも良いし、メールでも聞いてくれ」

「はい。…でも私、今思ったんですけど、総司君の連絡先知らないんですよね」

「あー、そういえばそうか。なら忘れないように今交換しておくか」

総司が机横に立てていた鞆からスマホを取り出す。それを見て、藤原も何故か慌てたように鞆からスマホを取り出す。

二人がスマホを操作し、メッセージアプリのIDを交換し、連絡先の交換を終える。

「総司君の…、こんな簡単に手に入っちゃいました…」

「よーし、それじゃあ始めるか。教科書出せー」

何やらぶつぶつ呟く藤原と、その呟きに気付きもしない総司。

二人の総司の部屋での勉強会が始まった。

かぐやが学園から帰り、屋敷へと入ったのは夜の六時になる直前の

事だった。

「あ、かぐやさん！お帰りなさい！」

「え…、ふ、藤原さん!」

扉を開け、玄関へと入ったその時、突然藤原の姿が現れた。あまりに突然の登場に驚きを隠せないかぐや。

「ど、どうしてここに？」

「えへへー。実は、総司君に勉強を見てもらってたんですー」

「総司に？」

そういえば、と一昨日に総司が藤原の勉強を見ると言っていたのを思い出した。しかし、何故この家で勉強をする事になっているのか。

かぐやがそう聞いてみると、藤原は素直にその経緯を説明してくれた。そしてその経緯を聞いて、かぐやは納得する。

確かに総司も藤原も有名人だし、二人一緒に勉強している所を目撃されれば根も葉もない噂が立つだろう。

現に、かぐやも今は石上の勉強を見ているのだが、かぐやや藤原とは別の意味で有名な石上と一緒にいる所を見られ、いらぬ事を言われた。

総司はそういう事を避けるために藤原を家に招いたのだろう。

「…」

しかし複雑ではある。藤原とは友達と思っではいるが、かぐやにとってはもう一人、掛け替えのない存在がいる。

その人物の事を考えると、どうしても複雑な気持ちになってしまう。

「かぐやさん？」

「っ…、何でもありません。今日はもうお帰りですか？」

「はいっ！門限もあるので、ここまでにしよう」と総司君が…」

少し残念そうに言う藤原の心境を察するのはかぐやには容易かった。自身の気持ちには鈍感でも、他者の気持ちには敏感なのである。

「そうですか。それじゃあ藤原さん、また明日」

「はい！かぐやさん、また明日！」

挨拶を交わすと、藤原は手を振りながらかぐやの横を通り抜け、玄

関から外へと出ていく。と、同時に外から微かに車が走る音、直後に止まる音がした。きつと、藤原を迎えに来た車だろう。

「…」

何事もなく藤原が乗ったであろう車の走り去る音を聞いてから、かぐやは早足で歩き出した。今頃、彼女はかぐやの部屋で自身の帰りを待っているはずだ。

部屋の前まで辿り着いたかぐやは、勢いそのままに扉を開けて自室へと入り込む。

「お帰りなさいませ、かぐや様」

かぐやの予想通り彼女は、早坂愛はかぐやの部屋で主の帰りを待っていた。かぐやは鞆も置かず握ったまま、早坂にずかずかと歩み寄る。

「かぐや様？どうか「藤原さんが家に勉強しに来たそうね」…」

かぐやのどこか苛立ってる様子に首を傾げる早坂の台詞を遮り、かぐやは問いかける。

「その間、あなたははどうしていたの？今日は貴女は私より早く帰ったはずよね？」

「…別に、何も。仕事をしていましたが」

かぐやの問い掛けに、普段の無表情のまま答える早坂。かぐやはそんな早坂をキツ、と睨み付ける。

「貴女、本当にそれで良いの？」

「…何がでしょう？」

「惚けても無駄よ。何年貴女と一緒にいると思ってるの？貴女の気持ちなんてお見通しよ。そして、貴女もそれは解っているのでしょうか？」

「…」

かぐやはとつくに早坂の気持ちに気付いていた。早坂が総司を憎からず想っている事を。そして、その気持ちに蓋をして、我慢している事も。

早坂もとつくに気付いていた。自分の気持ちがバレている事を。かぐやが然り気無く自分と総司を接近させようと画策している事も。

「…何の事でしょう」

「言つたはずよ早坂。惚けても無駄。いい加減白状しなさい」

尚も、かぐやの言葉を否定する早坂を容赦なく追い詰める。

「…」

早坂は何も言わない。かぐやは自分ではないどこかに向けられる早坂の目から視線を離さない。

「…私は」

どれだけ時間が経つただろうか。不意に、早坂が口を開いた。観念したように、諦めたように。

「私は使用人です。四宮に仕える者です」

「だから何よ。だから、諦めるっていうの？何もせず？」

「はい。この気持ちは、許されないものですから」

早坂はかぐやの言葉を認めた。それと同時に、これから総司に何らかの行動をするつもりはないと告げた。

早坂は四宮に仕える使用人。四宮直系の、それも次期当主に想いを寄せるなどあつてはならない事。

「臆病ね」

「会長に告白できないでいるかぐや様には言われたくないです」

「わ、私は会長なんて何とも思っていないから！」

早坂を追い詰め続けるかぐやだが、思わぬ所でカウンターを貰う。

そう、違う。自分は早坂とは違う。会長の事なんて好きじゃない。

しっかり自分に言い聞かせてから、かぐやは仕切り直す。

「おほん。私の事よりも貴女の事よ。とにかく、このまま何もせず諦めるなんて許しません」

「…それは、受け入れられません」

「早坂。さつきも聞いたけど本当にそれで良いの？何もしないまま、もしかしたら藤原さんに総司がとられちゃうのよ？」

「四宮家の次期当主と藤原家の娘。これ以上ない組み合わせと思いませんが」

「私が聞きたいのはそんな事じゃない！客観的な事じゃなく、貴女の本心が聞きたいの！」

まるで、必死に目を逸らそうとしているようだった。

かぐやが苛立ち、声を荒げる。早坂は一向に、かぐやと視線を合わせようとしない。

「…早坂」

「…私だって、嫌ですよ。何もしないまま、総司様が他の誰かと一緒になるなんて。でも、駄目なんです」

「早坂」

「私は…、私がこんな気持ちを抱いては駄目なんです」

俯いて黙り込んでしまう早坂。かぐやはそんな早坂を少しの間見つめてから、早坂の頬に手を添えて、その顔を自分の方へと向けさせる。

「ごめんなさい、早坂。私はどうして貴女がそこまで意固地になるか解らない」

「…」

「でもね早坂。私は、恋をする事が許されないなんて、絶対にあり得ないって思う」

「…かぐや様」

「貴女だけは違う、なんて事もあり得ないわ。私が保証します」

かぐやはそれだけ言い残し、早坂から離れて机の上に鞆を置く。

「着替えます。早坂、手伝って」

「…解りました」

自分の言いたい事は言い切った。それでこれからどうするかは早坂次第だ。

早坂が何に苦しんでいるのかは、正直解らない。

それでももし、早坂が自分の気持ちに素直になれたなら、かぐやはきつととても嬉しいだろう。

翌日の放課後。早坂はこの日の朝、テストが始まるまでは一人で帰るとかぐやに言われた。そのため今、早坂はこれからどうするべきか悩んでいる。このまま帰るか、それともかぐやと石上の勉強が終わるまで、周囲で見守るべきか。

いや、自分が何をしたいかなんて今の早坂には解っていた。もう、どうしようもなく、自分に嘘を吐けなくなってしまっていた。

「昨日、かぐや様があんな事を言ったから……」
足を止め、俯きながら呟く。

昨日、かぐやに言われた言葉の数々が蘇る。よくもまあ自分の事を棚に上げてあそこまで言えるものだ。

そこら辺の事情は置いておけば、言っていた事自体は全部的を射っていたのだが。

「…総司様」

再び歩き出した早坂の目に映ったのは、総司の姿。その隣には、笑顔で歩く藤原も。この後、二人は総司の部屋に行って、二人で勉強するのだろうか。

「…」

嫌だ。

心の中が一色になる。

昨日までは我慢できたのに。蓋をできたのに。溢れ出す感情が蓋を押し上げ、どこかに落としてしまう。

「っ」

気付いた時には早坂は駆け出していた。

「四宮君！」

「っ!!!?」

背後から聞こえてきた声に総司は目を剥いた。ピタリと足を止め、

慌てて振り返る。

「は、早坂？」

振り返った先に立っていたのは、予想通り早坂だった。

何で？何故？どうして？

総司の頭の中が疑問符で一杯になる。

「早坂さん！どうかしたんですか？」

「うん！その…、ちょっと噂を聞いちゃってさー。四宮君が書記ちゃんに勉強を教えてるって」

「…」

笑顔で会話する早坂と藤原。ギャルモードの早坂と藤原は知り合いだし、何ならどちらかという友人に近い関係でもある。

だが、何故だろう。笑顔で話しているはずなのに、二人に恐怖を覚えるのは。

「四宮君、お願い！ウチにも勉強教えて？」

両手を合わせて、上目遣いで聞いてくる早坂。

いや、本当に何がどうなってるんだ。早坂、学校で、それもこんな人目のつく所で話し掛けてくるとかどうしたんだ。

色々とツツコミたい事が多すぎるのだが、とにもかくにもまずはここから離れなくてはならない。

「いいぞ。藤原も、別に良いよな？」

「…はい」

思考は一瞬、すぐに了承を告げる総司。藤原からも少し間が空いたのは気になるが、許可は貰った。ならば善は急げ。二人を連れて校舎の外へと急ぐ。

(いや、マジで何で!?!本当にどうした早坂!?)

内心の混乱を必死に抑えながら、総司は両手に花の状態で生徒用玄関へと向かうのだった。

「四宮先輩。どうかしました？」

「いえ、何でもありませんよ。…ふふっ」

そして二人は強敵（とも）となる

別に一人が二人になった所でどうという事はない。初め、総司はそう思っていた。二人を家へ…、一人はその家に住んでいるのだが、招き、二人を自室へと入れ、テーブルを出し、さあ勉強をという所で早坂が口にした一言がこれだ。

「へえ…。昨日も四宮君の部屋で勉強したんだ」

ニツコリと、だが何故か迫力のある笑顔で藤原に声を掛ける早坂。

「はいっ。二人で、総司君の部屋で、勉強しました！」

それに対して藤原もまた、笑顔で返答する。その笑顔も、何故か迫力溢れるものだったのだが。

それと、何故藤原は二人での所と総司の部屋での所を強調したのだろうか。

「ふーん…」

「えへへ…」

「…ちよつと待っててくれ。使用人にお茶を持ってくるよう言ってくる」

総司は二人にそう言うと、静かにその場から立ち去った。扉を開け、部屋を出て、そこから少し離れた所まで歩き、立ち止まった。

「赤木、赤木、いるんだろ。来い」

「如何なさいましたか、総司様」

立ち止まった総司はすぐに赤木を呼ぶ。総司に呼ばれた赤木も近くにいたのだろう、即座に総司の傍までやってくる、

「助けてくれ赤木。お前が必要だ」

「…如何なさいましたか」

「早坂と藤原が怖い。何であんなギスギスしてんだ。お前も来て協力してくれ」

「…」

総司の指示に応えない赤木。

実はこの男、先程の総司の部屋でのやり取りを聞いていた。女の戦いをし始めた二人と、その事に全く気付かない総司。それどころか恐怖を抱き、他者に助けを求めるとは。

まあ、気持ちには察せない訳ではないが。

「総司様はお二人の勉強を見ると決めたのではないのですか？」

「藤原の勉強はそうだが、早坂に対しては違う。ていうかあいつ本当にどうしたんだ。そこも聞きたかったのに、怖くて聞けなかったぞ…」

「…」

総司はよくかぐやは丸くなったとか、それを通り越してポンコツになっちやったなんて言っていた。赤木はそれには同意するが、同時にこうも思う。あんたも大概だ、と。

「総司様の危惧している所は解りますが、早坂の擬態は完璧です。そうバレルる事はないでしょう」

「…まあ、な。だが藤原に関しては別だ。バレル可能性が高くなる」

赤木が言う事も解る。今日、ギャルモードの早坂が公衆の面前で総司に勉強教えてと言ってきたが、恐らく周囲の生徒には勇気があるな、程度にしか思われていないだろう。

だが、藤原は別だ。これから数日、放課後にこの家で集まり、勉強していくのだ。早坂がボロを出すとは思えないが、絶対はない。バレル可能性は高くなる。

「それでは、早坂は断るのですか？」

「…いや、それは」

赤木に問われる。確かに、一番確実なのは早坂はお断りする事だ。今ならまだ間に合う。今日だけ、という条件で明日からはお断りという事にすればまだ。

しかし、その決断を今の総司は下せない。昔と違って早坂に情を抱

いてしまった今の総司では。

「…早坂には念を押しておくか」

「それが一番かと思われれます」

総司の精神衛生上、一番の方針はギャルモードに擬態させたまま早坂も勉強会に参加させる、だ。赤木の後押しもあり、総司はその方針でいく事を決断する。

「赤木、三人分のお茶を用意しておいてくれ。俺は戻る」

「承知致しました」

赤木に指事を出し、総司は自室へと踵を返す。

時は総司が部屋を出る所まで遡る。パタン、と響き渡る扉が閉まる音。そして、部屋に残された二人の少女。

総司が立てたテーブルを挟んで、早坂と藤原は睨み合っていた。

「早坂さんは、総司君とはいっから知り合いなんですか？」

先に仕掛けたのは藤原だった。ニツコリ笑い、首を傾げながら早坂に問い掛ける。

「えつとねー、五歳の時からかなー？」

ギャル口調で答える早坂。正直、割と危ない答え方ではある。総司、かぐやとは学校では知り合いではあるが、友人までとはいかないという微妙な距離感を保ってきた。そんな三人が幼少の頃から知り合っただったと知ったのは、四宮関係者以外では恐らく、藤原が初めてではないだろうか。

「そうなんですか？なら、この家にも何度か来てたりするんですか？」

「んーん。それは初めてだけど？」

再び問い掛ける藤原。その問いに対しては否定の返事を返す早坂。

「おかしいですね〜」

「えー？何がー？」

「早坂さん、初めてにしては随分この家の廊下を歩き慣れている様

だったので…」

「っ」

しまった、と内心で叫ぶ早坂。確かに思い返せば、早坂は総司の隣でこの家の廊下を歩いていた。総司と一緒に、総司の部屋へ繋がる通路を、曲がる箇所があれば総司とほぼ同じタイミングで曲がった。

確かに初めてこの家に来たにしては不自然すぎる。だが、その違和感に気付けるこの藤原もまた何という洞察力か。

普段、早坂が見てきたぼわぼわふわふわしている藤原からは考えられない。

「早坂さん。ここに来たのは初めてじゃないですよ？多分、何度も…それこそ、ここに住んでるって言っても良いくらい歩き慣れてるんじゃないですか？」

いつもの柔らかい雰囲気はどこへやら。真剣な眼差しで早坂を問い詰める藤原。

一方の早坂は何かこの追求から逃れる一手を探るも、全く思いつかない。というより、詰んでいるのだ。藤原はすでに確信している。早坂と総司を繋ぐ、何らかの関係がある事を。

「…」

両目を瞑る早坂。そのまま数秒の間、目を閉じたまま動かない。

その間に早坂は、自分を切り替えた。

「驚きました、千花お嬢様。ご明察です」

「…へ？」

「まさか千花お嬢様にバレてしまうとは…。正直、想像もしていませんでした」

「あ…え？は、ハーサカ君？」

「はい」

戸惑う藤原。微笑みを以て藤原の問い掛けに頷く早坂。

早坂、イケメン執事モード。

藤原は数度この家に遊びに来た事がある。その時、早坂は男装をし、執事の格好で藤原と会っていたのだ。その時の偽名が、ハーサカである。

「いえ、お気になさらず。総司様」

「おう。…?…?…?!!」

綺麗な二度見だった。一度目は少し不思議そうに、そして二度目はすぐ傍に藤原がいる事も忘れ、動揺を隠せぬまま早坂の方を見開いた目で見えた。

「はや、はやさ、早坂!」

「すみません。藤原さんにバレてしまいました」

「はあ!」

バツ、と首を回して藤原を見る総司。総司の視線を受けた藤原は、照れ臭そうに頭を掻きながら、えへへなんて言って笑っている。

「え、いや…、え?は?」

「おー。総司君がここまで動揺してるとこは初めて見ます」

「私もです。藤原さん」

「いや、何でお前らそんな仲良く…、いや、とにかく何があつた!?詳しく話せ!」

「嫌です。かぐや様にはお話するつもりではありますが、総司様にはお話しできません」

「そうです。これは乙女の秘密なんです。男の子には教えられません」

「ええ…。そういう問題じゃないんだけどな…」

頭が痛むのだろう。手で頭を押さえる総司。その様子を見た藤原が口を開く。

「大丈夫です、総司君。この事は、他の誰にも言いません」

「…」

「誓います。総司君に嫌われたくはありませんから」

「…信じるぞ、藤原」

誰にも言わないと誓った藤原は、総司の言葉に笑顔でハイッ、と答えた。

そしてこれ以上はもう何も言うつもりはないらしく、総司はテーブルの前で腰を下ろして二人を見上げた。

「それじゃ始めるぞ。二人とも教科書出せ」

「はい！あ、そうです早坂さん。今回の期末試験で勝負しましょうよ！」

「良いですね。それじゃあ、勝った方は総司様を好きにできるという条件でどうでしょう」

「乗った！」

「ホント、仲良くなったなお前ら……。でも、人を勝手に賞品にするなやめろ」

結局、その条件は総司が許可を出さなかったため不採用となった。その後、勝った方は総司にお菓子を奢ってもらえるという条件で許可を貰い、勝負する事となった二人。

試験当日、どちらが勝ったかは想像にお任せしよう。

ちなみに藤原が帰った後、家に帰ってきたかぐやに藤原に使用人の事についてバレてしまったと告げると、かぐやは総司と全く同じ反応をしたという。

四宮総司は甘えられたい

窓の方で一瞬、光が迸る。その数秒後、ゴロゴロという低い音が耳朶をうつ。

総司は一旦キーボードを叩く手を止めて、視線を窓の方へと向ける。どうやら予報通り、台風が直撃しているようだ。そろそろかぐやと早坂が帰ってくる頃のはずなのだが、大丈夫だろうか。

ちなみに総司は雨が強くなり始める前に帰宅したため、特に台風の影響は受けなかった。だがかぐやは生徒会の仕事で夕方まで残るため、台風の影響を強く受ける時間帯と帰宅する時間が重なってしまった。

その後、総司が作業を進めている間に帰ってきたらしいかぐやは時間通りに夕食の席にいた。その場で、色々とかぐやの話：愚痴を聞く羽目にもなった。

曰く、せっかく会長を車に乗せてあげようと思っていたのに自転車で帰ってしまった。

曰く、早坂にはちゃんとタクシーを用意していたのに傘が壊れてびしょ濡れになった。

一つ目はまあ解るが、二つ目は文脈がよく読み取れなかった。白銀を車に乗せると早坂が車に乗れなくなるため、タクシーを呼んだのは解るがそれが傘が壊れた事と何の関係があるのか。

疑問に思うがかぐやが怒濤の勢いで喋り続けていたため、質問を挟む事ができなかった。

結局かぐやの愚痴を聞くだけで終わった夕食の時間。それぞれ部屋に戻り、総司は残った仕事を片付け、日を跨いで丁度の頃に就寝し

た。

そして、翌日――

「おにいちゃん…。いっちゃんやだあ…」

ベッドの上に寝転がるかぐやが総司の制服の袖を掴んで行かせないようになっている。

総司はその手を強く振り払う事ができず、ただただその手を撫でる事しかできない。

かぐやが風邪を引いたと知ったのは朝食の直前の事だった。何やら昨日、雨に濡れたまま帰ってきたようで、風邪の原因はそれだろうとの事。

雨に濡れたとは、一体かぐやは何をしていたのだろうか？

「…俺も休もうかな」

「シスコンを発動しないでください。かぐや様は私に任せて、総司様は早く学校に行ってください」

「…」

最近、早坂が総司に対して遠慮がなくなってきた。正確に言うなら、テストが始まった日の辺りからだ。

別に気分を害した訳ではない。むしろ、早坂と遠慮なしのやり取りが出来ているかぐやを羨ましく思ってたくらいだ。この早坂の変化は素直に嬉しい。

嬉しいのだが、少し当たりが強いと感じるのは気のせいだろうか。

「おにいちゃん…、いっちゃん…?」

「…早坂、やっぱり」行ってらっしゃいませ総司様。かぐや様も、総司様を困らせてはなりません」…」

やっぱり学校を休むと言おうとしたその時、早坂に背中を押される。早坂は総司の背中を押しながら、かぐやを嗜めている。

しかし効果はなく、かぐやはやあく、と言いながら首を振っている。「総司様、構わず学校に行ってください。しばらくすればかぐや様も諦めるでしょう」

「いや、俺は…」

「それでは、行ってらっしゃいませ」

「…」

お構い無しである。部屋の扉の前まで総司を押し出した早坂はお辞儀をして外に出るよう総司を促す。

「行ってきます」

「おにいちゃああああああん!!!」

背後から聞こえるかぐやの泣き叫ぶ声に胸を痛めながら、総司はかぐやの部屋を去る。

「…久しぶりの甘えんぼかぐやだったのにな。よし、今日は授業終わったらすぐ帰ろう。それで仕事の前にかぐやの顔を見ていこう」

かぐやは風邪を引くと、かくかくしかじかな理由で甘えんぼになる。普段は総司と呼び捨てにしていたのが、風邪を引くと昔の呼び方に戻り、お兄ちゃんと呼んでくる。

何とも可愛い事だろうか。なお、治るとその時の記憶が綺麗さっぱり消えているらしいのだが。

総司は早く治れば良いというかぐやを案ずる気持ちと、帰ってくるまでは甘えんぼでいてほしいという我欲と半分ずつ持つて、学校へと向かうのだった。

放課後、授業が終わって総司はすぐに教室を出て生徒玄関に向かう。そして靴を履き替え、校門前で待たせていた車に乗り込んで急いで家へと帰ってきた。

屋敷の前で止まった車をすぐに降り、走りはずせ、されど早歩きで家の中へと入っていった総司の向かう先は勿論かぐやの部屋である。

「早坂、入るぞ」

部屋の扉の前に着くと総司は一言かけ、返事を待たずに扉を開けた。もう、総司の頭の中には甘えんぼかぐやに癒しと力を貰う事しかなかった。

「総司様。せめて返事を待ってから入ってきてください」

「んー…うあ、おにいちゃんであく、おかえりい〜」

ため息を吐きながら総司に注意する早坂と、朝と同じ、布団の中からとろんと力のない目で総司を見るかぐや。

どうやらまだ風邪は頑張っているらしい。かぐやには本当に、大変申し訳ないのだが、総司は心の中で風邪にお礼を言った。それと同時に、心の中でのかぐやへの謝罪も忘れなかった。

「早坂に本を読んでもらったのか？」

「うん。おにいちゃんもいつしよにきこ？」

「良いのか？なら、一回だけ俺も聞こうかな」

「…総司様」

「いいだろ早坂。一回だけだからさ」

再びため息を吐く早坂。仕方ない、と言いたげに頷いてから、手に持っている絵本を読み始める。

かぐやが目を輝かせている。早坂がたまに、横目でそんなかぐやの様子を見守っている。総司はかぐやの髪を撫でながら、早坂の声に耳を傾ける。

三人はベッドの上にいる。かぐやは寝転がって布団の中に。総司と早坂は、かぐやの傍らに二人並んで。傍で第三者がこの光景を見ていたらこう思うだろう。

家族か、と。

「そうして姫は王子様のキスで目を覚まし、なんやかんやで幸せになりました。めでたしめでたし」

早坂が本を閉じる。総司が両手を叩いて拍手をする。

「かぐや様、楽しかったですか？」

「たのしかった。もっかいよんで」

「勘弁してください。もう四回目ですので」

「三回も読んだのか」

何か絵本を読むだけなのに微妙な顔をしているなどは思っていたが、まさかすでに三回も読んでいたとは。そりゃ早坂も渋るはずである。

「さて…。俺も仕事あるし、部屋に戻るわ」

「そうですか。それでは、後はお任せください」

ベッドから立ち上がり、足下に置いていた鞆を持って扉へと歩き出そうとする総司。

しかし、それを良しとしない人物が約一名いる。

「やあ〜！おにいちゃんもいつしよがいい！」

「かぐや…」

当然、かぐやである。朝と同じだ。総司の制服の袖を掴んで行かせないようになっている。

「かぐや様。ワガママを言っては行けません。総司様はこれからお仕事なのですから」

「やあ〜〜〜っ！」

この光景を第三者が見ていたらこう思うだろう。家族か、と。

「かぐや。悪いな、早坂の言う通り仕事がある」

「う〜…」

「だから、次に会うのは風邪が治ってからだ」

「…なおつてから？なおつたら、またきてくれる？」

「勿論。約束だ」

総司はかぐやに小指を差し出した。それを見て、かぐやもゆっくりと布団から手を出し、小指を立てる。

二本の小指は絡まり結ばれ、小さく二つの手が上下する。

「よし。じゃあまたな、かぐや」

「うん…。またね、おにいちゃん」

手を離し今度こそかぐやに背を向けて歩き出す総司。

最後にもう一度、こちらにお辞儀をする早坂と、じつと総司を見つめるかぐやの顔を目に映してから総司は部屋を出た。

そして、総司の部屋までもう少しといった所だった。屋敷のチャイムが鳴り響いたのは。

「来客か」

まあ早坂に任せておいて大丈夫だろう。今日は重要な来客の予定はない。もし総司の対応が必要な場合はすぐに早坂が呼びに来るはずだ。

総司は来客を気にする事なく部屋へと入り、鞆をデスク横に掛けてから制服から部屋着に着替える。

そしてすぐにデスクの席に着くとパソコンを立ち上げ、今日入った仕事と報告に目を通すのだった。

そうしてどれほど時間が経っただろう。一人での夕食も食べ終え、部屋に戻って仕事を再開。今日はかなり良心的な仕事量で、お陰でまだ九時前なのだが今日の分は終わりそうだ。

しかし、毎日毎日仕事の分量に差がありすぎる。もう少し平均的にならないのだろうか。

さすがにそれは求めすぎだとは解っているのだが、少々愚痴りたくなる総司の気持ちも汲める。ある日は今日のように九時。ある日は日を跨ぎ、二時を過ぎる事も。学生の身には少々酷である。

『きやああああああああ!!』

さて、これにて今日の分の仕事は終わり。余った時間は勉強か、それとも読書に使うか、と頭を悩ませようとした時だった。

「かぐや!？」

かぐやの尋常ではない悲鳴が総司の部屋まで届いた。総司は慌てて立ち上がり、勢いよく部屋から飛び出す。

部屋から飛び出た総司の耳には二人の声がする。一人は女、もう一人は男。女の方は先程の悲鳴から予想はつくし、その声を聞き間違わずもない。かぐやである。

だが、もう一人は――

(白銀か?)

その声から記憶を呼び出す。恐らく、この声は白銀のものだろう。だが、何故白銀がこんな時間までこの家にいる。

この家に来た理由は簡単に想像がつく。かぐやのお見舞いだろう。そして、これも予想だが白銀の対応に早坂が総司を呼ばなかったのは、総司の仕事を考えての事だろう。

だがそれは良い。

問題は、こんな時間まで白銀がこの家で何をしていたか、だ。

「早坂ー！」

「総司様？そんなに慌ててどうしたのですか？」

「どうしたじやない！かぐやの悲鳴が聞こえたから急いで来たんだよ！白銀の声もするし、何があつたんだ！」

「あー…、それはですねー…」

首を傾げる早坂を問い詰める。だが早坂は少し言い淀む。

再び総司が早坂を問い詰めようとした、その時だった。

「それでベッドに潜り込む男がいますか!!信じられない!!」

「…ベッドニ、モグリコム？」

「あー…」

「…ハヤサカ、イマヘヤニシロガネガイルヨナ。アイツハコンナジカ
ンマデ、カグヤノヘヤデ、ナニヲシテイタンダ？」

「総司様、誤解をなさらぬよう。かぐや様がお風邪を召した時の状態
はご存知のはずです」

「ウン、シツテルヨ、シツテル。…シロガネ、コロス」

「ご存知じゃないっ！」

もう総司は普通の状態じゃなかった。頭の中にあるのは可愛い妹
の純潔を弱った所に付け込んで奪った糞野郎への殺意。

それは全くもって誤解甚だしいのだが。

「だから総司様！勘違いしてます！会長はかぐや様に何もしてません
！」

「ハヤサカハナセ、アイツコロセナイ」

「話を聞いて！」

形振り構っていらなかった。早坂は総司の背後から腰に両腕を
回し、抱きつく形で総司の進行を止める。

シロガネ殺害マシンと化したはずの総司だが、早坂を力任せに振
り払おうとはしなかった。案外、理性が残ってたりするのだろうか。

「最低!!今すぐ出てってください!!」

「う…あ…うわああああああん!!」

そうこうしている内に、かぐやの怒鳴り声と共に部屋から叩き出された白銀。そして白銀は泣き叫びながらこの場から走り去っていった。

「シロガネ、オイカケル。シロガネ、クロス」

「待ってください総司様！…そうです！まずはかぐや様の無事を確認してからです！」

「…そうだった！かぐや！」

総司が正気に戻り、それを察した早坂が解放したと同時にかぐやの部屋へと飛び込む。

「大丈夫かかぐや！無事か!？」

「そ、総司…。わ、解らないわ…。私、会長とどこまで…」

黙り込む兄妹。二人が早坂の方へと振り向いたのは全くの同じタイミングだった。

「早坂！」

「はいはい、今すぐ確認しますよ」

二人に呼ばれた早坂はどこからか取り出した虫眼鏡でベッドのシーツのチェックを始める。

結果、何もなかった事が判明した。更に、早坂から白銀がかぐやのベッドで眠る事になった経緯を聞いた総司。

しっかりと反省するようにと早坂から説教を受けたのだった。

ついにその日はやって来る

かぐやが風邪から復帰してから数日。その間、かぐやと白銀はあの出来事のせいでギクシヤクしていたのだが、総司が知らない間に解決していた。

その事について何があつたのか、かぐやに聞いてみたのだが、『秘密です』と凄くご機嫌そうに返されてしまった。あの様子から、とても良い事があつたのだろうと思う。

だが、どんどん妹が離れていくような感覚に総司は陥った。いや、兄離れは喜ぶべき事なのだろうが、いざ離れると寂しく感じてしまうのは兄の悲しい性である。

さて、そんな総司は今、白銀と並んで生徒会室へと向かっていた。ちなみに、白銀への謝罪はとつくに済ませている。あの時の白銀はかぐやに叩き出されたショックで近くにいた白銀殺害マシーンには気付いていなかったのだが。

その白銀は今日、部活連の予算案会議に出席していた。つい先程まで続いていた会議は、相大白銀に疲労を与えたらしい。いつもよりも目の下の隈が濃くなっている。

しかしそれも当然と言えば当然だ。部活連の会議に参加している面子は錚々たるものなのだから。

とある宗教法人の浄階一級の孫に、陸上自衛隊幕僚長の息子。広域暴力団組長の娘に警視總監の息子。経団連理事の孫もいれば、ある国の第二王子までいる。

そんな面子の中、一般家庭出身である白銀が混ざっているのだ。白銀の精神はゴリゴリすり減ったに違いない。

総司が白銀と共に生徒会室に向かっているのは、会議の議事録を報告用の紙に書き写すのを手伝うためである。

「総司」

「ん？何だよ」

廊下の角を曲がって、視界に生徒会室の扉が見えてきたところで、白銀が口を開いた。名前を呼ばれた総司が振り向く。

「その…、良いのか？手伝ってもらって」

「は？いきなりどうした。良いも何も、手伝うためについてきてるんだが？」

「いや、だがな…」

どうも白銀の様子がおかしい。これは…、罪悪感だろうか。白銀は総司に対して罪悪感を抱いていると思われる。しかし、何故？

「…ハーサカさんから聞いたぞ。お前、当主の仕事を手伝ってるんだってな。夜遅くまで」

「…」

これまで、総司は白銀に自身がしている仕事について一度も話した事はなかった。仕事をしている、とも言わなかった。

先日、恐らく白銀が家に来た時、早坂に聞いたのだろう。総司は今どこにいるのか、とでも。そして早坂は、部屋で仕事をしていると答えたのだろう。

別に早坂を責めるつもりはない。白銀に仕事について言っただけでなかった事は早坂には伝えていないし、何より詳しい仕事の内容に関しては早坂も知らないため、それについては当然白銀に伝わっているはずがないからだ。

「もし無理なんだとしたら、遠慮せずに断ってくれ。こっただけで何とかするから」

「いや、無理だったなら断ってるから。今までに何度か断った事あるだろう」

白銀の気遣いは嬉しいのだが、正直無用な気遣いである。何故なら、とつくに総司は白銀の言葉通りにしていたからだ。

それに、総司は今の生徒会を気に入っている。多少夜更かしする羽

目になったとしても、その程度なら躊躇いなく生徒会を手伝う方を選ぶ。

徹夜になりそうだったとしたら、また話は別だが。

「へ？」

「いや、へ？じゃなくて。今までに何度かお前の頼みを断った事あるだろ？それ、仕事が長引きそうだったからだから」

「…あ、そうなの!？」

早坂からその話を聞いた時にその考えに至らなかったのだろうか。

白銀は頭が良いから、彼もまた変な所でポンコツを発揮してくれる。

「だから、別に遠慮なんてしてない。無理そうなら断る。俺は自分が大事だからな」

「…そうか。それなら良い」

扉の前で立ち止まり、白銀の方を向いてから総司は断言する。これっぽっちも白銀達に遠慮なんてしていないと。

そして白銀は、その総司の言葉を聞き、どこか嬉しそうに笑みを浮かべた。

「おーっす、会長様のお帰りだぞ〜」

「総司…。やっぱりお前は少し遠慮してくれ」

「は？何つい数秒前に言った事覆してんだ…ん？」

ノックもせず扉を開けてずかずかと生徒会室へ入っていく。余計な台詞と共に。そんな総司の様子を見て、白銀はため息を吐きながら掌を返した。

そして総司が白銀にツツコミを入れようとした時だった。総司はふと生徒会室の様子がいつもと違う事に気付く。

今、生徒会室にいるのは総司と白銀を含めて五人だ。総司、白銀、かぐや、藤原。石上はもう仕事を持って帰っていったのだろう。そしてもう一人。

「君は？」

「あ…え、あつ…」

総司達とは違う白い制服を着た銀髪の女子生徒がいた。

この白い制服は、秀知院学園中等部のもの。つまり、この生徒は中等部の生徒。一体何の用でここまで来たのだろうか。

「あれ、圭ちゃん？何しに来たんだ」

「おに…、兄さん…。無事だったのね」

「え、何が？」

「兄さん…。あ、もしかして白銀の妹か？」

総司と中等部の女子生徒が視線を交わしていると、総司の背後から前に出た白銀が女子生徒に話し掛ける。

圭、という名前なのかと知ったのも束の間、その女子生徒は白銀に對して兄さん、と呼び掛けた。

その前に何かを言い淀んだのがちよつぴり気になるが。

総司は白銀に妹がいる事は知っていた。というのも白銀から直接聞いたのではなく、白銀から聞いたかぐやから聞いたのだが。

「は、はい。中等部生徒会の会計、白銀圭と申します」

「おお…。しっかりした子だな、白銀」

綺麗なお辞儀をする女子生徒、圭に感心する総司。ちらりと横目で白銀を見遣ると、何故か苦笑いしていた。いや、本当に何故？

「総司君！今日はお仕事を手伝いに来たんですか？」

総司を呼びながら近付いてきたのは藤原だ。いつもの柔らかか笑顔で話す藤原は生徒会の癒しである。

時に場を混沌とさせる劇薬にもなるが。

「ああ。白銀が泣いて頼んできたからな」

「え!?!会長、泣いたんですか!?!」

「泣いてない」

総司の嘘を信じてしまう藤原。藤原の問いかけをすぐに否定した白銀は呆れの視線を総司に送る。

「ほら、そんな事より白銀。早く資料半分寄越せ。後、書き写す紙も」
「…手伝いを頼んだ俺が言うのも何だが総司。やっぱりお前は少し遠慮するべきだ」

ソファに腰を下ろし、ふんぞり返る総司にため息を吐く白銀。

「…」

白銀が資料を分別している間、総司はふとある事に気付く。

「随分」機嫌だなかぐや。どうした？」

総司の正面に座っていたかぐやの機嫌がとても良いのである。目を輝かせ、頬を赤くさせて少し興奮すらしている様子。

「白銀さん…、妹さんと夏休みに買い物に行く約束をしたんです。今からもう楽しみで仕方ないんです」

「そんな…。私も、楽しみです」

「私と萌葉も忘れないでください!？」

どうやらかぐやは圭に懐いているらしい。まあ、圭には白銀の面影もあるし、かぐやのタイプにドストライクだろう。

「夏休み…、そうか、夏休みか。もうそんな時期か…。夏休みかあ…」

「お、おい総司? どうした? 何でそんなにテンション下がってんだ? 夏休みにトラウマがあるのか?」

そう、もうすぐ夏休みなのだ。正確に言えば、来週一杯で一学期が終了するのである。全国ほとんどの学生が楽しみにする夏休みがやって来るのである。

だが、この四宮総司にとって夏休みなどただの繁忙期でしかないのである。

「ああ、総司は長期休みに入ると仕事が大量に降りてくるんです。だから総司にとって夏休みは休みじゃないんですよ」

「そうなの!？」

心配そうな白銀兄妹に藤原。一方のかぐやは普段と変わらぬ凛とした様子で総司の現実を白銀達に伝える。

驚愕する白銀。

「四宮先輩…、可哀想です…」

「総司君…」

「いいよ…、もう慣れたから…」

同情の視線を総司に向ける圭と藤原。同級生だけでなく、中等部の後輩にすら同情の視線を向けられる総司は今、彼らにどう映っているのだろう。

少なくとも、今の総司は鬼才と呼ばれるような学生には見られない

だろう。

「…総司君」

ホロリと一滴の涙を落とした総司に、遠慮がちに藤原が近付いて小声で話しかけてきた。

「…どうした」

「あの、今の総司君にこんな事言うのはちよっぴり心苦しいのですが…。あの約束を覚えてますか？」

「約束…？あ」

耳元で問いかけてきた藤原が口にした約束は、すぐに思い出した。もう二ヶ月も経つ。藤原と、新しい水着を一緒に選ぶと約束してから。

「覚えてる。というか、思い出した」

「それなら良かったです。それで、その約束なんですけど…、次の日曜日で良いですか？」

来た。来てしまった。ついに、この時が。避けられない、男にとつての試練の日が、ついに定められた。

「…日曜日なら問題ない」

「…じゃあ、その日に一緒に行きましょうっ。買い物に行く場所や待ち合わせ場所はこちらで決めておくので、後日に連絡しますっ」

小声だが弾んだ声で言いたい事を言い終えた藤原が総司から離れる。総司から離れた藤原に圭が何を話してたの？

と聞いていたが、藤原は笑顔で秘密ですつ、と答えている。

「おい総司、持ってきたぞ」

「ん、おう。んじゃ、始めるか」

「ああ。…藤原書記と何を話してたんだ？」

「いや、別に何も」

資料と書き写す用の紙を総司に渡した白銀は、それ以上何も聞かなかった。

白銀が会長席へと戻り、議事録の書き写しを始める。総司もまた、白銀より一足先に書き写しを始めていた。

そんな総司を、かぐやは紅茶が入ったカップを片手にじっと見つめ

て
いた。

四宮総司は楽しみたい

「よし。それじゃあ行くとするか」

念のために姿見でおかしな所はないか、シワになってる所はないかチエツクする。

珍しく、総司は今私服である。部屋着でもなく、制服でもなく、当然来客用のスーツでもなく、私服姿である。

トップスには薄いベージュのTシャツと白のリネンシャツを羽織り、ボトムスには黒のスキニー。

正直、外に私服で出るのはかなり久しぶりだし、何より私服で友人、それも女子の友人と会うなんて総司は初めてだ。

今なら、少し前のかぐやの気持ち解る。本当にこれで大丈夫なのだろうか。実はこれが普通に見えるのは自分だけで、藤原や他の人から見たらかなりおかしく見えてたりするのだろうか。

そんな不安が総司の胸の中でぐるぐると巡る。

「…ま、なるようになるだろ」

だが総司はかぐや程に優柔不断ではなかった。もしこの格好がおかしかったら周囲や藤原の反応で解る。そして、この格好がおかしければ藤原に頼んで自分に合うコーディネートを選んでもらおう。少し時間を貰う事になってしまおう。

現在の時刻は十時。藤原との約束の時間は十一時。日曜日は基本毎週仕事は休みのため、時間はたっぷりあると藤原に伝えたところ、それなら一緒にお昼ご飯も食べましょうと誘われた。

…これは俗にいうデートなのではないか？と総司の脳裏を過った

が、飽くまでこれは藤原へのお詫びであり、それ以上でもそれ以下でもない。勘違いしてはならない。

総司は左手首に腕時計を付け、リネンシャツの左右のポケットにそれぞれ二つ折りの財布とスマホを入れて、総司は自室を出る。

廊下を歩き、玄関を抜け、歩いて門へと向かい、敷地から外へと出る。そういえば、一人で歩いてこの門を潜るのは初めてだ。

…正確には、一人ではないが。

総司はまず最寄りの駅へ行き、電車に乗る。一度乗り換えをしてから、目的の駅で降りた総司はその駅の南口にてある人物を探す。

「まだ来てない、か」

日曜日、休日という事もあり、駅ではかなりの人数の往来が流れている。その中で、その場に立ち止まった人の中から藤原を探すも見つからない。まだ来ていないようだ。

総司は近くにあるオブジェの前で藤原が来るのを待つ事にした。

現在、十時五十二分。待ち合わせの約束の時刻まで残り八分となった時だった。

「総司く〜ん!」

総司を呼ぶ声がして振り向く。慌てた様子で走ってくる藤原の姿があった。

藤原は総司の前で立ち止まると両手を膝に着き、乱れた息を整える。

「ごめんなさい…。待たせちゃいましたか…?」

「いや、そんな事はない。俺もついさつき来たばかりだ」

ついさつき、という程さつき来た訳ではないが、実際そこまで待った訳でもない。総司は藤原の息が整うまで何も言わずに待つ。

「はあ…はあ…ふうっ。総司君、来てくれてありがとうございます」

「いや、約束だったからな。そりや来る」

「約束じゃなかったら来てくれなかったんですか?」

「…そんな聞き方は狡いだろ」

「あははっ、ごめんなさい」

藤原の息も整い、総司は腕時計を見る。丁度十一時になった所だっ

た。

「それじゃ行くか」

「はいっ」

総司がそう言うと、藤原は花の咲いた様な笑顔を浮かべて頷いた。そして二人は並んで歩き出す。

そんな二人を、物陰から覗く人影があつた。

「…行つたわね。それじゃあ追うわよ、二人共」

「…どうして私までここに」

「いや、私からすれば何故お二人がここにいるのかがまず疑問なのですが」

まず一人目。並んで歩く総司と藤原を真剣な眼差しで見据えて追いかけるかぐや。

二人目はそんなかぐやに無理やりこの場に引つ張つて来られた早坂。

そして最後、三人目は総司に命じられ、総司と藤原の護衛として陰から見守るべく参上した赤木。

二人を陰から覗いていたのはこの三人だった。

かぐやはノリノリで、早坂はげんなりと、赤木はいつもと変わらぬ毅然とした様子で総司と藤原を追いかける。

「早坂。貴方は気にならないの？もうこれはデートよ？総司と藤原さんのデートなのよ？危機感を覚えないの？」

「…確かに全く気にならないと言えは嘘になりますが、別に尾行したくなるほど気にはなりませんよ」

「…なるほど。お二人がここにいるのはそういう理由でしたか」

かぐやと早坂のやり取りを聞いて、赤木は二人がこの場に來た訳を悟る。だが、それだけではまだ不完全であつた。

「大体どうしてかぐや様がここにいますか。かぐや様も総司様と藤原さんのデートが気になるのですか？」

「…それもあるわ。でも、ちよつと今後の参考にしたいと思つて…」

「ああ、会長とのデートのですか」

「別に会長とじゃないわよ！でも私だつていずれ男の人とデートをす

る日が来るかもしれない！そのときの参考にしたいだけよ！相手が誰かは知らないけどね!？」

早坂に凶星を突かれて慌てるかぐや。無表情だが内心面白がってる早坂。会話に入れない赤木。

三人は騒ぎもそこそこに、移動を続ける二人を気配を殺し、追うのだった。

視点は戻り、総司と藤原の二人である。並んで歩く二人の会話は弾みでる訳ではなかった。この休日は何をしていたか、藤原は怒濤の如く喋り続ける。一方の総司は完全に聞き役だった。

しかし別に総司は楽しくない訳ではなかった。楽しそうに話す藤原に釣られて、総司の顔には笑顔が浮かんでいる。

「そうだ！聞くのを忘れていました！」

二人が渡ろうとした横断歩道の信号が赤になり、立ち止まった所で藤原はそう言うと、体を総司の方に向けて両手を広げた。

「どうですか!?総司君！」

「…?」

首を傾げる総司。どうですか、と聞かれても。正直何の事かさっぱり解らない。

だが、藤原の期待に満ちた瞳を前にすると、何の事か聞くのも戸惑われる。

総司は頭をフル回転させる事コンマ三秒、とある可能性に至る。

「…似合ってるぞ」

「…在り来たりですが、シンプルかつ真っ直ぐに言ってくれたので良しとしましょうっ」

「それは有難い事で」

「どうやら正解だったらしい。」

総司の言った似合ってる、とは藤原の服装についてである。

当然、藤原も総司と同じく学園の制服ではなく私服だ。

藤原のトレードマークである頭のリボンはそのままに、白のワンピースの上にピンクの薄いカーディガン、シンプルではあるが藤原の柔らかい雰囲気にもマッチしている。先程の総司の台詞は心の底からの本心である。

「総司君も、似合ってますよ？ かつこいいです！」

「…それは有難い事で」

藤原は真つ直ぐに総司を見上げてそう言った。

何というか、照れ臭い。決してそうではないだろうが、朝に着替えてた時の不安が藤原に見透かされている様に感じてしまった。

信号が青に変わり、同時に歩き出す。

それからも会話は途切れなかった。というより、藤原が途切れさせなかった。次々と藤原の口から出てくる話題の数々に、総司は何故そこまで多く話のネタがあるのかと不思議に思うが、すぐに藤原だからという理由で納得する事が出来た。

そうして二人がやって来たのは大きなショッピングモール。総司はここに来るのは初めてだが藤原はそうではない様子。ただ、来るのは久しぶりな様で、入るとすぐにモール内の地図が載ったパンフレットを貰っていた。

「うーん…。前に来た時とそこまでお店の場所は変わってませんね。これならパンフレット貰わなくても大丈夫だったかもしれない」

なんて呟く藤原。一方の総司は初めて来る大型ショッピングモールの中を見回していた。

人の多さ、店の多さ、客達の賑わい。どれも総司にとって初体験である。

「総司君？ どうかしましたか？」

「…いや、何でも」

「？」

首を傾げる藤原。周りを見続ける総司。

「…もしかして総司君、ショッピングモールに来るの初めてですか？」

「…恥ずかしながら、こういう店に来るのも初めてだ」

総司はこれまで四宮の教育を徹底的に叩き込まれてきた。その教育が終わっても自分で努力は欠かさず、高校に入学してからは家の仕事もする様になり、こういつた場所に遊びに行く時間などなかったのだ。

服などは使用人達が厳選して買ってきてくれる。この服も総司が選んで買ってきた訳ではない。

「それなら、今日は目一杯楽しみましょう！」

「藤原？」

「私の水着だけじゃなく、色んな所を回って遊んじやいましょう！ね？総司君！」

藤原が総司の前に回り込んでそう言った。

初めは呆気にとられて口を半開きにさせていた総司だったが、藤原らしい心遣いが籠った言葉に次第に笑みが零れる。

「…そうだな。付き合ってくれるか？藤原」

「勿論です！」

総司が問いかければ、藤原は両手を腰に当てて胸を張りながらハツキリと一言で答える。

「それじゃあ早速行きましょう！まずは総司君の服を買いに！」

「ん？藤原の用事を先に済ませなくても良いのか？」

「今、私は総司君の服を選びたい気分なんです！」

「なんだそりゃ」

藤原が総司の手を掴んで引つ張っていく。総司は抵抗する事なく藤原に引つ張られる。

二人の初めてのデートは、こうして始まったのであった。

藤原千花はまた行きたい

道中とは比べ物にならない人の多さ。時折二人を見失いそうになりつつも、かぐや達の尾行は続いていた。

昼食を終えた総司と藤原は、約束の買い物とは違う物の店へと入っていった。何故、と疑問が浮かぶが恐らく、藤原の誘いを総司が受けたのだろう。その光景が容易く頭に浮かぶ。

どうやら藤原が総司の服をコーデイナートしているようで、何着か服を選んだ藤原が総司の体に合わせつつ、どれが良いかと悩んでいる。

一方の総司は、藤原にされるがままだ。あっちへそっちへ引つ張られ、試着を頼まれたら試着室で試着する。

だが、総司は楽しそうだった。そして、かぐやもそんな総司が羨ましかった。

自分も、あんな風に友達と一緒に服を選んでみたい。友達と遊びに行きたい。

夏休みに入れば、かぐやも今日の前にいる藤原やその妹、そして何より圭と一緒にショッピングに行けるのだ。その日がかぐやの中で更に楽しみになる。

(…そうだね。藤原さんは早坂の事を知っている。それなら早坂も一緒に連れていけないかしら?)

ふと、かぐやの頭の中でショッピングに早坂も連れていけないかという考えが浮かんだ。

早坂が四宮に仕えている事は漏らしてはならない秘密だが、すでに藤原には知られている。そして、藤原はその秘密を他者に漏らしてい

ない事は確認されている。今のところ、という言葉が頭に付いてしま
うが。

かぐやと藤原の共通の友人という事にして、早坂も連れていき
たい。これは中々に良い考えではないだろうか。家に帰ったら早速早
坂を誘おう。

そう思いながら、かぐやはチラリと横目で早坂の横顔を見遣った。
「ひっ」

かぐやは思わず小さな悲鳴を漏らした。それと同時に、かぐやの頭
からこれまで考えていた事が吹っ飛んでいった。

「は、早坂、早坂…。落ち着きなさい、気配を消しなさい」

「何を言っているのですかかぐや様。私は落ち着いています」

「いいえこれっぽっちも！」

小声で叫ぶという器用な事をするかぐや。そしてかぐやの隣にい
る早坂からはどす黒い怒気が溢れ出していた。

ここに来る道中は帰りたいとかそこまで気にしてないとか言っ
た癖に、いざ二人の仲良さげなデートシーンを見るとこれである。

「かぐや様。本当に私は怒ってる訳じゃないんです」

「そ、そうなの？」

「はい。ただ、今総司様と藤原さんがしてる事を全部覚えておいて、い
つか必ず私とそれ以上のデートをしてもらおうと思ってるだけです」
「…」

かぐやは初めて、自身の従者が嫉妬深かった事を知る。

つい最近まで自分は使用人だから何もしないとうじうじしていた
というのに。まあ開き直らせたのはかぐや自身なのだが。

「決まったようね」

そんな事を話している内に二人は買う服を決めたようで、レジ前の
列に並んでいた。そして自分達の番が来たのだが、買う商品を台に載
せてから二人が揉め始めた。

二人が財布を持っている事から、恐らくどちらかが代金を払うかを揉
めているんだろう。

二人の声が、特に藤原の良く響く声がかぐや達にも届く。

「…？何を言われたんでしよう？」

突然の事だった。二人のやり取りを微笑ましそうに見ていた店員が何かを言うと、二人は黙り込んだ。すぐに総司が手を横に振りながら何かを否定するが、藤原は両手を体の前で組んでモジモジしている。

「多分、仲が良いカップルですねとか言われたんでしよう」

「…は、早坂」

怒気、再び。顔を引き攣らせるかぐや。

「…」

かぐやはこの時ふと気付く。ここ十数分の間、かぐやと早坂しか喋ってない事に。これまでは何だかんだ口数は少なくとも会話に参加はしていた男。

かぐやは早坂がいる位置とは逆、赤木の方へと視線を向けた。

「…？」

赤木は真剣な眼差しで総司と藤原を、いや、かぐやには二人の向こう側に目を向けている様に見えた。かぐやも目を凝らして赤木が見ているだろう方を注視してみるが、かぐやには何もおかしい所や怪しい所は見受けられなかった。

「…」

「え、あ、赤木っ？」

赤木が動き出したのはその時だった。そして同時に早坂もまた、赤木を追って動き出していた。

「かぐや様、早く二人を追いかけますよ」

「…早坂」

早歩きしながら振り返って早坂が言う。かぐやは赤木が突然歩き出した理由を悟ると同時に、本当にノリノリで尾行を続ける早坂に苦笑を浮かべる。

本当に道中は、あんなに渋っていたのに。

早坂はかぐやに歩くよう促すとそのまま振り返る事なく歩いて行ってしまふ。かぐやは一度ため息を吐いてから、早坂達を見失わない内にかぐやも追いかけるのだった。

ショッピングモールに来てから約四時間。初めは昼食を摂った。モール内のラーメン店にて、総司は初めてのラーメンというものを経験した。美味かった。また行きたいと思った。(小並感)

それからは総司の服を買いに行ったり、女性の小物を見に行ったりとモール内の様々な場所を回った。

その中で、総司の服を買いに入った店で、店員にカップルと勘違いされた時は藤原を正気に戻すのが大変だった。他人の恋ばなに目がない藤原だが、自分の事になると免疫がないらしい。まあカップルじゃないのだが。

そして遂に、今回ここに来た目的である物を買いに、総司と藤原はある場所へやって来た。

そう、知つての通り、水着コーナーである。

「…遂に来てしまったか」

ポツリと呟く総司。

目の前には女性物の水着がズラリと並んでいる。

店内には女性しかいない。男性は総司一人しかいない。そのため、総司は非常に目立っていた。他の客が水着を選びながら、横目で総司の方をチラチラと見てくる。そして、総司を見てから隣の藤原を見て微笑むのだ。

これは、また何か勘違いされてる気がしてきた総司だった。

「うーん、これ可愛いなあ。でも私に合うサイズは…ないですね…」

「…」
藤原の後ろについて店の奥へと入った総司。総司の居たたまれない気分が気付かず藤原は自分の水着を選ぶ事に集中している。

(サイズって…)

藤原が口にしたとある一言。確かに、藤原の体型だとデザインより

もまずサイズを気にするのは当然の事かもしれない。

しかし、藤原の水着姿、か。

「っ……！」

「？総司君、どうかしましたか？」

「いやなんでもない」

良からぬ絵が頭に浮かぶ寸前、ブンブンと頭を振って振り払う。その様子を目にした藤原が首を傾げながらどうしたか問い掛けてくる。

総司は即座にどうもしないと否定した。

危ない。更に深く想像に潜り込んでいたら戻ってこれなくなる所だった。

とにかく深呼吸だ。心を落ち着かせろ。無だ。無の境地に至るのだ。

「総司君！……つちとこつち、どつちが私に似合うと思いますか？」

「はえ？」

無の境地に至れなかった。

今まで出した事のない声が漏れた。

視線を藤原の方へと向ける。藤原の両手にはそれぞれ違う水着。

一つは白の生地にかくさんの花柄が描かれたビキニ。もう一つは緑の生地のビキニで、下の水着にはフリルが着いている。

(え？選ぶの？俺が？水着を？どつちかを？)

思考がグルグル混乱する。

どうしてこうなった。まさかこんな選択を委ねられるとは思わなかった。

「……どつちがと言われてもな」

ぶっちゃけると、選べない。何故なら、どちらかを総司が選ぶという事は、その二つの水着をそれぞれ身に着ける藤原を思い浮かべなければならぬという事。

つい先程、危険と判断してシャツアウトした思考を行わなければならないという事。

「……」

「決められませんか？」

「…申し訳ないが」

悩む総司に気を悪くした様子はなさそうだ。藤原は問い掛けに頷いて答えた総司に藤原は微笑むと、突然歩き出した。

「総司君、ついてきてくださいっ」

「ん、ああ」

藤原に従い後を追う。

藤原が立ち止まったのは、試着室の前だった。総司の目が点になる。そして、とある可能性が脳裏を過る。

まさか――

「私がこの二つの水着を着ますから、実際に見て選んでください！」

(やっぱりかああああああああああ!!)

藤原はそう言うと、靴を脱いで意気揚々と試着室へと入っていく。

カーテンで遮られ、藤原の姿が見えなくなる。直後、カーテンの向こうから布の擦れる音が僅かに聞こえてくる。

(聞くな、考えるな、感じるな)

総司も一人の思春期男子である。あの一枚の布の向こう側で同年代の、それも容姿端麗スタイル抜群の美少女が着替えているというこの状況で心が乱れない筈がない。

それでも総司は意識的に耳を周囲の音や客の声に傾け、目を瞑り、必死に前方から伝わってくる情報を遮断する。

だが否応にも音が大きければ総司の耳に入る。

カーテンが開かれ、その音はしつかり総司に届き、つられて開いた総司の目には水着姿の藤原。

「その…、どう、ですか？」

「…」

まず藤原が着たのは緑の生地の方の水着だった。

ビキニ型の水着は藤原の抜群のスタイルをこれでもかど総司に見せつけている。透き通った白い肌、引き締まったウエスト、そしてたわわに実った――

「うえっほんゴツホンゲホオオオオオッ!!」

「そ、総司君?! どうしました!?!」

シャツトアウトシャツトアウトシャツトアウトシャツトアウト
シャツトアウトシャツトアウトシャツトアウトシャツトアウト
シャツトアウトシャツトアウトシャツトアウト

止める、それ以上は駄目なんだ。藤原は純粹にどの水着が似合っているかを聞いてきてるんだ。こちらにも真剣に考え、どちらが似合っているかを決めるのだ。

「…うん、似合ってるぞ。それじゃあ…」

「は、はい。次を着てきますね」

藤原が再び試着室へ戻り、着替えを始める。総司も再び情報の検閲を始める。

カーテンが開かれる音がしたのは先程よりも早かった。総司は目を開け、藤原の姿を目にする。

「――」

思考が停止する。今度の水着も先程と同じビキニタイプの水着だ。白い生地にかくさんの花柄が描かれた水着。少し俯き気味に、恥ずかしげに総司に水着を見せる藤原との組み合わせは総司に多大なダメージを与えた。

奇跡的マリアージュ相性。総司にとって、最高の組み合わせなのである。

「総司君？」

「…俺は、その、うん。…こっちの方が良い、と、思う」

「…、そ、そうですか」

只でさえ赤く染まっていた藤原の頬が更に赤くなる。総司もまた、僅かに頬を羞恥に染めていた。

「…それなら、これにします」

「は？」

短い沈黙の後、藤原は自分が身に着ける水着を眺めてからそう口にした。

「いや、そんな簡単に決めちゃって良いのか？もっと慎重に選んでも良いんじゃない？」

「良いんです」

「…でもそれ、俺が決めた奴だぞ？本当にそんなんで良いのか？」

「はいっ！それが良いんです！」

藤原は水着の柄と同じ、花の咲いたような笑顔を浮かべて総司に返事を返してから、試着室へ戻っていった。

総司はポカンと口を半開きにさせながら閉まったカーテンを眺めていた。

「な、何だったんだ…」

呟く総司。しかし、その呟きに返事をする者は誰もいなかった。

水着選びも終わり、今日はお開きとなった。外はまだ明るかったが、藤原家の門限を考えるとそろそろ帰らなければならぬ。

名残惜しそうな藤原には悪いが、さすがに藤原の親御さんに心配は掛けられない。

モールを出て、昼前に通った道を逆に進む。モールに行く時はあんなに会話が弾んでいたのに、帰る時の二人は静かだった。

何故だろう。別にこれでもう二度と会えない訳じゃあるまいに、この空しさは何だ。

駅が近付く。駅に着けば、それで今日は藤原とお別れである。また次の日になれば会えるのだが。

「今日は楽しかったです」

駅の手前の信号が青になるのを待っていた時だった。藤原がそう言った。

「俺も、楽しかったよ」

「ホントですか？」

「ああ」

「初めて買い物に行ったからじゃなく？」

「…まあそれもない訳じゃない」

「むっ。そこは藤原と一緒に行ったからだよって言ってくださいよー」

「それもある」

頬をぶくつ、と膨らませる藤原に笑みを溢す総司。

信号が青になる。二人は同時に足を踏み出して横断歩道を渡る。

二人は駅の南口から入り、それぞれの乗る電車の切符を買おうと、改札を抜けて一旦立ち止まった。

「それじゃあここで」

「はいっ！…総司君、また明日」

「ああ、また明日」

挨拶を交わし、それぞれ別の方向へと歩き出す。

今日一日、本当に楽しかった。藤原に言った事は素直な総司の気持ちである。

だからなのだろう。今日という日が終わっていくのが、寂しいと感じるのは。

「総司くーん！」

寂寥が総司の心に滲み始めた時だった。総司の背後から大声で自分を呼ぶ声が聞こえたのは。

立ち止まり、振り返る。振り返った十メートル程先に、藤原が総司の方へと向いて立っていた。

「藤原…？」

「総司君！また、誘って良いですか？!!」

周囲の視線を気にせず、藤原が大声で総司に問い掛けた。

視線が交わる。どこか、緊張している様に唇を引き締めている藤原。

「…ああ！勿論！」

総司は体を藤原の方に向けてから、遠く離れた藤原に届く様に声を張り上げて答えた。

総司の誘いを受ける返答を聞いた藤原はゆっくりと笑みを浮かべると、再び口を開いた。

「総司君、ありがとうございます！…また明日あ〜!!」

「おう！また明日！」

今度こそ、二人は別々の方向に歩き出した。

今度は総司の中に滲んでいた寂寥感は無かった。

総司の足取りは、とても軽かった。

早坂愛は誘いたい

夏休み。それは総司にとって地獄を意味する。

学校の授業がある日はそれを考慮し、抑えられた量の仕事が降りてくるのだが夏休みは違う。授業がない分、情け容赦なく四宮当主様は総司に仕事を寄越してくる。

夏休みといえば海？山？花火？祭り？違う。夏休みといえば、仕事である。

総司はかなり歪んだ夏休みを去年から過ごす事になったのだ。

「マジめんどい…」

夏休み前最後に行われる生徒総会が終わり、早い生徒はすでに下校を開始している。

そう、明日から夏休みが始まるのだ。そして明日から、総司の繁忙期が始まるのだ。

明日から始まるであろう社畜生活を思い浮かべてげんなりする総司。只でさえ他にも考えなければならぬ事があるというのに、それと同時に大量の仕事を熟さなくてはならなくなる。

「…もつと。もつと部下が欲しい」

せめて赤木の他に三人。三人でも総司直轄の部下が傍に居れば。総司の父親は本当に最低限、赤木一人しか寄越してくれなかった。しかもその赤木は雁庵の命令で総司の仕事に手を貸せないという始末。「随分と酷い顔をしてらっしゃいますね。明日から夏休みなんですよ？」

「…早坂」

ふーらふらと歩く総司に話しかける人物、早坂愛は総司の萎えた感

情を隠さず浮かべる表情を無表情で見つめていた。

「早坂も知ってるだろ。俺の夏休みは休みじゃないって…」

「まあ、知ってますけど。知ってて言ったんですけど」
「…」

無表情なままの早坂。何か最近早坂の当たりが強い気がする。最近同じ事を考えたが、レベルが違う。あの時は遠慮がなくなったというのがぴったり当て嵌まったが、今回は本当に不機嫌そうなのだ。

早坂はあまり感情の起伏で表情が変わらないが、長年一緒に居ればある程度感情を読み取れる。

最近の早坂は、不機嫌である。正確に言えば、日曜日の夜からずっとである。

「なあ早坂。前から思ってたけどさ…、何でそんな不機嫌なの？」

ずっと不思議に思っていた。総司には何か早坂に悪い事をしたという自覚はない。それでも早坂は事実機嫌が悪いのだから、何かしたのだろうが。

正直総司には全く覚えがない。

「…別に、不機嫌なんかじゃないです」

「いやでも俺への当たり強いじゃん」

「強くないです」

「…」

総司から視線を外してそっぽを向くと、ぶくつ、と頬を膨らませる早坂。

…その顔は無意識でやってるのだろうか。そんな顔をして不機嫌じゃないと言うのは無理がある気がするが。

「…総司様のバカ」

「何でだよ」

訳が解らない。何故バカとまで言われなければならないのか。これは早急に早坂の機嫌を直さなければ。そのためにもまず、自分が早坂にした悪い行為について思い出さなければ。

「…別に、総司様は悪くないですよ。私が勝手に機嫌を悪くしてるだけですよ」

総司が考えている事を読み取った早坂がそう言った。というか、やっぱり機嫌が悪いんじゃないか。

とは口に出して言えず、総司はもう一つ頭に浮かんだ疑問を投げ掛ける事にする。

「俺は悪くないって、じゃあ何で機嫌が悪いんだ？俺が早坂に何かしたんじゃないのか？」

「さっきも言いましたが、総司様が悪い訳じゃありません。総司様が私に何かをした訳でもありません」

「じゃあ、何故？」

「…」

総司は悪くないと繰り返す早坂だが、それでは何も解らない。それに、理由が何であれ早坂は総司に対して機嫌を悪くしているのだから、原因は総司にあるのは間違いない。

だというのに、悪くないと言われても総司は納得できなかった。

早坂に続けざまに理由を聞くが、早坂は黙り込んでしまう。

「…言える訳ないじゃないですか。ただの嫉妬だなんて…」

「は？嫉妬？何に？」

「っ！わ、忘れてくださいー！」

俯いた早坂の呟きが聞こえた。だがその意味が解らず、総司は聞き返してしまった。

直後、早坂が顔を真っ赤にして総司を見上げて詰め寄った。

「いや、忘れろったってな」

常人とは比べ物にならないほど出来の良い頭をしている総司である。忘れられる筈がない。

（嫉妬って…、何に？俺は何か早坂に嫉妬される様な事したか？）

試験の結果？これはあまりに前過ぎるし、それに早坂が嫉妬するのならもうとつくにされている。

なら他の何か…、と考えるが全く思い当たるものはない。

この時、総司は勘違いをしていた。早坂の嫉妬の対象は総司ではなく、別の人物だという事を。

「…総司様。藤原さんのお出掛けは楽しかったですか？」

「え？」

早坂が不意にそんな事を問い掛けてきた。早坂は総司の方を見ず、俯いていた。

「…楽しかったぞ。ちよつと疲れたけどな」

「…そう、ですか」

総司は早坂の問いに本心で答えた。あれから五日が経ったが、あの時の光景は鮮明に思い出せる。藤原とラーメンを食べて、買い物をして、水着を——おつといけない。こんな事は早坂の傍で…いや、たとえ一人でも考えてはいけないものだ。

「早坂？」

「…総司様」

しかし、何故いきなりそんな事を聞くのだろう。総司が早坂に聞こうとした時、早坂が体を総司の方に向け、真つ直ぐに総司の顔を見上げた。

「総司様。今度は…」

「…」

「今度は、私とも…」

早坂は勇気を振り絞る。今すぐ逃げ出そうとする足をその場に留まらせる。緊張で乾いた唇を動かす。

頬を染め、両目を潤ませ、早坂は固い決意と共に、その言葉を——

「総司くううううううんんんん!!!」

口にする事は出来なかった。

「藤原？」

ぎしり、と体を震わせる早坂。

早坂の背後に視線を向けて目を丸くする総司。

総司の視線の先。総司の名を叫び、駆け寄ってくるのは両目に大粒の涙を浮かべる藤原だった。

藤原はわああああああん、と泣き叫びながら総司に抱き付くと、総司の胸に顔を埋めた。

「聞いてくださいいよ総司君！石上君が…、石上君があ…！」

ぐすぐすと鼻を鳴らし、ひつくひつくと喉を震わせながら何かを総司に伝えようとする藤原。

「…」

「あー、落ち着け藤原。何を言いたいのか解らんぞ。石上がどうしたんだ。後制服で鼻水を拭くな」

総司が泣いている藤原を宥めながら、ポケットティッシュを藤原の鼻に当てて鼻をかませている。

その二人を傍で眺める早坂。

「藤原さん…」

「…あ、早坂さん！早坂さんも聞いてくださいよ！石上君が酷いんですよ!？」

「…」

鼻をかみ終わった藤原がバツ、と早坂の方へと向く。そして藤原は総司と一緒に早坂にも自分の話を聞かせようとする。

早坂の瞳からハイライトが消えていく。本当に、本当にこの子は何でこう素晴らしいタイピングで乱入してくるのだろうか。

このマジ泣きの様子から意図的ではない様だが、この空気ブレイカーっぷりは正に対象^{藤原千花}Fの本領発揮というべきか。

「はあ…。何があつたんですか藤原さん」

「それがですね?!夏休み中にある夏祭りの事なんですけど…」

早坂は総司に話を切り出せないまま終わってしまった。

振り絞った勇氣は藤原の乱入で霧散し、藤原の乱入によって湧いてきた苛立ちは藤原のマジ泣きっぷりによって鎮火した。

結局総司と早坂はそのまま藤原の愚痴を聞く羽目になったのだ。た。

「藤原、それはお前が悪い」

「はい。私も藤原さんが悪いと思います」

「うわああああああああん!!!二人とも酷い!!!」

その後、藤原の話を聞いた二人は藤原が悪いという結論を出した。それを聞いた藤原が更に号泣する事となったのは言うまでもない。

そして号泣する藤原を二人で宥める羽目になったのも言うまでもない。

四宮総司は冷やしたい

夏休み。それは学生達にとっての希望。ある者は友人達と思い出作りを。ある者は恋人と愛を育み。またある者は自身の趣味のために時間を費やす。

夏休みとは、学生達にとっての希望なのである。

「…」

ただ、何事にも例外というものはある。この四宮総司が良い例である。

すでに夏休みに入ってから半月が過ぎている。だというのにこの男は友人と遊びにも行かず、趣味のために時間も使えず、恋人はいないから仕方ないものの、ひたすら仕事と学業に専念する毎日が過ぎていく。

夏休みとは、一体何なのだろうと、総司の今の姿を見る者がいれば誰もがそう思うだろう。

「…よし」

キーボードを叩く手を止め、体勢を崩す。

朝食を摂ってから七時間。昼食は簡単なものを赤木に自室まで持ってこさせ、ひたすらに部屋に籠って仕事を続けていた。まだ量はあるものの、終わりが見えてきた段階で総司は一旦手を止めて休憩をとる事にする。

さすがに休みなしですつと仕事を続けるのは総司でも集中力が持たない。総司とて人間なのだから。

椅子から立ち上がり、ふらふらと力なく歩いた総司はベッド目掛けて顔面から倒れ込む。シーツに顔を埋め、大きく息を吐いてから寝返

りをうち、天井を見上げる。

「くぷえー……」

脱力と共に変なため息を吐いてから、総司はこれからどうしようかと考える。

無論、この後も仕事なのだが、今日はまだ時間に余裕がある方だ。恐らく夜の九時頃には今日の分は片付く。

いや、朝から時間のほとんどを仕事に費やして、夜の九時までかかるのいうのは明らかに異常なのだが。

「騒がしいな」

ベッドに寝転んだまま、首を動かして顔を壁の方に向ける。総司が向いた方向は、かぐやの部屋がある方向だ。

そっちの方からかぐやが何やら騒いでいる声が聞こえてくる。多分、早坂にあーだのこーだの白銀との事について言っているのだろう。

総司も夏休みに入ってから何度かかぐやから相談を受けた。しかし手応えのある結論には至れなかった。

何しろかぐやもそうだが、白銀も互いに互いを誘うという選択肢が初めから無いのだ。それではどうにもならない。

白銀の家の近くに偶然を装って行ってみればと提案しても、そんなストーリー紛いの事は出来ないと言うし。

そんなこんなで夏休みに入って半月が過ぎたが、かぐやと白銀の間には何も無かった。そう、何もだ。会えもしないのに何かがあるはずも無いのだから。

「…もう少し、どっちかが素直になればな」

そうなれば、あの二人は今までの期間は何だったんだと聞きたくなくなるくらい簡単にくつつく事だろう。そして今までの期間は何だったんだと聞きたくなくなるくらいイチャイチャしまくる事だろう。

「…何かそれはそれで面倒臭くなりそうだ」

かぐやが白銀とくつつけば、かぐやから呼び出される数も減るだろうと総司は考えた。だがその考えをすぐに改める。逆に増えそうだからやれ白銀との仲をもっと深めるにはどうしたら良いかだとかデー

トにはどこへ行けば良いかだとか。

更に良く考えれば呼び出してくるのは本当にかぐやだけで済むの
だろうか。白銀からも色々相談されそうなのだが。

「やめやめ。そんな仮定の話、後になって考えろよ」

いずれ来るだろう未来だが、果たしてそんな未来はいつ来るんだろ
うか。このままじゃ卒業まで今の関係のままというのもあり得そう
で怖い。

「…ホント、何騒いでんだろうな」

かぐやの部屋の方からドタドタと床を足で叩く音が聞こえてくる。

総司は体を起こして両手を組み、大きく体を伸ばしながら左右に揺
らしてほぐす。

「散歩でも行くか」

立ち上がる総司。散歩といっても敷地内の庭を回るだけだが。

それだけなのだが、別邸周囲の庭は毎日使用人達が丁寧に手入れさ
れている。そして庭の景色は四季が切り替わる度に見せる景色が変
わる。

部屋を出て廊下を歩く。

ここで少し話は変わるが、総司とかぐやの部屋は近い。部屋を出て
突き当たりを左に曲がり、次に左に曲がれる所で左に曲がればすぐそ
こがかぐやの部屋である。

総司が廊下を歩いてみると、かぐやの部屋へと続く廊下の方から扉
が閉まる音が聞こえてきた。ぶつぶつと何かを呟く声と足音。声を
聞く限り、かぐやの部屋から出てきたのは早坂だろう。

そして総司は廊下の角から姿を現した早坂と出会った。

「えっ…」

言葉を失う総司。現れた総司を見て目を丸くして声を漏らす早坂。

沈黙が流れる。総司は余りに突然の事で何も言葉を発する事が出
来ない。

それも当然である。何しろ、姿を現した早坂はバスタオル一枚を体
に巻いただけだったのだから。バスタオルの下は恐らく全裸である。

髪は濡れていて、顔はやや紅潮している。恐らく、入浴中にかぐやに強引に連れて来られたのだろう。

(まずい、これはまずい)

総司はすぐに顔を逸らした。だが、早坂の扇情的な姿は完全に総司の目に刻まれた。

藤原ほどではないもののバスタオルを押し上げる形の良い胸。引き締まったウエストとヒップ。黄金比を擬人化させたとすら思える美しいスタイルだった。

「そ、総司様…っ！」

「…早く行けよ。風邪引くぞ」

「…お風呂を上がったら話があります。後で総司様の部屋に行きま

す」

「…」

少しの間その場に立ち尽くす。早坂の足音が聞こえなくなっ

たら、総司も歩き出す。回れ右をして。こんな顔が熱くて仕方ない状態で太陽がギラギラと陽射しを注ぐ外に出るなんて無理だ、不可能だ。部屋に戻ってクーラーをガンガン回さなければ。

総司は熱くなった体を冷やすべく、部屋へと戻るのだった。

部屋に戻ってからベッドに倒れ込んでから一時間程経っただろうか。すでに体も冷え、顔も冷え、頭も冷え、クーラーの温度は戻した。後は、あれだ。仕事の続きをしなければならぬのだが、そんな気は起こらなかった。

無論、しなければという気持ちはある。だが、ベッドから立ち上がろうとする度に過るのだ。バスタオル姿の早坂が残した最後の台詞が過るのだ。

話って何だ。あんな事があつた後だ、正直恐怖しかない。

何を言われるのだろうか。とりあえず何らかの恨み言を言われるのは間違いない。あんな姿を見たんだ、一発殴られるのも覚悟しておかなければ。後は…後は…。

「総司様。いらっしやいますか?」

「…。ああ、入っていいぞ」

扉をノックする音がする。その後、扉の向こうから早坂の声がした。総司が部屋に入る許可を出してから、早坂が静かに扉を開けて部屋に入ってきた。

当然だが、バスタオル姿ではない。いつものメイド服姿の早坂だ。

しかし、早坂の姿を見ると脳裏に過るあの姿。

ダメだ、止める、忘れる、すぐに。記憶から消し去れ。早坂のために、そして自分の精神衛生上のために。

「すみません、総司様。仕事でお忙しい中、時間をとってしまいました」

「ああ、いや、別に良いさ。ちよつと今は仕事に、その、手が着かなくてな…」

「…そうですか」

言えない。早坂のあの姿が過るせいで仕事に集中できないなんて言えない。言ったら最後、変態の烙印を押され早坂の好感度は駄々下がりだろう。

家族同然の人から変態と思われるのはかなりきつい。総司は固く唇を引き締める。

「総司様」

「…はい」

早坂が総司の傍まで歩み寄り、真っ直ぐに総司の顔を見上げる。そして――

「見ましたね」

単刀直入に一言、そう言った。

「…」

「…」

早坂の視線を正面から受ける総司。数秒、数十秒と時間が経つ。

「…はい」

嘘はいけない。正直に総司は答えた。

見るどころか、記憶に刻んでしまったのだ。見てないなんて嘘にも程がある。早坂にバレるに決まっている。

「…そうですか」

「あの、その、わざとじゃないんだ。早坂の気分が悪くなるのも当然だ。けど…、許してほしい。埋め合わせなら出来る限りの事はする」

早坂の顔が灰かに染まる。羞恥の色に間違いない。

総司はそれを見てから、姿勢を正して早坂に謝罪した。

すると、早坂がピクリと震えた。

「埋め合わせ…。それなら一つ、良いですか？」

「おお。ドンと来い」

早坂は大きく深呼吸をする。息を吐いてから一拍起き、早坂は口を開いた。

「花火大会…」

「え？」

「花火大会、一緒に見てください」

花火大会。夏休みの終盤に行われる夏祭りがあるのだが、祭りの最後に行われるイベントだ。

それを一緒に見る、というのは二人でという事だろうか。しかし――

「早坂、それは…」

「解ってます。夏祭りに一緒に行こうと言ってる訳ではありません」

もし早坂が言っているのが、夏祭りに一緒に行きたいという意味であればそれは無理だと言わざるを得なかった。

だが、早坂はそれを否定する。早坂が言ったのはそういう意味ではなかった。

「小さくはありますが、ここから花火が見られます」

「…そうだけど。そんなんで良いのか？」

「はい。私はそれで満足です」

早坂の言う通り、総司とかぐやの部屋のバルコニーから花火は見た

れる。そこから見える花火は小さい。それでも早坂は満足だという。

「…解った。それくらいならお安いご用だ」

「ありがとうございます」

総司の了承を得ると、早坂は満面の笑みを浮かべた。

普段、余り表情を変えない早坂だが、今浮かんだ笑みは本当に嬉しそうで、総司はその笑顔に視線を捕らえられる。

「総司様？」

「…いや、何でもない」

じつ、と総司に見つめられた早坂が首を傾げる。我に返った総司がすぐに視線を逸らす。

「それなら良いのですが。それでは、私はこれで。総司様、お仕事頑張ってください」

「おお。…改めて、本当にすまなかった」

「それはもう良いです。…何なら、もう一度見ますか？」

「…冗談は止める。ほれ、仕事再開するからとつとつと行け」

「ふふ…、ごめんなさい。それでは、失礼します」

早坂がお辞儀をしてから部屋を出ていく。扉が閉まり、足音が遠ざかっていく。

「…はああああ〜〜〜。仕事すつかあ」

大きいため息を吐いてからデスクの席に腰を下ろし、PCを立ち上げる。

総司の目は次第に据わっていき、集中が研ぎ澄まされていく。作業のペースはどんどんと速くなっていき、総司は自分の世界へのめり込んでいくのだった。

ちなみに、最後の早坂との会話にあったとある早坂の台詞に大きく胸を高鳴らせたのは誰にも言えない総司の秘密である。

四宮〇〇は仲良くしたい

すでに何度も言っているが、総司にとって夏休みは繁忙期である。日曜日を除いた週六日は全て仕事に忙殺され、勉強する事すら出来なくなる日が発生するくらいである。

そんな総司は今、自分の意思とは関係なく震えていた。

PCにある一つの情報を…、いや、それは少し語弊がある。PCに何もない事を見て総司は体を震わせていた。

総司はカレンダーを見る。今日は日曜日でない事を確認する。視線を外す。もう一度見る。結果は変わらない。視線を外す。もう一度見る。結果は変わらない。

「…」

今度は総司は自分の頬を引っ張り始めた。

痛覚はある。つまり、これは夢ではない。日曜日でないのに、仕事がない。

「何で!?!」

動揺する総司。実は、これまで何度か何故か仕事を送られて来ない事はあった。そういう時は決まって理由があった。

ある時は素直に総司に休みが与えられたから。

ある時は仕事以外に総司にやらせたい事があったから。

そしてある時は――

「総司様。お入りしてよろしいでしょうか」

扉をノックする音。そして扉の向こうから総司を呼ぶ声。その声は、余り総司にとって聞き馴染みのない声だった。

「入れ」

先程の動揺を抑え、扉の向こうにいるであろう人物に声をあげる。扉がゆつくりと開かれる。そこに立っていたのは二人の男女だった。

白髪の老いた男と、男とは違い若い女。どちらもスーツを身に纏い、総司に対して礼をとっていた。

「失礼します。雁庵様がお呼びです。かぐや様と共に、京都の本邸までお越しく下さい」

そしてある時は――仕事を寄越す本人が、何らかの用事で総司を呼び出す時である。

「そうか、解った。下がれ。これから着替える」

総司が言うのと、二人の使用人は何も言わずにお辞儀を残して部屋を去った。

総司はすぐにクローゼットから黒の正装を取り出してベッドの上に放る。

「…また何て悪いタイミングで呼び出すんだよ」

部屋着を脱ぐべく裾に手をかけ、総司はポツリと呟いた。

思い出すのは昨日の夜に見せたかぐやの笑顔である。明日、つまり今日。藤原姉妹と白銀妹と四人で買い物に往くのだと、物凄くウキウキした笑顔で語っていたかぐや。

そんなかぐやを見て、買い物には参加しない総司もつられて嬉しくなったものだ。

きつと、あの使用人達は今頃かぐやにも総司と同じ事を伝えているはずだ。かぐやのあの無邪気な笑顔が、失望に染まっている頃だ。

「…糞親父が」

どういう意図があるにせよ、さすがに一言言ってやらねば気が済まない。総司は固く決意した。

京都にある四宮本邸。京都市上京区に位置し、その中でも京都御所と程近いという位置に屋敷を構えている。

東京ドーム数個分の面積を誇る敷地の多くは庭が占めており、庭の中心に四宮の屋敷が建てられている。

東京から車で約七時間。すっかり日は暮れ、辺りは暗くなり始めている。そんな時刻によく本邸に着いた総司、かぐや、お付きとしてついてきた赤木と早坂は本邸に勤める使用人に案内された部屋にて父であり四宮当主、雁庵が来るのを待っていた。

「何て顔してんだよ」

「…総司」

この部屋に案内されてからすでに一時間が経過していた。その間、ずっと緊張感に満ちた固い顔をしているかぐやに総司は声を掛ける。「まったく、呼び出した本人が遅刻とかマジ腐ってるよな。よっ、と…。ほら、かぐやも足崩せよ」

「…」

明るい声でかぐやに話し掛けながら、正座を解いて胡座をかく総司。

しかしかぐやの表情は優れないまま。正座もそのまま、総司に声を掛けられて上げた顔も再び俯かせてしまう。

「…」

「っ」

その時だった。僅かに開いた襖の外から、ゆつくりと足音が近付いてくる。

総司は黙ってそちらを向き、かぐやは俯いたまま息を呑んだ。

足音は近付いてくる。それと同時に、何か棒状の物が床を突くような、そんな音も近付いてくる。

「お…お父様…っ」

襖の隙間から、真っ白の着物を着た老人が見えた。老人は黙って部屋の前を横切ろうとして、そこでかぐやの声を聞いて立ち止まった。この老人こそ、総司とかぐやの父であり四宮家当主、四宮雁庵である。

「ああ、居たのか」

雁庵はかぐやの呼び掛けに短くそう答えた後――

「総司。今すぐ私の部屋に來い。かぐや。ご苦勞だった」
簡潔にそう言い残して去っていく。再び鳴り出す床が軋む音。

かぐやは立ち去る父に、何も言う事が出来ない。何故自分呼び出したのかを聞く事も。本当は來たくなかったと本音を言う事も。

かぐやは尻込みしてしまう。

「こんな場所まで呼び出して、かぐや様にはそれだけですか。…くたばれ糞爺」

「…」

かぐやと静かな怒りを露にする早坂を見回してから、総司はため息を吐いて立ち上がり、雁庵が見えた方から部屋を出る。

「きやつーそ、総司?」

だが部屋を出る前に、またまた俯いてしまったかぐやの頭を撫で回した。グシャグシャと髪を掻き乱されたかぐやは短い悲鳴を上げながら、不思議そうに総司を見上げる。

「すぐ戻ってくるから。赤木、お前はかぐやと早坂と待つてろ」

「承知しました」

かぐやに笑顔で一言掛けてから、総司はついでこようとした赤木に二人と待つよう命じてから今度こそ部屋を出る。

先に戻った雁庵の姿はすでになく、総司は先程雁庵が歩いていった方へと歩き出す。

縁側を歩いていき数十秒、総司はとある障子の前で立ち止まると腰を下ろして正座をする。

「お父様、総司です」

「入れ」

中からしゃがれた男の声がしてから、総司はゆっくりと障子を開ける。正座のまま膝歩きをし、部屋に入ってから背を部屋の主に向けないようにして、先程開けた障子を閉める。

「…」

「…」

部屋の主、雁庵は部屋の中央で座布団の上に正座をして総司を待つ

ていた。雁庵の前にはもう一つ、座布団が用意されている。そこに座れという事だろう。

総司はそこまで移動し、改めて座布団の上に正座をして雁庵の言葉を待つ。

皺にまみれながらも威厳があるその顔を上げ、雁庵はまず第一声を口にした。

「早坂の娘にくたばれ糞爺とか言われたんじゃが。酷いと思わんか？」

「事実だろうが」

「爺はそうじゃけど、糞は余計と思わんか？」

「思わん」

「…末の息子が反抗期で辛い」

威厳は一体どこへやら。その口から出てくるのは世間が四宮雁庵に抱くイメージからは掛け離れた台詞の数々。

すっかり慣れた総司はため息一つで済むが、仮にこの場にいるのが総司ではなくかぐやならば、恐らく信じられぬ余り気絶していた事だろう。

「大体かぐやは今日友達と遊びに行く予定だったんだぞ。何で今日呼び出したんだよ」

「え、何じゃそれ。早く報せてくれれば後日にしたのに」

目を丸くする雁庵。もう何度目かのため息を吐く総司。

「あんたさ。かぐやと仲直りしたいんなら早く本音で話せよ。今回だって俺だけじゃなくかぐやも呼んだのは顔を見たかったからなんだろ？」

そう、そうなのである。この四宮雁庵という男は親バカなのである。それも総司とかぐやの母に瓜二つのかぐやをかなり溺愛している。

それなのに、実際にかぐやを前にするとあの態度である。それは何故か。

「そんな事出来る筈なからう」

「…一応聞こうか。何でだよ」

「そんな事をしたらワシがかぐやと仲良くしたくて堪らないみたいじゃろうが！」

「…ホント、何でこんな似た者親子が擦れ違ってたんだろ」

何処かで聞いた事のある台詞である。

そう、この雁庵とかぐやはかなり似ている。外見ではなく、中身が。意地っ張りで、されどどこかポンコツで。無論、そのポンコツっぷりを表には全く出さない雁庵とそうではないかぐやの差はあるが。

事実、雁庵がこんな風に本音で話すのは今では総司だけである。それ以外には完璧に猫を被っているのだ。

「実際そうだろうが。もう今日の内にかぐやと話せよ」

「嫌じゃ。かぐやが来ない限りワシや動かんぞ」

「…めんどくさ」

「おい、親に向かって何て言い草だ」

腕を組み、完全に意固地になった雁庵に聞こえない様に呟いたつもりだった。だが、今の総司よりも離れた所にいた早坂の呟きすら耳に捉えるこの男の地獄耳からは逃れられなかった。

まあ、総司は無視するだけなのだが。

「で？父様が動く気ないのはもう解ったから。本題に入りましょうよ」

「…仕方ないのう。じゃあ、まずはこれだ」

先程までの緩んだ表情を引き締めた二人の間に流れる空気が冷えていく。

そこから始まったのは、四宮家当主と次期当主による意見交換だった。

あまり売上が奮わないある子会社の経営に介入するか否か。

四宮の系列に加わりたいと申し出ているある会社を受け入れるか否か。

四宮とは別のグループとのパイプを更に繋げるか否か。

残念だが、すぐに戻るといとかぐやとの約束は守れなさそうだ。思いの外白熱する二人の論戦は長い間続き、気付けば時計が一時を差すまで二人は話を止めなかった。

「む…。もうこんな時間か」

先に時間に気付いたのは雁庵だった。時計を見上げ、そう口にする。続いて総司も時計を見上げ、今の時刻を目にしてからぐるぐると腕を回して肩を解す。

「大方方針は固まった。これでいくが、それで良いな？」

「ん。文句はないぞ」

雁庵に返事を返してから、総司は体を伸ばす。さすがに長時間正座のままというのは相当きつい。それでも慣れている分、以前よりはずっとマシだが。以前の総司なら、足の痺れでしばらく立ち上がれなかっただろう。

だが今は違う。今はたとえ足が痺れていても立ち上がれる様になった。別に足が痺れなくなった訳ではない。それについてはもう総司はどれだけ慣れても無理だと諦めた。

「総司」

もうこれで話は終わった。立ち上がった総司は部屋を出ようと障子の取っ手に手を掛け…た所で雁庵に呼ばれた。

「相馬が動き出した事は、もう掴んでいるな？」

振り返った先には、鋭い視線を総司に注ぐ雁庵。

総司はそんな雁庵に表情一つ変えず、一度頷いた。

「ああ。ただ、それが兄上の指示なのかそれとも独断なのか、そこまではまだだけど」

「そうか。そこは私もまだ掴んではない。まあ、掴んでいても教える気はないが」

自分の力で何とかしろ、という雁庵の声が声に出さずとも聞こえてくる。四宮家の当主になるのなら、四宮を変えるつもりでいるのなら、その程度自分で何とかして見せろ、と。

「解ってるさ。…それより父様。さつき早く報せろって言ってたから今言うけど、二十日にかぐやは生徒会のメンバーで祭りに行くからな」

「…そうか」

その会話を最後にして、総司は部屋を出る。雁庵からの返事は小さ

く短いものだったが、これでまた急な呼び出しでかぐやが友人との外出が出来なくなる、なんて事はないだろう。

総司はこの時、そう思っていた。

「なりません」

だが、現実とは残酷なものである。

早坂愛は近付きたい

楽しい日になる筈だった。初めての友達と、可愛い後輩と、ちよつぱり気になる人と、遊んで、食べて、そして花火を見る。夏祭りに行こうと約束した日から、どれだけこの日を待ちわびた事か。今日を迎えて、どれほど心踊らせた事か。

「なりません」

ずつつまらない夏休みだった。早く終われば良いとすら思ってた。でも、今日だけは違う。

「最近のお嬢様の振る舞いは目に余ります」

それなのに――

「人混みのある場所は付き人もかぐや様を見失う恐れがあります。そんな中でかぐや様に何かあれば、当主様に何と申し述べれば……」
待ち焦がれていた一時は、かぐやの掌から零れ落ちていった。

「なるほど。それでこうなった、と」

今、総司はかぐやの部屋に来ていた。早坂に頼まれこの場に来たのだが、部屋の主はベッドに伏せている。ルンルン気分だったかつての姿はなく、絶望に満ちた背中が総司の瞳に映る。

「おいかぐや。かぐやー?」

かぐやの傍らに腰を下ろし、肩に手を乗せて揺するも反応なし。

まさか眠ってるのかと思っただが、直後に聞こえてきた鼻を吸る音で

それは違うと悟る。

「大丈夫…」

「え？」

ずつと泣いてたのか、そう問い掛けようとした時だった。かぐやがポツリと呟いたのは。

「夏はもう終わるから…。だから、大丈夫」

言葉が出ない。涙を流しながら、かぐやはずっと、こうやって自分に言い聞かせ続けていたのだ。

何度も、何度も、何度も。大丈夫と。

ふと、総司は先程からずっと電気も付けずに暗い部屋の中で光るあるものを見る。それは、パソコンの液晶。

『みんなと花火が見たい』

かぐやの紛れもない本音だった。抑え切れない本心が、そこには書かれていた。

沈黙が流れる。正直、何と声を掛ければ良いか解らない。何故なら総司には、かぐやを家に閉じ込めるその判断の理由が解ってしまうから。

だが、当然だがそうではない者には関係ない。

早坂がかぐやに向かって口を開く。

「…かぐや様、いつまでそうしてるつもりですか。普段だったら手段を選ばず家から抜け出してる所じゃないですか」

「何をしたってどうせ上手くいかないわ…」

早坂の台詞に対して力ない返事を返したかぐや。そんな主人の姿を見た早坂は、一つため息を吐いた。

「本当、弱る時はとことん弱る人ですね…」

うつ伏せのままのかぐやの頭を撫でながら、総司は黙って二人の会話を耳を傾ける。

「かぐや様。以前貴女が私に言った台詞を今、そのまま使わせてもらいます。…本当にそれで良いんですか？」

早坂が言った言葉の意味は総司には掴み切れない。だがかぐやには通じた様で、かぐやはピクリと体を震わせた後、ゆつくりと体を起こして真つ直ぐにかぐやに視線を送る早坂を見返した。

「…なら、私はどうすれば良いの？」

「知りませんよ。そんなの自分で考えてください。ですが、もし貴女が何かを成したいのなら私は全力で協力します」

縋る様に早坂を見るかぐや。そんなかぐやを早坂はあっさり突き放しつつ、笑顔を浮かべて力は貸すと意志を示す。

「でも…、今日は本家の執事が二人もいるのよ？何の準備もなく抜け出すなんて出来る筈…」

「準備？それなら、私にお任せください」

作戦決行のための準備を行うため、総司は部屋を追い出されてしまった。ただ、恐らくその作戦は成功する。というより、成功しかない、と言った方が正しいか。

早坂が考えた案に総司の修正を加え、まず間違いなく成功するだろう作戦が完成した。

まあ、作戦というか力押しというべきか。

「…ったく。相馬の事は俺に任せるんじゃないのか」

あの時、京都の本邸で雁庵と別れ際にした会話を思い出す。雁庵は、かぐやが今日夏祭りに行く事を知っている。それにも関わらず、雁庵は本家の執事二人に命じたのだろう。かぐやを家から出すなど。

雁庵からの指示だとはかぐやには報せなかった様だが。さすがに嫌われている事に気付いているのだろう。これ以上嫌われるのは御免らしい。

まあ、効果はないと思うが。これで更にかぐやは雁庵に対して苦手意識を深める事だろう。

かぐやを家から出さないのは、何よりかぐやを想つての事なのだ

が。

その理由が、先程の総司の台詞である。

相馬、総司と敵対している四宮家長男、黄光との繋がりが深い財閥である。その相馬の配下である工員が総司の周りを彷徨いているという報告が上がっている。

以前の藤原との買い物の際にも、姿があつたと赤木から報告を受けている。

そんな中で、監視も付けずにかぐやを人混み溢れる夏祭りの場に行かせたくなかつたのだろう。

そして、その判断は正しい。総司自身、今の自分の判断が甘い事は重々承知している。

「何事だ」

それでも、総司は信じている。この判断こそが、一番かぐやに笑顔を与える選択なのだ。

「総司様。申し訳ありません。この者が、かぐや様を外に逃がしました」

開きっぱなしの扉からかぐやの部屋へと入る。そこには本家の執事の一人に手首を掴まれ拘束される、かぐやに変装した早坂の姿があつた。

「ああ。その事ならもう気付いている」

「…は？」

「もう赤木を追わせている。時間は掛かるだろうが、かぐやを家に連れ帰ると命じておいた」

「…そうですか」

総司の台詞が予想外のものだったのか、呆ける執事だったがすぐに持ち直し、早坂の手首を掴んだまま総司にお辞儀をする。

「それでしたら、すぐに応援を…」

「いや、その必要はない。ついでに先に言っておくが、早坂に処罰を与える事も許さん」

「…総司様、それは出来ません。我々は——」

「父様直属の部下、か？だからどうした。お前らに俺の命令に背く権

利があるとしても？」

「っ…」

威圧。

総司は執事を見下ろし、有無を言わせぬ口調で続ける。

「どうしても納得いかないのなら父様に報告すれば良い。応援を出そうとしたが俺に止められたと。早坂の処罰も俺に止められたと」

「…失礼します」

数瞬の思考の後、執事は早坂から手を離し部屋を出ていった。

足音が遠ざかっていく事を確認した総司はふっ、と気を緩めてため息を吐く。

「ありや、黄光兄上寄りだな」

「…助かりました、総司様。ありがとうございます」

「気にすんなよ。それに、これは作戦だろうが。上手くいったな」

着けていたかつらをとって、早坂が総司に礼を言う。

しかし、あのやり取りは最初に決めた作戦の上だった。

先程、かぐやを花火大会に送り出す作戦を早坂が考えた時はこうだった。

早坂がかぐやに変装し、夕食時にかぐやを呼びに来る本家の執事を誤魔化す、というもの。しかしそこに総司が修正を加えたのだ。

「やっぱりバレただろ。あいつら、何だかんだ有能だからな」

「…本当に助かりました」

総司はこう考えた。恐らく、早坂の変装はバレると。ならばそれと予想した上で動こうと。

先程、総司は執事に対して赤木を向かわせたと言ったが、それは事実である。総司の言う通り、赤木は時間を掛け、花火大会が終わってからかぐやを連れ帰って来るだろう。

そしてもう一つのバレた場合の懸念、早坂の処遇である。これももう力押しでしかない。

いくら総司の直轄でないとはいえ、執事は飽くまで執事。次期当主である総司とは立場が違う。その命令に、自分の意思のみで逆らう事は出来ない。

後は雁庵をどう納得させるかだが、それは多分大丈夫だろう。これが一番かぐやのためだと言いつづければ多分納得する。

「かぐや様は、皆と花火を見られるでしょうか」

「…さあな。そこまでは解らん」

早坂が窓の外を見上げながら呟く。

その視線の先では、夜空に咲く花火がここからでも小さく見えていた。

かぐやは今頃、全力で会場に向かっているのだろう。

総司達に出来るのはかぐやを送り出す所まで。後は、本人に頑張ってもらおうしかない。

「早坂。外に出て見よう」

「…はい」

それに、かぐやには悪いがこちらはこちらでとある約束がある。

早坂と二人で花火を見るといふ約束だ。四宮として、約束を違える訳にはいかない。

二人はバルコニーに出て、手摺に寄り掛かりながら花火を見上げる。

花火が打ち上がり、夜空に咲き開く。時間差で、僅かに聞こえる音は正に夏の風流。これは、自分も浴衣を着るべきだったかとちよつぴり後悔の念を抱く総司。

「私はいつも、ここから花火を見上げるかぐや様を見て、不思議に思っていました。どうしてここまで、花火に憧れてるんだろうと」

不意に早坂が口を開く。視線は夜空に咲く花火に向けたまま、続ける。

「でも、今なら解ります。…私も、もっと近くで見たい」

早坂が総司を見上げる。小さな笑みを携えて。

「…そうか。なら、来年行こうか」

「え…」

「俺と早坂とかぐやと、藤原と白銀と石上と。うん。この面子なら俺達と早坂の関係は解らんだろ。白銀と石上には最近友達になつたつて言えば…」

「…」

どうやって四宮と早坂との関係が知られず、尚且つ自然に早坂を参加させられるかを考える総司は気付かなかった。

早坂の目が白けている事を。

「…そうじゃない」

「は？何が？」

「もう良いです。ええ知ってましたよ、総司様がそういう人だって事は」

「??？」

首を傾げ、疑問符を浮かべる総司。そんな総司に呆れつつも、早坂は一步、大股で総司に近付いた。

「…早坂」

「何でしょう」

「近くない？」

「そうでしょうか？」

今の二人の距離は拳一つもない、もう今にも二人の肩が触れ合いそうですらある。

「…早坂」

「何でしょう」

「近い」

「近くないです」

いや完全に近い。更に総司に近付いた早坂の肩は総司の腕に触れている。

何故ここまで近づく必要があるのか。そんな総司の気持ち伝わったのか、早坂はニツコリと悪戯気に総司に笑い掛けながら口を開いた。

「総司様が悪いんですからね？」

俺が何をした、とは聞けなかった。早坂の笑顔の前にして、唇を動かす事が出来なかった。

花火の音が鳴る。早坂は花火へ視線を戻す。

一方の総司は、腕から伝わる早坂の体温と先程の早坂の笑顔が妙に

脳裏に通り、花火に集中出来ぬまま、花火大会は終わりを迎えたのだった。

かぐやが赤木と帰ってきたのは、夜の十時を回った後だった。

総司と早坂が迎え、二人は花火はどうだったかとかぐやに問い掛けた。

「……めんなさい。花火、見られなかったわ」

一瞬、表情を暗くしかけた二人だったが、すぐにそれは笑顔に変わった。それは何故か。

かぐやの顔が、輝かんばかりの笑みに包まれていたからである。

因みに後日、赤木から総司に一枚の写真が渡された。

そこに写っていたのは一台のタクシー、その車内を拡大させたものの。

窓ガラスに反射する花火で見辛いが、そこにはガラスに張り付いて花火を見上げる三人の姿があった。いや、正確には一人は傍らにいる男の顔を見上げている。

その三人とは、かぐや、白銀、藤原である。恐らく、石上は助手席に座っていたと思われる。

そして総司は昨日のかぐやの花火は見れなかったという台詞の本当の意味を知る。

要するに、白銀に見惚れていたのである。何という事だ。あんなに苦勞：別にしてないが、送り出してやったというのに。

目の前の花火ではなく、好きな男に見とれてしまうとは。これは問い質さなくてはならない。

という事で、この後総司は写真について早坂に報告。二人掛かりでかぐやを質問攻めにしたという。

藤原千花は会いたい

九月一日。この日を彼女はどれだけ待ち望んでいた事か。

夏休みが楽しくなかった訳ではない。家族で行った旅行は楽しかったし、生徒会メンバーで見た花火は一生の思い出として胸に刻まれた。

だが一つ。一つだけ物足りなかった。

この夏休み中、一度もある人物に会えなかった事である。

その人物とは友人で、でも彼女はその人物に対して友人以上の感情を抱いていて。

休み中、何度かメッセージのやり取りをした。旅行で撮った写真を送ると、楽しそうだな、と返事が来て。たったそれだけの事で心踊らせた。

しかし、一ヶ月の間その彼とは一度も顔を合わせる事はなかったのである。生徒会メンバーで行くと約束した夏祭りでもしかしたら、と期待していたのだが結果彼は来ず。

結局夏休みの間、その人物とは会えず仕舞いに終わってしまった。そして今日。夏休みが終わり、新学期が始まる日。本来は、夏休みが終わってしまった現実に絶望する多くの学生が死屍累々と登校する中でこの少女、藤原千花はうつきうきで胸踊らせながら登校するのである。

学校の敷地内に入ってから、藤原は視線を周囲に巡らせ始める。無論、彼、すなわち総司の姿を探すためである。

「いない、かあ…」

しかし総司の姿は見当たらない。総司、かぐやの登校時間は毎日大

体同じなのだが、登校途中の道路状況等の理由で前後する事はある。まだ来ていないか、はたまたすでに教室にいるか、藤原は登校中に総司に会う事は出来なかった。

ならばと総司のクラスの教室に突撃しようかとも一瞬考えるが、朝礼の時間を考えればたとえ総司に会ったとしても、ゆつくり話す時間はない。

やむを得ず、藤原は朝に総司に会う事を諦めたのだった。

ならばと藤原は昼休みを狙う。この時間ならば時間の余裕はたっぷりあるし、お弁当を一緒に食べようと誘えば自然な流れで二人の間が作る事が出来る。

筈だった。

「千花ちゃん！一緒に食べよう？」

「え…」

それはいつも一緒にお昼を食べている友人達からの誘いだ。いつもならば飛ぶが如く勢いで誘いを受け、一緒に食べている所。

だが今日は――

『ごめんなさい！今日はもう約束してる人がいて…』

『そっかあ…。それなら仕方ないね。今度は一緒に食べようね？』

完璧な流れである。藤原は友人が多い。藤原の言葉を疑う余地はない。

しかし藤原は思い直して動かそうとした唇を止める。以前のある出来事を思い出したからだ。

そのある出来事とは、総司と二人で行った勉強会中に起こった事である。初め、藤原と総司は図書館で勉強をしていたのだが、その姿を見られ、ちよつとした騒ぎになったのである。

今、総司を昼食に誘い、もし二人でお弁当を食べている所を見られたら？瞬く間に話は広がり、当然友人達の耳にも入るだろう。

そうならば、どうなるか。

『え？千花ちゃんが言ってた人って総司様の事だったの!?!』

『そういえば前に千花ちゃんと総司様が二人で勉強してたって噂を聞

いたけど、もしかして…』

『千花ちゃん…』。もしかして、総司様の事…』

ラブ探偵と自称し、他人の恋話に首を突っ込みまくった女が思う事ではないが、恥ずかしい事この上ない。さすがに駄目だ。これはまずい。

「…はいっ！一緒に食べましょう」

了承するまで少し間が空いてしまったが、友人達は藤原を怪しむ素振りも見せず机の位置を移動し始める。

結局、藤原は昼休みにも総司に会う事は出来なかった。

その後も藤原は総司に会う事はなく放課後を迎える。藤原はもう、我慢の限界だった。

帰りのホームルームを終えるとすぐに教室を出て、総司のクラス、E組の教室がある方へと視線を向ける。E組の教室前ではすでに生徒が教室から出てきており、早い者は階段を降りていく姿までである。「っ」

藤原はすぐに駆け出した。生徒会の一員として、学校のルールを率先して守らねばならない立場ではあるが、時に人にはルールよりも優先しなければならなくなる場合がある。

藤原にとってそれは今なのだ。

総司はたまに生徒会を手伝いに来てくれるが、それは何らかの行事の前など、どうしようもなく生徒会が忙しくなる時だけだ。まあ行事の前でなくとも来てくれる時もあるが、決して頻度は多くはない。

そして今、生徒会には急ぎの仕事はない。ならば総司が放課後にとる行動はほぼ一つ。帰宅である。

階段を急いで駆け降りる。走る藤原を何事かと驚いた様子で生徒達が視線を送ってくるが、構わない。藤原は総司が向かったであろう生徒玄関へとひたすらに急ぐ。

「っ、総司君！」

一階へと降りて正面が生徒玄関である。藤原はその姿を見つけ、立ち止まる。

下駄箱の扉を開け、外靴を取り出そうと手を伸ばした総司が藤原の方へと振り向く。

大声で名前を呼ばれた事に驚いたのか、それとも息を切らして自分を見る藤原の様子に驚いたのか、はたまたその両方か。動きを止めた総司は目を見開いていた。

藤原は再び、先程よりはスローペースではあるが走り出し、総司の前で立ち止まる。

「はあ…はあ…。そ、総司君…」

「おう。…大丈夫か？」

「は、はい…」

藤原は運動能力が低い訳ではないのだが、さすがに三階から一階まで全力疾走で駆け降りるのはきつかった。

藤原は両膝に手を突いて、必死に息を整える。そんな様子を見た総司が心配そうに声を掛ける。

藤原の息が整うまで総司は黙って待つてくれた。

改めて藤原は顔を上げ、総司に口を開

「…藤原？」

さて、何と話し掛ければ良いのだろうか。

いや、藤原も今日一日過ごす中で総司に話し掛ける方法を何パターンか考案していた。

していたのだが、悲しい事に全て忘れ去ってしまったのだ。総司の姿を見た瞬間に。

夏休みの間、総司に会えない日々を送っていた藤原。そんな藤原は今日、この瞬間、総司の姿を見つけてテンションがガンアゲでキマってしまったのだ。

記憶が飛んでしまうのも無理はない。ないといったらないのである。

「え、と…。あの…」

話し掛けたは良いものの、言葉が出てこない。これは中々にきついものがある。特に想いを寄せる相手の前だと。

とにかく何か言わなければ。首を傾げる総司を見て更に焦る藤原。だからだろうか。暴走する思考は藤原の本音を抑える事が出来なかった。

「夏休みの間、会えなくて寂しかったです」

「…」

「…」

黙り込む総司。自身が言った事を自覚し同じく黙り込む藤原。

藤原の顔がみるみる内に赤く染まっていく。

何を、何を言っている。これではまるで告白の様ではないか。藤原の思考が更に混沌と化す。

どうする。どうすればいい？考える藤原だが、彼女は解っていないかった。目の前の男は、鈍感系主人公四宮総司なのだ。

「そういや、夏休み中藤原とは会わなかったな。てか俺は全くと言って良いほど外に出てないけど」

「…」

呑気にあっはっは、と笑う総司をしらーつとした目で見る藤原。

「…何でせうか藤原さん」

「いいえ、何でもありません」

いや、こんな形で気持ちを知られずに済んだのは幸いなのだが、ここまで見事な完全スルーを披露されるとそれはそれで複雑である。

「これは喜ぶべきなんでしょうか。それとも怒る所なんでしょうか…。ううう…」

「…あの、やっぱ何か悪い事した？」

再び藤原に問い掛ける総司。とにかくあんな形で告白してフラれるという最悪の結果だけは避けられたのだからと藤原は自分を納得させる。

これで良いのだ。これで。

「いえ、何でもありませんよ？それより総司君はもう帰るんですか？」

「ああ。今日はちよつと早めに帰らなきゃならん」

「そうですか…。それなら生徒会室に一緒には行けませんね」

本当はもつと引き留めて話が見たい。しかし総司には総司の事情がある。特に、四宮家の次期当主としての仕事があるのだから、個人の感情で邪魔をしてはならない。

「…後一ヶ月で生徒会も解散だからな。暇があったら顔を出すよ」
「本当ですかっ?」

総司の言葉に、両手を上げてわーいと喜ぶ藤原。

「約束ですよ、総司君?」

「ああ。約束は守る」

今日の藤原と総司の交流はここまでだった。二人はまた明日、と挨拶を交わして別々の方向へと歩き出す。

もう、朝のような虚無感は胸に無かった。藤原は満たされた気持ちを胸に、スキップしながら生徒会室へと向かう。

これは、藤原がかぐやに撃墜される十分ほど前のお話である。

四宮総司は守りたい

帰りのホームルーム後の教室掃除も終わり、誰もいなくなった教室。そこにかちり、かちりと小さな物音が鳴り響く。

窓際の席には一人の生徒の姿。我らが主人公、四宮総司である。総司は席に座ったまま、くるくるとペンを回しながら何やら考え事をしてる様子。

机には一枚の写真があった。そこに写っているのは二人の男の姿。一人は総司と対して年が変わらなく見える金髪の男子。もう一人はスーツを着た壮年の男。

物陰に隠れて何かを窺っている様子に見える。

「四宮」

「ああ。いきなり呼び出したりしてすまない。よく来てくれた」

写真を一旦机の中に隠す。そして入り口の方から聞こえてきた声に振り向き、そこに立っている男子生徒に声を掛けながら総司は立ち上がる。

「さあ座れよ。もう放課後だし、気にする事はないぞ」

「…ああ、解った」

この男子生徒は総司とは別のクラスである。別のクラスの席に座るといのは何だか罪悪感が湧く行為ではあるが、今は放課後。全く気にする必要はない。

総司は自分の前の席の椅子を引いてそこに座るよう促す。男子生徒がそこに腰を下ろしてから、総司も再び腰を下ろす。

「それで、何の用だい？これでも僕は忙しいんだけど」

「忙しい、ね」

男子生徒は不機嫌そうに総司を睨む。総司は鋭い視線を受けながらも、全く気にする素振りは見せない。

それどころか、小さく笑みを浮かべる余裕さえ見せる。

「安心しろ。その忙しさも今日で終わる」

「…どういう意味だ」

総司の言葉の意味を計りかねたか、男子生徒は目を細めて聞き返す。

総司はその問いには答えず、黙って先程机の中に仕舞った写真を取り出し机の上に放り投げた。

「…っ!?!」

劇的なほどに、男子生徒の表情が一変した。

動揺、戸惑い、焦燥。様々な感情が入り雑じった表情で、男子生徒は机の上の写真を引たくってビリビリに破いてしまう。

「はあ…はあ…はあ…っ」

破いた写真の破片を全て回収し、ポケットの中に仕舞った男子生徒は息を切らしながら笑みを浮かべ、見下すように総司に視線を向ける。

——まさか、画像がその一枚だけでも思っているのだろうか。だとしたら、愚かにも程がある。

「安心して所悪いが高梨。画像のデータならもう家のPCに保存してある。残念だったな」

「っ!」

笑みから再び焦燥に満ちた表情へ。総司に高梨と呼ばれた生徒は歯を噛み締め、忌々しげに総司を睨み付ける。

「さてと、本題に入ろうか。高梨。お前は誰の指示でこんな事をした?」

「…」

黙り込み、総司の視線に耐えきれなかったか、目を逸らす。

逃げ出そうとはしなかった。逃げてでも無駄だと悟ったのだろうか、それとも逃げるといふ選択肢すら浮かばないのか。

「…ふう」

五分、待つてはみたが高梨に口を開く気配はない。相当強く口止めされたか、まあこの程度は想定範囲内である。ただ質問しただけで答えてくれるとは、総司も思っていない。

総司はため息を吐きながら、鞆を持ち上げて中からホチキスで留めた三枚の紙を取り出す。そしてその三枚の紙を総司は高梨に差し出した。

「これは？」

「暗号文だよ。家族を大事に思うんなら、帰ったら必ずそれをお父上に渡すんだな。それとこれは伝言だ。期限は今日の二十一時まで、とお父上に伝えておいてくれ」

総司はそう言い残し、鞆を持ち上げて教室を出る。

放課後となつてそれなりに時間が経っている。校舎内に残っている生徒はかなり少ない。

「…さて、どれくらい絞り出せるかな？」

まず総司はあの少年は大した情報を持っていないだろうと考えていた。いや、それ以前に高梨家自体、敵にとっての蜥蜴の尻尾でしかないとすら思っている。

もしあの写真が総司を尾行している様子であつたならば、急いであんな事をしなくても良いと考えていただろう。

だがあの写真は、藤原千花を尾行している様子を撮ったものだ。

自分ではなく、他人、それも身内に危害が及ぶというなら話は別である。

四宮総司という男は、身内には優しい人間なのだ。

「総司くーんー！」

さあ、用事は済んだし帰ろう、とした時だった。背後から総司を呼ぶ声。

振り返れば、そこにはこちらに向かって大きく手を振る藤原と、その隣に澄まして立つかぐやの二人がいた。

総司は僅かに唇の端を引き攣らせた。何というタイミングで遭遇するのか。総司は冷え切らせていた思考を元に戻す。

「藤原、かぐや。今から生徒会室か？」

二人に歩み寄りながら普段の四宮総司に戻し、総司は二人に話し掛ける。

「はいっ。総司君も一緒に行きましょう」

「藤原さん、総司は…」

「あー、かぐや、良い。藤原とは時間の許す限り生徒会室に行くって約束したからな」

総司の問い掛けに笑顔で頷く藤原。総司の事情を知るかぐやが藤原を嗜めようとするが、総司はそんなかぐやを止める。

すっかり頭から抜けていたが、藤原との約束は当然生きている。それならば、四宮としてまだ帰ってはいけない。

総司の今日のスケジュールは、二十一時になるまでは空いているのだから。

「…総司は藤原さんに甘いよね」

「そうか？」

しかし何故かかぐやにジト目で睨まれてしまう。

藤原に甘いという話だが、さっぱり解らない。別にかぐやと扱いを別にしていてという自覚はないのだが。

総司は気付かない。かぐやが言っている事はそういう意味ではないと。

いつものルンルン気分な様子
の藤原と、何故か呆れているかぐやと、何故呆れられているのか解らない
総司の三人は生徒会室へと向かうのだが――

「あの？そこ通してもらえますか？」

「し、四宮…！」

生徒会室の前で白銀と石上がこそそこそと部屋の中の様子を窺っていた。何をしているのか解らないまま、かぐやが二人に声を掛けると二人は驚きこちらに振り向いた。

「すまん、ちょっと今は駄目だ…！」

中に入ろうとするかぐや達を止める白銀。

その理由が解らず、藤原が首を傾げながら問い掛ける。

「何やってるんですか?」

「あの二人が神ってるかどうか調べてるんです」

藤原の問い掛けに答えたのは石上だった。いや、神ってるって何が…。

(あー、そういう事ね)

石上が僅かに開けている扉の隙間から中を覗くと、そこには二人の男女。

柏木渚と田沼翼がソファに隣り合って座っていた。

ちなみに、田沼翼の名前は真妃の件が気になって調べた。

「何かあの彼氏、感じ変わってね?」

「ああ、夏休み中にイメチェンしたらしい」

しかし田沼の感じが夏休み前とは大分変わっていた。素振りがどこかチャラク、何なら髪も染めていた。白銀曰く、イメチェンらしい。

「あー!恋人繋ぎ…!これはどうでしょう…!?!」

「いや、恋人繋ぎくらい初デートでもするだろう!まだ神認定は早い…!」

「前者はともかく後者については白銀に同意です」

中の二人が両手を握り合っていた。所謂恋人繋ぎである。だが、これではまだ神認定するには早すぎる。

それと、関係ない話になるが何故かぐやは顔を赤くして白銀を見るのだろうか?

「あー!ちゅーした!ちゅーしましたよ!これは神じゃないですか!?!」

「ちゅーくらい三回目のデートです!まだだ!」

「前者はともかく後者は白銀に同意です」

柏木が田沼の頬に口付けた。藤原のテンションが爆上がりである。だがこれでもまだ神認定には早い。

「あれ?!あー!あー!首筋にキスしてます!これはどっちですか!?!」

「最早これは現在進行形で神ってると言って良いんじゃないんですか!?!」

「いや、これ位四回目のデートです!」

「え、マジ？これに関しては石上に同意なんだけど」
白銀にはまだこれでも神認定は早いらしい。総司はもう、あ、やつ
てるわこいつら、と思うには十分な材料なのだ。

だつて首筋だよ？首筋にキスですよ奥さん？しかもあの吸い方、絶
対キスマーク残るよ？

「なら白銀は何回目のデートでセ○クスするんだよ」

「五回目だよ！」

「――」

総司が問い、白銀が答えた、その瞬間だつた。ばたり、と何かが床
に倒れ込む音が聞こえたのは。

「四宮!?」

「かぐやさん!?!」

かぐやが倒れていた。どうやら容量オーバーしたらしい。

ちなみに先程の総司の質問は単純な好奇心と一緒に、かぐやへの悪
戯心が混じつてたのは秘密である。

しかし、大分騒がしくなつてしまった。そろそろ彼らを落ち着かせ
ないと――

「なーんちゃつて」

――遅かつたらしい。

全員が視線を向ける。そこには扉を開けてこちらを覗く柏木の姿
があつた。

「かつ、柏木!?!これはだな……!」

「ごめんなさい。ちよつと悪戯させて頂きました」

ニツコリと笑いながら謝る柏木。

何故だろう、笑顔なのに素直に笑顔として見る事が出来ない。

「いや、その、色々と心配でな!」

「大丈夫です。私達、皆さんが考えてる様な事はまだ致してませんよ。
ご安心ください」

「そ、そうか!そうだよな!」

「…」

柏木の言葉を素直に受け取る白銀。

「そんなのまだ…」

「ええ。もちろん」

安堵し、続けようとした白銀だが、妖しさすら醸す柏木の微笑みに言葉が止まる。

これはもう、完全にあれである。

柏木渚と田沼翼は神ってる。結論はこれである。

「…?」

だが話はこれだけで終わらない。いや、終わらないのは総司だけなのだが。

別に確たる理由があつた訳ではない。虫の知らせというか、勘に触れたというか。とにかく総司は振り返ってしまったのだ。

「…つつつ!!!」

総司はそれを見て、すぐに視線を前へと戻した。

両目を剥き、唇を震わせ、そんな様子がおかしい総司に気付いたのは石上だった。

「どうかしたんですか、総司先輩？」

「…いや、何でもない。何でもないから石上…」

石上には大変申し訳なく思っている。これは素直に総司を氣遣つて声を掛けてくれたのだと、総司は解っている。

だが、彼女の名誉のためにも、こうしなくてはならないのだ。

「今後ろを振り向くなよ。自分が大事なら…」

「…はい」

恐怖に震えながら頷く石上。その様子にひしひしと罪悪感に襲われる総司。しかしこうせざるを得ないのだ。

総司達の背後でぽろぽろと涙を流す四条真妃の為には。

「さて、もうすぐ約束の時間だな…」

あれからは特に何事もなく、他の人が眞妃に気付く事もなく、生徒会の活動を終えて家へ帰った総司達。

すでに外は真つ暗、時刻はもうすぐ二十一時になろうとしていた。

「総司様。高梨と名乗る男から電話でございます」

扉の向こうからそんな赤木の声が聞こえてきたのはその時だった。

総司は部屋に入るよう赤木に言い、赤木が持ってきた電話の子機を受け取る。

「お電話代わりました。四宮総司です。…高梨宗太郎さんですね？」

電話を耳に当て、笑顔を浮かべて通話の向こうにいる相手に問い掛ける総司。

高梨宗太郎。大手グローバル企業の重役を勤める男の名前である。年収は一千万を超えるエリート役員だ。

しかし、その実態は――

「俺が送ったお手紙は見ました？貴方に解るように暗号を作ったんですが、解読できましたか？」

「何が狙いつて…、嫌だなあ。そんな怒らないで下さいよ。俺は貴方にとってメリットのある取引をしたいだけなんですから。ああ、因みに手紙を処分しても無駄ですからね？ちゃんとバックアップはとっております。それと、もしそんな事をした場合は手紙の内容を全部世間に公表させてもらいます」

「…喧しいな。むしろあんたは俺に感謝すべきだ。俺の身内に手を出しておきながら、二度と外に出られない生活を送らずに済ませてやろうとしてんだからな、こっちは」

相手が息を呑む音が聞こえた。総司は凍らせた表情を溶かし、再び笑顔を浮かべる。

「それじゃあ、とりあえず洗いざらい吐いてもらいましょうか。今回

の経緯について全部。そうすれば海外への島流しで許してあげます」
もう相手に反抗する気力はなかった。総司の質問に全て答えて時
が経つこと一時間。ようやく通話を終えた総司は受話器を赤木に渡
し、一言だけ命じる。

「後始末は任せるぞ」

「了解致しました」

赤木はそう一言総司に返し、部屋を出ていった。

これは、秀知院学園から一人の生徒が転校する三日前の出来事であ
る。

白銀圭は諦めない

「ウインドウショッピング〜！今日は秋物しこたま揃えちやいますよ〜！」

髪を二つのヘアゴムで纏めてピッグテールにした女の子、藤原千花の妹である藤原萌葉がテンション高めで両手を広げて言う。

いや、揃えたらそれはウインドウショッピングとは言わないのではなからうか。というツツコミは藤原にとられてしまう。

萌葉は藤原のツツコミを流しつづくるくると踊っている。

街中にあるとある場所。若者が待ち合わせ場所として良く使うその場所に彼女らは来ていた。

人数は四。その内二人は藤原千花、萌葉の姉妹。そして残る二人は四宮かぐやと白銀圭の四人である。

今日彼女らが集まったのは、元々は夏休み中に予定していたが、かぐやの事情でお流れになってしまったウインドウショッピングをするためである。

恐らく、ウインドウショッピングはそう時間が経たない内に終わりを迎えそうだが。

(ようやくこの日が来た…！)

移動を始める四人。

その中で、かぐやは前方を歩く圭の背中に視線を向けた。

かぐやはこの日を待ちわびていた。これは圭と仲良くなる絶好のチャンスである。それと同時に、かぐやは圭からある事を聞こうと考えていた。

今日の日付は九月七日。この二日後である九月九日にはかぐやに

とつて、何事よりも優先して行わなければならない事があるのだ。

九月九日、すなわちその日は、白銀御行の誕生日である。かぐやは何としても、白銀の誕生日を祝わなければならないのだ。

他人の誕生日を祝うのに最も手っ取り早い方法は、プレゼントを渡す事だ。しかしかぐやは白銀がどんなプレゼントを欲しているか計りかねていた。

そこで、目の前にいる白銀圭である。

白銀の妹である彼女ならば、どんなプレゼントを贈るべきか解るはず。

圭ともっと親しくなる。圭に白銀への誕生日プレゼントのアドバイスをもらう。二つの目的を胸にいぎ、かぐやのウィンドウショッピング（笑）が始まった。

しかしかぐやの思惑は全く進まなかった。

移動中は圭の隣は藤原がキープし、以降もかぐやは積極的に圭の傍へ行く事は出来ず、時間だけが過ぎていく。

デパートに着いてからはゲームセンターで遊び、プリクラを撮り、小物を見て、カフェでお茶をした。

その間、特に何もなかった。

（上手くいかないわね…）

かぐや達はある洋服店へ来ていた。だがかぐやの服は全て使用人が用意したものであり、自分で服を買った事のないかぐやには勝手が解らない。

かぐやは店を出て、店の前のベンチに腰を下ろして三人の買い物を待つ事にした。

かぐやがベンチに座ってすぐだった。綺麗な長い銀髪が、かぐやの視界の横で揺れたのは。

（横顔…、会長にそっくり）

かぐやの隣に腰を下ろしたのは圭だった。優雅な仕草で髪をそつとかき上げるその姿は美しく、同性のかぐやですら見惚れてしまう程だった。

更に仕草だけではなく、圭の横顔が想い人と良く似ている所もまた目を奪われる要因となっていた。兄妹なのだから当然ではあるのだが。

「あの…」

「は、はいー！どうかしましたか、妹さん！」

圭の横顔に見惚れている最中、不意に声を掛けられたかぐやはついテンパってしまう。

「妹さん？」

「あつ、何て呼べば宜しいでしょうか？白銀さんだと会長と区別つきませんし…」

「圭で良いですよ。年上なんですから」

「じゃあ、圭さん」

「圭」

「圭ちゃん…」

「圭」

「け、圭…」

「はい」

押しが強さに負け、下の名前での呼び捨てをする事となってしまう。別に嫌ではないしむしろ望む所なのだが、もっと段階を踏んで仲良くなるつもりだったかぐやは戸惑ってしまう。

ただでさえ、人の下の名前を呼び捨てするなんて総司以外では初めてだというのに。

「あの、かぐやさん、と呼んで良いですか？」

「あつ、はいっ。勿論」

「それでは、かぐやさん。私、かぐやさんに聞きたい事があるんです」
呼び捨てし合う仲にまで進展した事に喜ぶのも束の間、圭が自分に聞きたい事という何かに意識を切り替え、耳を傾ける。

「はい。何でしょう？」

「その…、いきなりこんな事聞くのは変だと思われるかもしれませんが…。四宮…総司さんについて聞きたくて…」

「総司？に、ついてとは…」

果たして圭が聞きたい事とは、と構えたかぐやだったが、予想外の質問が掛けられ、つい首を傾げてしまう。

「はい。その、好きなものとか趣味とか、そういう事を…」

何故そんな事を？と聞き返しはしなかった。それがしてはならない事だとかぐやは悟った。

頬を赤く染め、必死に言葉を絞り出した圭の質問に素直に答えるべきだとかぐやは感じ取ったのだ。

「総司の好きなもの、趣味ですか…」

口許に手を当てて考える。総司の好きなものはすぐに思い付いた。しかし、総司の趣味。これについてはかぐやですら良く解らない。

というよりまず第一に、総司に興味に割く時間なんて無いのだ。かぐやも多忙な毎日を送っているが、総司はそれ以上である。そんな総司が、趣味を持っているとすら思えない。

「総司は辛いものが好きですよ。たまに激辛ラーメンを食べに行ってるくらいですし」

「辛いもの…、ラーメン…」

「それと趣味ですが…、申し訳ありません。総司の趣味は私でも解らないの。何しろ総司は毎日忙しいですから。もしかしたら、私の知らない趣味があるのかもしれませんが…」

「いえ、謝らないでください！」

総司は辛いものが大好物である。何なら、辛党が行き過ぎて甘いもの、特にケーキ等のお菓子は苦手ですらある。

そしてかぐやの言う通り、授業がない且つ仕事のスケジュールに余裕がある日限定で行きつけのラーメン屋に行っているのも事実である。

ただ、行きつけのラーメン屋があるのは本当だが、他の激辛料理を出す店にも総司が足を運んでいる事はまだかぐやは知らない。

そして総司の趣味については良い答えを出せない事を謝る事しか出来ない。

頭を下げて謝罪するかぐやに、圭は慌てたように両手を振る。

「本当は本人に自分で聞くべき事なのに、その勇気がない私が悪いんですから…。かぐやさんが謝る事じゃありません」

「圭…」

目を伏せ、しよんぼりと落ち込む様子を見せる圭。

可愛い、という率直な感想は呑み込み、かぐやは笑顔を浮かべて圭に声を掛ける。

「圭。あなたもしかして、総司の事が…」

「っ！わ、解ってます！私なんかが好きになって良い相手じゃない事は！でも…「何を言ってるの？」え？」

かぐやが言い切る前に発した圭の台詞が、かぐやの予想が正しい事を証明した。

しかし、どうやら圭は勘違いをしている様だ。かぐやは圭の台詞を遮って口を開く。

「好きになっちゃいけない相手なんていません。圭、貴女は総司の事が好きなのね？」

「か、かぐやさん…。私は…」

「…」

「…はい。好き、です」

両手で拳を握り、握った拳を両膝に置いて縮こまる圭。恥ずかしそうに頬を染める姿はかぐやの頭をピンク色に染めるには充分すぎる威力だった。

だが可愛いという素直な感想は胸に秘める。

「圭。私はね、他にも総司の事を好きな人達を知ってる。それもその人達は私にとって、とても大切な人達なの。だから、貴女だけに肩入れは絶対に出来ない」

「…」

「でもね、もし貴女がそんな程度の事で諦めるつもりなら、私は全力で止めるわ」

「かぐやさん…」

かぐやの信念の籠った視線から、圭は目を逸らさなかった。先程まで揺れていた表情は、決意に満ち、唇は引き締まる。

どうやら、もう圭に言うべき事はないらしい。

「かぐやきーん！圭ちゃーん！お待たせしましたー！」

「お姉ちゃん、待ってー！」

藤原が店から出てきたのは二人の会話が丁度一段落した時だった。しかし出てきたのは藤原だけで、萌葉はまだ店の中の様だ。

萌葉はすぐに店から出てきたが、不自然な程に荷物を持っていた。そして藤原は全く荷物を持っていなかった。

「どうしたのお姉ちゃん…？いきなり『嫌な予感がします！』とか言ってお金だけ置いてお店出ちゃって…」

「…何ででしょう？」

首を傾げる藤原。どうやら勘で新たな恋敵の出現を察知したらしい。

(この子は…、本当に読めないわね…)

一筋の汗を流すかぐや。藤原との付き合いは長いが、未だに藤原の全容を掴めていないし、これから先掴める気もしてこない。

普段は天然でゆるふわでポンコツなのに、時に屋敷を歩く早坂の仕事だけで正体を見抜く観察眼を発揮する。

本当の藤原は一体どちらなのだろうか。

(…まあ、どっちも本当なのでしょうけど)

疑問の答えは簡単に出た。両方本当である。それでこそ、藤原千花なのだ。明らかに矛盾のある答えだが、かぐやには妙にしっくり来た。

「さあ、次のお店に行きましょう！」

そう高らかに告げながら歩き出す萌葉に続くかぐや達。

そうして、彼女達のウインドウショッピング(笑)は続くのだった。

かぐやが藤原姉妹と圭と一緒に遊びに行ったその翌日。いつもの

時間にかぐやと共に登校する総司。送迎車から降り、正門から学園の敷地内に入る。

「かぐや…。いい加減機嫌直せよ」
「…」

だが二人には一つ、いつもと違う点があった。
そう、かぐやの機嫌が悪いのである。

昨日、藤原達と遊びに行つたかぐやはほくほく顔で帰ってきた。どうやら相当楽しかったらしい。その日の夕食で、また遊びに行こうと約束したと嬉しそうに教えてくれた。

なのに今日になってこの機嫌の落ちようである。

聞いてみたら、何やら早坂に悪戯されたらしい。その内容は恥ずかしかつて教えてくれなかつたが。

何だかんだ単純なかぐやである。ここまで引き摺るといふ事は、早坂は相当かぐやに効く悪戯をしたのだろう。何をしたかは知らないが。

「総司くーん！かぐやさーん！おはようございますー！」

さて、どうやってこの可愛い妹の機嫌を直そうかと考えていた時、背後から二人を呼ぶ声がした。二人は立ち止まって振り返る。

「藤原。おはよう」

「おはようございます、藤原さん」

こちらに駆け寄ってくるのは藤原。柔らかな笑顔を浮かべる藤原は二人の前で立ち止まった。

「んー？どうかしたんですか、かぐやさん？顔が怖いですよ？」

「…いえ、別に。何でもありませんよ」

かぐやが藤原に笑顔を向ける。機嫌が完全に直つた訳ではないのだろうが、藤原の笑顔に毒気を抜かれたのだろう。藤原の笑顔を見ると何故だが癒されるのだ。

「そうだ総司君！かぐやさんに聞きましたか？昨日の事」

「ん、ああ。凄く嬉しそうにかぐやが話してくれたよ」

「え？本当ですか!？」

「総司！」

恥ずかしげに総司を一喝するかぐや。嬉しそうにかぐやが何て話していたかを総司に問う藤原。

「四宮先輩！」

そして、前方から聞こえてくる少女の声。三人が同時に、同じ方向へと視線を向ける。

視線の先に立っていたのは綺麗な長い銀髪を靡かせる、中等部の制服を着た女子生徒。

「あ、圭ちゃん！おはよう殺法！」

「はい！おはよう殺法返し！」

(え、何その挨拶。殺法付ける意味あんの？普通におはようで良くない？)

謎の挨拶を交わす藤原と女子生徒。総司はその女子生徒に見覚えがあった。

「えっと…、確か、そう。白銀の妹の…圭さん、だっけ？」

「あ…はいっ。圭、で良いですよ」

「そうか、それなら圭さん」

「圭です」

「？圭さん」

「圭」

「…圭さん？」

何故かかぐやがジト目で見てくる。あと、何故かため息を吐く圭も総司にはよく解らなかった。

「…圭ちゃん？どうして高等部に？何か用があるんですか？」

「はい、そうなんです。四宮先輩にお願い事があるんですが…」

「…あ、俺に？かぐやじゃなく？」

「はい。かぐやさんじゃなく、その…総司さんに」

初め、圭が言う四宮先輩はかぐやを指していると思っていたのだが、圭の視線が自分を向いているのに気付く総司。

「あの、授業で解らない所があつて…。教えてもらえないでしょうか…？」

「うん、別に良いけど…。白銀に聞いた方が早いんじゃないか？」

「そうですねよ圭ちゃん？総司君は忙しいんですから、あまり時間をとつちや駄目ですよ？」

「…でも千花姉は前に総司さんに勉強してもらってたんだよね。中等部まで噂届いてるよ」

「…」

「…」

何故か睨み合う藤原と圭の二人。

あれ、二人って仲良いんじゃないの？さつきあんなに楽しそうに謎挨拶を交わしてたのに。どうしてこうなった？

「本当、何と罪深い…。総司、貴方の事ですからね？」

「何故だ」

更にかぐやに見捨てられた。先に行きます、と歩いて行ってしまった。待って、見捨てないで。助けてくれ。

総司の心の叫びはこれっぽっちもかぐやに届かなかった。

「ふ、二人とも落ち着け。こんな所で喧嘩するな、な？」

「総司君はどうするんですか？」

「そうです。総司さんが選んでください。私に勉強を教えてくださいませんか？」

「…」

いや、本当にどうしてこうなった。マジで誰でも良いから助けてくれ。

かぐや。白銀。石上。早坂。赤木。父様。何ならこの状況から救ってくれるなら黄光兄上でも良い。相馬でも許す。

しかし現実は無情。誰も総司を助けてくれない。

「…放課後、こっちの生徒会室で良いか？」

「…はい。今日のところはそれで許してあげます」

え、生徒会室じゃ不満なの？何が？どこが？あと、また、来るつもりなのだろうか。

「圭ちゃん…」

「千花姉。私、負けないから」

「うう…、ただでさえ強力なライバルが…また増えるなんてえ…」

何の事かさっぱり解らないが、とにかく今のうちに逃げる…のは何だかしちやいけけない気がして総司は二人の会話が一段落つくまで待つ事にした。

結局、三人は予鈴五分前になるまでそこに居続けたのだった。

四宮総司は見届けたい

九月九日。すでに何度か言っているが、その日は白銀御行の誕生日である。

かぐやはその日に向けて何を送るべきか、どう祝うべきかと考えに考えた。らしい。それは総司も最近のかぐやの行動や仕草を見ていて解っていた。

それを見て、総司はかぐや一人に任せるべきだと考えた。自分は手を貸すべきではないと、自分は自分でかぐやとは別にプレゼントを用意しておこう、と。

だが白銀の誕生日当日の朝、総司は絶賛その決断を後悔していた。「どうでしょう、特別に発注して作ってもらったケーキです。会長、ケーキ食べたがってる感じでしたからとつても喜ぶに違いないわ♪」
「…」

絶句。

今の総司の状況を一言で言い表すならその一言以外考えられない。因みに今、総司達は家の厨房にいるのだが、この場にいるのは総司とかぐやの二人だけではなくもう一人、早坂も総司の隣に立っていた。

二人は朝、朝食を摂り終え身支度を終え、その時かぐやに呼ばれたのだが。

三人の目の前には、一メートルはあろうかという巨大なケーキがあった。これはもう、誕生日ケーキというよりウェディングケーキと言った方が正しいのではないだろうか。

更にこのケーキは大きさ以外にも拘りがあるらしく、かぐやはその点の説明を続けている。

しかし総司も早坂も、目の前の衝撃が大きすぎてかぐやの説明が全く耳に入ってこなかった。

「…早坂、任せる。ちよつと俺は用事を思い出した」

「待つてください、行かせませんよ。私には荷が重すぎます。ここは総司様がかぐや様の相手をすべきかと」

「お前の主だろ、お前が残れ」

「それを言うなら貴方の妹でしょう。総司様が残ってください」

二人の間で始まるかぐやの押し付け合い。さすがのかぐやも二人の様子に気が付き振り返る。

「二人共、どうしたの？」

「…いや、その、まあ…な？」

「…はい。かぐや様がそれで良いなら特に口出ししません」

「何よ、歯切れが悪いわね」

早坂がため息を吐く。そして、ぷいっとかぐやから視線を逸らしてから小さく、されどもかぐやの耳には届くボリュームで呟いた。

「昔はこんなにアホじゃなかったのに…」

「アホ!？」

「そんなハッキリ言ってるなよ早坂。…事実だけど」

「総司も何を言ってるの!？」

私はアホじゃない！

いやアホですよ。

という口喧嘩がかぐやと早坂の間で始まる。まあ喧嘩というには可愛いものだが。

(…さて、それじゃあ今の内に行くのでしょうか)

二人が互いに意識を向けている内に総司は厨房を出て玄関へと向かう。そしてすでに屋敷前に到着していた運転手に今日は赤木の車で行くと伝えてから、総司は予め呼び出しておいた赤木の車に乗り込んで学校へと向かうのだった。

その後、二人の口論がどういう結末を迎えたか、総司が知る事はな

かった――

なんて事はなかった。

「総司様。よくも私を置いて行ってくれましたね」

「…その、早坂。マジスンマセンした」

正直、朝のあのかぐやの様子は尋常ではなかった。ここ最近ポンコツが混じってきてる事は承知していたが、あのケーキをそのまま白銀に渡すなんて事、普段のかぐやならばあり得ない思考だ。

流石に心配に思った総司は、藤原と石上が生徒会室から出て行った事を確認すると、扉の前で中の様子を覗く事にしたのだ。

同じ思考をした人物がもう一人いる事を知らずに。

藤原と石上が帰っていったのを見届けた総司が生徒会室の方へ歩き出そうとしたその時だった。細く白い指が総司の肩を力強く掴んだのは。

当然、総司の肩を掴んだのは早坂である。

「あれから大変だったんですよ？結局かぐや様が納得しないまま時間は遅刻ギリギリ。私はかぐや様と同じ車に乗る羽目に。車に乗ってからもかぐや様の相手を続け、どれだけ疲れた事か」

「…すみません、はい、すみません」

ハイライトが失われた瞳を前に、総司が出来るのは頷く事と謝る事だけ。

抑揚のない声で喋り続ける早坂に逆らえず、ただ総司はその場で早坂の話の聞き続ける。

「…これはいざ埋め合わせしてもらいますからね」

「え、いや…」

「してもらいますからね」

「いえすまむ」

次期当主としての威厳はどこへやら。総司は震えて早坂の言葉に頷くのだった。

「さて…。かぐや様はどうされたのでしょうか」

言いたい事を言い終え、スッキリした表情になった早坂が生徒会室へ視界を向ける。

二人は足音を殺して扉に近付き、一度視線を交わし、頷き合ってからそつと扉を開けた。

僅かに開いた扉の隙間から中の様子を覗く。

白銀は執務デスクで作業をしていた。そしてかぐやだが、部屋の脇の扉を開けて何かを眺めている。

「…あ、何か動揺してるぞ」

「あそこにはかぐや様の指示で運んだケーキがあります。多分、自分のアホさ加減を自覚したのでしょうか」

早坂が言った直後、顔を赤くしたかぐやが扉を閉める。どうやら早坂の言う通りらしい。ほら、心の中で『私アホ——!!!』て叫んでる顔をしている。

すると、かぐやの表情がコロコロ変わり始めた。その様子を見て、総司が口を開く。

「始まったな」

「その様ですね」

時にアホっぽく、時に氷の様に冷たく、時には幼児の様に純粋な、また時には普段の平静を保っている状態の、様々な表情がかぐやの顔に表れる。

あれは、かぐやの脳内で会議が行われている時に起こる現象だ。かぐやは知っての通りだいたい情緒不安定だ。その日その日のメンタル状態によって性格が変わる。

数多くかぐやの性格の変化を見てきた総司と早坂は、その種類を大きく四つに分けた。

一つはここ最近のメインの性格である通常かぐや。二つ目は白銀に出会うまでのメインであった氷かぐや。三つ目は今日の朝にかぐやが見せていたアホかぐや。そして四つ目が、以前に風邪を引いていた時に見られた幼かぐや。

時には通常と氷が混ざった様な性格になったり、アホと幼が混ざった様な性格になったりと精密に分類できている訳ではないが、大方は

この四つで分類は可能だ。

まだまだかぐやの生息は謎に包まれているのである。

そして総司が口にした脳内会議とは、かぐやの脳内で先程上げた四種類のかぐやが会議をするのである。

別にかぐやの脳内を映像解析できる訳でもあるまいし、総司と早坂にも良くは解らないが。これは飽くまであのかぐやの表情の変化の仕方から立てた総司と早坂の仮説である。

「…終わった様ですね」

「こつちに来るな。一回閉めるぞ」

かぐやの表情の変化が止まる。と思えばかぐやが扉の方へと歩いてくるではないか。総司がそつ、と音が立たない様に閉める。

同時に二人は扉に耳を付けて中の声を聞き逃さんと集中する。

まず聞こえたのはパチリ、と何かのスィッチが押された様な音。直後、戸惑う白銀の音が聞こえてくる。どうやらかぐやが部屋の電気を消したらしい。

かぐやは白銀に目を閉じているように言う。白銀はそれに従った様だ。

聞こえてくる衣擦れの様な音。更に何か粘着性のある物を触る際の音が聞こえる。

(…まさか、かぐや！服を――)

「絶対違いますから」

カツ、と目を見開き部屋に突入しようとする総司を早坂が冷静に止める。

「いやでも…」

「よく考えてください。あの音は多分ケーキの音。それとライターの音も聞こえましたから恐らく――」

総司の脳内がシスコン思考に吞まれかけた時だった。二人はこちらに近づく足音を察知する。即座に扉から離れ、廊下の角に身を潜める。

扉が開かれたのはその直後だった。部屋から出てきたその人物は閉まった扉に乗り掛かるとずると崩れ落ち、床に座り込んでしま

う。

顔を真っ赤にし、僅かに息を荒げ、疲労困憊な様子。

「…」

総司と早坂は目を見合わせ、ふつ、と笑い合った。そして座り込んだ生徒に歩み寄ると、その両脇に腰を下ろし、総司は生徒の肩に手を置き、早坂は優しく生徒の頭を撫でる。

「頑張りましたね」

「ああ。お疲れ、かぐや」

座り込んだ生徒、かぐやを笑顔で労う二人と労われるかぐや。

周囲には誰もおらず、その光景を見られる事は無かったが、もし誰かが見ていたらこう思っていただろう。

家族か、と。

あの後、かぐやが落ち着いてから三人は身を隠し、白銀が帰宅してから生徒会室に置いたままの巨大ケーキを運び出した。

あれを処分するのはかぐやと早坂だが、まあ主に早坂のお腹の中へと消えていくだろう。

ちなみに総司は甘いものが苦手のため辞退した。裏切り者、と総司を非難する早坂の暗い目は総司の脳裏に刻み込まれた。あれはまた埋め合わせとか言い出すかもしれない。

「あ」

ふと、総司は動かしていたペンを止めた。そしてデスクの傍らに立て掛けてある鞆のファスナーを開け、中から包装されたある物を取り出す。

「渡しそびれちゃった」

総司が取り出したのは今日、白銀に渡すつもりだった誕生日プレゼントだ。かぐやが白銀にプレゼントを渡すのを見届けてから渡す予定だったのだがすっかり忘れていた。

「まあ、明日渡せば良いか」

白銀は小さな事には囚われない男である。かぐや関連の事以外は。だから今日渡し忘れた事は謝れば許してくれるだろう。多分。

そして総司は明日、手伝いを頼まれてないが生徒会室へプレゼントを渡しに赴く事となる。そこで、混沌とした光景を見る事になるとは知らずに。

次の日、総司は予定通り生徒会室に赴いた。そこで石上に泣かされた藤原に抱き付かれたりと大変だったが、何とか白銀にプレゼントを渡す事が出来たのだった。

ちなみに、総司が白銀に渡したプレゼント、高級枕は大層喜ばれたという。

白銀御行は見上げたかった

「今日は十五夜だ！月見するぞー!!」

総司はここまでテンションの高い白銀を見るのは初めてだった。いや、色々と振り切れた白銀は何度も見てきたのだが、純粋に楽しそうにテンションが高くなる白銀を、初めて見たのだ。

生徒会室にいる他の面々も一人を除いて同じで、うさぎを歌いながら踊る白銀を目を丸くして見ている。

ただ先程言ったが、一人だけ他の面々とは違う反応をしていた。

「恥ずかしい…」

生徒会室のソファに座る中等部の女子生徒、白銀圭だけは赤くなつた顔を両手で覆つてポツリとそう呟いた。

彼女は今日、総司に勉強を教えてもらいに来たのだがその結果、兄の醜態が晒される場面に出会すという何とも言い難い事態になってしまった。

「突然どうしたんですか会長…。テンション高いですね…」

「いやなに、今夜は中秋の名月！こんな日に夜空を見上げないなど人生の損失だぞう！」

「ごめんなさい千花姉、皆さん。兄は星が物凄い好きで、良く星空鑑賞してるんです。十五夜の天気が良い事にテンションがバカになってるんです」

「兄に対して何て口の聞き方だ圭ちゃん！だが許そう！今日の星空指数に免じてな！」

「…ホント恥ずかしい」

また圭が両手で顔を覆ってしまった。何というか、少し同情してしまおう。

「でも急すぎませんか？」

かぼつ、とうさ耳を頭に装着しながら言う藤原。

いや、そのうさ耳はどこから出した。四〇元ポケットでも持っているというのか。実は藤原はドラ〇ちゃんだったのか？

というか可愛すぎる。危ない。もしこれが猫耳だったら総司の意識は途切れていたかもしれない。

「まあいいじゃないですか。僕は乗りますよ」

「石上？」

藤原やかぐやの様子からあまり乗り気ではなさそうという印象を受ける中、石上が口を開いた。

しかし意外だ。石上が同意するとは。最近は何中こそ残暑で厳しいものの、夜になれば秋らしく肌寒い気温となっている。

その中で外に出ようという白銀の提案に賛成するとは。

「もうすぐこの生徒会も解散…。皆で無茶できるのも、これで最後かもしれないですよ」

石上が賛成した理由は単純だった。何だかんだ石上も生徒会が気に入っていたのだ。

そんな生徒会ももうすぐ解散を迎える。そうなれば、今までのようにこのメンバーで毎日集まる機会は当然少なくなってしまう。

残り少ない日数で、少しでも思い出を残したいのだろう。

しみみりと、どこか寂寥感のある空気に生徒会室が包まれる。

「俺と圭さんは生徒会じゃないけどな」

直後、総司が一言簡潔に告げる。総司の一言に続いて圭がこくこくと頷く。

しみみりとした空気が霧散し、代わりに微妙な空気が生徒会室を包んだのだった。

「というか圭ちゃん何でいるの？」

「聞くの遅くない？総司さんに勉強教えてもらいに来たの」

「そんなの俺が教えてやるのに」

「兄さんより総司さんの教えの方が解りやすいの」

「…」

白銀は心に八十三のダメージを受けた。

白銀は部屋の隅っこでいじけた。

六時までには日没が終わり、辺りがすっかり暗くなるまでそう時間は掛からなかった。

現在の時刻は七時。生徒会メンバー十総司と圭は学園の屋上に集まった。

「わーっ！意外と星見えますねー！」

「月のある南西側が東京湾だから都会の灯りも比較的少ない。ロケーションも悪くない」

うさ耳を着けた藤原が目を輝かせて夜空を見上げる。

総司も夜空を見上げて星空を眺める。あまりこうして意識して星空を見た事はなかった総司。綺麗だとは思うが、さすがに星空を見るだけというのは退屈な気がする。

さすがに思いつきり今のロケーションを利用するだけしてやろうとほくそ笑むかぐや程ではないが。

「おっもちい♪おっもちい♪」

「お、藤原は餅を持ってきたのか」

「はいっ。私は花より団子、月よりお餅です！」

一体どこに持っていたという疑問は問うまい。携帯コンロに水の入った鍋を載せ、ご機嫌に歌を歌いながら沸騰を待っている藤原。

「…?」

「…」

「…」

不意にかぐやと目が合った。パチパチと瞼を開閉させてウインク

するかぐや。

総司はかぐやのアイコンタクトを受け取る。

「ここじゃ風が当たる。藤原、そっちの影でやったらどうだ？」

「あ、それもそうですよね！それじゃあ行つてきまーす！」

まず一人目の隔離成功。

かぐやの意思、白銀との二人きりの空間を作るには後二人、石上と圭をどうにかしなければならぬのだが――

「…僕も火の側で暖まりますね」

冷たい風に体を震わせた石上は総司が何をするまでもなく勝手に藤原の所へ行つてしまった。

これで残り一人だが。

「俺もあつちに行くけど、圭さんはどうする？」

「あ、はい。それじゃあ私もご一緒させてください」

総司が誘うと圭は乗ってきた。これで任務完了である。

心の中でかぐやへ健闘を祈り、総司は藤原、石上と圭と共に合流した。

「おお、こっちは暖かいな」

「はい！あ、圭ちゃんもこっち来たんですね」

藤原はしゃがんで未だお湯の沸騰を待ち、石上はゲームをしていた。

月見はどうした月見は。

「千花姉、何か手伝う事ある？」

「いえ、ただお餅入れて煮るだけですから。二人とも向こうで月を見てて良いんですよ？」

「俺は石上と同じで寒い嫌だからな。餅が煮終わったら皆で見ようと思う」

「私も総司さんと同じです。それに…、今のおに…兄さんは面倒臭いから相手したくないのでここにいます」

圭の台詞に総司と藤原が、ゲームしている途中の石上も顔を上げて圭の方へと向く。

「面倒臭いって…。いや確かにやけにテンション高いなとは思ってた

けどさ」

「はい。兄って子供の頃の夢が天文学の博士だったくらいに天文好きなんですよ。だから、その…。毎年十五夜の日にはテンションが振り切れて…」

「へえ。会長って子供の頃は天文学を学ぼうとしてたんだ」

圭の口から初めて聞く白銀の過去が語られる。

確かにあの様子を見れば天文学を志すのも不思議ではない。というより圭の台詞が過去形だった事の方が意外ですらある。

「…あれ、そういえばかぐやさんは？」

「かぐやならまだ向こうにいるけど？」

ふと辺りを見回し出す圭。かぐやを探していたようで、総司が圭の問いに答える。

すると、みるみる圭の表情が微妙なものへと変貌していく。

「圭ちゃん、どうかしたの？」

「いえ…。十五夜の日の兄はテンションが振り切れてると言いました。が…。そのせいか、他人との距離感が物凄く近くなるんです」

圭は過去の出来事を語り出す。それはまだ小さい頃、といっても兄妹互いに思春期には入っていた頃である。

十五夜に圭と白銀は二人で月見をしていたらしい。そして圭は不意に白銀にこう聞いたそうだ。

『秋の四辺形ってどれ？』と。すると白銀は圭の肩を抱き寄せ、夜空に指を指しながら説明を始めたのだという。

確かに互いに向ける視線の始点が近ければ近いほど指が指す方が解りやすい。とはいえ思春期に入っていた圭。いくら相手は兄とはいえ男。異性である。というか兄だからこそ、といった方が正しいのかもしれない。

圭は白銀を張り倒してしまったという。

「まあ、こんな事がありました…。もしかしたら、兄がかぐやさんに迷惑掛けてないかと…」

「いやいや、確かに会長のテンションは振り切れてましたけど、あの四宮先輩にそんな事する程愚かじゃないですよ」

「…だといいんですけど」

「そうだよ圭ちゃん。それに会長がそんな事したのは妹相手だからだ
と思うよ？さすがにかぐやさんにまでしませんよ」

「…」

石上と藤原が二人して、さすがにかぐやにはしないだろうと断言す
るが、圭の表情は冴えない。

総司も二人と同じ意見である。圭の場合は家族という事もありそ
こら辺の抵抗感が薄かったのだろう。だがかぐや相手はそうではな
い。

「なら、覗いてみるか？」

「…え？」

「かぐやと白銀を」

総司が出した提案に三人が振り向く。少しの間考えた後、三人はこ
くりと頷いた。

総司達が影から顔を出し、二人の方を見る。そこでは――
白銀がかぐやの肩を抱き、シートの上に二人が寝転んでいた。

「――」

「ええ…」

あんぐりと口を開けて呆然とする総司と圭。マジか、と言わんばか
りに微妙な表情になる藤原と石上。

「…総司さん、本当にごめんなさい。兄が本当にごめんなさい」

「…別に圭さんが謝る事じゃないさ。それより今は」

「はい、解つてます」

藤原、石上の視線を受けながら、二人は足を踏み出す。

重い足取りで歩みを進める二人は、かぐやと白銀のすぐ後ろで立ち
止まった。

「ん？二人とも、どうした？」

「そ、総司っ…！圭っ…！」

白銀に肩を抱かれるかぐやは顔を真っ赤にしていた。一方の白銀
の瞳は輝いていた。それはもう純粹に。

「――」

それを目の当たりにし、総司は我に返り、そして悟る。白銀はただ純粹に、かぐやに天体について知って貰いたいだけなのだ。何の下心もない、子供の如き瞳は総司を正気へと戻した。

というより、あの瞳で下心を持ってたら本当に総司は誰も信じられなくなる。

「圭ちゃん、今回は…」

許してあげよう、と続けるつもりだった。だが、その台詞を言い切る事ができなかった。

「この、バカ兄がああああああああ!!!」

「ぐほおおおおああああああああ!!!」

その前に圭が白銀の腹目掛けて踵落としを食らわせていたからだ。

「かぐやさんに何て事してるのよ！ほんつと信じらんない！天体好きもいい加減にしろ！」

「ぐつ、うあつ、け、けいちゃ、なんで、おこつて、…」

「…大丈夫か、かぐや」

「…恥ずかしかった」

圭が白銀に制裁を与えている間にかぐやを起こす。まだ顔が赤いままだが、瞳には正気が残っている。これなら大丈夫だろう。

「みなさーん、お餅が煮えましたよー。圭ちゃんもそこまでにして、お月見始めましょー」

すると丁度良くというべきか、藤原が鍋を持ってこっちにやってくる。その後ろからは石上がついてきている。もうゲームはしていない。

藤原は人数分の皿にそれぞれ餅を盛り、総司達に渡す。

そうして、生徒会のお月見はスタートしたのだった。

その後、月といえばかぐや姫、という藤原の発言から白銀の暴走が始まったのはまた別の話。

そして先程のものよりも激しい圭の制裁が白銀に与えられたのも

また別の話である。

早坂愛は言わせたくない

今日も今日とて学校に行き、授業を熟し、いつも通りの日常を過ごす。

夕食を済ませ、お風呂から上がり、部屋へと戻ってきたかぐやは何をしているかというところ。

「お見舞い、花火大会、誕生日、月見。これだけイベントがあつて進展がないってどういう事ですか」

早坂から説教を受けていた。いや、その言い方は少々大袈裟かもしれないが、早坂に呆れられている事はかぐやにも簡単に悟れた。

「生徒会ももう解散するのに。ホントダメダメですね。どうしてここまで下手を打てるんでしょう」

早坂の言う事は一理あるとかぐやも思う。あれだけイベントがあつて白銀に告白させられないというのは、自身に至らなさがあつたのは事実なのだろう。

だがさすがに余りにド直球な早坂の言い方には不満があつた。

「じゃあ何。早坂なら会長を落とせるといふの？」

「まあ、恐らく」

「何か切れる音がした。」

「言つたわね!?!ならやつてみなさいよ!」

かぐや、キレる。

「私にかかればどんな男もイチコロって言うなら会長を落としてみなさいよ!」

「イチコロとは言つてないです」

怒りの余り周囲が見えていないかぐや。早坂の訂正はこれっぽっちも耳に届いていない。

「他人事だと思つて簡単に言つてくれますけどね！実際やってみれば私の苦勞も判るつてものですよ！」

「イチコロとは言つてないですよ」

「ええ、口では幾らでも言えますからね！大体早坂だつて総司を落とせてないじゃないの！」

「…」

「私を花火大会に送り出した時、どうせ二人で花火見たんでしよう!? 貴方だつて総司とのイベントがあつたのに落とせてないじゃないの！よくもまあその様で私の事を言えたわね！」

「――」

何かが切れる音再び。

「私は使用人としての立場が制約になつてます。かぐや様の様に自由にアプローチできる訳ではないんですよ」

「ふんつ、そんなの言い訳よ！その程度の事に遠慮してる時点で私に物を言う資格なんてないと知りなさい！」

「全部相手からの行動に期待して自分から動こうとしないかぐや様に言われたくありません。私に物を言いたいならまず自分から会長にアプローチしてみたらどうです？」

「そんなの出来るわけないでしょ！」

「一応聞きましょう。どうしてです？」

「そんな事したらまるで私が会長の事好きみたいじゃないのよ！」

「…ぐうの音も出ない程その通りじゃないですか」

違うわよ…ときやいぎやい騒ぐかぐや。

この時、完全にかぐやは我を失っていた。

「解りました！もうこうなつたらこれしか方法はありません！」

「…何をするつもりですか」

かぐやはベッドから降りたかと思うと、机の上に載った携帯を手に取る。

「総司に聞きます！私と早坂、どっちが正しいと思うか！」

更にこんな事まで言い出す始末。早坂は一瞬、余りの事に硬直してしまう。

そのタイムラグがかぐやに行動を許してしまう。

「っ、ちよっ、かぐや様！それはっ……！」

「何よ！もう第三者の意見を聞くしかないでしょう!？」

「正気ですか!？」

「これ以上ないくらい冷静よ!！」

早坂はもう言葉では止められないと悟る。ならば残る手段はただ一つ、力づくである。

早坂がかぐやに飛び掛かる。目を見開き驚いた様子を見せながらもかぐやは反応し、半身になって携帯を握った方の腕を後ろに下げる。早坂の狙いには気付いているらしい。

完全に必死である。早坂はかぐやの肩を掴み、携帯を奪い取ろうと腕を伸ばす。

一瞬、携帯の画面が見えたが、もうほとんどの文が完成している。あの僅かな時間でここまでタイピングするとは何という早業か。

「くっ、ぬっ、ぐぬっ」

「くうっ」

呻きながら腕を伸ばす早坂と抵抗するかぐや。

やがて二人の争いは規模を広げていく。

腕を伸ばすだけでは駄目だというのなら、他の方法で隙を生むしかない。早坂はかぐやの肩を掴んでいた手を離すと、その手でかぐやの腕を力一杯引き寄せる。

「っ!」

しかしその策は上手くいかなかった。かぐやはそれにも反応し、両足を踏ん張ってその場に留まる。

ならばと早坂はしやがみこみ、左足を回してかぐやの足下を狙う。

「きゃっ」

これは成功。早坂に足を払われたかぐやは体勢を崩す。

——殺った!

確信し、早坂は携帯へと手を伸ばす。

だが早坂は忘れていた。かぐやは何に対しても才能溢れる天才だという事を。

「なっ」

体勢を崩したかぐやは体を反転して払われた足を床に着けて踏ん張る。その勢いのままにしゃがみ、早坂の足を払い返す。

しかしこれに早坂は反応。かぐやの足払いには早坂の跳躍によって空振りに終わる。

「…」

「…」

沈黙が流れる。睨み合う二人。そして――

「っ！」

二人が飛び込んだのは同時だった。

「うるせえぞ！少し静かに…昭和の喧嘩!？」

直後かぐやの部屋に入ってきたのは総司。二人の騒ぎは総司の部屋までしっかりと伝わっていたらしい。

さすがに煩すぎたのか、入ってきた総司の顔は怒りに満ちていた、のだが。かぐやと早坂の喧嘩の様子を見てただ事ではないと思っただか、怒りの表情を収めるとすぐに二人の仲介へと向かった。

「で、何があった」

今、総司の目の前には床に正座した二人の少女がいる。一人は総司の妹であるかぐや。そしてもう一人はそのかぐやのお付きである早坂だ。

二人の頭には揃って同じ大きさのたんこぶができており、総司に拳骨を落とされたのが容易に察する事が出来る。

さて、二人の喧嘩を仲介し、鉄拳制裁ではあったが一応二人を落ち着かせた総司は改めて二人に喧嘩の理由を問う。

「だって早坂（かぐや様）が…っ」

「はいそこで睨み合わない」

ここまで二人がいがみ合うのは久し振りである。というかあそこまで激しく取っ組み合っているのを総司は初めて見た。相当な理由があったのだろう。

「互いの不満な所じやなく喧嘩になった経緯を教えろよ。ほら、喧嘩になった切っ掛けは何だ。どんな話をしてた」

「…かぐや様と会長について話していました」

「それで早坂が私に言ったのよ！何でこんなにイベントがあったのに会長を落とせないのかって！」

冷静に答える早坂。ふんすふんすと息を荒げながら大声で語るかぐや。

「だから私は言ったのよ！早坂だってそ「あああああああああああああああ!!!!」

「…」

かぐやが更に続けようとした時、早坂がかぐやに飛び掛かったり

総司は腕を組んで目を瞑る。総司の前では再び繰り広げられている昭和の喧嘩。

「…痛い」

「暴力に訴えすぎだと思えます」

「自業自得だ。あと早坂、今のお前には言われたくない」

数秒後、二人の頭には一つ目のたんこぶの上に二つ目のたんこぶが重なっていた。

かぐやは涙目で俯き、早坂は無表情で総司を見上げて訴えてきた。その訴えはあっさり一蹴されたが。

「…早坂は喧嘩の理由を教えたくないのか？」

「…」

ふと総司は早坂に問い掛けた。早坂は何も答えず黙り込んでしま

う。その沈黙を、総司は是であると判断する。あの様子を見れば一目瞭然だ。理由は解らないが、早坂は喧嘩の理由を語りたくない。

それが総司にだけなのか、それとも誰にも言いたくないのかは定かではないが。

「…はあ」

総司はため息を吐く。

嫌がるのなら無理に聞くつもりはない。だがこの優しさに甘えてまた同じ事を繰り返されても堪らない。

「次は無理矢理にでも聞くからな。それで強制的に解決させてやる」

「…ありがとうございます」

とりあえず今回はこれくらいで許してやる事にする。それが正しいのか否か、もし間違ってたら先程言った通りにするだけだ。

「…かぐや？」

ここで総司はふと気付く。

先程からかぐやが何も喋っていない。総司はかぐやに視線を向け、苦笑を浮かべた。

「ったく、こいつは…」

かぐやは正座をしたまま眠りの世界へと舟を漕いでいた。こくくと頭を揺らし、すーすーと寝息を立てている。

何とふてぶてしい事か。

「早坂はそっち支えろ。俺はこっちから持ち上げる」

「はい」

総司は右から、早坂は左からかぐやの肩を持ち上げてベッドに運ぶ。ベッドに寝かせたかぐやに早坂が布団を掛けて電気を消す。

物音を立てぬよう静かに歩き、二人はかぐやの部屋から出た。

何も言わずに廊下を歩く二人。もうすぐ廊下の分かれ道で二人が別れる、という所で総司は口を開いた。

「もしかしてさ。早坂って好きな人いる？」

「つつっ!!!?」

今まで見た事のない早坂の動揺っぷりだった。

何故総司がそう思ったのか、それは先の早坂によって途切れたかぐやの台詞である。

何で会長を落とせないのかという台詞に言い返したのだろうかぐやの言葉。あの時、かぐやは『早坂だって』と続けた。その後は早坂の妨害によつて聞けなかったが。

早坂だつて。この一言が意味するの、早坂だつて好きな人を落とせていない、なのではと総司は考察を立てたのだ。

そしてそれはどうやら正しかったらしい。早坂が面白いくらいに動揺している。顔を真つ赤にして口を開閉させている。

「マジか…。いや、早坂にも春が来たか…」

「あ、その、ちが…」

「で？相手は誰なんだよ？」

「…」

あれ？おかしいぞ？さつきまで顔を真つ赤にして恥ずかしそうにしてたのに何故か顔の赤みが引いてその上ジト目で睨んでいるぞ？

「…ホント、兄妹揃つてアホですね」

「アホ!？」

思わぬ一言を喰らい、後退る総司。一方の早坂はため息を吐いてから廊下の分かれ道を左に進んでいく。

「あ、待て早坂！まだ話は…」

「大丈夫ですよ」

慌てて早坂を呼び止めようとする総司。

すると早坂は立ち止まり、振り返った。

ふわり、とスカートが揺れる。早坂の顔には、花が咲き乱れたと錯覚する程の綺麗な笑顔が浮かんでいた。

「私の好きな人は、とても素敵な男性ひとですから」

「――」

そう言い残し、今度こそ早坂は立ち去っていく。

どこか足取りがご機嫌そうなのは総司の気のせいか。

どちらにしても、総司は呆気にとられてその場から動けずにした。

「…何なんだよ、全く」

本当は早坂が好きだという男の名を聞き出し、その男について調査するつもりだった。それで早坂を任せるに値する男であれば問題なし、そうでなければ総司直々に動くつもりだった。

だが、あんな顔をされたら何も出来ないではないか。

「まあ、早坂を信じるしかないか」

とにかくこうなったら早坂の男を見る目を信じるしかない。

「…」

脳裏に先程の早坂の笑顔が過る。

何となくむず痒く感じ、頭をガリガリと掻きながら総司は部屋へと戻っていくのだった。

四宮総司は勉強したい

机にはPCではなくノートと問題集、筆記用具が並んでいる。

今日の分の仕事は終え、久し振りにゆつくりと勉強が出来る時間の余裕が出来た。この時間を無駄にはしたくない。何せもうすぐ全国統一模試が行われる。気合を入れて勉強しなければ勝てない相手が二人もいるのだ。

だというのに、何とタイミングの悪い事か。もうわざとやってるとしか総司には思えなかった。

「死ね」

『開口一番ひどくね!？』

驚愕する声は総司のスマホのスピーカーから聞こえてきた。

そう、これまた久々の登場、四条帝である。

帝からアプリ通話が掛かってきたのは総司が勉強を初めてから数分してからだった。

仕事を終え、『よっしゃ、今日は腰を据えて勉強するか』なんて気合を入れ、問題集を解き始めてすぐにこれである。正直、軽い殺意が湧いた。

「久々にじっくり勉強出来る時間がとれたんだ。邪魔すんな」

『とか言いながら通話には出てくれるもんな総司は。このツンデレめっ』

「…」

『おい、俺には解るぞ。無言で通話を切ろうとするな。ちゃんと用事はあるんだからな』

「ちっ」

帝に行動を読まれ苛立つ総司。荒々しい舌打ちの音はまさに荒れ狂う総司の感情を物語っていた。

『まず一つ目だけだよ。…今回の賭けはどうするよ』

「寿司じゃなかったか?」

『それは八百長の話だろ?寿司で良いならそれでも良いけどよ』

そういえばそうだったか、と過去の帝との会話を思い出す。…まずい、思い出せない。恐らく帝から言い出した事を聞き流してたのではないか、総司の記憶には全く八百長の話をした事など残っていないかった。

何故か寿司という単語は残っていたが。

ちなみに賭けというのは模試の点数の勝敗についてである。二人が勝敗によって賭けを始めたのは高校に入ってからだった。模試前に内容を決め、負けた方が勝者に施すという至ってシンプルな賭けである。

これまではほとんど食事を奢るといふペナルティーを課してきた。そうでない時もあったが、今回もその例に倣い食事を奢るといふのが敗者のペナルティーになりそうだ。

「ん〜…。蟹なんてどうだ?」

『あ?蟹?何で蟹だよ』

「いや、何となく思い浮かんだだけ」

寿司といえば海鮮、海鮮といえば…という風に思考を進める内に総司の頭に浮かんだのは蟹だった。

「うん、何か蟹食いたくなってきた。正確に言うなら他人の金で蟹が食いたい」

『…あー、何か話してたら俺も蟹食いたくなってきたわ。もつと言うなら敗者の金で蟹が食いたい』

総司の手が止まる。顔が上がり、今は何の音も出さないスマホへと目を向ける。

その口許は、嚙猛に歪んでいた。

『決まりだな』

「ああ。いつになるか解らんけど、蟹を奢ってもらう予定立てとく」
『そりゃこっちの台詞だ』

恐らく帝も同じ表情をしているに違いない。

今の総司と帝は飢えた獣も同然だった。久々に喰い甲斐のある獲物を見つけ、獰猛に噛む獣。

「んで？二つ目の用事って何だよ」

『ああそうだ、忘れてた。いや、姉貴の事なんだけだよ』

自分の姉についての相談の癖に忘れるとは何事か。

いや問題はそこではない。帝が姉について相談をする。それはつまり――

『あれからどうだ？何か解ったか？』

「…何が？」

『いや何がって、忘れたのか？姉貴の様子がおかしいってお前に話しただろ？』

これがテレビ通話でなくて良かったと心底安堵する総司。いや、帝とテレビ通話なんてした事はないが。

いやだからそこじゃない。そこじゃないのだ。

以前、総司は帝から姉の情緒が不安定なのだと言われた。初めはいつもの事なのでは？と思っていたのだが、帝曰くいつもとは何やら様子が違うという。

結局二人で話していても結論は出なかったため話し合いは終わりにし、帝からそれとなく姉を見てやってほしいと頼まれお開きになったのだ。

単刀直入に言おう。総司は帝の姉、四条真妃の様子がおかしい理由を知っている。というか、その理由を目の当たりにしてしまった。帝にその理由を話そうと思えば話せる。

だが、総司はその判断を下す事を戸惑っていた。理由は簡単。あんなのに関わりたくないからである。介入すればややこしい且つ面倒臭い事になるのは目に見えている。

というかそういう理由を抜きにしても介入したくない。

（嫌だよ、あんな悲しい事に関わるの。だってあの二人もう神ってる

んだぞ?…あ、涙出てきそう)

今の真妃の心情を想像していたらつい涙が出そうになる。それもそうだろう。想いを寄せる相手と付き合っているのは自分の親友。そして二人はすでに——まあそれを真妃が知っているかは定かじやないが。

しかしもし知っていたら——総司は思考を止めた。これ以上考えたら本当に泣いてしまう。

「…そういえばそうだったな。悪い、まだちよつと解らん」

『そうか…。俺の方もちよつと掴み兼ねててな。一応姉貴に監視付けたりしたんだが、手応えは無しだ』

「…」

総司は優しい嘘を吐いた。さすがにありのままを帝に話すのは、プライドの高い真妃には我慢ならないだろう。

そして、それと同時にある事を悟る。

帝が真妃に付けたという監視は恐らく、総司と同じ心情なのだろうと。きつと、総司と同じ理由で帝に報告しないのだろうと。

総司と同じく、あれを見てしまったのだろうと。

「俺ももう少し注意して真妃さんを見てみるよ」

『悪いな。俺も秀知院生ならお前に面倒掛けなくて済むんだが…』

「気にすんなって」

というかむしろ帝が秀知院生じゃなくて心底良かったと思う。もしそうだったら、今頃真妃の精神はどうなっていたか。

とにかく帝には言ってはならない。もし言えば真妃を

慰めるべく総司の協力を帝は得ようとするだろう。何だかんだ、帝は姉を慕っているのだから。だがそんなのは御免だ。というより無理だ。さすがにあれば手に余る。

そして何より真妃のために、帝には言わない選択を総司はとる。いずれ知られてしまうのは避けられない運命だと解つていても。

「それで用は済んだか?」

『ああ。…次に話す時は料亭でだな。金は忘れるなよ?』

「それはこつちの台詞だ」

笑みを含んだ声で言い合ってから、総司は帝との通話を切る。

「さて、今度こそ…」

今度こそ集中して勉強を、という所でスマホが震える。断続的に震えるそのパターンは、メールが来たという事。

そしてこの便利なメッセージアプリが多くあるこのご時世にメールという機能を使う知り合いは、総司には一人しかいない。

「かぐや…」

そう、総司の妹かぐやである。そうでないガラケーもあるが、かぐやのガラケーはメッセージアプリが使えない機種である。なので離れた所にいる友人との会話の手段は電話か、メールのみ。

「…はあ」

ため息を吐きながら立ち上がる。無視しようかとも考えたが、そうすると後が面倒臭い。仕方なく総司はかぐやの呼び出しに応じる。

「おーい、久々に勉強中だったお兄様が来てやったぞ。久々に余った時間を割いて来てやったぞ。開けろ」

そんな風に不機嫌さを隠す事なく皮肉全開の台詞を吐きながらどんどんと扉を叩く総司。

数秒後、扉を開いて総司を出迎えた早坂の表情はそれはもう申し訳なさそうに、何も言わずともその顔だけで謝罪してる事が丸分かりの表情をしていた。

「申し訳ありません。本当にかぐや様が申し訳ありません総司様」

「で、今回はどうしたってんだ。…まさかまた喧嘩したんじゃないだろうな？」

「いえ、そうではありませんのでご心配なさらず」

どうやらまた喧嘩したという訳ではないらしい。それならかぐやは何故総司を呼び出したのか。

(あ、これは愚痴を聞かされるパターンだ)

総司はその理由をかぐやの表情を見ただけで悟った。

何故なら、ベッドに座るかぐやは赤くなった顔を膨らませ、大変ご立腹な様子だったからだ。

「帰っていい？」

「駄目です」

即答だった。これは帰ろうとしたら早坂は全身全霊で止めてくるだろう。

諦めて総司はぶんすこしているかぐやに歩み寄る。

「どうしたんだよ今日は。また白銀と何かあったのか？」

「そうですね！かいちよ：白銀さんが酷かったんですから！」

何故か白銀の呼び方を直したかぐやは経緯を話し始める。

そしてその話を聞いて総司はかぐやが白銀の呼び方を直した理由を理解する。

今日、第六七期秀知院生徒会は解散の日を迎えた。白銀から生徒会室の片付けに誘われたため総司はその事を知っていた。ちなみに白銀の誘いは丁重に断った。さすがに生徒会最後の日に自分がいてはいけないだろうと思つたからだ。たとえ、白銀達がどれだけ否定しようとも。

生徒会室の片付けを終えてから、かぐや達四人はファミレスで打ち上げを行つたらしい。その時にかぐやは白銀からもう自分は会長ではないと言われ、呼び方を直したという。

さて、本題は打ち上げが終わつてからだ。店を出て帰路に就き、駅で藤原、石上と別れたかぐやは白銀に家まで送ってもらつた。

その時、かぐやは白銀にこう言つたそうだ。『私は会長は、会長がい』と。

「うっわ、はっず」

「言わないであげてください、総司様。かぐや様が一番解つてる事なんですから」

「二人とも黙りなさい！まだ続きがあるのよ！」

茶々はそこまでに、かぐやの話に再び耳を傾ける。

かぐやの我が儘を聞いた白銀は鞆から一枚の紙を出した。それは、生徒会選挙の申込書。そこにはしっかりと白銀御行と名前が書かれていたらしい。

「会長は全部計算していたんです！私にあの恥ずかしい台詞を言わせるために！」

「なるほど、かぐや様はまんまと出し抜かれてお怒りという事ですね
…、総司様、どうしました？」

「…ん？いや、別に」

かぐやの話は解った。だが一つ、一つだけ総司はかぐやの話の中で
引つ掛かっている事があつた。

「…早坂、悪いけどかぐやの相手を任せていいか。すぐ戻るから」
「え」

「頼む」

「あの、総司様？ちよつ「聞いてますか早坂！」」

幸運にもかぐやの意識は完全に早坂に向いていた。その隙に総司
はそそくさとかぐやの部屋を出る。早坂の声は聞こえないフリをし
て。

かぐやの部屋を出た総司はすぐに自室へと戻り、机に置きっぱなし
にしていたスマホを手に取り操作する。

メッセージアプリを起動、アプリのフレンド欄を呼び出し、その中
から一人のユーザー名をタップする。

『もう会長はこりこりなんじゃないのか？』

そう文字を打ち、送信する。

返事はすぐに返ってきた。

『気が変わった』

これまた簡潔な答えだ。果たして、気が変わったその理由とは一体
何なのだろうか？

「くくっ」

小さく笑みを漏らしてから、総司は再び文字を入力、『そうか』とだ
け打って返信する。

画面には二つの画像がそれぞれ左右にあり、縦に並んでいた。一つ
はデフォルトの顔面がない上半身の画像。もう一つは迫力のある文
字体で『知』と書かれた画像。

デフォルト画像は総司のもの。そして、もう一つの知の画像の所に
は――

「単純だな、白銀」

白銀御行と書かれていた。

総司は小さく呟いてから、スマホを机の上に戻して部屋を出る。当然、かぐやの部屋に再び向かうためである。

今頃早坂がかぐやの相手をしているはずだ。先程と同じく勉強を続けようかという考えが出なかった訳ではないが、後が怖いため却下する。

かぐやの部屋に戻ってきた総司を出迎えたのは、騒がしいかぐやの声と早坂の鋭い視線だった。

すぐに謝ったが、無情にも早坂の埋め合わせカウンターは一つ追加されたのだった。

四宮総司は思い出す

「珍しいな。四宮が休み時間に勉強してるなんて」

「バカ、お前忘れてんのか？もうすぐ全国統一模試があるんだぞ」

「あー、それで…」

現在、秀知院学園は午前の授業を終えて昼休みを迎えていた。思いの休み方で貴重な時間を過ごす生徒達。

ある者は友人と会話、ある者は一人で読書、ある者は机に伏して睡眠、またある者は騒がしく廊下へと出ていく。

そんな中、窓際の机で一人、ひたすらノートにペンを走らせる生徒がいた。そう、総司である。

何者も寄せつけない集中力でただ一心にノートと問題集に向き合っている。

ペンが止まる気配は一向にない。それはつまり、総司が何らかの問題で迷い、解き詰まっていないという事。

総司が使っている問題集は超難関大学を目標にしている高校生の多くが使用している人気の問題集。当然、目標が高い高校生が使用しているのだ、そこに載っている問題は全てレベルの高いものとなっている。

そんな問題集に載っている問を、総司は止まる事なく解きまくる。もう、勉強する必要などないとすら思えるほどに。

しかし、総司も人間だ。何度も繰り返し返さなければ、やがて忘れてしまう。そして一度でもそうなってしまうえば、奴との差はあつという間に追い付けない程にまで広がってしまう。

「そーいやもうすぐ生徒会選挙だよな。四宮は立候補しねえのかな

？」

「…」

総司の人並外れた聴力がその言葉を聞き取る。直後、初めて総司の手が止まった。

「てかぶつちやけ、白銀が会長やんの気に入らねえ。あいつ混院だろ？俺、前の選挙で違う奴に入れたんだけどなー。あいつ当選しちまつたんだよなー」

「まあ、な。俺も白銀がまた会長やるのはちよつと複雑だ」

「てかさてかさ？何で四宮は会長やんねえの？確か中一ん時に会長当選したよな？あれから立候補してねえけど」

「いや、それは四宮の後継者として忙しくなったからだろ？」

「あー、そうか…。いやでも後継者として指名されたのは中学卒業してからだろ？なら何で…」

ガタツ、と椅子が動く音がした。ただそれだけの事で総司について話してた二人が、周囲の教室にいた生徒達が震え、同じ方向に視線を向ける。

視線の先には、椅子から立ち上がった総司がいた。総司はそのまま歩き出す。先程まで総司の事について話していた二人に向かって。

「あ、え、いや…」

「ち、違うんだ四宮！俺達はただ…」

慌てて言い募る二人。総司は黙ったまま歩き続ける。

そして――

「え…」

「あ」

何も言わぬまま、総司は二人の横を素通りし、廊下へと出ていった。二人は呆然としたまま、先程まで総司がいた方を眺める事しか出来ぬまま。

あれだけ騒がしかった教室は、総司がただ立ち上がり、廊下に出ていっただけで静けさに包まれたのだった。

一方、教室から出た総司は廊下をただ宛もなく歩いていった。別に何か目的があつて廊下に出た訳じゃない。ただ、あそこに居るのが堪らなくなつた。逃げたようなものだ。

「…会長、か」

すでに言っているが、総司は中等部にいた頃、一度だけ生徒会長に就任した事がある。

選挙での得票数は驚異の九十%超え。秀知院始まつて以来の最多得票数だつた。それ程までに総司は生徒達の畏怖を集めていた。

生徒会長となつた総司は様々な学校行事を成功させ、生徒達の敬意を更に集めた。教師の誰もが総司の堂々たる姿を見て、来年もまた会長は決まりだと疑わなかつた。

だが、それはただの鍍金だつた。輝かしく、薄っぺらい金を剥がせば何という事はない。そこにはただの現実があつた。

『ふざけんな！誰もが皆、てめえみたいに出来る訳ねえだろうが！』

総司はそれを無能と切り捨てた。

『あんだ、天才つて言われてるみたいだけど少し違ふみたいね。他人の気持ちを全く察せられない。そこに関しては凡人以下よ』

総司はそれを不要と切り捨てた。

その結果、総司は独りになつた。独りで生徒会の仕事を請け負ひ、進め、成功を納めた。亀裂を誰にも悟られず、周囲には華々しい結果だけを見せ続けてきた。

そうして総司に残つたのは、空しさだけだつた。

「なに黄昏てんだ」

気付いた時、総司は中庭の上で繋がる連絡橋まで来ていた。そこで立ち止まり、ずっと過去の事を思い出していた。

背後から話し掛けられたのはそんな時だつた。

「龍珠」

「はっ、さすがのお前も気になつて見に来たのか。随分妹思いな事だな」

「はっ」

振り返つた総司の視線の先にいたのは一人の女子生徒。

まず入る特徴はその目付きの悪さだ。だが、その目付きの悪さでも掻き消せない美貌は、多くの男子生徒を魅了した。

まあ、魅了された男子生徒は例外なく全員ぶった切られたが。物理的にではなく。

彼女の名前は龍珠桃。某反社会的団体トップの孫娘。秀知院四大難題美女の一人に数えられている。

「何言ってるんだ？かぐやがここで何かするのか？」

「あ？おめえ知らないで来たのかよ」

龍珠の言っている事が理解できず聞き返すと、龍珠は表情を曇めながらも説明してくれた。

何でも授業の合間の休み時間中、白銀がかぐやを中庭に呼び出したそう。かぐやとこれからの話をするために。

「学校中噂になってんで。白銀が四宮妹に告るってな」

「…これから」

白銀がかぐやを、これからの話をするために呼び出した。

確かにこれは白銀がかぐやに告白するために呼び出したと考えるのは自然な流れだが、どうも総司には引つ掛かった。

だって、あの白銀が、かぐやに告白する？どうも総司には信じられなかった。何か心境の変化でもあったのだろうか？

「しかし龍珠、お前も可愛いところあるんだな。白銀の恋路が気になんのか？」

「あ？てめえふざけた事言ってるつとぶつ殺すぞ？私がここに来たのは白銀の弱味が握れねえかと思っただからだ。大体あいつが告白？ハッ、あのチキン坊やがそんな事出来る訳ねえだろ」

随分な言い草だった。というか白銀に対する暴言がヤバイ。

「弱味？」

「…そこは聞き流せ」

「お前、白銀に何か弱味握られてんの？」

「そんなんじゃない。ただ、あいつには恩がある。…あるんだが、あいつがそれで調子に乗らねえ様にこっちも手札を持つとくべきだと考えた。それだけだ」

よく解らないが、総司が知らない何かがあるらしい。高一の、まだ前々生徒会長が現役だった頃、二人は生徒会で一緒だった。その時に何かあったのだろう。

「…来たな」

「…」

二人が見下ろす先、中庭に入っていく三人の生徒の姿があった。その内の二人は勿論、かぐやと白銀。そして何故かもう一人、藤原がその場についてきていた。

龍珠が窓を開ける。これで耳を澄ませば外の会話を聞く事が出来る。何故か周りは静寂に包まれているため、割りとかぐや達から距離が離れているが大丈夫だろう。

かぐやと白銀の会話が始まる。白銀は周囲を見回しながら何やら戸惑っている。それを見て総司も周囲を見回し、ぎよつとする。

(そういうや龍珠が言ってたな。学校中の噂になってるって…)

何故か連絡橋、もつと言えば総司と龍珠の周りにだけはいないが、中庭が見下ろせる場所には多くの生徒の姿が見られた。今、この瞬間を見るために来たのだろう。

かぐやが緊張した面持ちで白銀の言葉を待つ。白銀はまごまごしてかぐやに言葉を掛けられないでいる。

そこで動き出したのは藤原だった。

「会長！私じゃなくかぐやさんを選んだんでしよう!? だったらもつとしっかりしてくださいよ!!」

白銀の顔がとんでもない風になったのが見えた。そして周囲の生徒は反応を示す。

やれ三角関係か、やれ生徒会室痴情のもつれか、やれ藤原は総司様が好きだったんじゃ、など。

最後については後々問い詰めるとしよう。噂の源を絶つために。

「…おい四宮。これはまさか」

「ああ。俺もそう思う」

龍珠の声に総司が頷く。どうやら白銀の告白するにはらしくない態度を見て龍珠も察したらしい。

今、二人の視線の先ではかぐやと白銀が見つめ合っていた。

その光景を見て、二人はおつ、と目を見開いた。

まさか、本当にそうなるのか、というちよつぴりの期待を込めて白銀に視線を送る。

だが、残念ながらその期待は裏切られる事となる。

白銀はかぐやの耳元に口を寄せ、小声で何かを伝えた。その直後、かぐやの瞳から一瞬ではあるが何かに絶望したが如くハイライトが失われた。

周囲の生徒は気付いていないだろうが、総司と龍珠には見えていた。

総司は苦笑いを浮かべ、龍珠はため息を吐きながら頭を搔く。

「やっぱチキン坊やのままか。少し期待してたんだがな」

「そう言うなよ。初めからそんなつもりで呼び出したんじゃないやなかっただろうから」

「けっ、と吐き捨てる龍珠を総司が宥める。」

結局白銀のその声は聞こえてこなかったが恐らく、かぐやを呼び出した理由は――

「選挙の応援演説、か。まあそれに関しては成功したみたいだな」

「選挙、ね」

白銀が立候補した選挙の応援演説をかぐやに頼むためだろう。そしてその頼みをかぐやは受け入れたようだ。

二人は今、小声でされたやり取りの内容を知りたい生徒達から逃げている。

「…何だよ」

「お前さ、今なら出来んじゃないやねえの」

走っていくかぐやと白銀を目で追いかけていた総司だったが、隣からの強い視線を無視し続ける事は出来ず、振り向いて問い掛けた。

龍珠は、総司の問いに問いで返した。

「何がだよ」

「会長」

「…」

総司は目を丸くする。まさか、龍珠からそんな事を言われるとは思わなかった。

「んだよ」

「いや…。お前からそれを言われるとは思わなかった」

「は？嫌味か？」

「それ、むしろ俺の台詞なんだけど」

ただでさえ鋭い目付きを更に鋭利にして総司を睨み付ける龍珠。一方の総司は全く堪えた様子は見られず、やや演技ぶって両手を広げながら言い返す。

「…今のお前ならやれるんじゃないやねえかって思ったんだよ。あの頃から、だいぶ変わったからな」

「…」

龍珠にそれを言われると何だか感慨深い。龍珠も被害者の一人だからだ。そんな龍珠からあの頃から変わった、と言われたのは他の誰に言われるよりも総司の胸に響いた。

「人間、そうそう変われねえよ。俺の根っこの部分はあの頃のままだ」
「…」

「大体お前、俺を殺す気か？今、生徒会長の仕事が降ってきたら睡眠時間消えるんだが？文字通り」

「まあ、お前にその気がねえんなら強要はしねえよ」

総司の台詞を聞き終えた龍珠は、もう用はないとここから立ち去る。

総司もそれに続いて歩き出す。

「おい」

「ん？」

「ついてくんな」

「そんな事言われても、俺も教室そっちだし」

「五分空けてからにしろ」

「遅刻するんだが」

軽口を叩きながら自分の教室へと向かう二人。

文句を言われながらも、総司は次の授業に遅刻する事なく、教室へ

と戻る事が出来たのだった。

藤原千花は呼ばれない

「総司は人の美醜で態度を変える女ってどう思う…?」

「糞だと思う」

かぐやの質問に答えたらかぐやが落ち込んだ。理由はさっぱり解らない。

「総司様。ド直球すぎます」

首を傾げる総司に早坂がそう言った。総司は早坂の方へと振り向く。

「でも実際糞だろ。イケメンには良い顔してそうじゃない奴には態度悪い女とか。ああいうのを見ると潰したくなるよな」

「潰したくなる…」

「総司様、そこまでにしてあげてください。かぐや様のライフはもうゼロです」

「?今の話とかぐやがどう関係してるんだ?」

すでにお解りの事と思うが、総司は今かぐやの部屋にいる。恒例となったかぐやの呼び出しを受け、部屋に来てみれば始まったのはこの話題である。

かぐやの問いかけに正直に答えただけなのに、かぐやはどんどんダメージを受けていく。

訳が解らない総司に早坂が経緯を説明してくれた。

要するに、白銀が健康さを取り戻したという話らしい。生徒会長の仕事丸ごとなくなり、その分を睡眠時間に回せるようになった白銀は十分に睡眠が摂れるようになり、結果あの常時寝不足で鋭かった目

付きが信じられないくらい柔らかくなったそうさ。

「…白銀の目付きの悪さが好きだったのか」

「別に好きじゃないわよ！ただ…ただ、あの目付きの悪さがちよっぴり可愛らしいと思ってただけよ！」

なるほど、かぐやは白銀の目付きの悪さが気に入ってたらしい。そんな事本人に言えば絶対に否定するだろうが。

というより、たった今否定された。

「総司も早坂も大馬鹿よ！二人して私が会長の事を好きだ好きだって…！言っておきますけどね！私は確かに会長のお人柄は好ましく思っています、恋愛的な意味でそういう訳ではありませんから！」

かぐやがぶんすか怒りながら大声で続ける。

一方、総司の隣では大馬鹿と言われて少々ムカツとした様子の早坂が口を開いた。

「…そうですね。人の美醜で態度が変わる程度の気持ちなんですから、かぐや様の言う通り好きでも何でもない様ですね」

「え…、あの、判れば良いのだけれど」

あつさりと早坂が認めた事に戸惑ったか、かぐやがおずおずと早坂に返事を返す。

しかし早坂はそこで言葉を止めなかった。

「もし付き合ったりしたらどうせすぐに冷めて破局。結婚しても離婚。未来のない関係になってたでしょうね」

「…」

「おい早坂」

「所詮恋に恋してた程度の事。偽物、紛い物ですよ」

「早坂、ブレーキ踏め早坂」

「たかが外見が変わったくらいで冷める気持ちなんてその程ど…」

「…」

止まらない早坂だったが、ふと今のかぐやの様子を目に留めるとすぐに言葉を止めた。

「…なんで、そんなこというの…？」

「あ、はい、もう止めます」

絶望した表情で涙を流すかぐやにため息を吐く早坂。

「まったく…。そんな顔するなら好きじゃないとか言わないでくださいよ」

「好きじゃない！好きじゃないけど…。仮に好きだとしたらちやんと本物の愛だから!!」

「仮って何?」

「だから！仮にこの気持ちが恋だったとしたらって事よ！」

「…いや恋だろ、それ」

「違うわよっ!」

結局その後も総司&早坂陣営とかぐやとの論争は平行線が続き、結論が出ぬままかぐやがおねむになった事で終息を迎えた。

その翌日。いつも通りに授業を熟し、放課後を迎えた秀知院学園。

「それで、私に相談って何ですか、総司君?」

総司は放課後に帰ろうとする一人の生徒を呼び止め、中庭に呼び出していった。その生徒とは――

「ああ。色々と考えたんだが、お前が一番適任だ。藤原」

中庭にあるいくつものベンチの中の一つに、二人は並んで座っていた。一人は当然総司、もう一人は藤原である。

昨日、かぐやが眠ってしまい論議を続けられなくなった総司と早坂はかぐやに布団を掛けてからそれぞれの部屋へと戻った。

そして今日の朝、朝食の席でかぐやに言われたのだ。今回の件について、誰でも良いから女子に話し、その感想を聞いて欲しいと。当然、その話がかぐやの事であるのはぼかせという指令付きで。

その後、誰に相談するのが適任かと考えた総司は色々と相手を思考した結果、藤原という結論を出した。というより、藤原以外そんな事を相談できる相手がいなかった。

一応圭という選択肢も浮かんだが、相手がまだ中学生という事を考慮すれば藤原が適任だろうと考えたのだ。

「これはな、俺の知り合いの話なんだが…」

早速総司は昨日かぐやから聞いた事を話し出す。

気になる相手の見た目がガラリと変わった事、それを見て気持ちが

一気に冷めてしまった事、相手の見た目が変わった程度で冷めてしま
う気持ちなど真実の愛ではないのではないかと悩んでいる事。

それらの話を悩んでいる人物がかぐやである事だけ隠して藤原に
伝える。

「…一応聞きますが、それは総司君の話ではないんですよね?」

「?ああ、勿論」

「もう一度聞きますよ?本当に総司君の話ではないんですよね?」

「だからそうだって。何だよ急に」

総司が話し終わると突然真顔になった藤原がずっと顔を寄せ、そ
んな事を聞いてきた。

何故そんなに真剣な様子で聞いてくるのだろうか。まさか、バレた
のか?

内心の動揺を表に出さず、総司は表情を変えずに返事を返す。

すると藤原は打って変わって、にぱーっと明るい笑顔を浮かべた。

「そうですか!なら良かったです!それでえっと…、真実の愛は何な
のかって話でしたっけ?」

「そこまでバツサリ聞いてはいないが、まあ要約すればそうだ」

「ぷぷっ、総司君の知り合いさんは高校生にもなってそんな事が気
になるんですね」

ぷーくしゅくしゅと笑う藤原。

おいかがや、笑われてるぞ。高校生にもなってとか言われてるぞ。

「真実の愛なんて簡単ですよ。美女と○獣みたいに外見に囚われない
愛の形こそが真実の愛。相手の姿が変わったくらいで冷めちゃう愛
なんて最低!偽物ですよ!」

「…うん。だよな、普通そうだよな」

今回、かぐやが総司にこんな事を聞いてくるよう頼んだのは何も真
実の愛が何なのかを知りたい訳ではないと総司は考えている。いや、
そういう思惑もあるのかもしれないが。

だが実際は、かぐやの気持ちも真実の愛なのだとは肯定してくれる相
手を探しているのだ。そうなればかぐやは自身の気持ちは偽物では
ないと安心できる。無意識の内にそう思っているのだと総司は予測

している。

だから本当はここで話を終えてはダメなのだ。まだ藤原からの肯定を得ていない。だがこれ以上食い下がれば藤原に違和感を持たれるだろう。何故こんなにも、と。

「その子に伝えてください。あなたの気持ちは愛ではありません。もつと外見だけでなく中身も見てあげてください。あなたが見てきた物と違う物が見えるはずです。もしかしたら、それが切っ掛けで本当に好きになるかもしれませんね」

「…うん、解った。伝えておくよ」

百パーセント善意で答えてくれた藤原には本当に申し訳ないが、その答えをそのままかぐやに伝える訳にはいかない。何故なら、もしそのまま伝えたらかぐやが再起不能になる可能性があるからだ。

「ありがとう。悪いな藤原、こんな事に時間とらせて」
「…」

しかし藤原には感謝しかない。こんな下らない事に付き合わせ、時間をとってしまった。なのに嫌な顔一つせず、朗らかな笑顔で話に付き合ってくれた。

だというのに、総司がお礼を言った途端、藤原は頬を膨らませた。明らかに不満ありありといった顔である。

「…どうした」

「…総司君はどうして私の事は下の名前で呼んでくれないんですか？」

「へ?」

てつきり、やはりこんな事に付き合わされて不満だったのかと思っただ。しかし、藤原の口から出てきたのは意外な言葉だった。

「何だよ急に」

「急にじゃないですよっ！私と総司君は中等部から大分付き合い長いんですよ!?!なのに圭ちゃんは名前で呼んで私は苗字で…、不公平ですっ!」

うがーっ、と捲し立てる藤原に戸惑う総司。

本当に何故藤原が怒っているのか解らない。確かに藤原は苗字で、

圭は名前で呼んでいるがそれが何で藤原が怒る事に繋がるのか。

「総司君！何ですか!？」

「いや、何でって言われても…。圭さんは苗字で呼んだら白銀と区別つかなくなるし」

「なら御行君を名前で呼べば良いじゃないですか!」

「いや、今更あいつを名前で呼ぶのはな。もう苗字で呼ぶのが癖になっちまった」

「うう…、納得いきませ〜んっ!」

本当に解らない。何でこんなにも藤原は怒り狂っているのか。

しかし、その怒りを鎮める方法は何となく想像が付いていた。

「なら、藤原も名前で呼ぶか?」

「へ————?」

間の抜けた声が藤原から漏れる。その声を聞き、総司の内心でもしかして間違えたか、という一抹の不安が過る。

「嫌ならそのままにするけいえい!是非!名前で呼んでください!」近い

総司が言い切る前に藤原がずいっと顔を寄せながら遮った。それはもう満面の笑顔で。

「ほら、総司君!早く!」

「は?」

「名前で私を呼んでください!H u r r y u p!」

「…千花」

何がそんなに嬉しいんだか。藤原…千花は、目を瞑って噛み締めるように天を仰ぐ。

「…」

ただ名前で呼んだだけだというのに、ここまで喜ばれると少々恥ずかしく感じてしまう。

総司は堪らず立ち上がった。

「話は終わったし、もう帰るな?」

「あつ、待ってください総司君!校門まで一緒に行きましょう!」

立ち去ろうとする総司を慌てて追いかけた千花は、総司の隣まで行くといつもよりも若干近い距離感で総司と並んだ。

「…何か近くないか」

「えー？そんな事ないですよー？」

ふふん、と鼻で笑いながらご機嫌に、千花は総司と並んで歩く。総司はその様子を見て何も言えなくなり、ため息を吐くしかなかった。

二人のその距離感は、外に待たせているそれぞれの車に乗るべく別れるまで、ずっとそのままだった。

四宮総司は手を出さない

「おーっ！」

「会長ぶっちぎりじゃないですか」

校舎内の廊下に貼られた一枚の学内新聞。そこに書かれていたのはとあるアンケートの結果だった。

そこアンケートとは、生徒会選挙に出馬する三人の生徒の中で誰を支持しているかというもの。その三人の中には当然白銀もあり、白銀はアンケートに答えた生徒の過半数の票を獲得していた。

「これはもう勝ったも同然ですよ！」

「いや、予測の数字なんて当てにならない」

手放して喜ぶ千花と石上に対し、白銀は冷静なようだ。

事前予想の結果に一喜一憂せず、飽くまで本番は選挙当日という姿勢を見せる。

「前期の活動で俺達の名前を記憶してる層が多いだけだ。他の候補者の活動次第でこの数字は変動しうる……」

「そう、ですね。油断は禁物です」

白銀の態度に引っ張られ、石上と千花の緩んだ表情が引き締まる。

しかし、その中で――

（いやもう勝つただろ！強すぎてビビるわ！何もしなくても良くないか？選挙活動せずとも勝てるだろ！）

白銀という男は外殻とは全く真逆の事を考えていた。アンケートの、事前予想の数字を鵜呑みにして完全に油断しきっていた。

先程の台詞は一体どの口から出てきたのやら。

「なーに油断しきった顔してんだよ白銀」

「っ!?!そ、総司か」

内心を言い当てられた白銀は慌てて振り返る。そこに立っていたのは、にやにやと悪戯気な笑みを浮かべて白銀を見る総司。

「何言ってるんですか総司君？御行君は油断なんてないですよ」

「そうです。さつき僕らに注意してくれたばかりなんですから。ね」

「あ、ああ勿論だ。油断なんてしてないぞ？」

「ふーん…」

千花と石上が白銀を擁護し、白銀がそれに続くも総司の表情は変わらない。それどころか白銀を見る目が細まり、浮かべる笑みが更に深まった様にさえ見えた。

白銀は悟る。これは完全にバレていると。色々とサボろうとしていた本心が悟られていると。

「あつ、次点に来てるのは一年の子なんです。伊井野ミコちゃん」

「伊井野、ミコ…!?!」

千花が少し屈んで新聞を覗き、白銀の次に得票率の高い人物の名前を読み上げる。すると、その名前を聞いた石上の顔色が一変した。

「…うわ、マジか。あいつ、立候補してたのか…」

「知ってる奴なのか？」

「ええ、まあ。僕でも知ってる、一年の間では有名人ですよ」

伊井野ミコ。千花と白銀は知らない様子だが、総司はその名前を知っていた。

高等裁判所裁判官を親に持ち、自身も風紀委員に属す。精励恪勤、品行方正を地でいく優等生。入学以来、学年一位をキープし続ける秀才だ。

「ほら、あそこでビラ配りしているのがそうですよ。何なら実際に話してみます？」

石上が白銀の背後の窓を指差しながら言う。その指の先に視線を向けると、窓の外で女子生徒二人と男子生徒一人がビラ配りを行っていた。

あの女子二人の内どちらかが伊井野ミコと見て間違いないだろう。

「ふむ…。石上、頼めるか」

「了解です」

白銀は伊井野ミコと実際に話してみるという選択をする。

四人は一階へと降りて外に出て、ビラ配りを続ける三人組に歩み寄る。

「…ちよつといい？」

一瞬躊躇ってから、石上は三人の中で一番背が小さい女子生徒に話し掛けた。その女子生徒は一度石上の方に目を向け、冷めた視線となる。

「何の用？見ての通り私は忙しいの。不良に構ってる時間はないんだけど」

「不良…。いや、用があるのは僕じゃない。僕はただの顔繋ぎだ」

「君が伊井野ミコか？」

ぞんざいにあしらっていた石上への態度はどこへやら。白銀が話しかけると、その女子生徒、伊井野ミコはスツ、と白銀の方へと向き、背筋を伸ばして白銀を見上げる。

「はい。初めまして、でしょうか。白銀前会長」

「前…」

礼儀はしっかりしている様だが、言いたい事はばつさりと言い切る性格らしい。白銀の顔がやや引き攣っている。

「…？」

白銀と伊井野が舌戦を繰り広げる中、総司はふとその二人から視線を外す。

視線を向けたのは、二人の舌戦を他所にビラ配りを続ける男子生徒だった。

彼も伊井野を応援する一人なのだろうか。懸命にビラ配りを続けるその姿はそうとしか見えないのだが。

「…」

ビラ配りを続ける男子生徒が総司に気付く。そして一度手を止め、体を総司の方に向けると人の良さそうな笑みを浮かべてお辞儀をした。

数秒下げ続けた頭を上げ、再び男子生徒はビラ配りを再開する。

(あいつ…、どこかで…)

その姿を総司は未だに見続けていた。どうもどこかで会った気がしてならないのだ。しかし考えてもそれがどこなのか、そして本当に会った事があるのかも思い出せない。

仕方なくその場で思い出すのは諦めて、総司は白銀達の方に意識を戻した。

「くつくつ、なかなか弁の立つ小娘だ…。だがどんなに立派な理想を抱いていようと所詮は理想!」

「投票日が楽しみですねえ…。現実の厳しさを思い知る事になるでしょう」

「…なあなあ、何でこいつら三流悪役みたいな台詞吐いてんの?」

「理想なき思想に、意味なんてないのに…」

「こつちの方が完全に良い事言ってる!」

知らない間に白銀と石上が三流悪人に成り果てていた。伊井野がとても主人公っぽくなっていた。そしていつもはボケ役の千花がツッコミ役と化していた。

「ごめんね? 御行君、伊井野さんの事をだいぶ意識してるみたいで…」

「藤原先輩…! それに…」

二人の前に出て、申し訳なさそうに伊井野に謝罪する千花。いつもは逆の立場なのに、今は二人より常識人に見える。

千花からの謝罪を受けた伊井野は千花の顔を見上げ、そして総司の方を見た。

「あの…、藤原先輩と四宮先輩にお願いします!」

「?」

「へ?」

緊張した面持ちで口を開いた伊井野は、こう続けた。

「私が生徒会長になった暁には、二人に生徒会に入ってほしいんです! 特に藤原先輩には、副会長につ!」

「え? ええええええええええええ!!?」

「なにiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!?」

お願いを受けた総司や千花よりも、白銀と石上の方が驚いていた。「待て待て待て！総司はともかく、よりもよつて何で藤原なんだ!」「そうですよ！この人の事知ってたら絶対出てこない台詞ですから！」

「二人ともー、ぶつとばしますよー?」

遠慮なしに伊井野目掛けて千花へ失礼極まりない台詞を吐く二人に、千花が額に青筋を立てながら問い掛ける。

「ちよつとそこのマトモそうな人！これは止めた方が良いんじゃないか!?!」

「いえ。藤原先輩が副会長に相応しいのは論理的に見て当然でしょう?」

「え、え!?!論理的つて何だっけ!」

千花の怒りの台詞も何のその、白銀は伊井野の傍らに立つメガネを掛けた女子生徒に伊井野を止めるよう促す。

が、ダメ。伊井野と同じくこの女子生徒も論理的とは何なのかを解っていないかった。

「総司、頼む！お前も協力してくれ！このままじゃ学校がダメになる！」

「え、めんどいんだけど」

「総司先輩！良いんですか!?!藤原先輩が副会長になったらどうなるか、総司先輩だって想像つくでしょう!?!」

「…まあ、それは確かに」

「あの、二人とも？失礼つて言葉を知ってますか?」

「常識を知らない藤原（先輩）には聞かれたくない!」

「…うわああああああん！そうじくうううううん!」

「あー、よしよし」

白銀と石上の容赦ない口撃を喰らい、HPがゼロとなった千花は総司に泣きつく。これを千花にされるのは二度目。

慣れた様子で千花の頭を撫でる総司は、千花を泣かした事への説教を伊井野から受ける二人の姿を眺める。

もう、完全に混沌^{カオス}な状態だった。

その後、場が落ち着いてから白銀と伊井野は選挙で文句なしの決着をつけようと言合い合いその場はお開きとなった。彼らの言合い合いに付き合わされた結果、すっかり日も暮れてしまった。

「四宮先輩」

玄関へ行くのに一番近い階段を降りている時だった。背後から話し掛けられたのは。

「お前…、さっきの」

「竹田晴敏といいます。以後お見知り置きを」

振り返った先、階段の上に立っていたのは先程伊井野達が掲げる公約が書かれたビラを配っていた男子生徒だった。

竹田、と名乗ったその男子生徒の顔を見上げ、顔と名前を照合して再びどこかで会った事がないか思い返す。

しかし、いくら考えても同じだった。総司は竹田という男と会ったという記憶を思い出せなかった。

「そうか。それで、竹田君。俺に何の用かな？」

「いえ、用という程では。ただ、ご忠告をと思ひまして」

「忠告？」

竹田の言っている言葉の意味が図りきれず、聞き返すと竹田は笑顔のまま頷いた。

「どういう事だ」

「おや。まさかまだ見られていませんか？マスメディア部が掲載したアンケート結果を」

当然それは総司も見た。白銀がぶつちぎりでトップだった、そのアンケート結果を。

「…なるほど、それで忠告、か」

「やはりお気付きになられてましたか。さすが四宮次期当主、その慧

眼は見事なものだ」

竹田の返答で、総司は竹田が口にした忠告の意味を悟る。

マスメディア部が行ったアンケート、確かに白銀がぶつちぎりでの候補者を差し置きトップに立っていた。

しかし、その詳細に目を向ければ、白銀に僅かな暗雲が立ち込めているという事が確かにそこには書かれていた。

アンケート結果は得票率だけでなく、得た票の学年別割合もグラフで掲載されていた。白銀は特に二年生からの得票が多く、同学年からの人望の厚さが窺える結果となった。

だが一方で、他学年、一年と三年の得票率が次点である伊井野よりも劣っていたのだ。

今回行われたアンケートに答えたのは高等部の全生徒の中でたった11%。これが更に人数が膨れ上がる選挙本番だったらどうなっていたか。

「白銀前会長、随分余裕そうに見えましたね」

人の良さそうな笑顔が僅かに黒く歪む。

一度顔を合わせた時から引つ掛かってはいた。どうやら、こっちがこの男の本性らしい。

しかし竹田の言う通りである。アンケートでは白銀と伊井野の間に大きく差が出来たが、これからの活動次第でどうなるかは解らない。

まして、白銀には混院という一つの不安要素がある。あの伊井野の性格上、そこを利用するという事はあまり好みそうではないが、この男なら平然とそこを突いてくるだろう。

「それで？何故それを俺に言う？」

ここで一つ気になる事が出てくる。この話を何故総司にするかという事だ。

伊井野を裏切り、白銀陣営に塩を送りたいのなら総司ではなく直接白銀に、またはすでに白銀の応援演説を務めると公言しているかぐやや白銀の選挙活動に協力している千花や石上にすべきだ。

それを、何故総司にこの話をしたのか。

「おや、白銀先輩は四宮先輩の派閥とお聞きしましたが？」

「…何の話だ？」

「違うのですか？」

「初耳だ」

「そうですか。なら噂はデマだったという事ですね。ですが…、この噂は僕だけでなく、広く伝わってますよ？」

「…」

「もし白銀先輩が敗北すれば、それは四宮先輩が敗北したと噂を信じる方達は見なすでしょう。そして、その出来事は大きな衝撃となり、一気に周囲へ知れ渡る」

かなり無理矢理な理論ではあるが、あり得ないと笑い飛ばす事も出来ない。事実、総司は嘘が真実として周囲に知れ渡り、傷付いた人物を知っている。

もし白銀が選挙に敗北すれば、その再現となる可能性は確かにあるだろう。

「それで？まだ俺に忠告する理由を聞いてないが？」

「ああ、すみません…。では、単刀直入に。…つまらないんですよ」

色々と話してくれたが、結局総司に忠告をしに来たその理由に触れていない。何故、白銀達にはなく総司の所に来たのか。

その返答は、全く予想外なものだった。総司は目を見開き、珍しく驚きを露にする。

「ええ、このまま貴方が介入しなければ我々の勝利は大きく近付くでしょう。でも、それじゃ面白くない！つまらない！そんなんじや僕達は満足出来ないんですよ！」

「…」

「貴方のプライドを粉々にしたい！伸びた鼻をへし折ってやりたい！このまま勝つてはそれが成し得ないでしょう!？」

何とも歪んだ笑みだった。あの伊井野がこの男を味方として見ている事が信じられないほどに。

だが伊井野達の前では上手く隠しているのだろう。彼女も、悪意にはかなり敏感な方だろうに。それを誤魔化しきる事が出来るとは。

「…楽しそうな所悪いが、お前らじゃ白銀には勝てないよ」

「…確かに伊井野の公約は少々強引な所があります。人前に立つのが苦手なのも弱点だ。ですが「そうじゃない」

だが、それでも、総司は自分が手を出すまでもないと判断する。大体これで選挙に手を出せば、竹田に踊らされたようで癪だ。

総司は竹田の台詞を遮って続ける。

「お前じゃ白銀達の前に立ち塞がるのは荷が重い」

「…」
白けた総司の視線が、初めて竹田が笑顔以外で浮かべた表情を捉える。

「…ほう、楽しみですよ。いや、感謝します。もしこれで僕達が勝てば…、貴方はさぞ屈辱でしょうねえ…?」

「安心しろ。そんな未来はない」

総司は憤怒にまみれる竹田の顔を一瞥してから、そう言い残して歩き出す。

「本当に楽しみですよ…。選挙後の貴方の顔が…」

総司はその言葉に返事も返さない。ただ黙ったまま、階段を降りていくのだった。

「…プライドが高そうな奴だ」

玄関へと降り、靴を履き替える最中、総司は呟いた。

あの竹田という生徒の事だ。一体何の恨みを買ったのかは知らないが、かなり総司を敵視しているようだった。

(いや、あれは敵視というより愉悦、というべきか。気に入らねえ) まるでその視線は、新しいおもちゃを見るようだった。気持ち悪い、不快な視線だった。あんな目を見るのは総司でも初めてだった。そして、かなりプライドが高そうにも見えた。あの程度の挑発で簡単に激昂した。能力自体は高そうだが、欲望に忠実で自分を抑制する

事が出来ない。

あれでは、白銀との対決の前に――

「総司様」

「…早坂」

校門前で総司は背後から呼び止められた。今日は随分背後から呼び止められる日だ、と思いつつ振り返る。

そこに立っていたのは早坂だった。早坂が何故か不安げに、総司をじつと見つめていた。

「…聞いてたのか」

「…」

総司はすぐに悟る。聞けば、早坂はすぐに頷いた。

先程の竹田との会話を早坂は聞いていたらしい。

「かぐや様に報せましょう。そしてすぐに対策を」

「いや、必要ない。それにそれでかぐやに変に負担がかかったらどうする」

「しかし…!」

「安心しろ、早坂」

正直、早坂がここまで焦っている事がちよっぴり嬉しかったりもする。何故なら、総司の事を思っただけで焦っているのだから。

しかし、早坂の心配は全くの杞憂だ。

「あれにそんな大それた対策はいらない。むしろ、その方が良いとすら俺は思ってる」

「…どういう意味ですか?」

「それは言えない」

早坂の頬が僅かにムツ、と膨れる。

「総司様。貴方の口の固い所は美点と思っただけですが、行き過ぎると欠点になりますよ?」

「良く言うだろ? 敵を騙すにはまず味方からって。だから早坂でも言えない」

「…総司様」

「言えない」

食い下がり続ける早坂に、あしらい続ける総司。このままでは早坂との会話を誰かに聞かれてしまうと考え、総司は校門へと歩き出す。

「総司様」

「何回聞かれたって答えは変わらないぞ」

「…総司様のアホ」

「あ？今何て言った？」

突如総司への口撃にシフトした早坂に反応する総司。

端から見れば二人の痴話喧嘩にしか見えないやり取りは、外で待たせている迎えの車に乗ってからも続き、数十分後にかぐやがやって来るまで続いたのだった。

伊井野ミコは地雷を踏む

朝、いつも通りの時刻に起き、いつも通りの時刻に朝食を食べ、いつも通りの時刻に身支度をして外に出るといふパターン化したルーティンを終えた総司は屋敷の前でかぐやと合流する。

今日はかぐやの方が先に準備を終わらせていた様だ。かぐやの傍らにはまだメイド服姿の早坂が立っている。

「…ねえ、総司?」

「ん?」

すでに朝食時にかぐやとの挨拶は済ませている。今更挨拶をする必要はなく、総司は車に乗り込もうとして、かぐやに呼び止められた。

「昨日からずっと早坂の機嫌が悪いのだけど、何かしたの?」

「…」

かぐやにそう問われた総司はちらりと横目で早坂の様子を見遣った。

早坂は背筋を伸ばした体勢のまま目を瞑り、総司の方を見ようともしない。

「…いや、何も」

「ええ。かぐや様、総司様は私に何もしていませんよ」

「…そ、そう」

かぐやが苦笑する。そして視線を総司に向ける。

その視線は、何も言わずとも早坂に何をしたらと雄弁に総司に問いかけていた。

「本当になにもしてないんだって。それよりかぐや、早く行くぞ」

「…ええ」

総司はかぐやに車に乗るよう促してから先に乗り込む。かぐやも一度早坂の方に視線を向けてから、総司に続いて車に乗り込んだ。

二人が車に乗ってから運転手が扉を閉め、運転席に乗り込む。

車はすぐに発進した。その直後、総司は横目で早坂を一瞥した。

視線が合った。鋭い早坂の視線が総司に確かに向けられていたのだ。

交わった視線はすぐに解かれ、早坂の姿は見えなくなる。車は別邸の敷地内から抜け、公道に向けて住宅街の道を走る。

「…総司。本当に早坂に何したのよ」

「いや、本当に何もしてない」

かぐやは総司が早坂に何かしたと思っっているようだがそれは違う。確かに早坂が怒っているのは総司に原因があるが、それは総司に何かされたからではない。

むしろその逆、総司が何もしないから早坂は怒っているのだ。

「あんなに怒ってる早坂は久しぶりに見たわよ」

「…そうだな」

「何があったのかは知らないけれど、後で謝りなさいよ」

「…ああ」

「やっぱり何かしたんじゃない」

「だから何もしてねえつつの。…何もしてないから謝るんだよ」

「?何を言ってるの?」

総司が謝りたいと思っっている事は早坂に何も言わずに居続けた事であり、何かしたからではない。おかしい話だが、何もしなかった事を謝らなければならぬのだ。

さすがのかぐやも言っっている意味が解らず首を傾げている。そんなかぐやに総司は小さく笑みを漏らしてから、掌をかぐやの頭に乗せてぐりぐりと回した。

「ち、ちよつと！髪が崩れるからやめなさい！」

「うりうりうりうり」

「総司っ！」

かぐやが本格的に怒り出す前に手を離して解放する。かぐやは全

く、とため息を吐きながら鞆から手鏡を取り出して崩れた髪型を整える。

そうして穏やかな一時は過ぎ、車はもうすぐ校門に着くという所まで来ていたのだった。

昼休み。別に何事もなく午前中の授業を熟した総司は、弁当を持って廊下を歩いていた。今日は天気が良く、残暑が抜けた秋の穏やかな暖かさがある気候となっている。

だから昼食は外で食べようと考えたのだ。まあそれは建前だが。(お節介が仲直りさせようと手を出してくる前に逃げましょうと)

何だかんだかぐやは身内にはお節介を焼きたがる。まああんな空気の早坂と一緒にいるのは辛いというのもあるだろうが、もしかしたら総司と早坂を仲直りさせようと策を弄する可能性があった。

しかし総司は何があっても今の方針を変えるつもりはない。そしてそうなれば、早坂も総司への怒りは収まらない。どんな策でも、せめて選挙が終わるまでは仲直りなど出来ないだろう。

「……ここで良いか」

秀知院学園の敷地は広大だ。何年も通っている総司ですらまだ足を踏み入れた事のない場所はいくつもある。

何故こんな所に、と聞きたくなる程に孤立したベンチに腰を下ろし、包みを広げて弁当の蓋を開ける。中には高級食材をふんだんに使った、高級料理のオンパレード。もう少し庶民的な物を食べたいなんて贅沢を思いながらも料理に箸を付ける。

柔らかく涼しい風が吹く。木から落ちた銀杏が総司の目の前で舞う。

実に風情のある光景だ。この瞬間、今いる場所が総司のお気に入りとなったのと言うまでもない。

「四宮先輩……?」

不意に呼ばれたのは弁当の残りが少なくなってきた時だった。声がした方に振り向くと、そこにはたくさんの紙を抱えた二人の女子生徒が総司の方を向いて立っていた。

「…伊井野さん」

「っ…、私の名前、覚えててくれてるんですね」

「まあな。あんな印象的な出会いしたらそりや覚えるさ」

二人の女子生徒が総司の方へと歩み寄ってくる。その内の一人、背の小さい方の生徒である伊井野と言葉を交わす。

「それと、えつと…?」

「ああ、私は自己紹介がまだでしたね。大仏こばちです」

「大仏、さん…」

伊井野の隣にいるメガネをかけた女子生徒。初めて伊井野と対面した時も一緒にビラ配りをしていた生徒の名前はかなり聞き覚えのあるものだった。

秀知院が誇る四大難題美女。その一人に確か、大仏こばちという名前の生徒がいたはずだ。はず、なのだが、何というか…、メガネが特徴的というか、正直四大美女に数えられているとはどうも見えない。いや、別にそういう事に興味がある訳ではないが。

「四宮先輩はどうしてこんな所に?」

「?見ての通り、弁当食いに来てる」

「…一人ですか?」

「一緒に弁当食う友達いないけど何か?」

首を傾げる伊井野に意地悪してみたら、簡単にあたふたと慌て出す。何とも素直な子だ。

(やっば、そういう風には見えないよな…)

総司は一瞬、目を細めて謝りながら手を振る伊井野を見つめる。

どこからどう見ても、あの竹田と手を組む様な人物には見えない。

「ビラ配りか?」

「あ、はい。これからこばちゃんと一緒に行くこうとしました」

「…もう一人の男子生徒は?あの時は一緒だっただろ?」

「竹田君は…、今回は別行動してます」

二人はビラ配りに行くらしいが、もう一人、竹田の姿が見当たらなかった。竹田について問うと、伊井野は表情を曇らせながらそう答えた。

「…そうか」

どうやら総司が想定した通りの状況になっているらしい。これならやはり総司が介入せずとも――

(いや、これは純粹に生徒会長を目指す奴の前で考える事じゃないな) そこで思考をシャットする。伊井野ミコは純粹に秀知院を良くするために生徒会長を志す一人の生徒だ。竹田の様な奴とは違う。

総司が考えていた事は、伊井野の前で考えるべきではない事だ。

「…あの、四宮先輩」

「ん？」

弁当に入った天ぷらを口に入れた時、伊井野が口を開いた。体の前でビラの束を握り締め、緊張の面持ちで伊井野は続ける。

「あの時は返事を貰えなかったので、改めてお願いします。…私が当選したら、生徒会に入ってもらえませんか？」

「…」

それは、初めて伊井野と対面した時にも言われた事だった。あの時は何だかんだと色々あって返事が出来ず終いだっただけ。

だが、総司の中でもうその質問への答えは決まっていた。口の中の物を飲み込んでから口を開く。

「悪いが、それは出来ない」

伊井野の表情が泣きそうに歪む。大仏から感じる視線が厳しくなる。

「…どうして、ですか？」

「単純に生徒会の仕事を熟す時間がない。たまに仕事を手伝いに行くのは白銀の時にやれてたけど、生徒会に入るとな。幽霊部員みたいになるぞ」

「…なるほど。四宮の次期当主として、やる事がたくさんあるという事ですね？」

「そういう事」

総司の返答に伊井野は首を傾げたが、大仏は理解したようだ。そして大仏の解説に伊井野も納得したようで、目を見開いてこくこくと頷いた。

「そうですか…、そうですね。良く考えたら白銀前会長の時も生徒会には入ってなかった。理由も少し考えたら解るのに、私…、ごめんなさいっ」

伊井野が腰を折ってお辞儀する。彼女の髪が揺れ、勢い良くお辞儀したせいでビラの束から何枚も紙が地面に溢れ落ちた。

「あああああああつ!!」

「あーもう、ミコちゃん何してるの」

慌てて地面に落ちた紙を集める伊井野と、ため息を吐きながらそれを手伝う大仏。

総司は空になった弁当に蓋をしてから包みの上に置き、ベンチの近くにまで落ちてきたビラを集める。

「ほら」

「あ、ありがとうございます」

落ちたビラを集め終え、伊井野に渡す。

ここで、総司は一つ気になった事を聞いてみる事にした。

「なあ。何で俺を生徒会に誘ったんだ？」

ただの純粋な疑問。というより、確認というべきか。

これまでの総司の成績や功績を評価しての事なのか、それとも。

「…私、藤原先輩と同じくらい、四宮先輩にも憧れてるんです」

返ってきたのは喜んで良いのか微妙な返答だった。いや、藤原もカタログスペック上は相当な天才といっても良いのだが。

「中等部で生徒会長になって、それも一年であんな堂々として…。私もあんな風になれたらって、そうしたら私の理想を実現できるのにつて」

「…」

伊井野の口から続いて出てきた返答は、これまた総司にとっては微妙な気分になるものだった。

かつて、中等部で生徒会長をやった頃の記憶は今の総司にとつて良い記憶ではない。それに憧れたと言われても、総司は素直に喜ぶ事など出来なかった。

「…四宮先輩、私も聞いて良いですか？」

「…何だ」

「どうしてあれ以降、生徒会長をやらなかったんですか？」

伊井野がしたいという問いは、何となく想像がついていた。そして、実際に伊井野の口から出た問いかけは総司の想像通りのものだった。

「選挙で落ちたのならまだしも、立候補もしてません。それに四宮の後継者に決まったのは中等部を卒業してからだったはずです。なのに——」

「一つ言っておく」

伊井野の声がだんだんヒートアップする中、総司はその台詞を遮る形で口を開いた。

今の総司の声は先程までの穏和なものではなく、迫力に満ち、刺すような緊張感すら感じさせるものだった。

「伊井野。あの頃の俺に憧れるのは止めておけ。良い会長になりたいのなら」

「え…」

か細い声が伊井野の口から漏れたのが消えた。それを無視して、総司は弁当箱を包みに包んで持ち、伊井野と大仏の横を素通りする。

「ど…どういう意味ですか！あの時の四宮先輩に憧れるなって…！」

背後から伊井野の大声が聞こえてきた。総司は足を止め、しかし振り返る事なく答える。

「そのままの意味だ。あの頃の俺に憧れてる様だと、絶対に失敗するぞ」

「そ、そんな事はありません！四宮先輩は堂々としてとても立派で、他の役員がだらしなくてもそれを一人で「伊井野」っ…」

ただ忠告するだけのつもりだった。だが、さすがにその言葉だけは聞き流せなかった。

振り返り、伊井野を横目で視線を送る。

「あの時、本当にだらしなかつたのは俺だ。そこだけは間違えるな」

「あ…、あ…」

「…」

これ以上言う事は何もない。総司はもう振り返る事はなく立ち去っていく。

もう、背後から呼び止める声はしなかった。校舎に入り、廊下を歩き、少ししてからだった。

総司は階段の下、廊下からを歩く生徒からは見えない物陰に入っていた。

「…あああああああゝつ」

そして、頭を抱えてしやがみ込んだ。

（何やってんの？いや本当に何やってんだよ俺!?!は?!あれもう完全に八つ当たりじゃん!マジで屑じゃん!うっわマジで恥ずかしい!）

思い出すのは先程の伊井野との会話。伊井野はあの頃の生徒会について何も知る由はないのだ。総司自身、あの頃の生徒会は何も知らない者から見たらそう見えるのも仕方ないと解っていたはずなのに。

それなのに、伊井野の言葉に腹を立て、八つ当たりをしてしまった。

（ごめん!マジでごめん伊井野さん!…気持ちの整理がいたら絶対に謝るから!）

何としても伊井野に謝らなくてはならない。しかし今は出来そうにない。そんな精神状態じゃない。恥ずかしすぎて伊井野の前に立つ事すら出来ない。

総司はその後、気持ちの整理をすべくその場でひたすら少し前の自分の馬鹿っぷりに悶え続けたのだ。

一応落ち着くまで、昼休みが終わるギリギリまで時間が掛かったのはまた別の話。

早坂愛は吐露する

生徒会選挙当日。選挙に立候補したのは三人。白銀御行、伊井野ミコ、本郷勇人。その内の本郷勇人だけ突如謎の辞退を公言したため、選挙は白銀と伊井野の直接対決という事になる。

直前予想ではやはり白銀有利との結果が出ていた。しかしその差は決して油断できるものではなく、伊井野陣営の努力がどれ程のものが窺えた。

今、総司は同クラスの生徒達と列を組んで講堂へと移動中である。教室から講堂まではそれなりに遠く、一度吹き抜けとなった通路を通らなければならない。

「…」

その吹き抜けの通路を歩く途中だった。総司は視界の端であるものを捉えて足を止める。直後、背後で歩く生徒が総司の背中にぶつかってしまう。

「ああ、すまん」

「いや、良いけど…。早く行けよ」

ぶつかった生徒に謝罪すると、その生徒は早く前に進むよう促す。しかし総司はその場に立ち止まったまま、明後日の方向を見続ける。

「お、おい四宮？」

総司は歩き出す。しかし講堂の方ではなく、先程まで総司が視線を向けていた方へと。

背後から自身を呼び止める声には答えず、総司は建物の影へと踏み

入れる。

講堂へと移動する生徒達の話し声が聞こえなくなる。だいぶ生徒の列から離れてしまったか。総司のクラスの生徒達は皆講堂に並べられたパイプ椅子に座っている頃だろう。そして担任が総司がいないう事に気付き、探し始めただろうか。

「あああああああつ！ふざけんなつ！糞がっ!!」

高等部の生徒は講堂に移動している。それを考えれば今、総司がいる場所に他の生徒などいるはずがない。

だが総司の耳は確かに他の人物の怒鳴り声と何かが弾き飛ばされた様な音を捉えた。総司は迷わず、その声と音が聞こえてきた方へと足を向ける。

「何が最後は私の声を届けたいだ！何がここまで協力してくれた事には感謝してるだ！調子に乗りやがって…、あそこまで白銀と競れたのが自分の力とでも思ってるのか!」

校舎の壁を何度も何度も蹴り付けながら、怒りに満ちた表情を浮かべた男子生徒がそこにはいた。

明らかに荒れ、普通の生徒なら近寄ろうともしないだろうその光景を見た総司は躊躇いなくその生徒に歩み寄る。

「随分荒れてるじゃないか。こんな所で何をしている?」

「あぁ?!…:っ」

笑みを携えて総司は声を掛ける。その生徒は声に反応、総司の方へと振り向いて、目を見開いた。

「講堂に行かなくて良いのか?伊井野の応援はどうした、竹田?」

「:四宮先輩こそ、こんな所でどうしたんです?もしかして迷子ですか?講堂はあちらですよ?」

「なに、凄い形相でお前が講堂から離れていくからな。慰めてやろうと思ってたんだが」

「:…」

苛立たしげに総司を睨み付ける生徒、竹田。竹田の視線を受け、総司はただ静かに笑みを浮かべる。

「伊井野にフラれでもしたか?」

「…解ってたんですか。最初から、こうなると」

総司の問いに問いで返す竹田。礼を欠いた返答だが総司は気にしない。むしろ、そう返してくるだろうと総司には解っていた。竹田は答えないだろうと踏んだ上で質問したのだから。

「ああ。伊井野は悪意に敏感だつて解つたからな。いずれお前とは決別するだろうと想像はついた」

「…」

総司の返答を聞いて小さく舌を打つ竹田。

「お前が失敗した原因は簡単だ。伊井野を見誤つた事、ただそれだけだ」

「…良く言う。僕を挑発して怒らせて、伊井野に悟らせやすくしたのはどこの誰ですか」

「挑発？いつ俺がそんな事をした？」

竹田の皮肉を演技じみた素振りで見聞き流す。まあ、実際竹田の言う通りではあるのだが。あの階段での会話でさりげなく竹田を挑発したのは竹田のカモフラージュに穴を開けるため。

あの段階で竹田の腹の内をすでに伊井野が感じ取っていた可能性もあったが、そうでない可能性も十分にあった。だからプライドの高い竹田を挑発し、次の日以降のカモフラージュに影響が出る様にした。

先程竹田には言わなかったが、これもまた竹田の敗因である。自身の感情を制御できない。だから、伊井野に悪意を読まれ、決別された。ただこれでは総司が介入したかどうか、微妙なラインである。それでも竹田の言葉には根拠がない。あの時の会話も、総司が挑発してないと言い張ればそこまでという程度のレベルである。

「…初めから、貴方の掌の上だったという事ですか」

「さてな、俺にはさっぱりだ」

自嘲の笑みを浮かべながら言う竹田に簡単に返事を返した総司は直後、竹田を真顔で見据えて口を開いた。

「一つ聞かせろ。こんな事をした理由は何だ？」

「…どういう事です？」

「あの時お前は僕達と言った。伊井野と大仏の二人ではないな。お前の背後にいるのは誰だ」

『ええ、このまま貴方が介入しなければ我々の勝利は大きく近付くでしょう。でも、それじゃ面白くない！つまらない！そんなんじや僕達は満足出来ないですよ！』

あの時の会話の中で竹田は確かにそう言った。僕、ではなく僕達、と。ならば今回の策謀は竹田個人の意思だけではなく他の誰かの意思も混ざっているという事になる。

それが誰なのか、総司は竹田に問い掛けたのだが。

「さて、何の事やら」

先程の総司への意趣返しのもりなのか、演技じみた素振りで竹田はそう言い返した。

「確かに僕達は選挙に勝とうとしましたが、それ以外には特に何も思っていないですよ？まあ、僕は四宮先輩に恥をかかせたいという内心がありました」

「竹田」

「そんな目で見られてもお答えできる事は何もありませんよ？だって、本当に何も無いんですから」

これは先程の竹田と同じ、根拠のない問い掛けである。答え手が違おうと言い張ればもうどうしようもない。

総司に出来る事は、この場ではもうなかった。

「それでは四宮先輩、僕はこれで」

「…」

「次は、貴方と直接対峙したいものです。今回の様な代理戦争の形ではなく、ね」

総司に出来る事はないと解っていたのだろう、竹田は笑みを浮かべて総司にそう言い残し、去っていった。講堂とは逆の方向へ。

演説はもう見る気もないのだろう。竹田の姿は見えなくなり、その場に総司だけが残される。

「…竹田晴敏、ね」

最後に一度、竹田の名前を頭に刻む様に口にしてから、総司も竹田

が去っていった方とは逆、講堂の方へと歩き出す。

先程まで総司と竹田がいたこの場には二人が醸し出した冷たい空気だけが残され、やがて吹いた風に流されていった。

演説は予定時間を三十分以上オーバーしてようやく終了した。それ程までに二人の立候補者による討論は白熱したのだ。

途中、伊井野が坊主フエチを暴走させるというツツコミ所を残したが、中々に投票結果が楽しみに思わせる素晴らしい討論を二人は見せてくれた。

そして、選挙の結果が掲示板に張り出された。並んだ二つの名前。当選を表す赤い花が飾られていたのは――白銀御行の名前の上だった。

「…僅差やん」

総司は演説の途中からしか見ていなかったため、討論の全貌は聞いていなかった。だからそこで何が起こっていたのかもその途中からしか知らないのだが、直前予想の結果よりも明らかに両者の票の差は縮まっていた。

まさか竹田が何かしたのか？いや、それもあるだろうが一番は伊井野の公約が多く生徒に響いたという事なのだろう。

…信じられないが。強制坊主が何で響いたのかさっぱり解らないが。

しかし何はともあれ選挙は白銀の勝利で終わった。これで二期連続で白銀が生徒会長を勤めるという事になる。

それはそれとして、総司にはこれからやらなければならない事があった。掲示板の前に集う生徒の輪から離れ、総司は辺りを歩き回る。

夕焼けの日差しに照らされる外を歩き回りながら、キョロキョロと視線を巡らせる。

そして総司が探していた人物は、保健室の窓の前で何故か身を潜めて室内を窺っていた。

総司は足音を殺して静かに近付き、その人物の背後にまで来てからそつと声を掛ける。

「何してんだ?」

「っ!!?」
「っ!!?」
総司様でしたか。驚かさないでください

意識が室内に向いていたその人は突然総司に声を掛けられ相当驚いたのだろう、勢い良く振り向いたその顔は驚きましたかと思いい切り書かれていた。

「…くくっ」

「何が可笑しいんですか」

「く、く…いや、早坂のあんな驚き方は久し振りに見たな、と」

笑みを漏らす総司を不満あげな顔で睨む早坂。そんな早坂を見て総司は更に笑みを漏らした。そしてそんな総司を見て更に早坂が苛立つという小さなループ。

「悪い悪い、怒るなよ」

「…」

全く悪びれない様子で謝る総司を睨み続ける早坂。

総司はそんな早坂に先程とは違う穏やかな笑みを浮かべてから、口を開いた。

「勝ったな、白銀」

「…はい」

「悪かったな、何も言えないでいて」

「…本当、ですよ」

早坂の声が一瞬震えたのを総司は聞き逃さなかった。早坂の方へと振り向き、総司を見上げる視線と対面する。

「ずつと、不安だったんですからね。信じて待とうにも、総司様が何を考えてるのかさっぱり解らないし…」

「…ああ」

「ずつと…、不安、だったんですから」

早坂の瞳が揺れた。外に零れる事はなかったが、そこに見えたのは

涙だと悟るのは難しくなかった。

「総司様は何も言ってくれない。でも私はその事を誰にも話せない。本当、総司様は最低です」

「…悪い」

「少しは言い返してくださいよ、バカ」

言いながら、総司の胸を軽く拳で叩く早坂。それに続いてもう一発、二発と、力こそ弱いものの総司の中に響く早坂の拳は何度も、何度も胸に打ち付けられた。

「…埋め合わせはしてもらいますからね」

「…えっと、さ。これで埋め合わせ何回しなきゃいけないんだっけ？」

「大丈夫です。一度で良いですよ？その一度でこれまでに貯まった埋め合わせカウンター分の埋め合わせをしてもらいますから」

「埋め合わせカウンターって何だよ…」

訳の解らない単語が早坂の口から出て苦笑いを浮かべる総司。一方の早坂は先程までの苦い表情はどこへやら、満面の笑顔を浮かべて総司を見上げていた。

(これまで全部の埋め合わせ、ね)

正直覚えてないが、多分荷物持ち程度では早坂の気が収まらないくらいにはその埋め合わせカウンターとやらは貯まっているのだろう。「さて、何をしてもらいましょうか」なんて楽しげに考えている早坂を見ればそんな事は簡単に想像つく。

「…まあ、いいか」

「何か言いましたか？」

「いや、何も」

かなり苦勞する未来が見えるが、総司の中でそれに対する不満という感情は特になかった。

これまで早坂には相当迷惑を掛けてきた。早坂の気が済むまで、自分が出来る範囲の事なら何でもするつもりだ。

それに——早坂の笑顔を見るのは、嫌いじゃない。

白銀圭は交換したい

「…いない、か」

高等部の校舎の三階、二年の教室が並ぶ廊下を歩き、教室を覗き、目的の人の姿がない事を確認して落胆のため息を吐く一人の少女。

「むう…。やっぱり連絡先の交換は先に済ませとくべきだったかな…。そしたら事前に約束取り付けられたのに…」

不満げに呟くその少女の名は白銀圭。中等部の生徒である彼女が何故高等部の校舎にいるのか、それはある人物に会いたかったからである。

『白銀さんも読んでみなよ！』

『すっごく泣けるんだから！』

そんな風にクラスの友人に薦められ、少女漫画を借りたのが昨日の事。初めは友人が大袈裟に言っているだけだと高を括っていたのだが、実際に読んでみると泣けて泣けて仕方なかった。

号泣する圭にバカにするような言動をした兄にも貸してやれば、圭以上に号泣していた。男女問わず泣かせる程の感動作を読んだ結果、今の圭は恋をしたい欲が限界突破していた。

これまで、圭は何度か兄に橋渡しをしてもらい、総司に勉強を見て貰う約束をした事がある。その機会全て、勉強は生徒会室で行われ、二人きりになる事は出来なかった。

だが、今日は違う。兄に橋渡しをしてもらえばまた生徒会室での勉強になるのは目に見えている。なら、圭自身が電撃訪問すれば良いのではとテンションMAXだった昨日の圭は思い付いたのだ。

そして今、圭は高等部の校舎に一人で来ているのだが…。

(…視線が)

高等部の校舎に来るのは当然初めてではない。しかし、生徒が集まる教室前の廊下とこれまで圭が通ってきた生徒会室への廊下と、雰囲気はまるで違っていた。

まず生徒の数が違う。まだ帰りのホームルームが終わったばかり、生徒もかなり残っている。

そして何より先程から圭が気にしている視線だ。

それも当然だろう、高等部二年の教室の前を中等部生が歩いているのだ。気になるのは仕方ないというものだ。

だが圭にとっては恐怖でしかない。相手も学生とはいえ年上の視線が無遠慮に注がれるのだ。中学生である圭が恐怖を感じるのも仕方ないというものだ。

「圭さん？」

しかしここで圭に救いの手が差し伸べられる。聞き覚えのある、そして圭が望んでいたその声に振り返ると、そこにはきよとんと目を丸くして圭を見る一人の男子生徒。

「総司、さん」

「あれ？今日って勉強の約束してたっけ？」

震える声でその名前を口にする圭。一方の男子生徒、総司はあれ？ん？と繰り返しながら何やら思い返している様子。

「い、いえ…。約束はしてません」

「あ、そう？なら、藤原にでも用があるのか？それとも白銀に？」

「いえ！その…」

言いたい事はある。しかしはつきりとそれを口にする事が出来ない。理由は、単純に恥ずかしいからだ。

これまでは約束をして、その日に勉強を見てもらうという流れだった。今日はその約束の過程をすっ飛ばそうとしている。

要するに、がっついてる様に見られないかと圭は心配しているのだ。

「圭さん？」

何も言わないまま俯いてしまった圭に総司が声を掛ける。このままでは総司に不信感を与えてしまう。そう感じた瞬間、圭は勢い良く顔を上げた。

「総司さん！この後時間ありますか!？」

「え？…うん、大丈夫だけど」

圭がそう問い掛けると、総司は鞆から黒い手帳を取り出し、開いたページに書かれているのだろう今日の予定を見直してから答えた。

「それなら…、その…」

「？」

「っ、これから勉強見てもらえませんか？生徒会室でじゃなく、どこかで二人で！」

勇気を振り絞り、圭は総司に誘いをかけたのだった。

校門を出てから歩いて十分程歩いた所にあるファミレス。今、総司はそこにやって来ていた。一人ではなく二人で。勉強を見てほしいと頼んできた圭と一緒に。

いつもは圭の勉強を見る際は生徒会室で行っていたのだが、今日は圭が生徒会室とは違う場所で勉強がしたいと言ったからこの場に来ている。

まあ、顔見知りが多くいる生徒会室では集中しづらいのだろう。と、総司は考えていた。全く以て見当違いの予想だが。

「…総司さんも勉強するんですね」

圭の勉強を見るという事だが、ボックス席で圭の対面に座る総司もまた集中して勉強に臨んでいた。何しろ全国模試がいよいよ明後日に迫っている。そのため総司も圭と一緒にペンを走らせていたのだが、圭の呟きを耳にして一旦手を止める。

「そりゃ俺だって勉強しなきゃ成績キープできないしな」

「でも、凄く真剣に…」

「まあ、本気でやらなきゃ負けちゃうから」

「…四条さん、でしたっけ。毎回総司さんと一位を争っている人」

四条帝の名前は他校の中等部にまで広まっているらしい。まあ、同学年かつ全国模試でも毎回上位に食い込む白銀の妹だからというのもあるのかもしれないが。

「ああ。蟹のためにも勝たなきゃならん」

「え？か、蟹？」

「ああ。負けた方が蟹を奢る約束をしてるんだ。負けられない」

「…」

黙り込む圭。手を止めない総司。

「四宮家と四条家って仲悪いって話を聞いてたんですけど…、そんな事ないんですか？」

圭がそう言った直後、圭に解らない所を質問された時以外は止まる事がなかった総司の手が止まった。

数秒後、手元を見下ろしていた総司の顔が上がり、圭と正面から視線を合わせる。

「聞かなかつた事にしてくれ」

「え？」

「さっきの話。知られたら色々と面倒な事になる」

勉強に集中するあまり注意が散漫になってしまった。それにしただってまさかこんな初歩的なミスを冒すとは。

これでさっきの話は嘘だと言っても圭は信じられないだろう。それなら口止めさせた方がまだ確実な方だ。あの白銀の妹だ。それに何より何度か会って話して、この少女は信用できる人物だと総司の勘は語る。

「えっと…、はい。誰にも言いません」

理由も語られず、良く解らないといった顔をする圭だが、総司の言葉に頷いてくれた。

これで約束は成立した。圭は白銀と似て約束を違える事はしない性格だ。とりあえず、少し警戒は必要だろうが帝との交流の件が外部に漏れる事はなくなった。

「あの、総司さん。さっきの話を誰にも言わない代わりと言ってはなりませんけど…」

「ん？」

「私と、連絡先を交換してくれませんか？」

勝手に警戒を薄くしてうつかり口から漏らしてしまったのは総司の方だ。交換条件には基本何でも応じようとは思っていたのだが。

「…そういえばまだ圭さんのアドレス知らないのか。でも、そんなので良いのか？何なら交換条件とは別にして交換しても良いけど」

「そ、そんなの良いんです！総司さんと連絡先の交換が出来るだけで満足です！」

やや興奮気味に、頬を紅潮させて言う圭の勢いにこれ以上何も言えず、総司は鞆から自分のスマホを取り出して圭と連絡先の交換を行う。

「…ありがとうございます」

「別にお礼言う程の事じゃないだろう？」

「言う程の事なんです」

何がそんなに嬉しいのか。圭はスマホを胸に握りしめ、満面の笑顔を浮かべた。

総司と連絡先を交換した、たったそれだけの事で。

「…そろそろ帰らないとだな」

「あ…、もうこんな時間…」

窓を見る。空が茜色一色に燃え上がって、かと思えば良く見れば空の一部が夜の色に染まり始めている。

圭と連絡先を交換する際にスマホで見た時刻が、二人にそろそろ帰るべきだと教えていた。

「…迎えを呼んだけど、圭さんも乗ってくか？」

「え？良いんですか？」

「勿論。女の子の夜道の一人歩きは危険だぞ」

白銀家はここから歩いていくとかなり掛かる。家に着く頃には辺りはかなり暗くなっているだろう。

さすがにそんな時間帯に女の子を、それも中学生を一人で歩かせる

のは少し心配だ。そのため、赤木に連絡して迎えを呼んだ後、圭を車に乗っていかないかと誘った。

「…お願い、します」

「ああ。…さて、ここに着くまで大体二十分くらいか。最後に何か聞きたい所とかあるか？」

「あつ、それなら…」

誘いを受けた圭に、総司は恐らく今日は最後になるだろう圭への授業を始める。

総司の説明を圭が理解し、授業が終わったのは丁度迎えの車が到着したと赤木から連絡が入るのと同じ時だった。

「♪♪♪」

「圭ちゃん、随分ご機嫌だな。鼻歌なんか歌っちゃって」

夕食が終わったりリビングには台所からカチャカチャと食器と食器がぶつかる音と水が流れる音が聞こえてくる。

そしてその音と一緒に白銀の声が聞こえてくる。

「そんなのお兄いには関係ないでしょ?…♪」

「…本当に良い事があったみたいだな」

そして圭の口から出るのは普段通りの兄を突き放すきつい言葉。しかし、その声音は普段よりも柔らかく、圭の機嫌が相当に良い事を物語っていた。

「男か」

「え?」

「なっ!?!」

そんな中で響いたのは短く低い男の声。圭と白銀が振り向いた先には、腕を組んで圭を見る男。

「な、何言ってるんだ!圭ちゃんにはまだそういうのは早い!」

「おいおい御行、今時中学生でも経験済みは珍しくないんだぞ?圭に

彼氏がいたっておかしくないだろ？まあ妹に先越されるのが嫌な気持ちは解るが」

「やめろおおおおおおおおおおおおお！」

両手が洗剤の泡に濡れているのも構わず頭を抱える白銀。そんな哀れな息子の姿をコップ片手に眺める父親。

なかなか愉快的な光景だがこんなのは白銀家では日常茶飯事である。圭は二人を見回し、ため息を吐いてから立ち上がった。

「け、圭ちゃん！まさか親父の言う通りじゃないよな!？」

「…」

いつもこの兄は圭を子供扱いし、圭はそれを鬱陶しく思ってきた。今回もいつもの圭なら「過干渉うぎ」の一言で切り捨てていた事だろう。

しかし、今日の圭はご機嫌MAXだった。

「別に彼氏じゃないよ。…まだ、ね」

「そ、そうか…、それならよかつ…え、圭ちゃん？最後何て言った？」
たとえばご機嫌MAXとはいえこれ以上話すつもりはなかった。兄の食い下がる声は無視して兄と共同である自室に籠る圭。

リビングの方から声が聞こえてくる。

「…圭も成長したな。よし、相手がどんな男か俺が見極めてこよ」余計な事しなくていいから！」

自室に籠り始めて数秒後、圭は再びリビングに引き戻される羽目になった。

リビングに戻ってきた圭にこれ幸いとエプロン姿のままの兄が問い詰める。圭はそれを聞き流す。

次第にしつこい兄に対して苛立ちが募っていき、いよいよご機嫌MAX状態の圭でも我慢の限界が訪れそうになったその時だった。

「っー」

誰かの着信音が鳴り響く。圭はその音を聞いた瞬間、自身のスマホを操作し始める。アプリを起動し、ホーム画面に映される《新着メッセージ一件》の文字と、そのメッセージを送ってきた人物のユーザー名。

圭はそのメッセージをタップし、全文を表示させる。

『言い忘れてたけど、解らない所があったらここでも聞いていいからな。返事が遅くなるかもしれないし、何なら気付かない事もあるかもしれないけどそれは広い心で許してくれm（　　）m』

「……♪♪♪」

「け、圭ちゃん？」

「こりや重症だな」

自分の妹、或いは娘の姿を見て男二人は悟る。

今の着信音は妹の、或いは娘の想い人からのメッセージだったのだと。

そして、たった一通のメッセージだけで機嫌が急上昇した妹、或いは娘の姿を見て二人は思う。

べた惚れにも程がある、と。

四糸帝は愚痴りたい

全国統一模擬試験。それは大学受験を視野に入れた学生達がこぞって参加する戦争である。たかが学力テスト等とバカにする事なかれ。試験を受けた生徒の成績を詳細に分析し、同じ試験を受けた生徒の中でどの位置だったか、順位すら出されてしまう、恐ろしい行事なのだ。

そんな全国模試が今日、行われる。ここ、秀知院学園も例外ではない。

この学園では生徒の約半数が内部進学を希望するため希望者限定という形で行われる。そしてその希望者の中に、四宮総司の名前もあつた。

普段過ごしている教室とはまた別のクラスの教室で、いつも使っている机の位置とはまた別の机で。総司は席につき、ただその時を待つ。

机の上にはシャープペンと替えの芯、消しゴム、そして初めに行われる科目、数学ⅠAの問題用紙と解答用紙だけが置かれている。

その他には何もない、当然机の中にも物は入っていない。残りの所持品は机の足下の鞆の中だ。

集中力を研ぎ澄ます。静まり返った教室には時計の針が動く音しかしない。

「っ」
チャイムが鳴る。瞬間、総司のみならず教室にいる、いや全ての模試参加者の手が動き出した。

「いやー、旨い。超旨い。何で他人の金で食う蟹ってこうも格別な

んだろうな、帝？」

「…ホント、何でだろうな。俺も知りてえんだけど、総司？」

「あーそうか、お前は知りたくても無理なのか。今日の支払いお前持ちだもんなあつはっはっは！」

それはそれは機嫌良く高らかに笑う総司と、それはそれは不機嫌そうに今にも舌打ちしそうな様子の帝は、とある飲食店の個室にいた。

二人はテーブルを挟んで対面して座り、二人の間のテーブルにはたくさんの蟹料理が並んでいた。

「旨いーいやー旨いー！これが勝利の味ってやつなのかな？」

「…次は潰す」

「んー？聞こえんなあ〜♪」

帝を煽る煽る。しかしそれも仕方ない。何故なら、総司は今回の勝負にて勝ちを収めたのだから。たった三点の差でも、勝ちも勝ちだ。

「くそっ…、あの糞教師がリスニングのやり直しさえしてくれてれば…！」

「言い訳は見苦しいぞ帝君。素直に敗けを認めたまえ」

「がああああああうぜえええええええええ!!」

模試から十日後、結果が二人の手元に届いた。

800点満点中、総司が797点、帝が794点という凄まじいレベルの高さの争いを繰り広げた。の、だが、帝の方では何やらトラブルがあったらしい。

何でも英語のリスニング中、途中でノイズが奔ったらしい。その事に教師は気付かずスルー。帝はその音声に関わる大問の最後の問題を落としてしまったのだ。配点が4点の問題を。

「いやあー、負け犬の遠吠えを聞くのはきもちーなー」

「つぶす、ぜったいにつぎのしけんはつぶす、つぶす、つぶす…」

「あつはっはっは」

帝の怨念が籠った呟きも総司の耳には届いても心には届かない。それは楽しそうに笑いながら総司は蟹飯を堪能する。

「まあ負けたのは仕方ない。いや、あのごみ教師は後々左遷させるけど、それはまあいい」

「…ま、お前が家でどんな扱いされたかは想像つくよ」

「そうなんだよ！マジふざけんなよあいつら！総司との勝ち負けだけじゃなく点数見ろよ！てめえら全員俺と同じ年で同じ様な模試受けてこれより上の点数とれんのかってんだよああ!?!」

拳を握った両手でテーブルをダンダン叩きながら声を荒げる帝。帝は総司とは違って本邸に住んでいるため、周囲の音がほぼ直接届く。

だから、四宮に負けた帝を嘲る声はさぞ神経を逆撫でしている事だろう。

「マジでいつまで根に持ってんだ直接被害に遭ってない奴等がねちねちねちねちよお！てかお前らが憎くて憎くて仕方ない四宮に追い付くために今まで何してきたと思ってるんだ！てめえらも同じ穴の貉だろうがよお!?!」

「いつも以上に荒れてんなあ、帝」

「それを自分達は四宮とは違うとか本気で思い込みやがって…！なにが四宮に負ける程度では四条は任せられんな、だ！今からてめえら全員蹴落としてやろうか!?!」

「お、マジでやんなら協力するぞ?」

帝が言った事を想像し、少し総司がワクワクしたのは内緒。

「…マジで屑だよあいつら。同じ屑でも自分や自分の先人がしてきた事を自覚してる分、お前の親父の方がマジにすら見える」

「そりやどうも」

四宮と分離してからの四条はそれは物凄い勢いで成長した。しかし、その成長によってどれだけのものを食い潰してきたか。

あれだけの成長スピード、決して純粋な手だけで成し得るものではない。何かを犠牲にし、何かを壊し、何かを害し続けなければ不可能だ。

帝が口にした同じ穴の貉、とはそういう事である。四宮もまた、何かを食い潰しながら成長してきた家だ。それを、四条は癌と呼ぶ。なら、四宮と同じ事をした四条は一体何なのか。

「…早く何とかしないとやべえわ。この前の親父達との会話でマジで

思った」

「…さつきも言ったが、行動起こすのなら協力するからな。勿論、対価はたんまり貰うけど」

「解ってるよ。あの時の約束くらい覚えてるっつもの」

怒鳴った事で少しは落ち着いたか、帝は冷静さを取り戻し、総司と軽口を叩き合う。

あの時の約束。それは二人が初めて対面した時に交わした約束。

『もうやだこんな糞家系』

『ならお前が跡継ぎになつて変えればいいじゃん』

目から鱗が出た気分だった。あの頃の総司は次期後継者として選ばれておらず、それどころかまだ黄光が跡継ぎとして有力視されていた頃だった。

ああ、確かにそれなら四宮を変えられるかもしれない。そう思った総司は帝と約束したのだ。自分達がそれぞれの家で上に立ち、体系を変え、両家の仲を修正してやる、と。

そして約束から一年後、総司は雁庵から次期当主と指名されたのだ。

「…それでよ、一つ考えたんだよ」

「あ？」

互いが互いと交わした約束を思い出し、決意を改めて固めた。その直後、帝が口を開いた。

「こんな事まだ無理だし、時間が掛かるのも解ってる。相手の気持ちだつて考えなきやならんし、難しいだろうけどさ。周りに俺達の意志を見せつけるにはこれが手っ取り早いと思う」

「何だよ」

前置きが長い帝に早く本題を言えと促す総司。

そして帝は、自身が抱いた考えを口にす。

「

それを聞いた総司は目を見開き、少しの間固まったまま返事を返せなかった。

屋敷の前に止まった車を降り、短い階段を上って扉を開ける。辺りはまだ明るい、太陽は沈みかけ、その周りは茜色に染まっている。昼過ぎに帝と会ってからすっかり話し込んでしまった。試験の結果を言い合い、その結果によって起こる両家での扱いを話し、愚痴られ、そして――

「…さて、俺はどうすべきなのかね」

足を止め、ふと呟く。脳裏に過るのは帝の台詞。

自分達がどうしていくか、その意志表示にはもってこいの考えといえた。しかし、しかしだ。総司にとっては複雑であると言わざるを得なかった。

「お帰りなさいませ、総司様」

思考の渦に吞まれながら廊下を歩いていると、自身の左側、すぐ傍から声がした。驚きそちらを向くと、見えたのは綺麗な金髪。視線を僅かに下ろすと総司の顔を見上げる早坂の顔。

「ああ、ただいま」

「どうかされましたか？何か考え込んでた様でしたが」

「いや、別に何でもないさ」

「声を掛けるまで、こんな近くににいる私に気付かないのにそれはちよつと信じられないのですが」

「…」

ですよね、と内心で呟く総司。さすがに何でもないで納得してくれるとは思っていない。しかし、かといつてあの話の内容を伝える訳にもいかない。

「…何でもないって事にしておいてくれないか？」

「…」

早坂のじと目が総司の胸に刺さる。何しろつい先々週だ、総司と早坂がちよつとした仲違いを起こしたのは。

それからまだそう経っていないのにこの男、また早坂に隠し事をしようとしている。

早坂のじと目はまだ続く。さすがにダメか、と。早坂には話しておくべきなのか、と総司が考え出したその時だった。早坂が大きくため息を吐いた。

「解りましたよ。そういう事にしておいてあげます」

「え?…あれ?」

「何ですか。話したくなっただんですか?」

「いや、そうじゃないけど…」

あまりにもあつさりと、早坂は引いた。引いてくれるにしても、もっとうガミガミとあれやこれや言われると思っていた総司。

「どうせ聞いたって話してくれないのでしょうか?」

「…」

「どれだけ食い下がっても話してくれないのでしょうか?」

「…」

「…この総司」

「おい、聞こえたぞ。人の名前を勝手に悪口にすんな」

いや、早坂には言おうという考えは浮かんでいたのだが、以前の経緯もあつて早坂の台詞を黙って聞いていた総司だった。

しかしさすがに最後の一言は看過できなかった。

「お前ちよつと最近俺への当たり強すぎない?」

「総司様。胸に手を当てて最近の、正確には二週間程前の私への扱いを思い出してください」

「その節は大変申し訳ありませんでした」

素早い総司の掌返し。芸術点もかなり高い見事な掌返しだった。

そんな美しい掌返しも早坂には響かない。

「ああそうだ。その話で思い出しましたよ」

「何が?」

「埋め合わせですよ。してもらおうと言いましたよね?」

確かに早坂は総司に埋め合わせをしてもらおうと言った。それも埋め合わせカウンターの埋め合わせを一度に一気にしてもらおう、と。

埋め合わせカウンターがどれだけ貯まってるのか総司には解らないが、きつとそれ相応の埋め合わせを早坂は希望するのだろう。

それこそ、自分の一日の仕事を全部やってほしいとか、勿論それは例えだが、それくらいのきつい――

「明日、私の仕事がオフなんです。なので明日一日私を甘やかしてください」

「…は？」

事を課されるのだろうと総司は思っていた。だが、早坂の口から出てきたのは思わぬ言葉だった。

「甘やかす、って…どうやって？」

「それは総司様が考えてください」

甘やかすと言われても曖昧で具体的にどうすれば良いか解らない。なので早速、早坂に聞いてみたのだが聞き流されてしまった。

「いや考えてと言われても…」

「考えてください」

「…」

食い下がってみるも、駄目。

甘やかす。本当にどうすれば良いのか。頭を撫でまくれば甘やかすという事になるのだろうか？

(…違う気がする)

確かにそれも甘やかしてると言えば甘やかしてのだろうが、早坂が求めているのは違う気がする。いや、早坂が求めている甘やかし方がどんなのか総司にはさっぱりなのだが。

「それじゃあ、楽しみにしてますね。明日、総司様に甘やかされるのを」

「あ、おい…」

につこり、と総司に笑いかけてこの場から去っていく早坂。

結局、どうすれば良いのだろうか。

「…かぐやにでも聞いてみるか」

初めは赤木に聞こうと考えが出たのだが、女子の事は女子に聞いた方が良い気がする。いや、良いに決まってるだろう。

という事で、今日は珍しく総司がかぐやを呼び出し作戦会議をする事と相成るのだった。

「総司、貴方が好きなパンツってどんなの？」

「変態、帰れ」

相成る、はずだった。作戦会議は一分も経たず終わりを迎えたのだった。

変態と言われて憤慨するかぐやと何で怒られてるのか解らない総司、二人の口論だけで会話は終わり、答えが出ぬまま総司は明日を迎える事となる。

早坂愛は甘やかされたい

総司と約束を交わしてから一夜が明け、早坂はいつも通りの時間に目を覚ました。

現在の時刻は五時。今日は仕事がオフのため、目覚ましもいつもより遅くセットしていたのだが、それよりも早く目覚めてしまった。

体を起こして枕元の棚、目覚まし時計の隣に置いてあった眼鏡をとって掛ける。

普段はコンタクトを着けている早坂だが、メイクを行うまでは眼鏡で代用している。

ベッドから降りた早坂はまずシャワールームに向かう。服を脱いでシャワーを浴び、寝起きの頭を切り替える。

シャワーからあがってからは両目にコンタクトを入れてメイク、髪型のセット、そしていつものメイド服を身につけメイド、早坂愛を完成させる。

「結局、いつもと変わらないルーティンしちゃったし…」

時計を見ながら呟く。現在の時刻は六時、早坂が出勤する時刻である。今日はオフなのだが、何だかんだ身に付いた習慣はそう簡単には抜けない。

それに、結局どの道早坂はメイド服に着替えていた。いくらオフの日とはいえ、総司の前に、それもこの屋敷内で普段着姿など見せられる筈もない。それはメイドである早坂にとって死活問題である。

さて、早く起き過ぎた挙げ句、いつもの調子で着替えまで済ませてしまった早坂だが単刀直入に言おう。

する事がない。

総司との約束があるが、こんな時間から部屋まで赴く訳にもいかない。せめて、総司とかぐやの朝食が済み、落ち着いてからでないかと、早坂は考えている。

なら、それまでどうやって時間を潰すかだが――
「動画でも見ようかな…」

部屋にある机、その上にあるパソコンに視線を向けながら早坂はポツリと呟く。早坂にも趣味はある。特に机の上のパソコンは早坂の自作、趣味の一つによる物である。

中々の自慢の逸品で、完成してすぐ、総司に報告し出来栄を確かめさせる程だった。

早坂はスカートにシワが入らないよう注意しながら椅子に腰を下ろし、パソコンの電源を入れる。

パソコンの機動音が鳴り、液晶画面に光が灯る。パソコンの立ち上げ作業を終えた早坂は早速インターネットへと潜り、某大手動画サイトへとアクセス。『プレス機』という単語で動画検索を始める。

時間は過ぎていく。すでに見た事のある動画も見返しながら、早坂は退屈する事なく時間を潰す。プレス機が物を潰す所の何が面白いのかはさっぱり解らないが、とにかく早坂は楽しんで：なんていなかった。ぶつちやけ、早坂は動画の内容が全く頭の中に入ってきてなかった。

早坂はすでに同じ動画をこの朝の間に三十回は見ている。初めに再生した動画を何度もループ再生し、ずっとその動画を見続けているのだ。

しかし、今の早坂はその動画には全く意識が行っていないかった。もうすぐ、総司の所に行つて、甘やかされる。その事が早坂の頭をぐるぐると巡っているのだ。

(どんな事をしてくれるんだろう…。頭を撫でたりとか…。膝枕とか？…抱き締めてくれたり、はさすがに無いか)

こんな調子である。早坂愛は、完全に乙女思考に囚われていた。総司にあれやこれやされる自分を想像し、気分を高揚させていた。

別に意識してやっている訳ではない。ただじつとしていると早坂の頭が勝手に想像を始めるのである。

「っ」

ふと気付けばもうすぐ九時になろうとしていた。早坂は部屋の扉をノックする音で我を取り戻す。画面には未だにループ再生されるプレス機の動画。

「はい」

部屋の外まで聞こえるように声を張る。向こうからの返事はすぐに返ってきた。

「赤木です。総司様がお呼びです」

「…」

来た。早坂自ら出向く前に向こうから呼ばれるとは。早坂は掌を胸に当て、一度深呼吸をしてからすぐに行きます、と返事をし、パソコンを落とす作業を行う。

シャットダウンをクリックしてから、早坂はパソコンの電源が落ちる所を見届ける事もなく立ち上がり、一度服にシワがない事を確認してから扉を開ける。

「おはようございます」

「はい。おはようございます」

扉の前に立っていた赤木と挨拶を交わし、どちらからともなく歩き出す。

会話はない。ただ、目的地である総司の部屋に向けて歩くのみ。何度か廊下を曲がり、かぐやの部屋の前の廊下を通りすぎ、もうすぐ総司の部屋に着くという所。

そこで、赤木が口を開いた。

「主人に代わって私が謝罪します。申し訳ありません」

「はっ」

突然何を、と聞き返す暇もない。部屋の前で立ち止まった赤木は扉をノックして中にいる総司に呼び掛ける。

中から入れ、と総司の声がする。すると赤木は早坂に道を譲る。ここからは一人で行け、という事だろうか。

「…」

しかしそれは早坂にとって望む所である。総司に甘やかされている所を赤木に見られたくなんかない。

早坂は赤木の前を横切り、扉の前で立ち止まる。

「早坂です。入ります」

そう口にし、中から総司の返事の音がしてから早坂は扉を開ける。

「…は？」

そこには、圧倒的光景が広がっていた。

壁は金紙と銀紙で装飾され、きらびやかに輝いている。そして部屋の中央には豪華なキングチェアが。総司はその傍らに姿勢を正して立っていた。

「…総司様。これは？」

「お座りください」

「え？」

「お座りください」

まさか、座れというのか、そこに。その椅子に。

「…」

とにかく、総司に付き合っただけでやる事にする。早坂は黙ってキングチェアに腰を下ろす。

「早坂様」

「っ…」

そう呼ばれた瞬間、背筋にぞくりと寒気がした。

いや、本当にこれは何だ。何を考えているんだ。早坂にはさっぱり解らない。

「総司様、その口調は止めてください」

「…早坂さ「気持ち悪いです」…」

容赦なくぶつた切られた総司は、ショックを受けた顔をした。どういう考えの下でやっているのかは知らないが、総司なりに約束について考えたという事だけはこの短い間でも早坂に伝わった。総司の表情に心が痛まない訳でもない。

しかし、気持ち悪いものは気持ち悪いのだ。仕方がない。

「…早坂、朝食まだなんだよな？」

早坂の切実な気持ちに通じたのか、総司の口調が戻る。その事にホッと安堵しながら、早坂は総司の言葉で浮かんだ疑問を口にする。「そうですか…、何故それを？」

「今日、お前の代わりに俺とかぐやに朝食を届けてくれた人が言っていた。早坂が朝食を摂りに来ないって」

確かに早坂は未だに朝食を摂っていない。しかしそれを何で総司が知っているのか。そう思い聞いてみると、どうやら早坂の部下が総司とかぐやに漏らしていたらしい。

「様子を見に行きたいけど折角の休みでまだ寝てるのかもしれないって、どうするか悩んでたから赤木に呼びに行くついでに様子を見てこいって言つといたんだ」

なるほど、赤木がわざわざ呼びに来たのはそういう経緯があったからか、と納得する早坂。何故なら、ただ早坂を部屋に呼びつけるのなら、メールでも電話でも使えば良かったのだから。総司の早坂は互いの連絡先を知り合っている。それをせず、人を使ったのはそういう理由があったからだだったらしい。

「じゃあ、ここで待つてろ。ちよつとお前の朝飯貰いに行つてくる」「え？そのくらい、自分で…」

「今日はお前を甘やかす日なんだ。俺にやらせろ」

やはり、この謎待遇はあの自分を甘やかしてという約束について考えた結果らしい。

その事は素直に嬉しい。きっと、総司は真剣にどうやって自分を甘やかそうか考えてくれたのだから。

しかし、しかしだ。

(そうじゃない)

早坂の心の底からの一言。これが全てである。

早坂は部屋を出ていく総司を見届けながら、思う。

これは、自分から動かなければ自分の望む甘やかし方をしてくれないかもしれない、と。

早坂が総司の部屋で呆れている一方、総司はちやっかり楽しんでいった。

これまでの人生で、総司はずっと誰かから尽くされてきた。誰かに尽くす事のない人生を送ってきたのだ。

それが今日、総司は人生で初めて他人に尽くすという行為をしている。それが、尽くされる方にとつては本意ではなかったとしても。総司は初めての経験に心踊らせていた。

この屋敷に、いや、四宮に仕える使用人の朝食は質素なものである。使用人達は毎日とある部屋に置かれたサンドイッチを一つ食べる。使用人の朝食はこれだけである。

(…早坂にもっと良いものを食べさせるべきだったか)

総司の頭にそんな考えが過る。しかしもう後の祭り…いや、まだ遅くはない。確かに朝はもういつものサンドイッチ一つを持っていくしかないが、まだ今日の食事は昼と夜、二度もある。まだチャンスはあるのだ。

総司は早坂の分のサンドイッチが載った皿を貰い、自分の部屋へと戻る。この皿を貰う際に一悶着あったのだがそこは割愛する。どうせ自分の部屋に戻るのだから、皿を持つのが持つまいが労力は変わらないというのに、少ししつこすぎるのだ。

「早坂ー。持ってきたぞー」

もう先程までの敬語は欠片も出すつもりはなかった。気持ち悪いとまで言われて続けようと思う者がいるはずもない。総司はマゾではない。

早坂はキングチェアに座ったままだった。総司は早坂の前まで歩み寄り、早坂にサンドイッチを差し出す。

「…おい？」

しかし早坂はサンドイッチを受け取ろうとしない。それどころか

何故か総司を見上げながら口を開けている。

「…早坂。お前まさか…」

「はい、そのまさかです」

「…」

やれというのか、あれを。想いが通じ合ったカップルにしか許されないあの儀式を。

「…」

「…」

早坂に引く気はないらしい。なるほど、やってやろうじゃないか。ここで逃げては四宮の名が廃る。

総司は手に握ったサンドイッチを早坂の口元に持っていく。

「はむ」

早坂の唇がサンドイッチを挟む。口の中で噛み、一口分を咀嚼する。

「…」

何か変な気分だ。別に誰かが食事する所など、かぐやで見慣れてるというのに。自分も食事しながらと、誰かに食事をさせている、そんなシチュエーションの違いだけでこうも気分は変わるものなのか。

「あー…」

「…」

「はむ」

一口分を飲み込んだ早坂がもう一口を要求。総司は黙ってサンドイッチを近付ける。早坂がサンドイッチを啜える。

その繰り返しだが二度行われると、総司の手にあるサンドイッチはだいぶ小さくなっていった。もう一口で早坂の食事は終わる。

「…」

なおも早坂はあーんを要求する。総司は一瞬躊躇ってから、先程までと同じ様にサンドイッチを差し出す。

「あむっ」

「っ!!?」

早坂がサンドイッチを口の中に入れる。それを掴む総司の指ごと。

「何だ、これは」

「膝枕です。総司様はご存知ではありませんでしたか？」

「バカにすんな。そうじゃなくて、何で膝枕なんて求めるんだよ」

「これが私にとつて、これ以上ない甘やかされ方だからです」

何故に膝枕。総司には全く解らないが、早坂自身にそう言われてしまふと何も言い返せない。ただ甘んじて、膝枕を続けるしかない。

「…おい、早坂？」

「…」

「…おい」

以降、総司も早坂も黙ったまま時間が過ぎ、いつしか早坂の方から寝息と思われる規則正しい呼吸の音がしだす。

まさか、と思いい声を掛ける総司。返ってくるのは呼吸の音だけ。

「…つたく。疲れてんなら自分の部屋で寝ろよな」

ふつ、と呆れの籠った笑みを浮かべながら呟いた総司は右手を早坂の頭に乗せて優しく動かす。

ずっと、この細かい体で早坂は屋敷中の使用人達を纏めてきた。自分の仕事だけでも相当疲労が溜まるだろうに。それを表に出さず、何年も、何年も。

早坂は知らない。そんな自分の姿が、総司を変える切っ掛けになった事など。総司が、早坂にどれだけ感謝の念を抱いているかなど。

「…お疲れ、早坂」

早坂は知らない。このお疲れという言葉に込められたもう一つの意味を。早坂を労うだけじゃない。もう一つ、総司がこの言葉に込めた思いを。

それを知らないまま、早坂は小さく口元を緩めて笑みを浮かべたのだった。

そして、藤原千花は目を閉じた

『単刀直入に聞いわ。総司、貴方は藤原さんの事をどう思ってるの?』

昨日、かぐやに言われた言葉が脳裏に過る。

どう思う、なんて聞かれてもよく解らなかつた。ただ、良い友人だと思っっている、とだけ答えた。

現に総司は千花の事を友人だと思ってるし、千花も同じ様に自分の事を友人だと思ってるはずだ、とも答えた。

直後、かぐやの目が刺々しくなつたのは気になつたが。

「総司、くん…」

至近距離で総司を見上げている千花の頬は紅潮し、艶やかに潤んだ両瞳に吸い込まれそうになる。

今、総司と千花は校舎内のある教室に来ていた。ここにはたくさんの備品があり、この中には体育祭に使う得点板や拡声器、テントの布等が置かれている。

その他にも体育祭では使わないだろう備品も置かれているが、それには理由がある。

この教室の他にも備品が置かれた物置はちやんとある。今頃かぐやと白銀が行っているだろう体育倉庫は良い例だ。しかしこの学園で盛大に行われる行事に使う備品が倉庫一つ、教室一つで入りきるはずもない。

その場に入り切らなかつたものを置く場所、それが今、総司と千花がいる場所だ。

さて、そんな場所で何故二人がこんな雰囲気になつてくるのか。

「総司。体育祭の備品整理を手伝ってくれないか」

始まりは、そんな白銀の何気ない言葉だった。総司は今日のスケジュールを思い出し、特に白銀の頼みを断つてでも急いで熟さなくてはならない予定はないと確認してからその頼みを領いて受け入れた。先程言った通り、体育祭の備品は二ヶ所の場所に保管されており、その内の体育倉庫を白銀とかぐやが、そしてもう一つの教室を総司と千花が受け持つ事となった。

「総司君が生徒会の仕事を手伝うのって何だか久しぶりな気がしますねえ〜」

「…そういうばそうだな」

備品がしまつてある教室に向かう総司と千花。総司の隣で歩く千花がニコニコと笑いながら言う。

確かに、総司が生徒会の仕事を手伝うのは長らくなかった。前生徒会が解散してからの空白期間があったのもそうだが、新しく生徒会が発足してから今日、総司が生徒会を手伝うのは初めてだ。

「…何だか最近、総司君は私に構ってくれませんでしたからね〜」
「どういう意味だ」

何故か不貞腐れた様子の千花に苦笑いする総司。いや、確かにこうして千花と面を向け合って話すのも久しぶりな気がするが、そうだけでなく毎日メッセージでやり取りしてるはずなのだが。

「それは私とだけじゃないでしょう？圭ちゃんもだつて同じ事してるじゃないですかっ」

「いや、そうだけど…。何で俺が圭さんと連絡先を交換した事知ってるの？」

「圭ちゃんが教えてくれたんですよ！」

そのままモノログ通りの台詞を千花に言った総司。直後、火山が噴火したかの如く、千花が大きな声で総司に言い返した。

何で、何でそこまで怒る？首を傾げる総司とぷいつ、とそっぽを向く千花。

先程までの機嫌の良さはどこへやら、すっかりへそを曲げてしまつたらしい。

本当にどうしてこうなったのか総司には理解できない。近頃余り千花と実際に会って話せなかったのも圭と連絡先を交換した事も、何故千花の機嫌急降下に繋がるのかさっぱり解らない。

「っーん」

「…」

っーん、なんて口に出して言っちゃっている。実はそんなに機嫌悪くなつてなんかないんじゃないか、なんて考えが浮かんだ時には総司と千花は目的の教室の前まで来ていた。

総司が扉に掛けられた南京錠を外し、取っ手に手をかけて横に引く。

中はかなり埃臭く、久しく誰の手も入らなかつた事が窺えた。

早速動き出す二人。ここにある体育祭に使う備品の点検と、すぐに取り出せるように場所の移動を行う。

白銀から貰つたりリストを確かめながら、点検と移動を済ませた備品にはチェックを入れて作業は順調に進んでいた。

「…無いですね」

「無いな」

途中までは。というより、最後の一つまでは。

「体育倉庫の方にあるんですかね？」

「あり得るな。拡声器なんて気軽に持ち出せるし、文化祭の準備の邪魔になつて移動させたのかもしれない」

そう、リストにはこの教室にあると書かれている拡声器がどれだけ探しても見つからないのだ。おかげで拡声器を探すだけで十五分も時間を使つてしまった。

とにかく一度、白銀かかぐやと連絡を取りたい。そして、体育倉庫

に拡声器があればこれで作業終了、なければまた探し直しだ。どちらにしても白銀かかぐやに連絡を取らなければ始まらない。

だが――

「…出ない」

「生徒会室に置きっぱなしにしちゃったんですね…」

通話を掛けるも通じない。白銀も、かぐやもだ。

実際千花の言う通りなのだが、二人は知らない。体育倉庫にて、かつてないほど二人のテンションが爆上がりしている事など。

「どうします?…」

「…もう一度探してみよう。見落としてる所があるかもしれない」

もう一度探し直す二人。今度は先程よりも細かく、備品と備品の間に挟まってないか、文化祭で使う備品の中に混ざってないか、しっかりと目を通していく。

「あつ…ありましたよ、総司君!…」

千花が声をあげたのは、総司が去年の文化祭で使われたと思われる衣装が入った段ボールをどこかそうとした時だった。

振り返って見ると、千花は棚の上を見上げていた。千花の視線を追いかけて総司もそこを見ると、棚の上には段ボール、そして中からはみ出た白い拡声器の持ち手の部分。

「ん…しよっ」

千花が背伸びをして腕を伸ばす。段ボールに手は触れているが、千花の身長ではそれ以上は無理らしい。

「俺がやるから、下がってろ」

「いえっ…、だいじょうぶ、ですっ…」

立ち上がり、歩み寄りながら千花に声を掛ける。しかし千花は意地になってしまったか、背伸びを続けて段ボールを下ろそうと試みる。

「あつ…」

千花の右手の指が段ボールに触れ、位置を動かす。直後、呆然と千花の口から声が漏れた。

「っ」

総司の目にはその光景がスローモーションで見えた。

棚の上を見上げる千花。その千花に向かって落下する段ボール。中に入っていたのは拡声器だけではなく、何やら金属製の物が一緒に落ちていた。

「千花っ！」

手を伸ばし、千花の左腕を掴んで引き寄せる。抵抗する事なく千花は総司の方へと引き寄せられる。

床に落下する物々がけたたましい音を立てる。二人は思わず目を瞑って身を竦める。

音が止み、ゆっくりと目を開ける。先程まで千花が立っていた場所には拡声器が、棒状の金属が散乱していた。もし、総司が間に合わなかったら。

考えるだけでゾツとする。

「千花、大丈夫か？怪我はないか？」

総司は腕の中にいる千花を見下ろしながら問い掛ける。こうして見る限りは無事そうだが、掠り傷の様な小さな怪我はあるかもしれない。

「…おい？」

「…」

しかし千花は何も答えない。総司の方を見ようとしめない。腕の中で何故か小刻みに震えているだけ。

なのでもう一度呼び掛けると、今度はゆっくりと総司の方へと振り向いた。

頬を真っ赤に染めて。

「ここでようやく総司は今の自分達の体勢を自覚する。」

先程、千花を引き寄せた総司。その千花は今、総司の右腕に抱かれている状態だ。総司の右半身に千花の温もりが、女の子の体の柔らかさが直接伝わってくる。

『単刀直入に聞いわ。総司、貴方は藤原さんの事をどう思ってるの？』
昨日、かぐやに言われた言葉が脳裏に過る。

どう思う、なんて聞かれてもよく解らなかった。ただ、良い友人だ

と思っっている、とだけ答えた。

現に総司は千花の事を友人だと思ってるし、千花も同じ様に自分の事を友人だと思ってるはずだ、とも答えた。

直後、かぐやの目が刺々しくなったのは気になったが。

「総司、くん…」

至近距離で総司を見上げている千花の頬は紅潮し、艶やかに潤んだ両瞳に吸い込まれそうになる。

いや、実際に吸い込まれているのか、千花の顔が少しずつ近付いてきてる気がする。

(待、て…。おい、これはさすがに…)

そう言ったのは内心でだけで、実際に口に出しては言えなかった。このままではどうなるか、総司にだつて解つていた。しかし止められない。

どころか、千花の体を抱く総司の右腕に力が籠る。

「っ」

直後、千花の両目が閉じた。まるで、総司から来るのを待つように。バカな、本当にそれで良いのか。千花はそれで。相手が、自分なんかで。本当に？

頭が警鐘を鳴らす。このまま流されるべきではないと。

心が叫ぶ。このまま流されてしまえと。

総司の両目もまた、ゆっくりと閉じようとしていた。

「総司先輩、藤原先輩。手伝いに来ました、よ…」

時が音を立てて凍り付いた。総司と千花と、そしてこの教室の扉を開けた石上、三人の視線が交わる。

「…」

誰も何も言えない。沈黙が流れる。

それもそうだろう。方や自分の先輩二人の情事を目撃してしまい、方や目撃されかけたのだが。

いや、成立はしていないのだが。しかしそれを石上の方が解る筈もなく。

「」

そして、石上優は目を閉じた。両瞼の上に両手を重ねるといっておまけ付きで。

「死にたいので帰ります」

「ま、待て石上！誤解だ！これは千花を助けようとしてただな！」

「そ、そうなんです石上君！総司君は私を助けてくれただけなんです！」

「…総司先輩、藤原先輩を名前でも呼ぶ様になつたんですね。…藤原先輩は僕と同じ空っぽな人間だと思つてたのに、裏切り者！」

「どういう事ですか!？」

号泣する石上、憤慨する千花、そしていつの間にか話題が逸れていく二人の会話を聞いてる事しか出来ない総司。

千花と石上の言い争いは総司が止めに入るまで延々と続いたのだった。

「結局、お二人は何をしてたんですか？」

その後、石上がそう問い掛けたのは教室の扉に南京錠を掛け、生徒会室に戻ろうとした時だった。

総司と千花の二人は石上に懇切丁寧に説明した。拡声器が見当たらず探していた事、千花が棚の上の段ボールに入った拡声器を見つけた事。千花がその段ボールを落としてしまい、総司がそこを助けた結果、あの体勢になつてしまった事。

キスしてしまいそうになつた事は伏せたが。というより、触れたくなかつた。恥ずかしすぎたから。

「へえ〜…」

石上は以降、何も言わなかつたがもしかしたら察しているかもしれない。何だかんだ石上は勘の良い男である。

「…」

「…」

本当にそれ以降何も追求してこない石上が逆に怖く、戦々恐々とする総司と千花だった。

ちなみに夜、かぐやから体育倉庫であった出来事を早坂と一緒に聞かされ苦笑いしか出来なかつたのは別の話。

そして、その様子に何かが引つ掛かつたのか、早坂に何かあつたかと問い掛けられまた焦ってしまったのも別の話である。

早坂愛は往く

それは別段いつもと変わらない日常だった。当番が割り当てられた場所の掃除を終え、帰ろうとした時だった。

「…っ！」

スマホのバイブが鳴った。すぐに収まったため、通話が掛かってきた訳ではない。いつもなら帰ってから目を通していただろう。

しかし今回は何故か、気まぐれに総司は届いたメッセージを開いていた。

メッセージの送り主は千花だった。そしてそのメッセージの内容を見て、総司は弾かれた様に駆け出した。

「かぐやー！」

いつもならノックして返事を待ってから入っている生徒会室に遠慮なしに駆け込む。室内に入ってきた総司に集まる視線を無視し、床に倒れて胸を押さえるかぐやに駆け寄る。

「かぐや！大丈夫か!？」

「そ、そうじ…？」

「…意識はある。ただ脈拍が早すぎる。…白銀！救急車は!？」

「どつくに呼んである！」

「そうか！ならAEDを持ってきてくれ！何かあった時、すぐ使える様に！」

「わ、解った！」

白銀が生徒会室を出てからAEDを持って戻ってくるまで一分も掛からなかった。そして、伊井野が呼んだという保険医も白銀が戻ってきてからすぐにやって来た。

総司と保険医が簡単にかぐやを診る。が、特に異常はない。無論、ここまでかぐやが苦しんでいるのだ、異常がないはずがないのだが。しかしこの場で出来る診察は飽くまで簡潔なもの。それでは解らない何かがかぐやの身に起きている。

「うう……くっ……」

「かぐや……っ」

苦しそうに顔を歪めるかぐやを見ている事しか出来ない。総司もまた顔を歪める。

しかしそれはかぐやの様に苦しきからではない。何も出来ない自分への不甲斐なき、怒り。ギリツ、と噛み締めた白い歯から音が鳴る。

「っ、先輩！救急車が！」

まだかぐやの意識はある。脈拍も異常な早さこそ変わらないもののしつかりある。心停止の可能性はない。大丈夫だ。

そう自分に言い聞かせながら、やってきた救急隊員と共に、ストレッチャーに乗せられたかぐやに付き添って総司は救急車へと乗り込むのだった。

救急車に乗り込んでから、総司はすぐに救急隊員にかぐやの症状を説明した。しかし、かぐやの様な症状は初めてだったようで、救急隊員達はかぐやの処置をどうするか少しの間迷っていた。

当たり前だ。かぐやに起きている症状は恐らく「頻脈性不整脈」、簡単に言えば脈拍が早い方の不整脈だ。だがこの場合、倒れる程の症状となると大抵は失神、或いは目眩と意識レベルが低下する。

だがかぐやの場合は意識はハッキリしている。総司の言葉に返事も出来る。なら、この症状は何なのか。

後になって思い返すと、もうここで答えは出ていたのだと思う。

「それは恋の病です」

その後落ち着きを見せたかぐやと遅れて病院にやって来た早坂と共に診察室に向かう。

そこで、世界の名医十選にも選ばれる程の名医は、至って冷静に、かぐやに起きた症状の名を口にした。

「…そんな名前の心臓病があるのですか？」

「いえ。ただ好きな人にドキドキする感情の事です」

「お医者様でもご冗談を仰るのですね」

「いえ。冗談ではないのです」

早坂の顔がゆっくりと下を向く。総司の頬がまるで種を口一杯に啜えたハムスターの如く膨らむ。

「でしたら何ですか!? 私は恋のドキドキで倒れて救急車で運ばれたと!?」

「はい。私も医者三十年やって初めての出来事に少し動揺しています」

「ぶふっ」

いけない、つい嘔き出してしまった。だって仕方ないだろう。あの世界的な名医が動揺した症例が恋の病とか。その上、あの異常な脈拍の早さが、白銀に対して胸をドキドキさせた結果とか。

「総司?何が面白いのかしら…?」

「いや、別に」

「何よ!言いたい事があるなら言いなさいよ!」

「…余り田沼先生に迷惑掛けるなよ」

「どういう意味よ!」

総司の言葉とは裏腹に、かぐやは何度も食い下がった。もう答えは出ているというのに。誰かに恋をされる事はあっても、誰かに恋をするなどあり得ない、そう言っつて。

しかしかぐやが何度否定しようとも真実は変わらない。学校の活動で特定の人物の事を考えると脈動が速くなる。今日、髪に付いていたゴミを白銀が取り、その際に手が頬に触れたタイミングで胸にキュンキュンとした痛みが走った。

「それはね…恋だよ」

「違っつて言っつてるでしょう!?!絶対心臓の病気です!今まで人生でここまで胸が苦しくなったのは初めてなんです!」

「じゃあ初恋なんじゃないかなあ？」

「そうです。この子、初恋なんです」

「総司は黙ってて！」

怒られた。

「かぐや様…。私、外で待ってますので…終わったら呼んでください…」

「早坂!？」

「私だつてこの病院使ってるのに…。もう来れないですよ…」

「あー、早坂。大丈夫だ、田沼先生達は気にしないさ」

「なつ、なんなのよ…」

総司は完全にこの状況を面白がっているが、早坂はそうではなかった。顔を真っ赤にし、主人の醜態を恥じまくっていた。

まあ、気持ちは解らないでもない。総司は早坂の肩をポンポンと叩いて励ます。そんな二人を見てかぐやは頭の上に疑問符を浮かべる。

何故早坂は恥ずかしがっているのか、その理由がかぐやには本気で解らないのだ。

「とにかくもつとちゃんと調べてください！」

「あー、かぐや。お前が本当に恋の病に掛かっているかどうかは置いて、別に何か重大な病気とかじゃないんだ。そうですよね？」

総司がかぐやに待ったをかけた。さすがにこれ以上、何も問題がない者に医師の時間を割かせる訳にはいかない。それに、早坂がまた恥ずかしい思いをする。

総司としては面白いから良いが、あの恥ずかしがり様からもう早坂は限界だろうと察せられる。

「ええ。診察した結果、体に欠陥は特に見当たりませんでした」

「ほら、先生もこう言ってるんだ。なら今日のところは帰ろう」

「で、でも…。あんなの私初めてだったのよ？あんなに胸が痛くて、息も出来なくなつて…」

「ですからそれは恋です。初恋です」

「…」

折角かぐやの怒りが少し収まったのに。何とか説得できそうな空

気になってたのに。先生が言い放った言葉はかぐやを硬直させた。

「…すまん、早坂。まだまだ我慢させる事になりそうだ」

「も、もうやだ…」

活火山が噴火した。どうやらまだ帰れそうにないらしい。とにかく、まだまだ恥ずかしい思いをする事になりそうな早坂に、総司は謝罪しておいた。

「ヤブよヤブ！絶対にヤブ！私が恋!?そんなのあり得ないわ!」

「世界の名医に何て事を」

「総司も総司よ！私はただ事実を言ってるだけなのに何が面白いのかしらー!」

「かぐや様が事実を言ってると思ってるから面白かったんだと思いますよ」

「早坂！貴女はどっちの味方なの!?!」

「とりあえず今回に関してはかぐや様の味方ではないのは確かです」

「早坂!?!」

かぐやは荒れていた。その後、最先端設備を駆使しての検査を行うも結局異常はなく、世界の名医がかぐやに下した診断は、恋の病だった。

その結果にかぐやは納得がいかず、帰ってきてからもこうして荒れているのだ。

「大体私が本当に恋に落ちていたとしても矛盾があるわ!」

「何がでしょう?」

かぐやの憤慨は続く。こうしたかぐやの怒りは決して珍しいものではないが、それでもいつも以上の怒り具合に早坂の疲労は貯まってい

かぐやとのやり取りは楽しいし、この時間は早坂にとって掛け替えのないものだが、それでも疲れるという現実は変わらない。

しかし――

「貴女は倒れてないじゃない!」

「は?」

「私が倒れた原因が恋によるものだというのなら、貴女が倒れてないのはおかしいわ!」

「…」

色々と吹っ飛んだ。疲労も、何もかも。

「えっと、かぐや様?何を仰っているのですか?」

「私が会長にドキドキして倒れたというのなら、貴女が総司にドキドキして倒れてないとおか」「あああああああああああああああ
!!!」

速攻でかぐやの口を手で塞いだ

かぐやの部屋から総司の部屋までそこそこ離れてはいるが、かぐやの大声は総司の部屋まで届く。現に以前、総司は部屋で喧嘩する早坂とかぐやを止めに来た事があった。二人の騒ぐ音と声が聞こえたと言っ

て。もしかしたら、今のかぐやの大声も総司の部屋まで届いているかもしれない。早坂はそう直感し、すぐにかぐやの口を塞いだ。

少々、間に合わなかった気もするが。

「な、何を言い出すんですか?」

「ぶはっ!だってそうでしょう!?恋のドキドキで倒れるのなら貴女だって倒れてないのはおかしいでしょう!?!」

「いや、意味が解りません。その理論はおかしいです」

「おかしくないわよ!」

「いえおかしいです」

「おかしくない!!」

冷静さを取り戻した早坂がかぐやと言い合う。

「…確かに私も、その…、総司様の傍にいと胸がドキドキしたりはします。ですが、普通はそれで倒れたりしません。かぐや様がおかしい

んです」

「なんですつて!?!」

早坂とて恋する乙女。恋の対象が傍にいれば胸の鼓動が高鳴るのは当然だ。

しかし、しかしだ。その高鳴った鼓動が行き過ぎて倒れるのは恐らく世界広しといえどかぐやだけだろう。早坂は

自信を持って言える。

「いいえ貴女がおかしいのよ早坂! 倒れる程ドキドキしたいのならそれは恋じゃないわ! 貴女の想いはその程度なの!?!」

「かぐや様…」

「早坂! 本当に総司が好きなのなら、愛してるのなら、貴女も倒れなさい!」

「かぐや様、論点がずれています。そして言ってる事が無茶苦茶です」

「さあ早坂! 総司の事を考えなさい! そして私と同じシチュエーションを思い浮かべなさい!」

「…」

早坂は思う。ああ、これはダメだと。これは自分の手には負えないと。誰かに助けを求めないと。

しかし早坂は助けを呼べない。何故なら、今のかぐやは何を言い出すか解らないからだ。

仮に助けを呼ぶとして、一番手っ取り早いのは総司だろう。総司と協力すれば今のかぐやでも落ち着かせられる自信はある。

だが、落ち着かせる最中にもかぐやが――

『総司、貴方はどう思う?! 早坂は貴方に倒れる程ドキドキしないそうよ!?!』

なんて言い出したら。

その時には早坂はこの部屋の窓から身を投げるだろう。その自信が早坂にはあった。嫌な自信だが。

「かぐや様、落ち着いてください。そして自分が何を言ってる自覚してください」

だから、早坂は独りで奮闘するしかないのだ。強大な相手に独りで

立ち向かうしか道はないのだ。

そして早坂愛は往く。かつてない程困難な戦いへと、身を投じるのだった。

翌日

「早坂…、疲れてるのなら休んで良いんだぞ？」

「いえ…、大丈夫ですので…。気にしないでください…」

早坂は総司に本気で心配されるのだった。

白銀圭は見られたい

放課後、帰ろうとした総司のスマホにとあるメッセージが届いた。そこメッセージの送り主は圭で、簡潔に今すぐ会えませんか？と書かれていた。

総司はすぐに今日の予定を見て急ぎの用、仕事はないと確認してから了承の返事を返す。圭からの返信はすぐに来て、高等部の校門前で待っていてください、と書かれていた。

一体何の用なのか、いつも圭と二人で会う時は勉強を見てあげているだけだったが、今回は何か様子が違う。

そんな事を考えながら校門にて総司が待ち初めてからすでに二十分は経っている。すぐに向かう、と圭はメッセージで言っていたのだが、全く来る気配はない。

「…」

校門で立ち尽くす総司は注目の的だった。校門を潜る生徒達が一様に総司に好奇の視線を向ける。

それに対して総司は視線を向け返したり、何か言葉を掛けたりという反応は一切しない。全無視である。こんな視線は受け慣れている。とはいえ、鬱陶しいという不快さまでは消えないが。

「総司さん！」

総司の左側、つまり中等部の校門がある方から呼ばれる。視線を向ければ、笑顔でこちらに駆け寄ってくる圭がいた。

「お待ちせしてすいません…」

「いや、それは良いけどさ」

総司の傍で立ち止まった圭は、頭を下げながら総司を待たせてしまった事を謝罪する。

いや、総司としてはそれに関して気にしていない。圭とて何らかの事情があるだろう。それに何時に会おうという時間の約束まではしていない。そこを咎めるつもりは全くない。

しかし、だ。総司はそれ以外に一つ、気になる事があった。

「誰? その人」

「…」

圭の後ろにはもう一人、中等部の制服を着た男子生徒がいた。その男子生徒は総司を鋭く睨んでいる。

「あ、忘れてた。あのさ、さっきも言ったけど今日この人と約束があるから。帰ってくれない?」

「お、おい白銀! 俺はずっと前から遊びにいらこうって誘ってるよな!! 本当にそいつと、俺に誘われる前から約束してたのか!」

「いや、私とあんた、何も約束なんてしてないでしょ? 確かに誘われたけど、それはずっと断ってきたじゃん」

「…」

ああ、この短い会話だけで何となく察してしまった。

つまり、この男子生徒は…そういう事なのだろう。しかし、圭には全く相手にされないらしい。

「何で…、何で俺の誘いは断ってこいつと…!」

「私が誰と約束しようと勝手にでしょ?」

「くっ…!」

睨まれた。とはいえ、総司にとつては小さな子供が精一杯背伸びしようとしている様にしか感じられないのだが。

「おい」

「ん?」

「あんた、名前は?」

「…四宮総司」

「四宮、総司…。…っ!!!?」

名前を聞かれ、一瞬答えようか迷ったが素直に教えてやる事にし

た。

総司の名前を聞いた男子生徒は総司の名前を復唱。そして圭の方を向いたかと思えば、思い切り目を見開いてもう一度総司の顔を見た。

「しのみや…そうじ…？」

「ああ」

「あの、四宮総司…？」

「どの四宮総司かは知らんが、俺の名前は四宮総司だ」

「…」

顔が真っ青になっていく男子生徒は一步後退りしてから、回れ右してしまう。

「すいませんでしたあああああああああ!!!!」

そして大声をあげながら走って逃げてしまった。

「ええ〜…」

少し絡まれそうだと思っていたのに、蓋を開ければ名前を教えただけで逃げられてしまった。正直、拍子抜けである。

「なに、あれ…」

「私にしつこく言い寄ってきてきてたんです。だから、ちよつと総司さんの力をお借りしたくて…」

「ああ、だからいきなり会いたいなんてメッセージで送ってきたのか」

「…ごめんなさい、こんな事で呼び出してしまった」

「いや、気にするなよ。むしろ役に立った様で良かったよ」

先程の圭と男子生徒の会話からして想像ついていたが、大分前から圭はあの男子生徒に言い寄られていたらしい。どれだけ断つても引き下がらない様子に嫌気が差して、総司を呼んだ、そういう事だろう。

まるで利用、そう思われても仕方ない扱いをしてしまった事を謝罪する圭。しかし総司は全く気にしておらず、それどころか先程台詞の通り自分の名前が役に立ったのならそれで良いと本気で思っていた。

「…えっと、用事はさっきの彼を追い払うだけ、か？」

「い、いえ！その…、確かにあの人を追い払ってほしいのもありましたけど…」

さて、何はともあれ意図せず総司は圭の望みを叶えた事になるが、これで圭の用事は終わりなのか。

総司が圭に問いかけると、圭は慌てたように両手を振る。

「…また、あのファミレスで勉強を見てもらえますか？」

それは恐らく、今とつきに出てきた考えだろう。圭自身、総司への明確な用事というのは先程の件で終わったのだろう。

しかし何度もいうが、総司は気にしない。というより、気になる要素がなかった。

何故なら、慌てる圭の様子が可愛らしく、微笑ましかったから。

こんな事、本人には口が裂けても言えないが。

総司は隠しきれなかった微笑みを浮かべながら圭の提案を受け入れる。

直後、圭は輝くような笑みを浮かべた。二人は並んで以前に圭と入ったファミレスがある方へと足を向けた。

「ホントにお兄いは！いつも私を子供扱いするんですよ!?!」

「そうか、それは酷いな」

勉強を見ていた筈だった。校門から約十分、ファミレスに着き、店員に案内された席に座つてすぐはまだ勉強を見ていた筈だった。

それは、圭が古文についての質問をしてきた所から始まった。

圭が聞いてきたのはとある短歌の読解についてで、その短歌は筆者の女性が月を見ながら愛する男に想いを馳せるというものだった。

しかしその筆者が想いを寄せているのは実の兄というのが圭に何かを思い出させたらしい。その問題についての解説が終わると、圭は総司に聞いてきた。

『総司さんは、兄の好きな人を知りませんか?』

聞けば、昨日の白銀はやけに落ち込んでいたという。それどころ

か、花占いまでしていたという。途中で止めていた事から結果は…：白銀のために言わないでおこう。

それで圭は兄は恋をしていると察したらしいのだが、直接聞くのは気が引けたらしい。

しかし白銀家の父によつて、白銀が好きの人から…：つまりかぐやから避けられているという話が聞けたとの事。

圭は一言、白銀にそれは好き避けかもしれないからもう少し待った方が良くとアドバイスしたという。

うん、それ多分正解、と総司は心の中で呟いた。それと同時に一昨日、何か早坂とやってたなあと先日のお出来事を思い出す。

『やっぱ兄の恋の相手は気になるか』

またまた圭の微笑ましい一面を目の当たりにし、総司の口は軽くなつてしまった。

この一言が、圭をヒートアップさせてしまう。

初めはただ、妹として兄の恋の相手は将来の義姉になるかもしれないから、と言い訳染みた返事をしていたのだが、それが段々と小言が多い兄への愚痴へと変わっていき、そして――

「総司さん！聞いてますか!？」

「うん、聞いているよ」

こうなつた。

怒り心頭といった圭の様子だが、これもこれで総司にとっては微笑ましいものであつた。

子供扱いされて怒る。何という反抗期特有の子の微笑まじさか。

総司も圭と三つしか歳は変わらないが、色々と達観してしまつた総司は爺むさかつた。

「一々言う事が小さい子向きなんですよ！私が間違つてる時もあるからそれは受け入れてますけど、解つてる事まで何度も何度も…、あの母親気取り！」

「…」

なるほど、反抗期になるとこうなるのか、と総司は荒れる圭を見ながら染々思う。

総司もかぐやも、反抗期というものを経験した事がないから、今の圭の様子は新鮮に思えた。

「総司さん」

しかし、総司の内心は思い切り圭に読まれていた。

「何で笑ってるんですか？」

というか、思い切り顔に出ていた。

「…総司さんも、私の事子供だって思ってるんですか？」

「え？いや、そんな事は…」

圭にじと目で睨まれる。

「…まあ、高校生から見れば中学生は子供に見えるもんだよ」

「…」

圭の視線を前にして、総司は誤魔化す事を諦めぶっちゃける。圭の視線が更に強くなった気がするのは断じて気のせいではないのだから。

「圭さんも白銀の態度に一々ムキになってるようじゃ、な」

「むっ…。どういう事ですか」

「ここで総司は少し話の方向性を変える。」

「白銀も言い方はともあれ、圭さんの事を思ってるのは間違いないんだ。それに、白銀の言ってる事は丸々間違つてたりしてるか？」

「…いえ。兄は正しい事を言ってると思います」

「なら、ちよつとイラツと来ても我慢しないと。大丈夫だ、慣れれば気にならなくなるって」

「…」

総司に窘められて少し落ち込んだ風の圭の頭に手を乗せる。それは無意識の行動で、何となく圭を宥める今の行為がかぐやを宥める普段の行為と重なってしまった。

総司に撫でられる圭はきよとんと目を丸くして総司を見上げる。その視線を受けて、総司はようやく今自分がしている行為を自覚し、すぐに手を引っ込める。

「すまん。かぐやと話してる調子になってた」

「…かぐやさんにも、こんな風に？」

「…まあ、あいつもガキだからな」

かぐやに懂れているという圭にこんな事を言うのもあれだが、かぐやは今、遅れてきた反抗期の真っ最中みたいなものだ。

あーだこーだと不満を漏らし、総司と早坂がそれを宥める。ほぼ毎日繰り返される光景の一つだ。

「つまり、総司さんにとっての私は妹みたいなものなんですか？」

「え？…まあ、そんな感じかもしれない」

かぐやとのやり取りについての話が続くと総司は思っていた。しかし、圭は総司に思わぬ問いかけをした。

一瞬戸惑い、目を丸くした総司だがすぐにその問いかけに頷く。

圭は不快に思うかもしれないが、総司にとって圭はもう一人の妹みたいなものである。

勉強を見てあげたり、こうして愚痴を聞かされたり、前者はともかく後者はそれこそかぐやとのやり取りそのままである。

圭の年の頃の総司とかぐやよりも兄妹らしいやり取りをしている。

「…」

「あー…、やっぱ気持ち悪いよな。すまん、今後は気を付ける」

やはり圭にとっては不快だったらしい。圭は頬を膨らませて総司を睨んでいた。明らかに怒った様子である。

「そうじゃないですけど…、むう」

今度はそっぽを向く。完全に機嫌を損ねてしまったらしい。

原因は、総司が考えているものとは違っているが。

「…まあ、仕方ないよね。総司さんの言う通り、まだ子供なんだから」

「？何が仕方ないんだ？」

「何でもありません」

総司は疑問符を浮かべる。

機嫌を損ねていたはずの圭が突然笑顔を浮かべたのだから。それも、どこか期限良さそうに、悪戯気な笑みを。

「総司さん。私、すぐに総司さんに大人だっと思われるようになりま
すから」

「え？」

「覚悟していてくださいね？」

「…はい？」

全く訳が解らなかった。どういう意味か聞いても、「今は解らなくていいんです」なんて言い返される始末。

しかし、圭の顔は楽しそうに笑いながらも、その目だけは決意に満ちていた様に、総司は見えた気がした。

藤原千花は盗られたくない

体育館にて太鼓の音が鳴り響く。そんな中で、ある一人の男がもがき苦しんでいた。まるで水に溺れ、必死に助けを求めるように両手を振り、かくかくと不気味に首を傾け、その様子はおぞましいとさえ見えたと。

太鼓の音が鳴り響く。そんな中、総司はもがき苦しむ男の姿を眺めていた。じつと、無感情に、男を助けようとする様子は微塵もない。何故なら男はもがき苦しんでいるのではなく、踊っているのだから。

「ハッ！」

ヘンテコな決めポーズと共に男は踊りを終える。そして男は総司と先程まで太鼓を叩いていた少女に不敵な笑みを浮かべた。

「良い仕上がりだろ？」

一体、何を言っているのだろうか。総司は咄嗟にその言葉に返事を返せなかった。

しかし、もう一人は総司とは違った。

「うそつき！また私に嘘をついて！嘘を吐きましたねっ！」

両手を下にブンブンと振りながら、怒り心頭の様子で怒鳴る少女は藤原千花。ここに総司を連れてきた張本人である。

「嘘って何だよ」

そして心底不思議そうに千花を見るこの男は白銀御行。先程まで千花が叩いた太鼓の音に合わせてもがき苦しんで：ではなく、踊って

いた張本人である。

「踊りに苦手意識はないって言ったでしょ!？」

「別に苦手意識なんてないぞ」

「うそっ!・こんなのはコンプレックスであるべきです!ちゃんと劣等感を感じてください!」

凄い。あの千花がツツコミ役をしている。それと白銀相手に。

謎の感動を覚える総司。二人の会話から蚊帳の外だったが、千花が総司の方へと勢い良く振り向いた。

「総司君はどう思いますか!？」

「はい?」

「会長の踊りですよ!」

「いや、どうも何も…、あれは踊りじゃないだろう?」

「総司!？」

先程の白銀の踊りについて千花が聞いてくるが、どうも何も総司は先程のあれを踊りとはどうしても捉えられなかった。

食い下がろうとする白銀だが千花に止められ、その千花は総司に続きを促す。

「なあ白銀。どうやったら水のない所で溺れられるんだ?」

「どういう意味だ!？」

「苦しそうに一生懸命俺達に助け求めてたじゃん」

「求めてない!」

何と、白銀は溺れていなかったらしい。どう見ても溺れて助けを求めている様には見えなかったのだが。

「会長。私は悪魔払いをするエクソシストの気分でした」

「ソーラン節を踊ってたんだが!？」

「ですから、あれはソーラン節じゃないんです!踊りですらない何かなんです!」

ちなみに何故白銀がもがき…じゃなく、よきこいを踊っていたのかというと、もうすぐ行われる体育祭にて白銀、総司達二年生はソーラン節を踊る事となっているからだ。

それを知った千花は何故か不安がりだし、白銀を呼んで踊らせてみ

た所、こうなったという訳である。

更に聞けば、春頃のバレエの授業の時、全校集会で歌う校歌も白銀は上手くできず、歌えず、千花に特訓をつけてもらったらしい。

それを聞いた総司は納得した。何故なら、自棄に二人の特訓に入る流れがスムーズすぎると感じたからだ。

そう、白銀のソーラン節の特訓がこの瞬間、始まったのである。白銀がもがき苦しむ様を見た、おにと書かれたハチマキを額に巻いた千花が一喝する。

そしてその光景を体育座りで眺める総司。もう黙って帰ろうかと何度思った事か。

その後も特訓は続き、日を跨ぎ、何故か特訓が行われる度にその場には総司の姿があつた。

時折千花や白銀に意見を求められるだけで居ても居なくても変わらないと思いつつ、二人の真剣さに口を挟めない、そんな日々が続いたある日の事だった。

「どうだ？俺的には及第点かなって思うんだけど」

一曲踊り終えた白銀が監督する千花に問い掛ける。

そう、踊り終えたのだ。断じてもがき苦しみ終えた訳ではない。何度でも言おう。白銀は踊り終えたのだ。

(何だろう…。この胸に込み上げる感動は)

初めのあの溺れている様にしか見えない踊り(?)から、白銀は急激に成長を遂げた。その姿を見続けてきた総司の胸は熱くなっていた。

人の成長というのは、ここまで感動するものなのだと、この時総司は実感したのだ。

「まだまだです！一応人に見せても腰を抜かすような下手さではなくなりましたが、点数をつけるとしたら四十点といったところですよ」

しかし千花はまだ納得いってない様子。

これが音楽の分野だからだろうか、ここまで千花が真剣になる所を総司は見た事がなかった。

「いいですか？ソーラン節はニシン漁の鯺場作業唄や沖上の動作が元

となっております。その中に込めた大漁への願い……。海に生きる男達の美しさ、逞しさを動きで表現しなければならぬんです！」

さすがは音楽の分野で天才と言われた事だけはある。その説得力は総司ですら気圧されるものであった。

「良いですか会長！引つ張られる網の気持ちを理解してください！そうすれば網を引く男を表現できる筈です！」

「網の気持ちなんてわかんねーよ！」

しかし実際に言葉を向けられてる方としては堪ったものではないだろう。総司ですら千花の表現論についてけなくなっていたのだ。千花の教えを受け数日で普通のソーラン節が踊れる様になった白銀の音楽センスでは千花の表現論を理解するのはまず不可能だろう。

「なら、実際に網の立場になってみればいんじゃないやね？」

「は!?!どうやって!?!」

「海に舟出して、海に白銀落としてから引き上げるんだよ」

「！それは良い案です！早速今日行きますし「行かねえよ!?!」」

まあ総司自身本気で言った訳ではないし、白銀もそれを悟ってはいたのだが……。千花の食い付きが思いの外良すぎたせいで本気で白銀は総司の案を拒絶した。

「もう！そんな事じゃプロダンサーにはなれませんよ！」

「何でいつの間にも目標がプロになってんだよ！俺は体育祭で恥かかない程度で問題ないんだよ！」

「おーい、二人とも落ち着けー」

「大体体育祭の集団ダンスで表現とかそういうレベルのものは必要ないだろ。そこそこ形になってれば……」

「……」

まずい。確かにぶつちやけ、総司も体育祭の集団ダンスにそこまで高いレベルを要求するのはどうかと思っっている。

しかし、千花にそんな事を言えばどうなるか。

「あーもう限界です!!毎度毎度何で私が会長みたいなポンコツのお世話しなきゃなんですか!!」

結果、藤原火山が噴火する。

それもそうだろう。音楽家に喧嘩売ってるも同然の台詞だ。さすがに総司も庇えない。

「もう二度とやりませんから！何かあっても私を頼らないでくださいね！」

「あ、ちよつ、引つ張るな。転ぶ、転ぶ」

憤慨したまま千花は総司の手を引いて部屋を出ていく。総司は引つ掛かりそうになる両足の位置を調節しながら、千花に手を引かれたまま少しの間歩き続ける。

「千花」

白銀を置いて部屋を出てから十数秒、総司は千花の手を掴んだままその場に立ち止まる。千花は総司の手を引けなくなり、同じ様にその場で立ち止まる。

「…総司君もそう思いますか？」

「ん？」

「会長と同じ様に…。体育祭のソーラン節に表現は必要ないって…」

涙で瞳を潤ませながら、千花は総司を見上げる。

やはり、千花は先程の白銀の台詞に相当ダメージを受けたらしい。それでも泣くほどとは。それ程、千花は音楽を愛しているという事なのだろう。

「…まあ、惰性で踊るのはどうかとは思う。ただ、千花は白銀に求めすぎだとも思う」

「そう、でしょうか…」

「よく考えろよ。スタートが例のあれの奴があそこまで踊れる様になっただぞ？十分じゃないか？」

「…ぷいぷい」

落ち込んでた千花が不意に吹き出す。あの白銀のもがく様を思い出したのだろう。目の当たりにした時点では恐怖しか感じなかったあれも、今では笑い話に出来るまでになった。白銀には悪いが。

「でも、まだ出来ると思ってしまっうんです」

「…」

「それは、会長への押し付けなんでしょうか…」

千花はピアノの天才と呼ばれていた。全国大会で多くの年上学生を抑えて最優秀賞をとった経歴もある。

そんな彼女だからこそ、白銀の感覚は解らないのだろう。音楽の天才には音楽の凡才の感覚は解らない。

まあ、白銀は凡才以下だと思うが。あの踊り（？）は酷すぎた。

「今頃、白銀は一人で練習してると思うぞ」

「え？」

千花にあんな事を言い放ってしまった白銀だが、今頃千花を怒らせた事を気に病みながら練習しているだろうと総司は考えていた。

白銀は元来心根が優しい男である。あのかぐやが惹かれる程に。

「…総司君、私もう一回行ってきます。ついてきてくれますか？」

「おう。白銀に引き揚げられる網の気持ちつてのを教えてやれ」

「はいっ！」

意気込む千花と共に元来た廊下を戻る総司。しかし先程まで室内に白銀の姿はなく、それなら生徒会室にいるのでは、と思った二人はすぐに生徒会室へと向かう。

「先程の男度胸ならくの部分ですが、胸はこう張って…腰はここまで落とした方が格好の良い形になります」

しかして、二人の予想通り白銀は生徒会室にいた。総司の言葉通り、ソーラン節の練習を続けていた。

ただ、かぐやがそこにいて、白銀にソーラン節を教えているという点のみ、総司の予想から外れていたが。

「…」

「…」

感情をなくした瞳で白銀とかぐやを眺める千花。そんな千花を苦笑しながら見る総司。

これはいけない。

総司は今すぐここから逃げ出したい衝動に駆られた。

「え？え？ちよつとちよつと？…これどういう事ですか？教えてもらってるんですか？踊りを？」

折角良くなった機嫌が再び急降下。

しかし総司としてはこの中に飛び込むのはめんど…もとい気が引けた。ここで無理に二人を止めても恐らく千花とかぐやの間に確執が残るだろう。

それならば思う存分やらせた方が今は良いのではなからうか。

「…おい白銀。今なら解るんじゃないか？」

「な、何が!？」

「引き揚げられる網の気持ち」

「そ、そんなの解るはずが…っ!？」

白銀の目が何かに気付いたかのように見開いた。

(え? 解ったの? そんな馬鹿な)

先程の総司の台詞は適当に考えた誤魔化すためのものである。本気でこの状況で白銀が引き揚げられる網の気持ちを理解できるなんて思っていないかった。

しかし、今の白銀の反応は――

「はあ…はあ…」

「…はあ…」

白銀を巡った争いは十数分を要した。

そして、この時間の中で白銀は。

「ふっ!」

「な、何てソーラン節!!」

引き揚げられる網の気持ちを理解したのだった。

「ありがとう総司。お前があそこでアドバイスをくれたお陰だ」

「…そうか。それは良かった」

「え? 総司君、何かしたんですか？」

笑顔でお礼を言ってくる白銀に良心が痛む総司。

それと同時に、実はこの男、音楽の天才なのではないだろうか、と最初の印象が揺らぎ出したのだった。

少女達は邂逅する

体育祭。学校によって形式が違う行事であり、とある学校では球技大会が、とある学校では小中と行われる運動会と似た形式の体育祭が、或いはその両方が行われる学校もある。

ここ、秀知院学園の体育祭は二番目の形式で行われる。門は開かれ、見学は自由。生徒の親族だけでなく、その友人やまたは全く関係ない人も見に来る体育祭は毎年物凄い盛り上がりを見せていた。

「さて…。これで俺の午前のプログラムは終わった訳だ」

「お疲れ様でした」

「いや、全く疲れてないんだけどな？」

グラウンドの端に設置された赤と白のテント付近にて、総司は鯉ダンスを踊る三年達の姿をぼうつと眺めながら赤木と話していた。

この鯉ダンスの前のプログラム、二年男子全員によるソーラン節を踊り終えた総司は、それで午前に参加するプログラムを終えた。

残る総司が参加するプログラムは200m走、棒引き、選拔リレー。見事に全て午後のプログラムに集中している。

つまり何が言いたいかというと、暇なのだ。この空いた時間に話をする親しい友人なんていない。一応同じ組にはかぐやと早坂がいるが、総司と違って午前に出場する競技がある。

「…さて、もう予想はついてるが恒例行事として聞いておこう。何でお前がいるの？」

それはそれとして、総司は赤木に一つ、聞かなければならない事があった。

それは、何故ここに赤木がいるのかである。赤木とて多忙の身。特に今日は総司が体育祭という事を考慮されて仕事が休みの日である。当然、そのツケはこの男に回ってくる。

こんな所で油を売ってる場合ではないはずなのだ。

「仕事です」

「…何でカメラ？」

しかし、赤木は至って冷静に仕事で来たと告げる。カメラを手にしながら。

「御主からの命です。総司様とかぐや様の様子をしっかりと、たくさんカメラに収めてこいと」

「…」

額に掌を当て、天を仰ぐ。

これは毎年の事。多忙故、京都からここまで来られない雁庵の代わりというべきか、赤木は体育祭、そして文化祭に来ては総司、かぐやの競技の様子や文化祭に出展する作品や出し物の様子をカメラに収めている。

「総司くーん！」

内心が呆れに満ち、天を仰ぎ続ける総司の耳に明るい少女の呼ぶ声が届く。

視線を下ろし、声がした方へと振り向く。そこには体操着姿の千花が、後ろに眼鏡を掛けた男性を伴ってこちらに駆け寄っていた。

「おう。スパイか？」

「えへへー。総司君が出る競技を全部負けてくださいって頼んだらどうしますか？」

「一昨日来やがれ」

「やっぱり」

赤い鉢巻を巻いた千花と軽口を叩き合う。先程の会話から解る通り、総司と千花は敵チーム同士である。だからといって険悪な雰囲気になったりはしないが。

「いやあく、今年は晴れましたね〜」

「だな。去年は…寒かったもんな」

現在は十一月。日中でも冬の刺すような寒さが感じられる事がちよくちよくあるという時期になってきた。そんな時期に行われる体育祭だが、今年のように温かくなる年もあれば、去年のように寒くなる年もある。

去年は本当に酷かった。競技に出る生徒は半袖短パンの体操着を着るのだが、寒いせいで皆が震えていた。まあ最終的には体育祭の熱気によって常時半袖短パンのままにいる生徒も出てきたのだが、そういった生徒のほとんどが次の日に風邪を引き、体育祭の片付けに出られないという事態に陥った。

しかし今年は晴れ、ポカポカと陽気な暖かさがある。競技を熟した者は暑さすら感じてるのではないだろうか。

この十一月という時期に、生徒のほとんどが半袖短パンの格好で歩いている。目の前の千花もその一人だ。

薄着の白い体操服に紺色の短パンという服装が千花のボディラインを浮かび上がらせる。普段の制服ですら押し上げ目立つ豊かな胸が今の格好だと更に――

(カット)

思考を切る。これ以上はいけない。というかデジャブを感じる。前にもこんな事があった気がする。

「失礼。もしかして、君が四宮総司君かい？」

「…そうですが。貴方は千花さんの御父様ですね？」

「ああ。藤原大地です、宜しく」

眼鏡を掛けた清潔な印象を受ける男性は千花の父、藤原大地。彼の父、すなわち千花の祖父と同じ政治家の道を歩み、同僚、国民共に信頼度は厚い。いずれ総理大臣に選ばれるだろうと今の段階から言われている程である。

「君とは是非会って見たかったんだよ。千花がよく君の話をしているからね」

「お、お父様！」

「…」

ニツコリと笑いながら、なのに威圧感を感じさせる顔で総司を見据

えながら言う父に千花が慌てた様子で言い寄る。

一方の総司は何故威圧されたのか解らず内心首を傾げている。

「…はあ」

「おい、今バカにされた気がしたぞ」

直後、背後から聞こえる赤木のため息の声。完全に総司をバカにしたその声に総司はグリーン、と首を回して赤木を睨み付ける。

「…」

「…何か？」

「いや…。千花の話を聞いて解つてはいたんだけどね。こうして面を向き合ってみると、改めて君やかぐや君が四宮としては異常に見えてしまう」

「…」

千花は首を傾げているが、やはりこの男は四宮の実態を知る一人である。だからこそ、総司とかぐやに違和感を覚えて仕方ないのだろう。

何しろ、四宮が普通に行事に参加し、楽しんでいるのだから。

「かぐやはともかく、俺も本質の部分は四宮ですよ」

「だろうね。そうでなくては君が次期当主に選ばれる筈がない。…それでも、君が他の四宮とは違う事だけは間違いないよ」

やはり父娘だ。政治家らしい狡猾さだけでなく、千花の様な柔らかな包容力というべきか、そういった一面も持っている。

だからだろうか、つい喋りすぎてしまった。こんな話は千花に聞かせるべきではない。まあ、千花は何が何だか解らず大地に何の話なのか無邪気に問い掛けているのだが。

「そうだ。さつきかぐや君や白銀君にも言ったが、君も是非うちに遊びに来てくれ。無論、時間が空いた時に、だよ？」

「…はい。それでは、いずれ皆でお邪魔させてもらいます」

「楽しみにしているよ。…君とは個人的に話したい事もあるしね」

威圧感再び。遊びにおいてと誘われたのは良いのだが、最後の威圧と共に掛けられた言葉で総司は一気に行きたくなくなった。

本当に威圧される理由が総司には解らない。何故なら、鈍感系主人公四宮総司だ

から。

「総司君と話したいコトって何でしょうね？」

「…さあ？」

千花と一言二言交わしてからその場から離れていく父の背中を見ながら、千花が総司に問いかける。そんな事を聞かれても総司にはさっぱり解らない。何故なら（以下略

「あつ、私もうすぐ出番です！」

「そういや、障害物競走に出るんだっけか」

「はい！それじゃあ総司君！応援よろしくお願いします！」

「俺、白組なんだけど？」

抗議の言葉は無視された。千花は笑顔で手を振り、障害物競走に出る生徒達の集団へと入っていく。その姿を見送ってから、総司はふとある事に気が付く。

「あれ？赤木は？」

赤木がいない。キョロキョロと辺りを見回していると、観客の最前列でカメラを連写する赤木の姿を見付けた。

カメラのレンズの先には、100m走で一位をとったかぐやの姿が。

「…」

何か居たたまれない気持ちになった。自分の付き人が妹をカメラで連写する姿に居たたまれない気持ちになった。

いくら父の命令とはいえ…、総司はそつとその場から離れる。

グラウンドから少し離れ、丁度グラウンドを見渡せる位置で総司は立ち止まる。周囲から競技を見つめる観客と観客の間から見える競技の様子。

「総司様」

背後から声を掛けられる。涼やかな少女の声が誰のものか、振り返らずとも総司には解る。

「競技は大丈夫なのか？」

「はい。先程の100m走で午前の部で出る競技はなくなりました」

総司の隣まで来た少女は総司の言葉に返事を返す。ここで総司は

初めて少女の方へと振り向いた。

金色の髪をサイドにまとめ、体操服を着た早坂がそこに立っていた。早坂はグラウンドの方を眺めていたが、総司が振り向いた事に気付き、早坂も総司の方へ視線を向ける。

「総司様は…午後に出る競技が集中してるんでしたね」

「ああ。お陰で暇で仕方ない」

「それなら御友人と…すみません、いないのでしたね」

「おい、今のわざとだろ。泣くぞ」

ペコリと頭を下げる早坂。しかし、総司には解る。わざと早坂は地雷を踏み抜いたのだと。

「…書記ちゃん、頑張ってますね」

「おい、話題を逸らすな」

グラウンドでは二人三脚が終わり、障害物競走が始まっていた。総司もグラウンドに視線を向けると、千花がバランスをとりながら平均台を渡っているのが見えた。

「おお、千花一位じゃないか」

平均台を渡り終え、その後の障害も越えて何と千花は一位でゴールした。嬉しさのあまりピョンピョン跳び跳ねながら近くにいたかぐやに報告している。

その後、何故かキョロキョロと辺りを見渡しているが…、もしかして自分を探しているのでは？という考えが浮かんだ直後、千花と視線が合った。千花は嬉しそうに笑みを浮かべて手を振り…、総司の隣にいる早坂を見て固まった。

「？」

突然どうしたのか、首を傾げる総司。そうこうしている内に一位をとった生徒が立つ場所へと連れていかれる千花。その間もこちらに視線を向けたままだった。

「どうしたんだ、千花の奴？」

「…総司様」

「ん？どうしたはやさ…か？」

千花の様子を気にするのも束の間。低い声で早坂に呼ばれる。振り向いて見れば、早坂は無表情で、かつ迫力を感じさせる表情で総司を真っ直ぐ見据えていた。

「書記ちゃんのこと、名前で呼んでるんですか？」

「そうだけど」

「…ちっ」

「何で舌打ちした？」

総司は早坂の質問に答えた。しかし早坂は総司の質問に答えない。忌々しげにグラウンドの方を睨んでいる。

（え、何で？ 訳が解らない。何でいきなり早坂不機嫌になった？）

これが解らないからこいつは四宮総司鈍感系主人公なのである。

「総司さん！」

「あ…、圭さん？」

「っ」

更に直後、遠くの方から大きく総司を呼ぶ声がする。振り向けば、こちらに大きく手を振る圭の姿があつた。

圭は笑顔でこちらに駆け寄ってくる。

「総司さん、こんにちは」

「ああ、こんにちは。今日は白銀の応援か？」

「…まあ、それもありますよ、はい」

「？」

圭に微妙な顔をされた。何故？

「総司さんが出る競技って何ですか？」

「俺？俺は後200m走と棒引きと選抜リレーだけど？」

「…見事に午後に集中してるじゃないですか」

「はっはっは、言うな」

また微妙な顔をされた。まあ今回に関しては先程と違って理由は明らかだが。

「それで、総司さん。そちらの方は？」

「ん？こちらの方は…知り合いだ」

「お知り合い、ですか？」

「うん、知り合い」

「ただの？」

「ただの」

総司が出る競技を教えてもらった圭は次に総司の隣にいる早坂について聞いてきた。

千花の時とは違い、まだ圭は早坂について何も知らない…はず。なのに、そのはずなのに、何で圭は早坂と鋭く睨み合っているのだろう。

「…白銀圭です」

「早坂愛」

「言っておきますけど、負けませんから。貴女にも、千花姉にも」

「それはごっちの台詞」

「…」

口を挟めない。ツツコミたい事は山ほどある。早坂のギャル擬態はどうした、とか、何でここまで雰囲気悪いんだ、とか、突然千花の名前が出るのは何でだ、とか。

なのだが、二人の迫力に口を挟めない。誰でもいいから助けくれ、と総司は心の中でSOSを発する。

「総司君！やりました！私一位とりましたよ！」

「千花…!?!」

救世主現る。雰囲気ゆるふわな千花ならばこの空気を変えてくれるかもしれない。総司はそう期待を込めて振り返った。

「ごっつ」

「なっ」

駆け寄ってきた勢いそのままに総司は千花に抱き付かれた。その様子を見て早坂と圭が絶句する。

「えへへー、誉めてください」

「いつてえ…。おい千花、いきなりなに「千花姉！総司さんから離れてえー！」

「書記ちゃん、さすがにそれはちよつと尻軽が過ぎるんじゃないかな？かな？」

「」

おかしい。空気が悪化した。早坂と圭の形相が更に黒くなった。

圭は千花の腕を引っ張り総司から引き剥がそうとし、早坂は背後に黒いオーラを発しながら千花を睨んでいる。

「わあああああん！圭ちゃん、離してください！まだ総司君からご褒美貰ってないですよ〜！」

「そんなの私があるから！ほら、売店のカレーパン奢ってあげるから〜！」

「何なら私が焼きそばも追加で奢ってあげましょうか？」

どうして、どうしてこうなった。圭に続いて早坂も千花の腕を掴み、そのまま二人は千花をどこかへ連行していく。

「おーい、そっちは売店じゃないんだけど…」

総司の声は届かない。千花が二人の拘束から逃れようともがいていたが、今の自身の状況に楽しさを覚えたのか、急に抵抗を止めた。「…まあ、静かになったし良いか」

千花が来てから更に雰囲気が悪くなった時はどうなるかと思ったが結果オーライ。千花は総司の期待通り救世主の働きをしてくれた。

「さて…。ジュースでも買いに行くか」

騒いでいたら喉が渴いてきた。別にたくさん競技に参加した訳じゃないが、喉が水分を欲していた。総司は欲望の向くままに売店へと足を向ける。

その姿を、観客達の中から見ると視線には気付かぬまま。

四宮総司は身内に甘い

体育祭の半分、午前のプログラムは全て終了。現在、昼休憩と入り、生徒達は家族、或いは友人と思いい思いの人と過ごしている。

「…むぐ」

その光景を眺めながら、総司は陽射しが校舎に遮られて出来た日陰の中で昼食を摂っていた。普通の授業がある日の様な弁当ではなく、簡単なおにぎりを齧る。

おにぎりとはいえ侮る事なかれ。使われてる米は農薬、除草剤、化学肥料、有機肥料等一切不使用の高級米。米の中の具である鮭はトキシラズ。そしておにぎりを巻く海苔は潮の香り、歯応えがおにぎりに合う様に計算されて選ばれた高級海苔。

たかがおにぎり、されど四宮お抱えのシェフが全力を尽くして作り上げた贅沢なおにぎりなのである。

「…」

おにぎりを包んでいたラップを手で丸めて小さな紙袋の中に入れる。この袋に入っていた三つのおにぎりをこれで総司は食べ終えた。これでここには用はなくなった。このゴミを捨てに行こう、と立ち上がろうとして、止める。

まだ午後の部が始まるまでは時間がある。それなのに何が悲しくてあんな暑い日向に入らなければならないのか。

若干引きこもり染みた考えに陥った総司は日陰の中に居座る事を選ぶ。良いじゃないか。どうせ午後からはグラウンドに出続けるのだから今くらい。

「総司先輩?」

日陰で涼む総司の頭上から聞こえてくる声。顔を上げると、包みを手にこちらを見下ろす石上。

「何してるんですか、こんな所で」

「涼んでる」

「…そうっすか」

ただ石上の問い掛けに答えただけなのに、何とも微妙な空気に包まれる。

話が続かない。というより、石上は校舎の方から現れたのだが、もしかして校舎の中で弁当を食べていたのだろうか?

(そうか、その手もあったか…)

確かに校舎の中の方が外よりも涼しいだろう。どうして自分もそうしなかったのか、わざわざ日陰を探して、地面にシートを敷いて、近付いてくる蟻を手で払って。

校舎の中を選んでいたら全部なくて良い事だったのに。

「え、何ですか」

「いや、別に」

気付かぬ内に石上を睨んでいたらしい。石上が戸惑っている。

…ちつ。

「舌打ち!? 僕、総司先輩に何か悪い事しましたか!」

「いや、別に」

聞こえていたらしい。さすが石上というべきか。

しかし悪い流れである。空気がまた微妙な感じになった。石上は糞雑魚メンタルだから少しフォローしてあげないとすぐに死にたくなってしまう。

「石上って午後は何に出るんだ?」

露骨な話題逸らし。石上もすぐにその意図に気付くが、触れない方が身のためだと察したのか、少し間を置いてから口を開く。

「最初の応援合戦だけですよ」

「ああ、そーいや応援団に入ったんだっけか。かぐやが言ってたな」

石上の返答を聞いて、総司はかぐやが言ってた事を思い出す。楽し

そうに、色々とかぐやが話した事を。

「女装するんだって？」

「…僕は無力です。皆を止める事が出来ませんでした」

「あははははは！いやまあ、ウケるんじゃないやねえの？知らんけど」

「そんな他人事みたいに…」

「他人事だからな」

「…まあそうですけど」

項垂れる石上。まあ同情はする。総司がもし石上と同じ立場だったなら、全力で自分の代わりに応援団を押し付ける相手を探していた事だろう。

しかし、石上は違う事を総司は知っている。どういう理由で応援団を引き受けたのかは知らないが、石上はその役目を全うしようと本気で取り組んでいる。

「どんなパフォーマンスか、楽しみにしてるぞ」

「…期待に添えられるよう頑張りますよ」

笑顔を浮かべてそう言えば、石上も笑顔を浮かべて返した。

そのやり取りを最後に、石上がこの場から去っていく。総司は石上の姿が見えなくなるまでその背中を眺める。

冗談めかして言った先程の台詞だが、本心である。石上は向こうがどう思っているかは知らないが、総司にとっては身内も同然である。そんな彼がいつもからは想像のつかない応援パフォーマンスを見せるのだ。それも女装して。

楽しみにならないはずがない。

総司は内心ワクワクしながらこの時はいたのだ。

(んで、期待通り楽しめたのになあ)

昼休憩が終わり、すぐに応援合戦が始まる。

周囲の生徒達の反応は総司の想像以上に盛り上がっていた。

『もしかしてウチら、入れ替わってるく!?』から始まった赤組応援団のパフォーマンスは初っ端のふぎけた雰囲気から一変、後半は力強い躍りを見せてくれた。

次の競技の200m走に出る総司は待機場所からそのパフォーマンス

ンスを見ていた。総司の期待通りの、中々に楽しい一時を過ごせたのだ。

それなのに――

(ホント、折角人が気分よく頑張るかって気分になったのにさあ)

競技のスタート地点に、教師に先導されながら向かう集団の中で、総司は見た。

先程までかぐや達生徒会メンバーに囲まれ笑顔でいた石上に歩み寄る、他校の制服を着た女子の姿を。

その女子に呼ばれたのか、振り向いた石上の表情が一変したのを。

(水差してくれんなよ)

総司の心は、冷水が掛けられたかの如く冷たくなった。

去年の事だった。中等部で暴力事件が起きたと聞いたのは。

被害者は荻野コウという生徒だった。その話は初め、生徒が話していたのを偶然耳にした、という形で知ったために特に興味は持たなかった。

荻野という生徒に関しても別に気にする程の背後関係は無かったため、首を突っ込む気はゼロだった。

『――。これが、中等部で起きた暴力事件の真相です』

だから、事件について忘れかけていた頃に、赤木からその真相について聞いてもどうとも思わなかった。

ただ、その後の話を聞いて、事件での最大の被害者である石上優という男はどうしようもない程の馬鹿だ、とは思った。

『は？ 告発しなかったの？ マジで？』

更に後、本格的に事件について忘れていた総司がかぐやから聞いた、石上優は事件について告発せず、真相を知ったかぐや達生徒会メンバーにも口止めたという話を聞き、さすがに開いた口が塞がらな

かった。

総司が同じ立場だったならば、自身を貶めた相手と何も知らず言い放題だった周囲に百倍返しを実行していた所だ。それで学園の生徒数がどうなろうと、教師の数がどうなろうと、二度と自分の視界に目障りな顔が入らないよう消していた所だ。

たとえそこまではしなくとも、多少なりとも周囲に仕返しをするのが普通だ、というのが総司の考えだった。

しかし、石上優は何もしなかった。仕返し処か、事件の真相を公表する事すらしなかった。一人の女の子を守るために。

——君がそこまでする価値が、その子にあるのか。

というのが総司の率直な感想だった。何しろその女子は荻野を疑いもせず、石上優を糾弾し続けたらしい。

事件後、動きを見せない石上優を恐れて別れを切り出した荻野に違和感一つ抱かず、周囲に流されるままだったそれに、こんな大事な扱いを受ける資格はあるのか。

そこまで考え、総司は自分に驚いたのを今でも覚えている。理不尽に怒れる心がまだ自分にも残っていたのか、と。

そして同時に、石上優という生徒に、興味を持ったのもこの時が最初だった。

『お、君が石上君か？』

『…えっと、貴方は？』

『四宮総司。たまに生徒会を手伝いに来るけど、その時はよろしく。石上会計』

『…はい？』

生徒会室で初めて話したあの日、石上優を身内として捉えた日だった。

「アンカー石上とかマジ下がる」

「勘弁してよ」

「やなんだけどー」

今、行われている競技は部活・委員会対抗リレーだ。このリレーのルールは体育会系団体、文科系団体の二チームに分けてリレーを行うというもの。

ただし、アンカーは赤白それぞれの代表者がチームに加わって務める。

本来、応援団の代表者はほとんどの場合が団長になるのだが、赤組の団長は不慮の事故（笑）で足を負傷し、出場出来なくなってしまう。そこで白羽の矢が立ったのが石上だった。石上は中等部時代陸上部に所属しており、部内では一番速かったという。その選択は実に利に叶ったものだった。

しかし、周囲はそう思わない。学園の生徒の殆どが石上を快く思わない。同じ応援団として石上の為人に触れ、思い直し始めた彼らが例外なのだ。

「えっ、アンカー石上なの？最悪じゃん」

「団長は？」

「風野君じゃないの？」

「えーっ、何で？」

石上に聞こえている事を知らずか、それとも知っていて話しているのか。話し声の数は更に増えていく。

これが、この学園にとっての普通なのだ。加害者に罵声ひがいしやを浴びせる、ごく普通の行動。

「総司」

背後から声が掛けられる。さすが妹といったところか、総司が今、どんな心持ちでいるか察しているらしい。

「かぐや」

「駄目よ。石上君の意思に反するわ」

「…」

四宮総司は身内に甘い。かぐやは勿論、早坂に千花、白銀と石上、そして最近よく話す様になった圭も、総司は身内と捉えている。そこ身

内に手を出し、傷を付けようものなら、誰が相手でも総司は容赦なく制裁を下す。その相手がどれ程いようとも。

しかし、総司は耐える。何しろ被害者本人がそれを望んでいないからだ。それなのに被害を受けてない総司が先にキレる訳にはいかない。そう言い聞かせながら、総司は耐える。

「…白銀？」

募っていく怒りに震えていると、ラインの後ろに立って出番を待つ石上に白銀が駆け寄っていくのが見えた。

石上の背後まで来た白銀は、自分の額から解いた鉢巻を石上の額に巻き付けた。

ずっと呆然としていた石上は驚いた様子で振り返ると、何やら白銀と楽しげに話し始めた。

「顔からコケちゃえ！クソ石上！」

話し終え、白銀が石上から離れていったその時だった。その声は、思いの外近くから聞こえてきた。総司とかぐやのいる前方、最前列にそれはいた。

「アンタが変な事したから私フラれたんだからね…！私、結構根に持つタイプなんだから…！」

「…」

ああ、そうだ。石上のお陰でお前はフラれたんだ。そのお陰でお前がどれだけ救われたのか、その本人が解っていないというのは何と救えない話か。

「総司…！」

本当に救えない。救えなすぎて笑えてくる。よくもまあ何も知らない分際で好き勝手言えるものだ。滑稽にも程がある。滑稽すぎて

「目障りだな」

「っ…」

その声を聞いて、かぐやは身震いした。総司が完全にキレている。このままでは、何をしでかすか解らない。石上の意思とか、それどころじゃなくなる可能性もある。

四宮総司は撫でたい

結論。赤組が勝ちました。まる

「まあ、割と得点離れてましたからね。最後のリレーでワンツーフィニッシュしないと逆転できなかったらしいですよ」

「はんっ」

現在、総司は赤木が運転する帰りの車内にいる。体育祭は赤組の勝利で閉会し、窓からは楽しげに友人達と帰途につく生徒の姿が見える。

「総司様のチームが一位をとっても、もう一つのチームが最下位ですからね」

「…かぐやがいて最下位って、マジで他がだらしなすぎだ」

車内で早坂と話すのは最後のプログラム、選抜リレーについて。その時点で赤組と白組は得点差がかなり離れており、白組が優勝するには選抜リレーをワンツーフィニッシュで締め括るしかなかった。

しかし結果は先程の総司と早坂の会話の通り、総司のチームが一位をとったものの、もう一方の白チームが最下位となり勝負あり。

中盤までは良い調子だったのだ。かぐやの奮闘もあり、中盤までは白組の一位二位で展開されていた。だが次第に赤組チームとの差が縮まっていき、そして終盤になる頃には一位二位は赤に奪い去られていた。

アンカーの総司が他のチームをごぼう抜きし、一位を奪取したのは良かったが、もう一方のチームが結局前に入る事はなかった。

「…寝てますね」

「寝てるな」

窓際にいる総司と早坂の間にはかぐやがいるのだが、そのかぐやは会話に参加せず、すやすやと寝息を立てている。やはり今年の体育祭は疲れたのだろう。その理由の一端である…というより理由の大部分である総司はほんのちよつぴり心を痛める。

ほんの、ちよつぴり。

「…まあ負けたけど、楽しかったな。苛つく事もあつたけど」

「…会計君、喜んでましたね」

「ああ。打ち上げに誘われた時の石上の顔見たか？いやー、何か子供の成長を目の当たりにした親の気分だわ」

「二つしか歳は変わらないはずですけど」

体育祭という競技に負けはしたが、今までで一番楽しめた体育祭だったと今の総司は振り返る。先程言った通り腹が立つ出来事もあつたが、それ以上に楽しい事が多かつた。

あのものがき苦しむ様から見事に成長した白銀のソーラン節に、千花が一位をとつた障害物競走。そして、総司達以外のメンバーに溶け込む石上。

「ホント、楽しかったわ」

「…」

この三人だけではない。競技に参加するかぐやと早坂の姿だつて総司の思い出に刻まれている。圭が遊びに来た事だつて。

「…」

「…早坂」

「はい」

「俺、何かおかしな事言つたか？」

「いえ、そんな事はありませんが」

「ならば…。何でそんなに睨んでんの？」

ただ体育祭を振り返つてただけなのに。早坂の視線が冷たくなつた事に総司は気が付く。いや、本当にただ体育祭を振り返つてただけなのに。何故に？

「…私も、今年の体育祭は楽しかったです」

「そうか」

「しかし、体育祭を振り返るとですね、ちよつと腹が立った出来事も思
い出しまして」

「…」

早坂が腹を立てた出来事。全く心当たりがない…事はなかった。
むしろ心当たりしかなかった。何しろそれと思われる出来事の渦中
に総司もいたのだから。

しかし何故あの時、早坂があそこまで機嫌を悪くしたのか、あの時
早坂の他に総司の傍にいた千花や圭が険悪な雰囲気になったのか、総
司には解らない。

「…早坂」

「はい」

「…いや、何でもない」

早坂に謝ろうとしたが、何が悪いのか解ってもないのに謝っても早
坂の気分を更に損ねるだけだろう。

開いた口を閉じて窓の外に目を向ける。

「総司様は…」

直後、早坂に呼ばれて振り向く。早坂は総司の顔を真っ直ぐ見なが
ら続ける。

「総司様は書記ちゃんか会長の妹さんが好きなんですか？」

「…は？」

一瞬、早坂の言葉の意味を計りかねた。好き、とは、恋愛的な意味
での事だろうか？

「別に好きじゃないけど」

「…そうなんですか？」

「いや好きじゃないっていうのは語弊があるな…。人間的には好きだ
ぞ？でも早坂の言う好きっていうのはあれだろ？恋愛的な意味でだ
ろ？」

早坂はこくりと頷く。

「そういう意味では好きじゃない」

「…」

いや、何でそこでちよつと表情が柔らかくなるのか。かと思えばどこか複雑そうな顔にも見えるし、早坂の胸中は一体どんな風になっているのやら。

「で？何でそんな事を聞くんだよ」

今度は総司が質問する番だった。早坂が納得する答えを出せたのは良いが、一体何故早坂は突然、あんな質問をしたのか。最近、千花と圭の二人と距離が近い事が気になったのだろうか？まあ、総司も早坂が思いを寄せている相手が誰なのか気になっているし、それと似た気持ちで早坂も抱いているのかもしれない。

というか早坂に好きな人がいると知ったあの日からそれとなく調査が続いているのだが、全くそれらしい男の姿が見えてこない。

早坂の行動範囲は狭いため、恐らく学園内の誰かと思っていたのだがもしかしたら別の学校の生徒と総司もかぐやも知らない内に知り合ったのかもしれない。

「総司様は、二人を下の名前で呼んでいたからです」

「は？…あ、ああ、そういう事か」

早坂の好きな人が誰なのかという問題に意識がいついていたせいで、早坂の返答が何に対してなのか一瞬解らなかつた。

しかし、確かに早坂の言う通り、最近千花と圭を下の名前で呼ぶようになった。そして異性を下の名前で呼ぶというのはその異性同士がそれなりに親しくなければ不可能な事である。だから早坂は総司が千花か圭のどちらかを好きなのでは、と疑ったという訳だ。

「二人の事は良い友人だっと思ってるよ」

「良い、友人」

だから何でそこで表情が柔らかくなる。そしてそれと一緒に複雑そうに唇の端を引くつかせるのか。

「…それはそれであの二人が可哀想になりますね」

「何でだよ」

「それが解ってないから可哀想なんですよ」

「…何故だ」

総司の心の底から出た一言、何故だ。しかし早坂の言う通り、それ

が解っていないから千花と圭が可哀想なのだ。まあそれは早坂も一緒なのだが。

「んん…」

和やかな雰囲気と険のある雰囲気が入り交じった微妙な空気の中、かぐやが吐息を漏らしながらこてん、と早坂の肩に頭を凭れかける。

「かいちよお…がんばってえ…」

「…」

総司と早坂が目を見合わせる。かぐやはもによもによと唇を動かしながら更に寝言を続ける。

「かいちよおいちい…すごいです…」

「…ぷふ」

どんな夢を見ているのか、寝言で明らかである。夢の中でかぐやは白銀を応援しているのだ。現実では周囲の目を気にして思い切り応援できなかった様だから、こうして夢で見ているのだろうか。

そんなかぐやの様子が面白く、総司と早坂は同時に吹き出す。

「ホント、いつもこうだったら可愛いのに…」

「何言ってるんだ、かぐやはいつも可愛いだろう」

「あーはいはい、シスコン発言は良いですから」

微笑みを浮かべながらかぐやの頭を撫でる早坂の台詞に食い下がる総司。そして食い下がってくる総司を手をヒラヒラと揺らしてあしらう早坂。

立場が上なのは総司のはずなのに、完全に子供扱いされている。

「おい早坂」

「何ですか？」

「俺にも撫でさせろ」

「…ホントこのシスコンブラコン兄妹は」

ため息を吐きながらかぐやの頭から手を離す早坂。総司はかぐやの方へと近付き、掌をかぐやの頭に乗せる。

女性の肩に凭れかかる女の子の頭を撫でる男。これは端から見たら完全にあれである。かぞ（ry

先程までの微妙な空気ではなく、ただただ穏やかな空気が流れる。

少なくとも、三人はその空気に包まれていた。
そんな三人に運転席からルームミラーを通して、赤木は視線を向けていた。

四宮総司は歌いたい

「という訳だから、総司も合コンに参加してほしいのよ！」

「どういう訳だよ」

かぐやにメールで呼び出されたと思えば開口一番、合コンに参加しろと言われた総司。無表情のまま冷たくかぐやに言い返した。

体育祭が終わって一週間、盛り上がるの余韻も薄れ、いつもの日常が戻ってきた秀知院学園。近い内にまた、文化祭という大イベントが待っているがそれもまだ待ちわびるには先の出来事。

いつもの授業を熟し、帰って財閥の仕事を熟す、そんな総司の日常は変わらず過ぎていく。

「お願いよ！このままじゃ会長が一人で盛り場に行っちゃうのよ！」

「盛り場って…、たかが合コンだろ？」

「何言ってるの!?!合コンというのは男女がつがいを求めて乳練り合う盛り場なのよ!?!早坂が言ってたわ！」

「…早坂？」

「…」

まだ全貌を掴めてはいないが、どうやら白銀が合コンに参加するらしいという事は解った。そしてそれに対してかぐやが危機感を覚えているという事も。

しかし、まあ男女がつがいを求めてという点まではともかく、乳練り合うって。盛り場って。そんなのヤリパじやないか。

そして、かぐやに合コンとはそういうものだとかき込んだという早坂に視線を向ける。

早坂はすぐに視線を逸らした。吹き込んだかどうかはともかくとして、かぐやの勘違いを正さなかった事は本当らしい。

「てか白銀が合コンに行くって、俺には信じられないんだが」

「会長を誘った人は他校との交流会って言って誘ってました。恐らく合コンだと気付いてないのだと思います」

「あー、なるほど…」

白銀は中々の堅物である。そういった催しに参加するとはどうしても思えなかったのだが、どうやら友人に騙されているらしい。騙してる友人は悪意ゼロなんだろうが。

「お願い総司…!」

「やだよ。てかそんな所に行ったってバレたら面倒になる」

「そこを何とか!」

「無理」

かぐやの頼みを一蹴する。さすがに妹の頼みでも嫌なものは嫌だった。かぐやの言うような盛り場ではないものの、合コンに参加する輩など性欲にまみれた汚物だ（総司個人の意見です）。そんな集団に入っていくなんて、想像するだけで身震いしてしまう（総司個人の意見です）。

「そう…。なら仕方ないわね」

「?」

「早坂。やっぱり一人で行って貰うしかないようだわ」

「おい」

自棄にすんなり引き下がったと思ったら、何て事を言い出すのか。

「いやいやいやいや、さすがにそれは駄目だろ」

「ですがこのままでは会長が汚れてしまいます!」

「大丈夫だから。白銀はそんなんで汚れたりしないから」

「卑しい女に目を付けられたりしたら…」

「ああああああああ、もおおおおおおおお…」

ハイライトが消えていくかぐやの目を見ながらため息を吐く。

「大丈夫です総司様、私にお任せください。この身がどんなに情欲に汚されようとも、会長だけは救ってみせます」

「そういう言い方はやめろ！」

何だこれは。まるで総司が悪者の様ではないか。総司に無理強いしようとしてるのはかぐやで、早坂を性欲まみれた汚物の集団（総司個人の意見です）に放り込もうとしているのもかぐやなのに。

何で女を振り回す最低男みたいな感じになっているのだろうか。

「…解ったよ、行けば良いんだろ」

「総司っ！ありがとう！大丈夫、早坂も一緒に行かせるから！」

「おい」

早坂を庇うつもりでひきうけたのに、まさかの早坂同行という現実。早坂に視線を向けるが、とつくにこうなる事を知っていたかの如く平然としている。

まさか、全て承知の上だったのか。二人で手を組んで嵌めたのか。

「…お前ら覚えてろよ」

「え」

地の底から湧いてきた様な低い声がかぐやと早坂の二人に向けられたのだった。

「…来てしまった」

周囲は盛り上がっている。歌い、踊り、飲み、食べ、すでに男女のペアが出来上がっているのも見受けられる。

総司は右手にコップを持ち、周囲を見回す。白銀は入り口付近で秀知院学園の制服を着た友人と話している。あの様子から、予想通り白銀はこの交流会が実は合コンだったとは知らなかったと思われる。

これで、かぐやは一つ安心できる要素を得る事が出来たという訳だ。白銀は自分の意思で合コンに参加した訳ではないと。

因みに早坂はその白銀の傍にいる。背中まで伸びる髪は早坂が着けているウィッグ。普段よりも胸元が豊かに見えるのはパ○ド。完

壁の変装である。あれを見て早坂愛と繋げられる者はいないだろう。(何て言うと思ったか。いや、何故バレない? やっぱりパツ〇か? 〇ツドの力なのか?)

ウィッグは着けているものの髪の色はほとんど変わっていない。目はカラーコンタクトを着けているが、こう、雰囲気から早坂だと解らないのか。

まあ、白銀と早坂は殆ど交流がないから気付かれないのかもしれないが。

(しかし、早坂の私服なんて久し振りに見たな)

周囲の女子に比べて良い意味で浮いていた。恐らく変装なしでも今と同じくらいに似合っていた事だろう。

総司の隣から、早坂を気にする男の話し声が聞こえてくる。ああ、早坂が狙われている。どうするべきか、止めるのは不自然すぎるし、先に初対面を装って声を掛けるべきか。

しかしそれだと白銀に近付くというリスクを冒す事になる。総司は早坂と違って白銀との交流が豊富だ。変装しているとはいえ、バレる可能性は十分ある。

言うのが遅れたが、総司も変装している。金髪のウィッグを着け、度が入っていない眼鏡を着用。早坂と同じ様に制服ではない。かぐやと早坂に今の総司の姿に合うコーディネートを選んでもらい、その服を身につけている。

そのせいか、総司本人は気付いていないが早坂と同じく良い意味で周囲から浮いていた。ちらちらと見てくる女子がいる複数いる事に総司は気付いていた。その理由は解っていないが。

「ねえねえ！君は歌わないの?」

早坂と白銀の様子を悟られぬよう然り気無く見遣っていると、総司の隣に座っていた茶髪の女子に声を掛けられた。

活発そうな印象を受ける服装をした女子だった。総司にタッチパネルを差し出しながら距離を詰めてくる。

まあこの場において全く歌わない方が不自然か。総司はタッチパネルを受け取り操作を始める。すると、総司にタッチパネルを差し出し

た女子が更に距離を詰めてくると、総司が操作するパネルの画面を覗き込んできた。

「うわあ、それ英語の曲だよ？君…えっと…」

「…ああ、白川奏汰。よろしく」

「うん！私は中臣富美加！よろしくね？えっと…、奏汰くん」

いきなり下の名前呼びという距離感の狭さを披露する。こういうのは、あれだ、ビッチというやつか。いや、さすがにまだ殆ど話した事もない相手をいきなりビッチ認定はしないが。

「奏汰くんは英語得意なの？」

「まあ。日常会話は問題なく出来ると思う」

「えっ、スゴいね！私、英語は全然ダメなんだあ…」

「英会話と授業の英語は違うぞ。俺も英語の成績は今一だから」

嘘である。こんな事を言っているがこの男は知っての通り学園内では一度を除いてトップを守り続けてきた。そんな男が成績が今一なんてあり得るはずがない。

しかしそんな事を知る由もない中臣は「へえ、そうなんだねえ」なんて言っている。完全に騙されている。

「…？」

パネルを操作して曲を予約し終え、ふと視線に気付く。入り口の方から。早坂がいる方から。というか、早坂から。

睨まれている。別にいつもと変わらない様子に見えるが総司には解る。あれは睨んでいる、何故かは知らないが。

「奏汰くん、どうしたの？」

「え？…いや、何でも」

「…あのすっごく綺麗な人が気になるの？」

総司が視線を向けていた方を見て、誰を見ていたか悟られてしまった。いや、まあ気になってたというのとは事実だが、恐らく中臣の質問に込められた意味での気になるではない。

だから総司は首を横に振る。

「そういう訳じゃない。ただ、向こうがこっち見てたから何だろうって思っただけ」

「あー…。奏汰くん、人気ありそうだもんね。彼女は…いたらここには来ないか」

こうして話していると、初めに中臣に抱いた印象とはまた違った印象を受けてくる。茶髪、派手な服装とかなりチャラけた外見をしているが会話をしていると中臣本人から穏やかな印象を感じる。

「あ、奏汰くんの番だよ？」

「ああ…」

すっかり曲を入力していた事を忘れていた。テーブルに置かれていたマイクを手にとって電源を入れる。曲のイントロが流れ、総司はマイクを口元に近付ける。

先に言っておくが、総司は歌下手ではない。どこぞの生徒会長の様になちよつと苦手とかではない。自信があるという訳ではないが、音痴ではないと自負している。普通に全校集会では校歌は歌えるし、何なら中等部時代の合唱コンクールの曲でソロパートを任された事もある。

これで音痴な筈がないだろう。音痴だったらソロパートを任される筈がない。

普通に歌う。総司のお気に入りこの曲は、時間の合間に良く聞いており、入浴中に口ずさむ事だつてある。ネイティブ、とまではいかないがそれに近い発音の英語で歌を披露する総司に視線が集まる。

「……………」

四分半の曲が終わり、マイクを置く。そこで気付く。やけに静かな事に。

総司が歌っている途中から皆聞き入ってしまい静かになっていたのだが、歌を楽しんでいた総司はここまで気付けなかった。

「奏汰くん…。凄く歌上手なんだね…」

「いや、そんな事は…」

「そんな事あるよ！英語もすつごく上手だし…、私感動しちゃった！」
「そんな大袈裟な…」

言葉通り、本気で感動しているらしい。中臣はキラキラと瞳を輝かせて総司の目を見ている。総司としてはむず痒く感じてしまう。

「…」

で、ふと総司は視線をある方向に移す。

その方向は入り口の方、つまり早坂と白銀がいる方。

先程まで静まり返っていた部屋は総司に続けと歌い出す者達の盛り上がりで、総司が歌い出す前より更に騒がしくなった。

そんな中、周囲の騒がしさと裏腹に早坂から向けられる視線は更に冷たくなっていた。

(いや、何故だ)

白銀が何が何だか解らない様子で早坂と総司の方をキョロキョロと視線を行き来させていた。そして、総司もまた白銀と同じ様に何が何だか解らない。何でここまで早坂は機嫌を悪くさせているのか。

(マジで何で?)

総司の内心の眩きは、誰にも届く事はない。

そうして、合コンは尚も続くのである。

早坂愛は二人が良い

「あのー…。大丈夫、ですか？」

「…大丈夫だよ？どうして？」

「…いや、何となく」

白銀が声を掛けてくる。しかし何故、そんなにも気まずそうなのだろう。早坂はさっぱり解らない。自覚もない。自身が今、どんな顔をしているのか。

「…」

白銀から視線を移す。部屋の奥、茶髪の女子と話す金髪の少年を見る。

あの金髪はウィッグ、掛けている眼鏡は伊達。そう、あれは変装した総司である。総司は早坂の視線に気付いているのか否か、隣の少女と話し続ける。

総司の表情は無表情より少し柔らかい程度だが、少女の方は楽しげに華やいだ表情をしている。

「…」

ああ、イライラする。もしかして、総司は忘れていたのではないか。自分達がここに来たのは、白銀を他の女から守る事、或いは出来たらこの場から白銀を連れ出す事。

それなのに総司は白銀を全く気にする事なく先程からずっと隣の少女と話している。もしか、案外この合コンを楽しんでいるのではなからうか。

「…」

なるほど、そつちがそのつもりならこつちにだつて考えがある。早坂は総司を睨んでいた鋭い視線を切り替える。苛立ちに震える心を静めつつ、白銀の方へと振り返った。

「ねえねえ白銀君。君は歌わないの?」

「え? いや、俺は…」

「まあ、君が来たくてここに来た訳じゃないのは解ってるけどさ、折角なんだし楽しんじゃおうよっ」

努めて明るく白銀に言う早坂は、パネルを持って白銀との距離を詰め、二人でパネルの画面を共有して見る。ともすれば、二人の肩がくっ付きそうな程にその距離は近かった。

流石の白銀も思春期男子、早坂との距離の近さ、そして早坂から香る女の子特有の香りに思わず頬を染める。

すぐにブンブンと首を振って正気を取り戻す所は流石と言えるが。

「白銀君?」

「…悪い、ハーサカさん。俺、やっぱり帰るよ」

「…」

ああ、そうなるか。早坂の胸中に一筋の冷たい風が流れる。それと同時に笑みが溢れる。

(良かったですね、かぐや様)

脳裏に浮かぶのは主人のこれでもかと安堵する顔。

早坂も一人の女。それとなくアピールした直後に男に帰るなんて言われればそれはそれでショックである。しかしそれ以上に、この結果が嬉しくもあるのだ。

主人が選んだ男が、この程度のアピールで流される様な軽い男でなくて良かった。

「そうですか」

「…その」

「応援してますよ。白銀くん」

「…。ありがとう」

罪悪感を抱いてるのだろう、複雑な表情を浮かべる白銀に微笑みか

けて言ってやれば、白銀は早坂にお礼を言ってから部屋を出ていく。その後ろ姿を見届けてから、早坂はポケットから取り出したスマホを操作して、白銀が退室した旨をかぐやにメールで報告する。

さて、早くもこれでミツシヨンコンプリートという訳なのだが、どうしようか。自分も帰ろうか。というか、帰りたい。これが早坂の本音の一部である。

しかし、だ。

「…」

総司の隣にもう一人女が増えていた。何を話しているかは周囲の盛り上がりで紛れて聞き取れないが、二人の少女の表情から会話はそれなりに進んでいるらしい。

「あれ、君一人？さつきまでいた奴は？」

総司の方を眺めていると、早坂の隣に遠慮なしに腰を下ろすチャラけた雰囲気の良い男。茶色に染めた髪をワックスで立たせ、服装もかなり着崩した典型的なチャラ男だ。

「えっと、さつきの人は何か合コンだつて知らないで来てたらしくて。好きな人がいるし、その人にこういう場所に来てたつて知られたくないつて帰つたの」

白銀はそこまで明言した訳ではないが、この言葉を本人が聞けば即座に否定するだろうが、早坂の言葉は事実である。

「あはははは！それで置いてかれたの？可哀想お〜」

「…」

笑い出すチャラ男。早坂は外向けの笑顔を崩さぬままジュースの入ったコップを手に取り、ストローを啜る。

尚、笑顔こそ浮かべているが内心の気分は最悪なのは言うまでもない。

「ま、とりあえず歌おうぜ？ほら、何歌う？」

「え？えつと…」

チャラ男が距離を詰めてくる。更に腕をソファの背凭れの上、それも早坂の背後に置き、端から見れば二人はかなり密着している様。

早坂が上体を反らして距離を取ろうとしてもチャラ男はへらへら

と笑いながら更に詰めてくる。

「そうだ！俺とデュエット歌わね？俺、最近彼女にフラれちゃってさあ。ほら、失恋した同士って事で！」

別に失恋した訳ではないのだが。何なら、絶賛片思い続行中なのだが。勝手に失恋認定しないでほしい。ちよつと傷つく。

というか、近い。ぐいぐい来すぎ。彼女にフラれたと言ってたが、その彼女は良い判断をしたと思う。もつと良い男はいる。探すんだ、彼女さん。

「ほらほら、何歌おつか？」

「あは…、ぐいぐい来ますね…」

「そりや君みたいな可愛い子がいたら男ならぐいぐいいくでしょ！」

だがその彼女…というより、元彼女さんを心配している場合ではない。これ、地味に危ないのではなからうか？身体的にも。

かなり面倒そうだがそれとなくお断りさせてもらうか、しかしこういうタイプはかなりしつこい。無理矢理、という事だってあり得る。

「おい、ハーサカ」

「え…」

さて、どうやってこの場を乗りきろうか考える早坂の頭上から声が掛けられた。

早坂とチャラ男が見上げる。こちらに目を向ける、チャラ男と負けず劣らずのチャラ男がそこに立っていた。

「そ…」

「ドリンクバー行かないのか？空だぞ？」

金髪のチャラ男は早坂の手元にある空のコップを指差しながら言う。早坂は視線を落とし、それからすぐに顔を上げて立ち上がる。

「待って、私も行く！」

すでにドアノブに手を掛けていたチャラ男を追う早坂。チャラ男が扉を開け、それに続いて早坂も部屋を出る。背後から早坂を呼び止める声が聞こえてくるが無視。

ばたん、と扉が閉まり、先程まで耳にガンガン響いた大音はほとんど聞こえなくなる。聞こえてくるのは廊下に流される歌と、他の部屋

の盛り上がりから聞こえる僅かな音。

そんな空間の中で歩く早坂は、隣を歩くチャラ男を見上げて口を開いた。

「良かったんですか？さっきの子達は」

「何が？」

「楽しそうだったじゃないですか。多分、狙われてましたよ？」

「…まあ、いつものお前やかぐやとか以外の同年代の奴と話すのは新鮮だったさ。でも別に楽しくはなかったぞ」

「…鼻の下伸ばしてませんでした？」

「な訳ねえだろ。てか、お前ずっと俺の方見てた癖に解らなかったのか？」

苦笑しながら早坂を見下ろすチャラ男：もとい総司は早坂に問い掛ける。

「どうやら、総司の方を何度も見ていたのはバレていたらしい。早坂は悔しさを感じながらも努めて無表情を保って答える。

「私にはそう見えません」

「…お前の目はいつから節穴になったんだ？」

「総司様が自覚してないだけじゃないですか？」

「違う、そうじゃない。言いたいのはこんな事じゃない。」

解つてはいるが、早坂の意志に反して口から出てくるのは総司を貶める言葉ばかり。

「はあ…」

「何ですか、そのため息は」

「いや、何言っても無駄だと思つて」

「…」

でも、総司にも悪い所はあるのではと早坂は思う。ハッキリ言葉に表さない自分が悪いとは思うが、もう少し色々と察してくれても良いのではないか。基本的に敏い癖に。こういう時だけ鈍いのはずるいと思う。

「…総司様。今、久々に埋め合わせカウンターが増えましたよ」

「は？何でだよ」

だから、こうして総司をちよつと理不尽な目に遇わせるのも仕方ないのだ。

「そして今ここで埋め合わせを所望します」

「いや、今ここでどうやって…おい、まさか」

「はい、そのまさかです」

総司が恐る恐るといった様子で問い掛け、早坂はその問いに笑みを浮かべて答えを返す。

「いやいやいや、まてまてまて。まず何で埋め合わせしなきゃならんのだ」

「私の目の前で女に鼻の下伸ばしてたからです」

「だから伸ばしてないって」

「それと…」

「？」

「…もう一つは、秘密です」

早坂が速足で歩きだし、総司の前に出る。そんな彼女が向かうのはドリンクバーではなく、受付だった。

そんな早坂を総司は止めようとせず、ため息を吐いてただついていくだけだった。

時は少し遡る。まだ総司が二人の少女に挟まれ会話していた時である。

何を話したのかは知らないが、白銀がカラオケルームを出ていったのを見て、総司もこれで任務完了という事は了承していた。しかし、この後どうしようかと悩んでいたのも早坂と同じだった。

帰るべきか、残るべきか。一度、早坂と話がしたい。この後の事、そしてさつきから自分を睨むのは何故なのか、そこも含めて話し合いたかった。

そんな総司が見たのは、チャラ男に迫られる早坂だった。擬態の笑顔を浮かべてチャラ男に対応する早坂。それに気を良くしたチャラ男が早坂との距離を更に詰めていく。早坂が引いているのに気付いてないのだろうか、それとも気付いた上で迫っているのか。

どちらにしても、早坂が困っている。その事実だけで総司には十分だった。

四宮総司は、身内には甘いのである。

「ちよつとドリンクバー行ってくる」

そう言い残し、二人の返事を待たず立ち上がった総司は出入り口の方へ足を向ける。

そして――

「おい、ハーサカ」

早坂に助け船を出したのだった。

部屋を出てからは何故か早坂に埋め合わせをする事となった。理由は、先程のカラオケルームにて話しかけられた二人に鼻の下を伸ばしていたから。いや、伸ばしていないのだが、そう見えたらしい。意味が解らない。

埋め合わせの内容はここで二人で歌う事。断つたら後で何を課されるか解らないし、それくらいで早坂の機嫌が直るのなら安いものだと無言の了承をした総司は今、先程のカラオケルームからは離れた部屋にて早坂と二人でいる。

「…楽しそうに歌いやがって」

自分に理不尽を課した張本人はそれはとても楽しそうにマイクを持って歌っている。笑って、小躍りなんてして、本当に楽しそうに歌っている。

そんな顔をされたら何も言えなくなってしまう。

今回の理不尽は許容してやるか、なんて思ってしまう。

「ふう〜…。何か？」

「いや？随分楽しそうだなと思ってな」

「ええ、とても楽しいですよ？総司様の奢りで好き放題歌えるんですから…」

「…」

ただ、理不尽は理不尽。総司を無理矢理この部屋に連れ込んだだけでなく、カラオケの料金も払わせようとするその度胸に、総司は応えなくてはならない。

(…くくく)

内心でほくそ笑む。総司の右手にはスマホが握られていた。カメラレンズを早坂の方へと向けていたスマホの位置を正して画面を見る。

パパパ、と指で操作。そしてある事を確かめてから総司はご満悦に笑う。

「総司様、曲流れてますよ?」

「おっと…」

早坂に言われ、総司は一度スマホの画面をタップ、自分の傍ら、ソファの上にスマホを置く。そしてテーブルに乗ったマイクを持って歌い始める。

リズムに乗った総司の歌声が響く中、傍らに置かれたスマホは未だ画面を光らせていた。

そこには、楽しそうに笑顔を浮かべてマイクを握る早坂の顔が映されていた。

四宮総司は兄である

「…」
ああ悲しい、悲しすぎる。あわや涙が出そうになるくらい、総司の心は今、悲しみに満ちていた。

総司が今いる場所は学園の敷地内、校舎裏の小さな脇道。そこで足を止め、こつそりと建物の影に身を隠しながら向こう側を見つめていた。

「ううううううーっ！あうあうあうあうああああああーっ！」

そこには、両目に涙を溜めながら奇声を発する一人の少女がいた。奇声、と聞けば大半の人物がマイナスのイメージを持つだろう。総司も例には漏れず、奇声を発する人が近くにいれば気持ち悪いと、傍に寄りたくないと思ってしまう。

しかし、今の総司は違った。近づきたくないとは思っているが、気持ち悪いとは思っていない。というより、思えない。

何故なら、目の前で奇声を発する一人の少女、この光景があまりに、あまりに悲しすぎるからだ。

（何があった…。いや、あれ関連だとは思うけど、本当に何があった真妃さん…！）

許されるなら、今すぐにでも彼女に歩み寄り慰めてあげたい。しかしそれは出来ないし、何より総司がしてはいけない事である。

何が起こったのかも大体想像がつく。真妃のあの発狂っぷりは恐らく、柏木と田沼のあのシーンを見たのだろう。総司が実際にその場面を目にしていなかったため断定は出来ないが、可能性は高い。

(不憫だ…、不憫すぎる…ん?)

溢れそうになる涙を耐えながら眞妃を見守る。大声を上げ終えた眞妃は力尽きた様に地面に倒れ込んだ。いや、正真正銘精魂尽き果てたのだろう。口許から魂が抜けている気がする。

その時だった。総司がいる場所とは眞妃を挟んで反対側から歩いてくる二人の男子生徒を見たのは。

並んで歩いてくるのは白銀と石上である。二人は楽しげに話して倒れている眞妃に気付いている様子はない。

(…まずい。いや、これはある意味チャンス、なのか?)

一瞬、眞妃の醜態が見られる、まずいと内心で過るもこれはもしかしたらチャンスになるかもしれない。

ここで白銀と石上が眞妃に気付けば、こんな様子の眞妃を放つては置かないだろう。そうして、何であんな所に倒れてたんだという話になって、眞妃がこれまでの出来事を話して——他人に悩みを打ち明けるといふのは想像以上に気持ち軽くなる。それに白銀も石上は親身になって聞いてくれるだろう。

：石上は少し心配ではあるが。いや、眞妃を雑に扱うとかそういう風に思っている訳ではなく、こう、石上は変な方で想像力が豊かだから。

とにかく、このまま見守り続ける事にする。総司は視線をそこに向けて続ける。

「ん?何か踏ん…ええーっ!」

「バカー—————っ!」

見守り続ける事が出来なかった。倒れた眞妃に気付かぬまま歩き続けた白銀と石上。その結果、白銀が眞妃の頭を踏んでしまった。

堪らず飛び出す総司。白銀と石上に任せようという思惑は呆気なく頓挫したのだった。

ああ、何であの時飛び出してしまったのだろう。完全に失敗した。いやでもあんなの飛び出すに決まってるだろう。神様も何て残酷な仕打ちを受けさせるんだ。失恋した人に想いの対象だった男と親友のデーブキスシーンを見させたりそれによって傷心中の眞妃を白銀に踏ませたり。

(あんなの見せられたら飛び出るって。多分かぐやでも俺の立場なら飛び出るわ、多分)

必死に内心で言い訳する総司。その正面には総司を睨み付ける眞妃がいる。

現在、総司達は生徒会室に居る。総司と眞妃はテーブルを挟んで対峙する形でソファに座り、白銀と石上は眞妃にお茶を淹れている。

何でこんな事になっているのかというと、まあこれまでを見ていたら解ると思う。倒れていた眞妃を白銀達と一緒にここまで運んだのである。

そして正気に戻った眞妃が総司を見て、こうなった。生徒会室の雰囲気は最悪である。

「……こうして顔を合わせて話すのは初めてですね、おじ様」
「そう、だな。そういえばそうか」

総司は帝から眞妃の話を色々聞いていたためそんな感じはしないのだが、眞妃は違う。勿論、会った事自体はある。しかし、話した事はない。

因みに話は変わるが逆も然りだ。総司からかぐやの話を聞いて色々知っている帝だが、かぐやと実際に会話した事はない。

「おじ様のお噂は耳に入ってますよ？四宮の業績をバンバン上げているそうじゃないですか」

「別に大した事はしてないさ。四条の方こそ調子良いじゃないか。そろそろ国内進出狙ってるのか？」

「ふふ、それを貴方に言うと思います？」
「……」

白銀と石上が完全に硬直してしまっている。先程までとは違い、剣

呑な雰囲気を隠そうともしないまま話す総司と眞妃に戸惑っているのだ。

「あの、お茶です…」

「あら、ありがとう。えっと…」

「…あ、石上優です。…それで、貴女は？」

「…私を知らないなんて、不調法者ね。まあいいわ、教えて上げる」

眞妃が胸を張り、手を当てながら高らかに告げる。

「私は四条眞妃。正統な四宮の血を引く者よ」

「四宮…、え？じゃあ総司先輩達と親戚という事ですか？」

「ええそうよ。総司とかぐやは真正銘私の親族。二人は私の再従祖叔父と再従祖叔母にあたるわ」

「え、あ、そうですか。遠いんですね」

多分石上は再従祖叔父と再従祖叔母がどの位置にあたるのか解らないのだろうが、響きで色々悟ったらしい。

石上の言う通り、かなり遠い。

「それで？四条はあんな所で何してたんだ？」

白銀が問い掛ける。

あ、まずい。どうしよう。興味ないフリして出ていくべきか。

そんな迷いをしてる時点で時すでに遅し。

「そんな事も解らないの!?!私をあそこで…あそこで…ほんと…何してたんだろね…」

「え？え!?!」

ポロポロと涙を流す眞妃に戸惑う白銀と石上。そして、菩薩のような表情になる総司。

仕方ないだろう、どんな表情をすれば良いというのか。笑えば良かったか、泣けば良かったか。否、無表情が最善の選択である。

「何がしたいんだろね、私…」

「全然解らない!」

「お願いです！説明してください!」

眞妃がこれまでの経緯を話し始める。総司がこの場にいるというのに。相当動転しているらしい。

まあ、知つての通り総司は既に眞妃の周囲で起きた事を熟知しているのだが。

「つまり、四条はあいつが好きという事か」

「はあー？好きとかじゃないわよ！馬鹿にしないでちょうだい！…まあ、向こうから告白してきたら付き合う事を考えないでもないけど」

ツンデレを極めている発言が眞妃の口から飛び出す。と同時に総司は白銀の表情が引きつったのを見逃さなかった。

恐らく、それはそれは何とも馴染み深い台詞だった事だろう。そして、胸に刺さる台詞だった事だろう。

総司は僅かに頬を膨らませた。怒っているからではなく、笑いを堪えるために。

「いやちよつと待つてください。それはただの甘えでしょう」

ここで石上が口を開いた。石上に三人の視線が集まる。

「好きなら自分から告白するべきじゃないですか？向こうも同じ気持ちだったら永遠に結ばれないですよ？」

「…」

「そうやって人は後悔するんです。あの時こうしておけば良かったって。あの頃に戻りたいって。そんな哀れな人間になりたいんですか？」

「？」

白銀の心がかなり傷ついたのは言うまでもない。そして総司の頬が更に膨らんだのも言うまでもない。

「…勘違いしてるみたいね石上。別に私は翼君の事なんて好きじゃないわ」

「いや好きでしょ。好きじゃない人なら付き合っても良いなんて言いませんよ。後、あの人翼っていうんですね」

「好きじゃないわよ」

「いやどう見ても好きでしょう？」

「好きじゃないって！」

「そう言いながら好きなんでしょ！」

「…うん」

「あつ、思ったより素直で可愛いなこの人！」

先程までとは打って変わってしおらしくなる眞妃。その姿はあまりに可愛らしく、石上と白銀はそのギャップにグツと来たらしい。

総司もその例に漏れず、どころか石上と白銀以上に胸にキュンキュン来てしまった。

（まずい。何だこの覚えのある感覚は。…今すぐ眞妃さんの頭を撫で回したい）

重症だった。総司は必死に暴走しそうな内なる自分と闘っていた。

「それなら略奪でもするのか？相手は彼女持ち、それもその彼女はお前の親友。これまでの関係が木っ端微塵に壊れるが」

「…四宮の次期当主ともあろう男が、野蛮なこと。一人の男を巡ってどろどろの愛憎劇？そんなはしたない事をこの私がするとも？」

雑念を振り切り、眞妃に険悪な感情を抱いてる風を装って問い掛ける。総司の問い掛けに、眞妃は絶対零度の視線を向けながら返す。

また部屋の温度が下がっていく。総司と眞妃を中心に、白銀と石上を巻き込んで。

「学生のおままごとの恋愛ごっこが長続きする筈ないわ。どうせあの二人もすぐに別れる。私はただお茶を飲みながら待てば良いの。…そう、別に彼が誰と付き合おうと関係ない」

眞妃の視線がずらされる。直後、眞妃はうずくまりながら嗚咽を漏らし始める。

「最後に私の傍にいてくれたら…。それで十分…」

「…相当参ってんなこれ」

先程は総司がこの場にいる事を忘れていたで片付けられるが今回は無理だ。思い切り会話の相手である総司の前で眞妃は泣き出してしまった。

「…じゃあ、四条は別れさせる工作とかはしないのか」

「渚は大事な友人だしね。そういうのをするつもりは今のところないわ。多少の憂さ晴らしはするけど」

涙を引つ込め、再び尊大な態度を取り戻す眞妃。もうその態度に白銀も石上も騙されないが。この短時間に眞妃のか弱い面を見すぎて

しまったが故に、その態度もどこか微笑ましくすら感じてしまう。

「僕…何だか同情してきました」

「石上？」

「待つのが辛いですよ、僕なら耐えられない」

「あはは！か弱い人間だ事！私はアンタと違って鋼の心を持つてるから全然平気よ！」

「すごい…」

石上が尊敬の念が籠った視線を真妃に向ける。真妃がその視線に調子を良くして更に態度を大きくさせる。

「だって今頃、いつか二人で行きたかったデートスポットで遊んでたりするんですよ？」

「――」
真妃の中で時が止まった。少なくとも、総司と白銀にはそう見え

た。
「初めて二人で遊園地に行っても、彼は『元カノと来た事あるけど』なんて思う訳じゃないですか。手料理を振る舞っても元カノの味と比べられて。初めてのキスも妙に手慣れたり、ホテルの場所もバツチり把握してて…」

「石上。おい、石上」

「そうだな。後は、あれだな。彼の部屋に遊びに行ったらまだ元カノと続いてた時の名残が残ってたりな。捨てられないで残ってた元カノとのツーショット写真が机の中に入っていたり、カレンダーに自分とのじゃないデートの約束がメモされていたりとか」

「総司まで！おい二人とも！」

石上に総司が続く。そして白銀も、なんて事はなく、白銀は慌てた様子で総司と石上を止めようとしていた。

「やめてよ…そんなこといわないでしょ…ひどい…」
「…」

「あ、これは僕が悩んでる事にして！先輩を傷つけるつもりじゃないかったです！」

石上はともかく、総司としてはちよつとした悪戯心のつもりだっ

た。しかし効果は想像を越えて絶大だった。

謝罪の言葉はないが、内心では途徹もない罪悪感に苛まれてたりする。

「そういえば渚、週末デ○ズニーに行くって言ってた…。ミ○コスタのハーバービューのテラス席を予約したとも…。もう彼とミラ○ス夕泊まれないわ…」

わなわなと両手を震わせ、声を震わせながら友人との会話を思い返している眞妃。

「他人を顧みない自己愛の権化…。男を誑かすしか能のないヘンテコヘアピン女…絶対に許さない…」

（うっわ、すつげえ既視感のある顔と聞き覚えのある台詞）

ハイライトを失くす眞妃の目を見ながら総司は物凄いデジヤブを覚えていた。

何故だろうと考える内に話は進む。奥手だった筈の翼が壁ダアンとかいう技を誰かに吹き込まれたせいで柏木とデキたやら、その技を教え込んだ奴の皮を剥いで鞣すやら。

その時、白銀が震えていたのはきつと気のせいだろう。総司は気付かなかった事にする。

「もう四の五の言うの止めたわ！略奪？上等よ！絶対に彼を射止めてやるわ！…二人とも…協力、してくれるわよね」

「緩急が強すぎる！」

「てか、それとなく俺を除外するのな」

こういう態度の緩急が強すぎる場合はどちらかが演技、或いはどちらも演技というパターンが殆どだが眞妃の場合はどちらも本気である。

だからこそ、白銀も石上も流される。相談相手に選ばれていない総司は別だが。

（別に相談くらい乗るけどなー。まあ、眞妃さんのプライドが許さないんだらうけど…ん？）

仲間外れにされた事をちよっぴり寂しがっていると、生徒会室の扉が開かれる。その音に振り向く全員の視線が、部屋に入ろうとするか

ぐやの姿を捉えた。

「あら、こんばんは。お婆様？」

「眞妃さん…。お婆様は止めてと言っているでしょう？ 同い年なんですから」

「続柄上そうなってるのだから仕方ありません。目上の者は敬えと教わっているのです…」

「そうですね。分家は本家を敬うのが筋ですよね…」

総司と眞妃が話していた時と同種の空気が部屋を包む。

「あれが噂の本家末家論争ってやつ？」

「恐ろしいっすね」

「あれはかなりマシな方だ。というより可愛いもんだろ、姉妹喧嘩みたいで…」

「いや、姉妹喧嘩にしては殺気に満ちすぎてるんですが…」

総司は言いながら、初めて今代の四条の当主と会った時を思い出していた。許されるのなら今この場で殺してやりたい、そんな目で見られたのを今でも覚えている。

そしてそれと同時に、やけに眞妃の仕草や台詞が可愛く思えたのか、その理由も総司の中で判明した。

（そっか。姉妹喧嘩してるって思えるくらい二人が似てるんだ）

かぐやと眞妃。二人はとても似ていた。好きな相手に告白しようとせず告白させようとする所。打たれ弱く、涙脆い所。ツンデレな所。大切な友人に向けて呪いの言葉を吐く所。

少し考えるだけで共通点がこんなにも出てくる。

「会長…。どういう事ですか…。可愛かったんですか？ 眞妃さんが？」

「い、いや！ その、だな！」

「四条先輩はツンデレっぽいところが可愛かったです」

「不調法者は黙って！」

（ほら、不調法者なんて言っちゃってさ）

改めて見れば見るほどかぐやと眞妃が似た者同士に見えて仕方がない。

かぐやは勿論そうなのだが、かぐやに似ている眞妃も兄という立場で可愛く思えてしまう。血縁上、兄ではなく叔父に近いのだが。

「総司、何を笑ってるの?」

「え?」

「まさか貴方まで眞妃さんが可愛かったなんていうんじゃないでしょうね?」

「いや、可愛かったぞ。かぐやに似てたから」

「…誰が私に似てたんです?」

「眞妃さんが、かぐやに、似てた」

「…総司。今から少しお話しましょうか」

にっこりと微笑むかぐや。しかしその微笑みは黒く染まっており、その笑みを見た白銀は苦笑を浮かべ、石上は尋常じゃない程震え出す。

生徒会室にて説教が始まった。まあ、総司が考えを改めるつもりが微塵もなかったため効果は皆無だったが。しかし眞妃と似ているなど認められないかぐやの説教は千花がやって来るまで続いた。

「同族嫌悪」

「黙りなさい!」

なお、説教が終わってから微笑ましい兄妹喧嘩は夜まで続いたという。

四宮総司は元気付かせたい

「こりゃ無理だろ。これってかなり年代物だから修理部品残ってるか怪しいし、SDカードじゃなく内蔵メモリに保存してたんだろ？データの復旧は無理だ」

ボロボロに壊れた携帯を見ながら総司は長々と説明する。

総司が握っている携帯電話はかぐやの物である。着メロは16和音、写真も10万画素という代物だ。思い入れがあるとずっとかぐやはその機種を使い続けていたのだが今日、屋上から落としてしまったらしい。

「かぐや。明日一緒に新しいの買いに行こう」

「…いや」

「…かぐや」

「総司が言ってる事は全部推論でしょう？もしかしたら直るかもしれない」

「…解った。なら明日、その携帯を持って見せに行く。駄目だったら一緒にスマホを選ぶ、それでいいな？」

「…」

意気消沈した様子のかぐやは初め、総司の提案に首を横に振ったが続いて総司が出した妥協案には頷いた。

（相当だなこれ…。早坂から聞いてショック受けてるだろうなどは思ってたけど、想像以上だぞ）

放課後、帰宅してすぐに仕事を始めた総司。かぐやと早坂が帰ってきたのはいつか定かではないが、恐らく帰宅してすぐだったと思われる

る。

早坂に呼び出され、かぐやの部屋に来た総司を出迎えたのは未だ制服姿のままの二人だった。そして早坂からかぐやが携帯を屋上から落としたのだと聞いたという訳だ。

「…かぐや。気持ちは解るけど、写真ならまた撮れるんだから」

「…」

「…」

ダメだ。かぐやは本当に携帯に残した思い出を大切に思っている。正直、ここまで追い詰められるのはどうかと思うが…、しかしそれはかぐやにとつて大切に思える友人がそれだけ増えたという事。

喜ばしい反面、今のかぐやをどうやって立ち直らせるのか悩ましいところ。

「とにかく、明日かぐやと携帯ショップに行ってくれ。頼むぞ早坂」

とりあえず、何にしても一つハッキリしているのはすぐにでもかぐやに代わりの携帯を用意する事である。先程かぐやにああは言ったが、中のデータは絶望的である。修理すら難しいだろう。

早坂が総司の言葉に頷く。本来なら総司もついていきたい所なのだが、明日入ってくる仕事の量が恐らくいつもよりも多いと予想される。そのため、かぐやについていく事は難しいのだが――

「総司も来て」

かぐやが総司を見上げながら言う。総司と早坂が声を上げたかぐやの方へ振り向く。

「お願い」

「かぐや様…。明日、総司様は…」

「…いや、いいよ。行こうか、かぐや」

「総司様…」

「…ありがとう」

かぐやのお礼の言葉に総司は何も言わず、ただ優しく掌でかぐやの頭を二度叩く。

「いいんですか？」

「…まあ、今のかぐやを放っておくのもな。気になって仕事に集中で

きなくなるかもしれないし」

早坂にかぐやを任せるのはそれはそれで仕事に手が着かなくなり
そうな気がする。かぐやの事が気になって集中できなくなる気がする。
る。

だから総司はつい先程までの考えを改めて明日、かぐやと早坂につ
いていく事にしたのだった。

そうして翌日、結局かぐやが持っていた携帯は修理すら不能という
結論を突き付けられ、新しくスマホを購入する事となった。

かぐやが購入した機種は、白銀が持っているスマホと同じメーカー
の最新型。笑顔検出機能が搭載され、QI充電が可能、4KでHRD
対応という機械オタクの早坂をうきうきさせる程の便利さを誇る物
である。

あの早坂のうきうきっぷりは今思い出しても笑みが溢れそうにな
る。

しかし、実際にスマホを持つ事になるかぐやの顔は未だに晴れない
ままだった。

「あーかぐやさんもしかして、遂にスマホ買ったんですか!？」

そしてかぐやがスマホを持ってから最初の学校、すでに放課後に
入ってかぐやは今、生徒会室にいる。

ついでに総司もかぐやの隣に座っていたりする。今のかぐやから
目を離すのが不安だというシスコン極まれりな理由でこの生徒会室
にきている。

「それならかぐやさん!私とID交換しましょう!」

早速千花がかぐやとメッセーリアプリのID交換を行う。続いて
かぐやは石上、伊井野ともID交換を行い、そして――

「会長。ID交換してもらっていいですか」

「ああ、ID交換ね。勿論いいぞ…」

白銀の目が丸くなる。相当驚いているらしい。その気持ちは解らないでもない。何しろ総司も驚いているのだから。

しかし、それはかぐやの様子が未だに戻っていない事の証拠である。他のメンバーならともかく、まさか白銀に直接ID交換を申し込むとは。それだけ傷は癒えていないという事か。

「？」

じつ、と真つ暗なスマホの画面を見つめるかぐやの横顔を眺めていると、視界の端でゆらゆらと揺れる何かが映る。

そこに視線を向けると、総司とかぐや以外の四人が集まり、その中で千花が総司に向かって手招きしていた。

何か用事だろうか。まあ多分、今のかぐやの様子について聞きたいのだろうが。そう予想をつけながら、立ち上がった総司は千花達の元へ歩み寄る。

「どうした？」

「あの…。かぐやさん、どうしちゃったんですか？元氣ないですけど…」

総司の予想は当たっていた。千花が、白銀が、石上が、伊井野が総司に視線を向ける。

「まあ…。ちよつと落ち込む出来事があったらしい」

「落ち込む出来事…。身内の不幸とかあったのか？」

「いや、今のところ身内は皆元氣だ」

「なら、お腹痛いとかですか？」

「いや、健康そのものだ」

「ゲームのやりすぎで寝不足？」

「それはアンタだけでしょ」

「うーん…。総司君は何か知らないんですか？」

「…」

本気で心配そうにする千花達には悪いが、総司は今とても嬉しくて仕方なかった。妹をここまで心配してくれる人がいる。それが兄にとって嬉しくて仕方なかった。

かぐやが大切に思う人達は、かぐやを大切に思っているのだ。その

事実が、総司は自分の事のように嬉しい。

「…まあ、大丈夫だと思う。お前らがいつも通りでいてくれたら」

「いつも通り?」

「ああ。いつも通り」

いつも通り。人によっては冷たいとも取られるだろう結論。しかし、今のかぐやにとってはそれで良いのだ。

」

生徒会室に複数の着信音が同時に流れる。常にマナーモードにしているせいで総司の場合はバイブ音なのだが、総司のスマホもメッセージを着信する。

光るスマホの画面に映るのは『生徒会連絡網』、『白銀御行が招待しました』という二つの文字列。

「今生徒会のグループ作ったから入っというて」

「はーいっ」

「了解です」

「あ、今までグループなかったんですね。良かった…、私だけ招待されてないのかと思ってました」

「いや、そんな事しねえよ…」

ほっ、と安堵した様子の伊井野とは抱く気持ちは違うが、総司もまだ生徒会のグループがなかった事は初耳だった。まあ、今までガラケーを使っていたかぐやが仲間外れになってしまう事を考えればない方が自然なのかもしれないが。

いや、それよりもだ。

「おい白銀。俺にも招待来てんぞ」

「いや、なにさも俺が間違えてるみたいに言ってるんだよ。総司も入るんだよ」

「…はっ」

首を傾げる。何故だろう、前に同じ様な会話をした気がするのはいかげいだらうか?

「総司君、参加しないんですか…?」

「え?…ち、千花?」

スマホの画面とにらめっこしていると、千花が総司の傍までやって来て、上目遣いで総司を見上げながら問い掛けてきた。

両目を潤ませ、不安げな千花を前に総司は狼狽える。

「あー、総司先輩が藤原先輩を泣かせたー」

「最低だなー」

「最低ですね」

「お前ら…」

石上と白銀、更に伊井野までもが総司を責め立てる。総司の立場が一気に狭くなっていく。

これはもう、背に腹はかえられない。

「…」

「…」

ため息を吐きながら画面をタップする総司。

その様子を見て、パアッと表情を明るくさせる千花。

それだけで総司が何をしたか解るだろう。

「そうです！ついでに共有のアルバムも作りましょう！皆、自由に写真アップしてくださいね〜！」

「じゃあ、僕は体育祭の時のを」

「ス〇ウの写真送っていいですか？」

「…なら、俺はこれを」

「…は？おい総司。これどうやって撮った？」

「偶然撮れた」

「いやいやいや、加工でしょ？これ。加工の痕全然見えないけど…」

「加工じゃないからな」

「…え」

次々とアルバムに送られるたくさんの写真。生徒会室のふとした日常の光景や、この間の体育祭で撮った写真、その中に混じる総司が撮った衝撃写真等。

「…凄い量ですね」

「かぐや？」

「前の携帯が壊れた時、全部失くしてしまったと思っていたのに…、か

えって前より一杯になってしまいました」

スマホを胸に抱き締めながら、かぐやが微笑む。失ったと思っていた出がこうして戻って来た事が嬉しいのだろう。かぐやのこんな笑顔を見たのは総司も久し振りだった。

「良かったな」

「…はい」

短いやり取り。しかしこのやり取りの中にどれ程の思いが籠っているか、語るまでもないだろう。

「あ、四宮先輩のスマホって最近でたやつですよね？笑顔検出で写真撮ってくれるっていう」

「え！それなら皆で撮りましょうよ！石上君、どうやるか解る？」

「えっと…、はい、これでOKす」

かぐやからスマホを受け取った石上が操作し、ペットボトルにスマホを立て掛けてセットする。

「じゃあほら！かぐやさん、笑って笑って！」

「え？え？」

「笑わないと撮影されなですよ」

「伊井野さんまで…」

「…」

ああ、何て眩しい光景だろう。この光景の中にかぐやがいるというだけで、総司は満足できる。それだけで、総司にとっては――

「むっ、総司君、何してるんですか」

「はい？」

「何でそんな所にいるんですか。早くこっち来てください」

「いや、俺は…」

「いやも何ありません！もうっ！」

千花に手首を掴まれ、総司もかぐや達の所へ連れてかれる。

「だから千花、あのさ…」

「ほら、総司君も笑ってください！」

「…」

これはあれである。何を言っても、何をしても無駄というやつである。

総司の腕は千花にすっかりホルドされ抜け出せない。力一杯振り解けば出来ない事はないが、そこまでするつもりはないし、したくもない。

総司は諦めてスマホのレンズに顔を向ける。その後――

カシヤ

スマホのライトが灯り、それと同時にシャッター音が鳴り響いたのだった。

四宮総司は気付かされる

『姉貴が失恋してた』

「あ、それももう知ってる」

『そうか。…はあ!?!』

帝から通話が掛かってきたのは総司とかぐやが夕飯を食べ終え、それぞれの部屋に戻ってすぐの事だった。

部屋に入っただけ、スマホの着信音が鳴り、画面には四条帝の三字。仕事も今日はかぐやの事もあり、一度ストップさせている。その分、雁庵が地獄を見ているのは総司には知った事ではない。親不孝者と言われても関係ない。

まあかぐやの問題も解決し、明日からは普通の仕事スケジュールに戻る。今日はゆっくりグータラしていようと思っていた所での帝からの着信だった。

そして、通話を繋げてから帝の第一声が冒頭のあれである。

『知ってたって、何で?! いつから?!』

「知ったのはマジで偶然。夏休み前から」

『早い! てか前に俺お前に姉貴の様子がおかしいって相談したけど、その時から知ってたのか!?!』

「…正確にはその直後だな」

『おい!』

どうやら眞妃の失恋は帝の知るところになったらしい。というか今頃か。さすがに眞妃と違う学校に通い、総司が帝に何も伝えなかつたとはいえ遅すぎる。

『ごつちも色々忙しいんだよ…』

実際に口に出して問い掛けてみれば、疲れが滲む声で帝はそう返答した。

まあ、四条が今、大事な商談をしているのは総司も知っている。そして、四宮がその商談の妨害をしているのも総司は知っている。

無論、その妨害に総司は荷担していないが。

「まあ、あれだ。頑張れ。色々」と

『…て、そうじゃない、姉貴の事だ姉貴の事。何で言ってくれなかったんだよ』

「むしろ何で言えると思うんだよ。…あんなの見せられたら言わない方が良いって思うに決まってるんだろ」

『…泣いてたか』

「泣いてた。泣き叫んでた時もあった」

『…すまん』

総司が眞妃の事について言い淀んでいた理由を察した帝は先程とは違い、神妙な声で謝罪の一言を口にした。

「まあ、俺の方もすまなかったな。お前を騙してた形になった」

『いや。…俺も同じ立場だったら多分同じ事してた』

しかし何であれ、帝を騙していたというのは変わらない。総司も帝に簡単に謝罪をする。

『…っかし、あの姉貴が恋ねえ…』

「意外か？」

『お前だつて驚いただろ？姉貴が恋してるって知った時は』

「…まあ、確かに」

眞妃が恋していると知った帝の驚きは大きかったはずだ。多分、かぐやが恋していると総司が知った時と同じくらいには。

「お前はどうかんだよ」

『あ？俺？俺はあれよ。もうめっちゃモテよ。週一ペースでコクられまくリョ』

「ははは、盛るなよ」

『…すまん、週一は盛った』

笑いながら帝に発言の修正を求めたが、実は本気だったりする。そして総司の発言は当たっており、帝は自身のモチ具合を盛っていた。『いやでも告白はされてるぞ？最近も後輩女子に校舎裏に呼び出されてさ』

「それでカツアゲされたと。あははははは」

『違いよバカ！』

総司は笑い、帝は怒鳴る。対称的な様子の二人だが、会話を楽しんでいるのは二人とも同じ。

対等な友人と話すのは、今の二人にとって何にも代え難い一時なのである。

『で？そういう総司はどうなんだよ』

「ん？何が？」

『恋愛だよ恋愛。秀知院ってそういうところ緩いだろう？それこそ週一でコクられてたりすんじゃないの？』

今、帝は恐らくニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべているのだろう。手に取るように解る。

しかし残念、総司は帝の期待に応える事は出来ない。

「残念ながら俺はこれっぽっちもモテてない。告白もされた事ない」

『え？告白された事ねえの？一度も？』

「一度も」

『…何か、スンマセン』

「お前、トイレットペーパーで絞め殺されたいか？」

完全なる上から目線。対等な友人はどこへ行つた。総司はこの時、明確に帝よりも下の立場だった。

『まあ、一度で良いから女の子と付き合ってみろよ。結構良い経験になるぜ』

「上から目線腹立つ…」

『上だしな』

みしっ、と総司の握るスマホから音が鳴った。

「付き合う相手がいない」

『いやいや、一人くらいいるだろ、親しい女友達。それすらいらないのか』

？』

「いや、女子の友達ならいるけど…」

頭に浮かぶのは千花と圭の顔。早坂は友人というより家族に近いし、まず第一に二人の関係上そういう関係になるのは不可能である。

そのため今、総司とそういう関係になる可能性が高いのは千花と圭の二人。同じ年で会う機会が多い千花が一番可能性が高くなるだろうか。

『案外、その友達もお前の事が好きだったりするかもよ？』

「あははははははは」

『…え？何でここで笑われんの？もしかしてバカにされた？』

千花や圭が自分の事が好き？そんなはずがない。確かに嫌われてはいないしむしろ好意を持たれていると思う。

しかしその好意は恋愛感情ではなく、人として、一友人としての好意だ。

「それはねえよ。そんな素振り一度も見せたこと…」

笑いを収め、軽く息を整えてから総司は口を開き、そして言葉の途中で止まる。

思い返すのは過去の千花や圭の自分に対する言動や行動、自分に向ける表情の数々。

「…あれ？」

『どうした？』

帝が総司の異変に気付き声を掛ける。しかし、総司の耳にその声は届いていなかった。それ程までに今の総司は余裕を失っていた。

（待て。いや、待てホントに待て。今まで全く意識してこなかったけど、仮に帝の言う通り俺に好意を持っていると仮定したら…）

異性に自分が着る水着を選ばせたり、わざわざ高等部の校舎まで来て勉強を教えに貫いに来たり、異性に下の名前で呼ばれたがったり、仲が良かったはずが突然険悪になったり。

「あれ？あれえ？」

『おい、マジでどうした。救急車呼ぶか？』

混乱する総司。この混乱を医者が治してくれるのなら是非そうし

てもらいたい。だが現実は無情、そんな事は不可能である。

(いや、落ち着け俺、クールになるんだ。Be koolだ)

正しいのはcoolである。この男、かなり動揺している。

(…でも思い返せば思い返すほど辻褄が合う。いや、まさかそんな…)

『おい、そろそろ俺悲しくなってきたぞー』

「うるせーちよつと黙ってろ」

『ひでえ』

帝の阿呆に構ってられない。いや、待て。そうだ、帝だ。今ここには帝がいるじゃないか。いや、実際にいる訳ではないが、こうして通話が繋がっている今、これを利用しない手はない。

「なあ帝、これは俺の友人の話なんだが」

『ははは！何だよ急に、お前の話だろそれ』

「友人だ。友人の話だ」

『はいはい、お前の友人の話な。それで?』

「…女友達に水着選びに付き合わされたって相談を受けてな。どう思う?」

『どう思うって、何が?』

「いや、その女友達が、その…、俺の友人を好きなのかどうかって」

『まあそりゃ、好きなんじゃねえの?好きでもない相手に自分の水着選んでほしくないだろ常識的に考えて』

「…」

いけない。

「…帝、もう一つ受けた相談があつてな」

『あー、またお前の友人の話か?』

「そうだ。その子は学年でもトップクラスの成績の兄がいるのにわざわざ高等部まで勉強を教えて貰いに来るらしい。これはどう思う?」

『んー…。まあ、さっきのパターンみたいに確実とまではいけないけど、可能性は高いんじゃない?』

「…」

これはいけない。まずい。まさか二人ともアウトとは思わなかった。

『…お前の話だろ』

「違う」

『あつはっはっは！いやー、我が友人に春が来たようで俺も嬉しいなあー！』

「違う」

『何だよ、モテないとか言ってた癖にしっかりモテてんじゃねえか。さっすが四宮次期当主』

「それ関係ねえだろ。あと違う」

否定はするが恐らく通じてない。帝はこの話に出てくる総司の友人が実は総司の事だと間違はなく気付いている。

いや、一番の問題はそこではない。これからこの話について帝にかかわれたりするのだろうか、それは一番の問題ではない。

問題は、千花と圭の二人とこれからどう接していけば良いのかである。

勿論、これは帝が言っているだけであり、勘違いの可能性だってある。これが勘違い、自意識過剰ならそれはそれで良い。だが、もし帝が言った通りならこれからどう二人と接していけば良いのか。

「…あつ。何か今日暑くね？冷房つけようかな」

『は？いや、結構冷えてるだろ。俺今暖房着けてるぞ？』

「…」

おかしい。こんなに熱いのに何言ってるのか。住んでる場所は当然違うが同じ東京、そこまで部屋の温度が違うとは考えづらいのだが。

『いやー、今日は良い話が聞けたな。しっかしあの総司がねー…。何か進展あったら聞かせろよ？』

「おい」

『あー、解ってる。誰にも言わねえよ。そこは信用してくれて構わなこぞっ。』

「そこじゃねえよ。進展も何もねえよ。俺の話じゃないんだから」

無駄と思いつつもこう言い返す事しか出来ない。ここで認めたら、何か壊れてしまいそうだ。今でさえ色々と沸騰しそうなのに。

『そんなじゃ、これ以上からかったらブチギレられそうだし切るわ。じゃあな』

「…ああ。またな」

最後にまた総司をからかってから通話を切る帝。結局総司がやられっぱなしのまま通話が終了してしまった。

(…帝に彼女が出来たらからかい倒す)

スマホをスリープモードにしてから真っ暗な画面に視線を落としながら心に誓う総司。

しかし、誓いとは裏腹に胸の奥では全く違う事を思っているのは言うまでもない。

ずっと、そういった事から遠ざけられてきた。次期当主として嘗められてはいけなさと勉強、体験はさせられたが経験はゼロである。

本心で誰かを愛した事はない。愛された事もない。というより、自分がそうなるはまだ考えた事すらなかった。

そんな総司が突然、女の子に好意を持たれていると気付いたらどうなるのか。

(…あああああ、マジでどうすりゃいいんだ？ちか…や、け…いにどんな顔して会えば良いんだ!?)

答えはこれ。近くに本人がいる訳でもなし、そもそも口に出している訳でもないのに下の名前で呼ぶのが気恥ずかしくなってしまうている。

「あああああああああ——」

総司の声は掠れて途切れる。しかし以降、何度も何度も総司の唸り声は自室に響き渡るのだった。

四宮総司は落ち着きたい

本日最後の授業の終了を知らせるチャイムが鳴る。黒板にチョークで書き込んでいた数学教師が動きを止め、少し悩む素振りを見せてからチョークをケースに戻し、授業の終了を告げる。

生徒達がどこか安堵した様子が見られる。この教師は区切りの良いところで終わるまでは、チャイムが鳴ろうとお構いなしに授業を進める事で有名だ。今日もまだ説明の途中だったのだが、いつもと違いそこで授業を終わらせた。

(…:そーいや奥さんに浮気がバレたとか噂で聞いたな)

教室を出ていく教師の背中を眺めながら総司はふと、今日の昼休みに耳にした噂話を思い出した。

あの数学教師が年下女性と浮気し、それが奥さんにバレて離婚の危機だという噂である。初め聞いた時はどうでもいいと聞き流したのだが、あのおかしな様子からしてもしかしたら噂は本当なのかもしれない。

(さて、そんな事はどうでもいい。問題はこつちだ)

まあ今の総司にとってそんな話はどうでもいい。ゴキブリが辛いものを食べ続けると攻撃的になってムカデを食べるようになるという話くらいどうでもいい。

総司は机の中に隠しながらスマホを操作。メッセージアプリを呼び出し、ホーム画面にある文を見る。

『総司君、また勉強教えてくださいよー』

この一文の上には送り主である千花の名前が。その会話画面は開かず、総司はこのメッセージを受信した昼休みから疑似未読を貫いて

いた。

期末試験が来週に迫っている。前回の試験で落ち気味だった成績を持ち直し、再び中間辺りまで順位を戻した千花。

以前勉強を見ていた時にも思ったが、千花は地頭は悪くない。理解力はあるし、しっかり授業を聞いて帰ってから予習復習を行っていたら定期テストくらいは普通に熟せると総司は思っている。というか、以前にそう総司は千花に伝えたはずなのだが。

(…マジでピンチなのか、それとも——)

勉強を見てほしいというのは口実か。いや、どちらにしてもここで断るのは不自然である。それに頼られる事に嫌な気はしない。

総司は了承の返信を送るべく千花とのやり取りのページを開こうとして…、画面にポップアップした通知を見て手を止めた。

『今日からテストの日まで勉強見て頂けませんか?』

白銀圭、送り主の登録名である。まさかのブックキングである。

「どうすんだ、これ」

担任教師が教室に入ってきたため、総司は今返信する事を諦めてスマホを鞆の中に入れる。

しかし、新たな問題が出てきてしまった。それもかなり厄介な問題である。

千花と圭。まさか選べというのか。今の総司にそれは酷というものである。

(いや、選ぶ必要なんてないだろ。二人いっぺんに見れば良いんだから)

そう、どちらかの誘いを断る必要なんてない。二人とも家に呼んで…、その場合だとまた早坂も加わるのだろうか? そうなるの三人になるが、まあ問題はないだろう。

「——」

そこまで考えた時、総司は軽く絶句した。

無意識に、自然に、総司は四人で勉強しようと考えたのだ。男と女の比率が1:3の部屋で、しかもそれが自分の部屋だというのに。

いや違う、そういう風に変に意識するから疚しい事のように感じる

のだ。早坂は言わずもがな、千花と圭だつて友人なんだし、部屋に呼んで勉強会なんて何らおかしくないだろう。

それに、そうだ。こういう時こそかぐやを呼べば良いじゃないか。確か生徒会は試験が終わるまで白銀が休みにしたと言っていた。ならばかぐやは今日は真つ直ぐ家に帰るといふ事。それはらかぐやも加えて五人で勉強だ。

おお、何という名案。これは来た、勝てる。

「ごめんなさい。もう先約がいるんです」

そう、思つてたのに。

「それじゃあ総司、頑張ってください」

かぐやはそれはそれは美しい笑顔を浮かべながら裏切つてくれやがりました。

「…」

「…」

「…」

「…君達、これから勉強だよ？別に楽しくやろうなんて言わないけどさ、もう少し雰囲気良くならない？」

そして現在、総司の部屋である。

かぐやに裏切られどうしようもなくなつた総司は、ホームルームが終わつた後それぞれに千花も、圭も加わると付け加えて了承の返信を送つた。

かぐやはまだ学校に残り、総司は迎えの車に千花と圭を乗せて家まで連れていく。

先に帰ってきていた早坂が出迎えに来た時は驚きのあまり声が出そうになつたが。千花はともかく、圭はまだ四宮と早坂の関係について知らないというのに、隠す気ゼロである。

まあ白銀は知つていて圭は知らない、というのは仲間外れにしてい

るみたいで心が痛むため別に咎めるつもりはないが。

それと同時に、自分に対して甘すぎる、と自嘲もしたが。

「…メイドさんだったんですね」

「はい。ここに住み込みで働かせてもらってます」

「…」

それにしても、空気が悪い。何で…とは思わない事もない。何故なら、千花と圭の雰囲気が悪くなるのはともかく、何故早坂まで一緒になっっているのか。それがさっぱり解らない。

何か住み込みの所を強調して、珍しくムキになっってる様子である。

「す、すみこみ…?」

「はい。総司様と一つ屋根の下で、暮らしています」

「…千花姉」

「私は知ってました」

ああ、圭が泣きそうになってる。まずい、ここに二人を連れてきたのは失敗だったか。というかも何もかもが失敗な気がしてくるのは何故だ。最早、四宮総司という人間が産まれてきた事自体が失敗だったのではないか。

(いやいや落ち着け、自暴自棄になるな)

とにかく勉強だ、勉強をさせるんだ。ここに彼女らが来た目的は表向きには勉強なのだ。

「おーい、そろそろ勉強始めるぞー。ち…かは門限あるんだから早くするぞー」

「…しようがないですね」

「まあ、私は別に続けても良かったのですが」

「挑発すんな早坂」

火花が飛びすぎて怖い。何はともあれ、二人は矛を納めてそれぞれ参考書を取り出す。

…早坂はどこから取り出したのかさっぱり解らないのだが。いや、本当にどこから出した?そのメイド服の中から?え?

そんな総司の戸惑いを他所に本格的な勉強会が始まった。先程までのギスギス感はどこへやら、解らない所があれば教えたり教えられ

たり、総司自身、ここにいなくても良いのではとすら思い始めた。

そうして日々は過ぎていく。授業が終わってから総司は千花、圭と合流して総司の部屋に行き、先に帰っている早坂が加わって勉強会へ。

前回と違うのは学校がない土曜日も勉強会が行われた事だ。試験前最後の授業が終わってからの勉強会で、千花が明日も勉強会がしたいと口にし、総司が了承した。

「だから、この問題文に条件が書いてあるだろ？ x が負の数にならないとおかしいんだよ」

「むう〜…」

「あとけ…いさんはもっと視野を広げて考えよう。二つの三角形の合同の証明をするために問題とは別の三角形の合同の証明をする事は普通にあるぞ」

「はい」

さて、そんな休日の勉強会も大詰め。窓の外は暗くなり始め、時計もあと十分で六時になろうとしていた。

「あああああああ！解りません！総司君、ここはもう飛ばしましようー！」

「いやいや、テスト本番ならともかく勉強で諦めんなよ…」

「でもお〜…」

千花がちらりと時計を見る。確かに時間はない。というより、そろそろ帰り支度しなければならぬか。

「しようがない、続きは明日やろう」

「…」

「でも帰ったら自分なりに解いてみる。そんで明日、答え合わせしようか」

「…決めました」

「はっ」

もうこれで勉強会はお開きにし、続きは明日という事にしようとしたのだが。総司の話は耳に届いていない様子の千花が突如声をあげる。

「私、今日はここにお泊まりします」

「はい？」

「なっ…」

「千花姉!？」

呆気にとられる総司。目を見開く早坂。驚愕の声をあげる圭。

「総司君にみっちり勉強教えてもらいます!ね?総司君!」

「いや、ね、と言われても」

「お、お泊まりなんて…!そ、それなら私だって!」

「ちよっ!？」

千花に続いて圭までもが錯乱してしまう。

「お、おい早坂!どうすればいい!これ!」

そして、この状況に総司も錯乱する。只でさえここ最近の総司は平静とは言えない精神状況だったのだ。その原因でもある二人が泊まるなんて、それも本気で言っていればこうもなる。

もう総司が頼れるのは早坂だけだった。

「お任せください、総司様」

「は、早坂…」

早坂は抑揚のない声で、しかし確かな口調で任せろと言った。その姿に総司は感動を覚える。

何という頼もしさか。早坂の背中にはまるで戦場に赴く歴戦の戦士のよう。これが漢の背中だとむごんでかたっているようさえ見えた。

早坂は女だけだ。

この時ほど早坂がメイドでいてくれて良かったと思った日はなかった。

それはそれでだいぶ早坂にとって失礼な話だけど。

「お二人とも、お泊まりしたいのならちゃんとお親御さんに許可をとってください」

「あっ!そうでした!」

「私もお父さんに電話しとかなきゃ!」

「早坂あああああああああああ!!!?」

早坂はそれはそれは自然な流れで裏切ってくれやがりました。

「何で!?二人を説得してくれる流れじゃなかった!？」

「いえ。何か総司様が失礼な事を考えていた様な気がして」

「バレてた!？」

「やっぱりそうだったんですか」

「…あ」

「総司様はかぐや様をアホ呼ばわりしてますが、総司様も大概ですよ
ね」

こうして、藤原千花、白銀圭の四宮別邸でのお泊まり会が決定したのである。

圭の説得はかなり時間が掛かっていたが…、というか白銀の大声が漏れていたが、とにもかくにも勉強会は延長戦へと突入するのである。

本当に勉強会になるのかは知らないが。

女の子達は話したい

お泊まり会。

それは仲の良い友人達が集って一つの家で寝泊まりする会合。それが行われるハードルはかなり高く、同性だとしてもかなり親密でなければ行われない。それが異性となれば、まず不可能とすらいえるだろう。

しかし、そんな異性の友人達とのお泊まり会が今、四宮別邸で行われようとしていた。

「…」

すでに夕食は済ませた。高級食材をふんだんに使った高級料理に圭の目が輝いていたのが思い出される。

今、女子組はかぐやと一緒に風呂に入っている。早坂も三人とは別の、使用人用のバスルームではあるが、入浴している筈だ。

そして、総司もまた女子達が入浴しに行くのと同じタイミングで入浴し、女子達より先にあがって部屋に戻ってきていた。総司は長風呂しないタイプである。

「…遅い」

女子の入浴は長いという話は総司も聞いた事はあった。しかしそれにしても長過ぎやしないだろうか。すでに女子達が入浴しに行つてから一時間が経過している。

総司は知らないのだ。女子の入浴時間が長いのは勿論なのだが、上がってから長いのが女子だという事を。

そうして、女子達が戻つてたのは更に三十分経つてからだつた。かぐや達とは別の場所に入浴していた筈の早坂も一緒に戻ってくる。

女子達は一様に頬を僅かに紅潮させ、風呂上がりの匂いが総司の鼻をくすぐる。

「かぐやはどうした？」

煩惱を振り払って千花に問いを投げる。

千花、圭と一緒にいた筈のかぐやは今ここにいない。まあ、ここにいないのならば自分の部屋にいるのだろうか、一応聞いてみる。

「かぐやさんは自分の部屋に行っちゃいました。一緒に勉強しませんかって誘ったんですけど…」

「…まあ、最近集中して勉強できてなかったみたいだからな。一人で集中したいんだろ」

しよんぼりと落ち込んだ様子の千花。圭もガツカリした様子である。かぐやと一緒に勉強したかったのだろう。

総司の思った通りかぐやは自室に戻ったようだ。最近、正確にはスマホを買った頃からあまり集中して勉強が出来ていなかったようにだし、一人になりたかったのだろう。

正直、この空間に男一人というのはかなりキツイものがある。かぐやが居てくれたら相当心強かったのだが、早坂も総司にとって心強い存在としていてくれるので良しとする。

「え、何で睨んだの」

「いえ。何かまた失礼な事を考えていた様な気がして」

何故か早坂に睨まれた。何故だ。

雑談もそこそこに、勉強を再開する。別段特別な事件があった訳でもなく、夕方まで行った勉強会と同じ光景が繰り返されるだけ。

千花が解らないままだった数学の問題も、時間を掛けて説明した事で解決。圭も本番で凡ミスさえしなければ学年一位ほぼ間違いないといえるだろう。

早坂は…まあ、早坂は少し特殊なため置いておく。

「悪いな。こっちの都合で終わらせる事になって」

「いえいえ。気にしないでください」

「そうですよ総司さん。お仕事頑張ってください」

勉強を始めてから一時間と少し、時刻は十時になろうとしていた。

ここで今日の勉強会はお開きとなる。理由は先程の会話で解る通り、総司の今日の分の仕事があるからである。

荷物を片付けて部屋を出ようとする三人、特に詳しい事情は知らない千花と圭に謝罪する総司。早坂には二人を頼むとアイコンタクト。早坂が頷いたのを見て安心する総司。

「それじゃあ総司君、おやすみなさい」

「おやすみなさい、総司さん」

「ああ、おやすみ」

千花と圭の二人が総司と挨拶を交わしてから部屋を出る。

「おやすみなさいませ、総司様」

「ん。おやすみ」

そして最後に早坂が退室し、部屋に残されたのは総司一人となる。つい先程まで賑やかだった部屋が一瞬で静まり返る。

そんな寂寥感に浸る間もなく総司はデスクの前の椅子に腰掛け、P
Cを立ち上げる。

「さて、急がないと徹夜だぞ」

デスクトップ画面が表示されるとすぐにメールを確認。そこに添付されたデータと指示を基に総司は作業を開始するのだった。

「恋ばなしましょう！」

総司が仕事を始めたその一方、総司の部屋から客室ではなくかぐやの部屋へと移動した女子組は、勉強の続きを始める訳でもなく、ベッドに輪になって座り女子トークを始めていた。

「こ、恋ばなつて…何で？」

「色々知りたいんですよ。例えば圭ちゃんが総司君を好きになった切っ掛けとか」

「千花姉!？」

掌を口許に当て、ニヤニヤとした笑みを圭に向けながら言う千花。

「確かに、私も知りたいですね」

「かぐやさんまで!?!」

「ふふっ。でも、私は圭だけじゃなく…」

千花に続いてかぐやが便乗した事に追い詰められる圭、かと思えばかぐやのターゲットは圭だけではない事が判明する。

「藤原さん? 早坂? 貴女達の話も聞かせてもらいますよ?」

「え!? わ、私はそんな、別に面白い話じゃないですし…」

「右に同じです。私の話なんてつまらないですよ」

「そんなの聞いてみない事には解らないじゃない」

柄にもなくかぐやはワクワクしていた。何しろ自分の人生の片割れといえる総司を好く三人から、その理由の話を聞けるのだから。

一応言っておくが、別にこれから聞く話をネタに総司をいじるとかそういう意図は一切ない。かぐやは純粋に、妹として、兄の事が好きなその理由を聞きたいだけだ。

「で、でも…」

「…まあ、貴女方の気持ちは解ります。恋に落ちた切っ掛けなんて、恥ずかしくて話せませんよね」

「? 気持ちは解るって…。かぐやさん、もしかして好きな人いるんですか!?!」

「ふへえっ!?!」

かぐやの口から変な声が漏れた。目を真ん丸くして、頬を紅潮させるかぐやの姿は千花の推察が正しい事を証明していた。

その姿を見た千花と圭は目を輝かせ、早坂は二人からは見えない所でため息を吐く。

「そうなんですか、かぐやさん!?! 誰!? 誰なんですか!?!」

「い、いないわよ! 好きな人なんて!」

「でも私達の気持ちは解るんですよ!?!」

「そ、それは何となく察しがつくって事よ! それだけです!」

必死に否定するかぐや。しかし千花と圭の勢いは止まらない。

「またまたそんな事言つてえ〜。ラブ探偵の血が騒ぎますよお〜?」

「かぐやさんと関わりのある男の人…。やっぱり生徒会関連の人かな」

…?」

「わ、私の話は良いんです！それより私は、総司の妹として、貴女方の話を聞きたいんです！」

圭の小声の推察を耳にしたかぐやは話題転換を図る。

「でも、気になりますよ。かぐやさんの好きな人」

「だからいません」

「…まさか、兄さんなんて事は」

「――」

「え」

「違います」

危ない。危うくバレる所だった。脈絡なく白銀を持ち出されてつい硬直してしまった。その硬直は一瞬で、すぐに否定したから大丈夫だと思いが。

「それより、貴女方の話です。総司を好きになった理由は聞かないであげますが、せめて総司のどこを好きになったのかくらいは聞かせてほしいものです」

「…それってあまり変わってない気がしますよかぐや様」

「そう?」

かぐやに自覚はないが、実のところ話す際の恥ずかしさとしてはあまり変わっていない。それでも惚れた理由、切っ掛けを話すよりは辛うじてマシとは言えるが。

「ほら、話してはくれないのかしら?」

「え、えつと…」

「ん、ん…」

「…総司の妹として、ちゃんと総司の事を見れてるのか知りたかったのですが。やっぱり、総司の外見に釣られただけなのかしら?」

「そんな事はありません!」

「それなら、話せますよね?」

「うーわー…、性格悪…」

かぐやの台詞に聞き捨てならないと言わんばかりに声を揃えて言い返す二人の背後で、早坂が人の悪い笑みを浮かべるかぐやの顔をげ

んなりした様子で見る。

「…私は、その…、一目惚れでした」

始めに口を開いたのは圭だった。体の前で両手を組み、落ち着かない様子でモジモジしながら言う。

「…圭、それはつまり」

「はい…。最初はさつきかぐやさんの言う通り、総司さんの外見とか、そういう所に釣られてたと思います」

圭は先程のかぐやの台詞を部分的に肯定してから、でも、と続ける。

「総司さんと会って、話をして、関わってく内に総司さんの優しさに触れて…、そしたら、その…。もっと、好きになってました…」

「…おお…」

顔を真っ赤にして俯いてしまった圭。そして、圭の話を聞いていた三人はパチパチと両手を叩いて拍手をする。

「~~~~~っ!はいつ、次千花姉!」

「ええっ!?私ですかあ!?わ、私は…」

続いて話し出したのは千花。千花も先程の圭と負けず劣らず頬を染め、両手の指を弄りながら話を続ける。

「最初は、かぐやさんのお兄さんってどんな人だろうって気になって話し掛けただけだったんですが…。すごく優しく、頼もしくて…、

それで、とても努力家なんだって事も知って…、それに…」

「…それに?」

「それに…っ!だ、ダメです!これ以上は言いません!」

「なっ…、それはズルいよ千花姉!」

「嫌です!これ以上はぜつつつつつたいに言いませんから!」

初めはゆっくりと、総司の好きな所を話していた千花だったが、突如話すのを止めてしまう。

(どうやら、総司と何かあったようね。藤原さんの好意を決定付ける何かが)

かぐやは圭と言い合う千花を見つめながら考える。

千花の様子から、本気でこれ以上話す気がないのは解る。本来ならばが非でも聞き出した所だが、先程も言った通りかぐやには好きな

人について語る恥ずかしさが解る。

かぐやに好きな人はいないが。断じていないが。

「ほら二人とも落ち着いて。藤原さん、私はこれ以上問い質すつもりはないから安心して」

「か、かぐやさん…」

二人を諭すかぐや。かぐやの台詞に千花は感激の涙を浮かべ、圭は不満げに唇を尖らせ子供っぽい表情を浮かべる。

「さて。最後は早坂、貴女よ?」

「…勘弁してほしいのですが」

「ダメ」

表向きには茶目っ気のある、しかしその裏に有無を言わせない圧力を醸した笑みを浮かべるかぐやに早坂は一つため息を吐く。

「…私も白銀さんと似たような感じですよ。総司様と関わる内に好きになっていった。ただ違うのは、一目惚れはしなかったです」

「でしょうね。貴女、最初は総司を毛嫌いしていたものね」

「ちよつ」

「え!?!そんなんですか!?!」

「それでどういう経緯で総司さんを好きになったんですか、早坂さん!?!」

「い、いや、それは…」

余計な事を口にくれたかぐやを睨む早坂。そんな視線を物ともせず素知らぬ顔をするかぐや。

「好きになった経緯は話さなくても良いので」

「私は話しましたが」

「それは自滅でしょう?」

「む」

「あああああああ!?!気になります!?!ラブ探偵の血があ!!」

「…」

楽しげに、かぐやの表情が緩む。今の彼女ら三人は、同じ男を好きになった恋敵ではなく、ただの友人に見える。恋ばなを楽しむ、普通の。

「それよりもです。二人とも、忘れてませんか？」

「え？」

「何がですか？」

「ここにはもう一人、女子がいるんですよ？」

「……っ」

悪戯気に笑う早坂。そして、早坂の台詞を聞いて少し間を空けてから、同時にかぐやの方へと振り向いた千花と圭。

「…えっと、何かしら？」

「そうでした…。さっきは話を逸らされましたが、もう逃がしませんよ…っ。」

「かぐやさんの恋ばな、聞かせてもらいます…」

ターゲットが移った。それを悟り、余計な事を口にくれた早坂を睨むかぐや。そんな視線を物ともせず素知らぬ顔をする早坂。

「ほら、かぐやさあん」

「かぐやさんの好きな人って、誰なんですかあ？」

「だ、だからっ、私に好きな人なんて…！い、いや！近付かないで！そ、総司！助けて総司！いいいいいいいいいい！！！！」

かぐやの叫びは届かない。彼女達の夜は、まだまだこれからである。

四宮兄妹の憂鬱

『明日は早坂を名代として送る。お前とかぐやは早坂と共に三者面談を受けろ』

「はい」

『…ついでに聞いておくが、お前は行きたい大学はないのか？』

「いえ、特別行きたい大学はありません。強いて言うなら、東大に行こうかな、と」

『そうか。…かぐやについては何か聞いてないのか？』

「…ご自分でお聞きすれば良いのでは？」

『それはできません』

「…一応聞きます。何故です？」

『そんな事を聞けば、儂がかぐやの事を気になって仕方ないみたいじゃろうが！』

波乱づくしの期末試験を終えてから、もう一週間が過ぎた。

総司は満点で一位、かぐやは三位、二人の間に二位の白銀、三人の下に真妃と上位四人の顔ぶれ、順番は変わらず。

勉強会に参加した早坂、千花は前回の試験より更に順位を上げ、圭は中等部二年でトップの成績を叩き出した。試験の順位発表が行われた日に、メッセージで写真を添付して報告してくれた。

一年組では伊井野が変わらず一位、そして石上が前回から順位を二十位上げるといふ快挙を達成。何かやる気を出す切っ掛けでもあったのだろうか？

そして先程も言ったが、期末試験が終わってから一週間。明日、二

年生は三者面談を行う日となっている。その際の打ち合わせを総司は雁庵と、電話を通して行っていた。

本来なら総司とかぐやの父親である雁庵が来るべきなのだがそれは出来ず、代わりに京都にいる早坂の母が来る事になった。

しかし雁庵も総司とかぐやの進路は気にしている様で、総司には直接、かぐやには総司を通して把握しようとしている様だ。

「…マジでめんどくせえ」

『何か言ったか?』

「マジでめんどくせえ」

『せめて誤魔化さんか!』

相変わらずかぐやには踏み込んでいけない雁庵にため息を吐く総司。

(ホント、かぐやのあのアホっぷりは父親譲りだよな。俺には遺伝しなくて良かった)

なんて、ため息を吐きながら自分の事を棚に上げているこの男もまた父の血を存分に継いでいる事を忘れてはならない。

「俺も詳しく把握してないぞ。かぐやの進路が知りたいんなら直接聞けばいい」

『息子が冷たくて儂や寂しいぞ…。完全に敬語消えとるし…』

「暖かくしてほしかったらかぐやにも少しは親らしい事をしてやれ。電話してやるだけでもきつと喜ぶぞ」

『…考えておく』

「…」

これは電話しないパターンである。

雁庵がかぐやを毛嫌いして関わろうとしないのなら総司も雁庵に何らかのアプローチが出来たのだが、そうではない。照れ臭いから関われない。こんなの、どうやって解決すれば良いのか。第三者が解決できる範囲を越えている。

「マジでこのアホ…」

『今、アホって言ったか?』

「言った」

『お前最近儂の事舐めとらんか？儂も怒るぞ？』

「事実怒るなよ」

『…明日から仕事の量を倍「お父様は天才でございませぬ。阿呆などではございませぬ」…その掌の返しっぷりも少々腹立つんじやが』

こうして話しているといつも思う。何で、これをかぐや相手には出来なくなるのだろうと。何でかぐや相手には下らない意地を張ってしまうのだろうと。

『とにかく、明日の事は伝えたぞ。かぐやにも伝えておけ』

「ん」

そのやり取りを最後に通話が切れ、約十分の短い親子の会話が終わった。

「さて、かぐやには…メッセで良いか」

かぐやに雁庵からの伝言を伝えに行こうと立とうとして、わざわざかぐやの部屋に直接行くのも面倒臭いとスマホを再び起動、アプリを立ち上げてかぐやに送るメッセを打つのだった。

翌日、放課後に予定通り、三者面談が始まった。もうすぐ番が来る総司とかぐやは廊下に並んで立って順番を待っていた。

二人の傍らにはもう一人、付き人である早坂もいるのだが、何故か彼女の機嫌が悪い。

（おかしいな。早坂はマザコンだから母親が来るって楽しみにしてるとばかり…、あれ？面白いや俺、代わりに来る人が奈央さんだっけ言っただけ？…まあいいや）

ちなみに総司の不安通り、かぐやと早坂には代わりの者が来るとしか伝えていなかった。しかしそれはそれで早坂の面白い反応が見られそうだと総司は黙っておく事にする。

「総司、代わりの人は誰なのか聞いていないのですか？」

「聞いてない」

「…何で少し食い気味なんですか」

危ない。まるで示したかのようにかぐやが問い掛けてきたために総司も僅かだが動揺してしまった。お陰でかぐやの言う通り食い気味な返答になってしまったが、かぐやは総司を問い詰める様子はなく、早坂の方へと向いた。

「奈央さんが来るんでしょうか？」

「ママ？ママは来ないですよ。忙しい人だし、冷たい人だし、娘に興味ない人だから」

（来るよ？）

壁に寄り掛かりながら平然とした風を装いながら、実のところ必死に笑うのを我慢している総司。

その時、総司とかぐやはこちらに歩み寄ってくる一人の女性を見つける。

未だに母への不平を呟く早坂をじっと見つめながら、その女性は更にこちらへ向かってくる。

「体育祭にも来なかつたし、私の進路なんてどうでもいいと思って…」
「思っていないわよ」

早坂の傍で立ち止まった女性は、早坂の言葉を遮るように口を挟んだ。

「――」
目を見開き、一瞬硬直してから早坂は勢いよく声が出た方へと振り向いた。

「ママっ！」

まさかのママ呼びである。

そう、この女性こそ早坂の母親、早坂奈央である。

「ご無沙汰しております。若様、かぐやお嬢様。僭越ながら、本日は私が雁庵様の名代を務めさせて頂きます」

「ああ、よろしく」

「よろしくお願ひします、奈央さん」

奈央が総司とかぐやの方を向き、一礼してから挨拶をする。総司は一瞥しながら、かぐやはにこりと微笑みながら奈央の挨拶に言葉を返

した。

その一方、早坂はというと。

「ママ……。かぐや様の為に来たんだ……。別に私の為じゃ……」

不貞腐れていた。ぷいっとそっぽを向いて頬を膨らませている。

（マジでこいつ、奈央さんが来るとキャラ変わるよな。散々俺とかぐやをアホアホ言ってるけどこいつも大概だよな）

ぐしぐしと頭を撫でられ、奈央に窘められる早坂を眺めながらそんな事を思う。

不満げな表情を保ってるつもりなのだろうが、隠しきれない嬉しさが漏れている。僅かににやけているのが総司にもかぐやにも丸わかりである。

「じゃ……。じゃあ、今日は一緒に晩御飯も……?」

「ええ。今日は名代ですから。四人で美味しい物を食べに行きましょうか」

「うんっ!」

つい数十秒前まで不機嫌だった早坂の機嫌が天元突破した瞬間である。

「わたし、やきにくかおすしがいい!」

心なしか、口調がアホになってる気さえする。

「ママは河豚刺しがいいわ」

「……最近出来た中華料理屋に行きたい」

「総司様、激辛料理が食べたいのならお一人でお願いします」

「……」

(・・ω・・) ↑総司

面談が終わった後、外食する流れだったから行きたい店を言っただけなのに、先程まで機嫌MAX状態だった早坂にじと目で睨まれてしまった。

最近、激辛マニアには堪らない料理を出す中華料理屋が出来たという噂を総司はキャッチしていた。その激辛料理の正体は麻婆豆腐、店名は……忘れてしまったが、いつか時間が出来たら行こうと思っていた。

奈央の台詞を聞いてチャンスと思っていたのに、早坂め。

「やあかぐやちゃん、調子はどう？」

その時だった。渋く低い男の声がかぐやを呼んだ。

振り返ると、かぐやがいた場所にもう一人、声から受ける印象通りの渋いおじ様がいた。

(…誰かに似てる気がする)

あの目付きの悪さ、どこかで見た気がしてならない。とても最近、身近にあの目付きの悪さを見ていた気がしてならない。

「ええ…。健康そのもので…」

「違う違う、そうじゃない。御行とその後どうなのって話。キスとかした？あ、もしかしてもっと…」「してません！」

(御行…。あ、この人、白銀の親父か)

ずっと苗字で呼んでいたため気付くまで少し間が空いたが、この男は白銀御行の父親らしい。そう言われれば、かなり白銀に似ている。いや、白銀が白銀父に似ているのだが。

「む？」

「え？」

不意に、白銀父の視線が総司の方へと向いた。白銀父は総司からかぐやへ、かぐやから総司へと視線を行き来させてから、再び総司の方へと向いて口を開いた。

「君はかぐやちゃんの関係者かね？」

「はい。かぐやの兄の総司です」

「そうか。総司君…、そうじ…？」

「？」

何故だろう。総司の名前を聞くと、白銀父は何かを思い出そうとする様に視線を上げる。間違いなく、総司と白銀父は今が初対面である。それとも、総司が覚えていないだけで何処かで会った事があったのだろうか。

「…あー、ああー、なるほどなるほど」

「??」

総司には知る由のない事だが、この時白銀父は白銀家にて見たある

光景を思い出し出していた。それは、一週間程前に掛かってきた圭からの電話から起きた出来事である。

その電話の内容とは、四宮家にお泊まりしたいというものだった。電話を受けた父はそれを承諾、しかし妹思いの兄はその許可を渋っていた。

たった今まで父の何処かで引つ掛かっていた。何故突然、圭がお泊まりしたいと言いだしたのか。これまで友人の家に泊まった事はあがるが、その際は必ず前日までには報告していたのに。そして何故、兄は圭が泊まる事を渋っていたのか。

父はもう一つ、ある光景を思い出す。ある日、圭が信じられないくらい機嫌が良く、兄の小言に怒りも見せず、しかし何故かずーっとスマホとにらめっこしていた。

父は、そのスマホの画面を圭の背後から盗み見た。圭のスマホはメッセージアプリを起動しており、そこにはとある相手のユーザー名が載っていた。

圭の頭で隠れてフルネームは見られなかったのだが、この時父は確かに見たのである。総司という二文字を。同時に悟る。この可愛い娘にも、春が来たのだと。

「総司君」

「はい？」

「娘とはどこまでいったのかな？」

「…はい？」

そして今日、父は娘の想い人と邂逅を果たすのである。

一方、そんな白銀父の内心などさっぱり知らない総司は言葉の意味が解らず混乱していた。

「ちよっ、何を聞いてるんですか!？」

「ん? いや、父として娘のこい「少し黙っていてください!」」

「…あー」

慌てるかぐやと平然としている白銀父。この二人の会話を聞いて総司はようやく先程の言葉の意味を察した。

つまり、まあ、あれである。そういう事なのだろう。この質問には

答えず聞き流す事にする。いや、第一にどこまでと聞かれても何も無いのだが。

「ふむ…つまり、圭を焚き付ければ良いって事だな」

「いや、そういう訳じゃ…ああもうそれで良いです…」

どうしてそこで諦めるんだもつと頑張れよもつとお！

と、心の中で声援を送る。その声援は決して届く事はないのだが。

「…そういうえば、かぐやちゃんのご両親は？一度正式に挨拶しなきゃと思っっていたんだ」

「何で挨拶…」

話題が変わった会話を耳にして、総司はふと思う。もし、雁庵自身がここに来ていたら、恐らく白銀父と出会っていたのだろう。そして、白銀父と挨拶を交わしていたのだろう。

「…」

容易に思い浮かぶ。白銀父が赤裸々にかぐやと白銀の関係について話し、その話に黙って耳を傾ける父の姿が。

(あ、来なくて正解だね。かぐやのためを思うなら来いよとか思ってたけど、かぐやのためを思うなら来るべきじゃなかったわ)

容易に思い浮かぶ。白銀の命を奪わんと疾走する父の姿が。本当に今日、雁庵がこの場にいなくて良かったと総司は本気で安堵した。

「総司様、総司様」

総司の肩がちよんちよんと叩かれる。振り向けば、いつの間にか早坂が傍まで近づいてきていた。

「…ん、早坂？どうした？」

「あれ。放っておいて良いんですか？」

「あれ？どういう…」

何の用かと問い掛けると、早坂はかぐやと白銀父がいる方を指差しながら逆に問い返してきた。

疑問符を浮かべながら、総司は早坂が指差す方へと視線を向ける。

「かぐや様。折角ですしこのお方にも同席して頂きましょう」

「は…」

「ええっ」

「総司様もよろしいですか？」

「いやよろしくないですけど」

気付いたら物凄い方向に話が進んでいた。何がどうなったら白銀父も面談に参加するなんて事になるんだ。

「四宮かぐやさんの保護者の方——」

「はい」

「ええーっ!!」

「あ、マジで行くの？俺の面談にも？」

かぐやの番がやって来る。教室から呼ばれる声に返事を返しなが
ら教室へと入っていく奈央と白銀父。そして、呆然と立ち尽くすかぐ
や。

「…総司」

「お前のせいだぞ。終わりだよ、俺達の三者面談」

「私のせいにして下さいよお！」

容赦なく罵声をぶつける総司と、罵声を浴びて涙目になるかぐや。

しかし、二人とも憂鬱な心情は一緒だった。

「もう…、いってきます…」

「がんばれ」

戦場へと赴くかぐやの後ろ姿を見送る。総司はその背中に向けて
エールを送るのだった。

「次は総司様ですけどね」

「言うな。忘れさせろ」

なお、現実逃避は早坂がさせてくれませんでした。総司は早坂に言
い返してから、両手で頭を抱えたのだった。

たかが三者面談がこんなにも憂鬱になるとは思わなかった総司で
あった。

四宮総司は誤魔化せない

「総司先輩って誰かと付き合った経験とかあるんですか？」

そう唐突に問われたのは生徒会室へと向かう途中での事だった。

もうすぐ文化祭が行われるという事で、体育祭直前から生徒会の繁忙期は未だ続いていた。今日はかぐやからヘルプを頼まれ、生徒会の仕事を手伝う事となっていた。

石上と会ったのは生徒会室がある一階へと階段を降りている途中、二年生の教室がある三階から一年生の教室がある二階に降りた時だった。

バツタリ出会した二人は一言挨拶を交わしてから、並んで生徒会室へと向かったのだが。

「急にどうした」

「いや、ふと気になって。総司先輩ってモテますけどそういう浮いた話は全く聞かないなと思って」

「だろうな。そういう関係に至った事がないからな」

色々吹っ飛ばして先の先まで至ったけど、とは口に出しては言えず。へえー、と相槌を打つ石上の次の言葉を待つ。

「彼女が欲しいなんて思った事もないんですか？」

「：ろくでもない女と結婚させられるよりは自分で決めた相手と、とは思ってる」

「政略結婚は嫌ですか」

「そりゃな。政略結婚から始まる恋、とかよく聞くけどあんなの物語だけの話だろ」

なお、これは総司個人の考えである。

「で?」

「はい?」

「何で急にこんな事聞いてくるんだよ」

「いや、だからふと気になって…」

「子安つばめの事の相談か?」

「!!?」

石上が信じられないといった表情で総司を見る。見開いた両目とあんぐり開いた口が、石上の驚きの大きさを物語っている。

「…四宮先輩ですか?」

「かぐやは関係ない。俺独自で知った事だ」

「ばねえ…」

ぽつりと漏れた石上の一言はしつかりと総司の耳に届いていた。総司は胸を張り、どや顔を浮かべながら石上を上から目線で見下ろす。

「また難儀な奴を好きになったもんだな。あの人、恋愛にトラウマ抱えてんだろ?」

「え、そうなんですか?」

「知らねえのかよ。…まあ知らないなら詳細は語らんぞ」

「いや、聞こうと思ってませんよ。知りたくはありませんけど」

三年、子安つばめ。秀知院四大難題女子の一人で、容姿端麗、性格も穏和で裏表のない性格は性別関係なく人を惹き付ける。

体育祭では赤組応援団の副団長を務めており、恐らくそこで関わりを持って石上は彼女に惚れたのだろう。

「ていうか、知ってるなら聞かないでくださいよ。性格悪いっすよ」

「四宮だからな」

「うーっわ…。申し訳ないですけどものっ凄くその一言で納得できちゃいますよ…」

再びどや顔を浮かべる総司。ドン引きする石上。

対称的な二人ではあるが、間に流れる空気は決して悪いものではなかった。

「…でもそんな人でも普通にモテるんだもんなー。やっぱイケメン妬ましい」

「何か知らんがものっ凄く憎悪を向けられてる気がするぞ」

理由は不明だが、涙目で俯き、影が差した表情からは黒いオーラが醸し出る石上からは憎悪を感じ取れた。

別に総司が某アニメに出てくる新人類に覚醒した訳ではない。誰でも出来る、ごく普通の読心術とすらいえない読みである。

「とにかく、恋愛相談なら俺にしても無駄だぞ。大体、相談したいのは俺の方だ」

「?それ、どういう事です?」

あつ、と声をあげなかつた総司を誉めるべきか、それともあつさりと口を滑らせた阿呆っぷりを貶すべきか。

どちらにしてもこの時、総司は石上にペースを握られたのである。

「もしかして、総司先輩も好きな人が…」

「それは違う」

総司が抱えている悩みは好きな人がいるとかそういうのではない。というより、それ以前の問題というか、とにかく石上が考えているものとは違う悩みを抱えている。

「じゃあ、誰かに告白されたとか?それとも告白を断った結果、ストーリーされてるとか?」

「それも違う。後、もしストーリーされてたら悩む暇もなく部下が断罪する」

「四宮家怖い」

総司の悩みが何なのか聞き出そうとする石上。そろそろ脅しをかけて矛を納めさせるか、という考えが浮かび出す。

(…いや、ここは石上に意見を聞くチャンスなんじゃ?)

しかしここで物騒な考えを引つ込め、逆にこの状況を利用しようかという考えも浮かぶ。

以前、帝にはああ言われたが、もしかしたら石上はまた別の考えを持つかもしれない。

「…なあ石上。これは俺の友達の話なんだが」

「そう切り出されると総司先輩の話に聞こえますよ。ていうかそれ、生徒会の誰かの話ですよ？総司先輩他に友達いませんし」

「お前ぶつ殺すぞ、社会的に」

無表情の総司に告げられ怯える石上をそのままに、総司は帝に話した事をそのまま話した。

怯えを収めた石上はうんうんと時折頷きながら総司の話に耳を傾ける。

「…どう思う？」

「総司先輩、爆発四散してください」

そして、総司の話聞き終えた石上の答えはこれだった。

「何ですか、めっちゃアオハルしてんじゃないっすか。何ですか、片想い真つ最中の僕への当て付けですか。もう青春の中の青春すぎて訓読みしちやっただじゃないですか」

「落ち着け石上。スイッチを切るんだ」

「一緒に水着を買いに行く？そんなのに好意を持ってない男を誘う女がいたらそいつはとんでもない尻軽ビッチっすよ。僕もつばめ先輩と行きたいです」

「だから落ち着けて。願望漏れてるぞ」

暴走が止まらない石上を宥める総司。その苦労の甲斐あってか、それとも総司の苦労は関係なしにか、石上は直後に落ち着きを取り戻す。

「総司先輩、もしかしてその話って藤原先輩との話ですか？」

「!!!」

藤原先輩の話ではなく、藤原先輩との話と来た。総司は驚きを隠せず目を見開いてしまう。

それは、洞察力の高い石上相手には致命的であった。

「あ、やっぱりそうなんですね」

「…石上、この話は」

「解ってますよ、誰にも言いません。言ったら後が恐ろしすぎるんで」

総司の脳内で目まぐるしく思考が巡る。結果、何をしても無様な言い訳にしかならないと結論付け、総司は無駄な抵抗を止めた。大体、

石上には以前、千花とのキス未遂事件を目撃されている。これで誤魔化すとかどだい無理な話である。

ただし、千花との話であるとは認めるがもう一人、圭の存在は出さない。これは絶対である。

「じゃあ、もう一人は会長の妹さんですか？」

「!!!」

「あ、こっちも当たりですか」

総司、再びの驚愕。何故、と問いた気な総司だが、石上にとってこの謎解きはあまりに簡単すぎた。

まず先程の総司の話だが、総司は帝にした話をそのまま石上にした。そう、始めから相手はともかく、誰かに好意を向ける女子が二人存在する事を総司は話してしまっているのだ。

しかし、それでも石上が圭の存在に辿り着く事は難しい。ならば何故、石上は圭の存在に辿り着く事が出来たのか。

「会長がめっちゃ悩んでましたよ。』もしかして、圭ちゃんは総司の事を…』なんて言って」

「…」

もう一人のシスコンのせいだった。恐らく、期末試験前の勉強会についての話だろう。

これは今日の生徒会は荒れるかもしれない。あの超絶シスコンが今、総司をどう思っているかなんて想像するに難くない。

しかし、忘れてはいけない。白銀は、総司の妹に手を出そうとしている事を。

「今日は戦争だな」

「え、何ですかいきなり」

そうこう話している内に二人は生徒会室の前に辿り着く。すると石上は真剣な顔付きで総司の方を振り向いた。

「総司先輩がどういふ答えを出すかは知りませんが、ちゃんと二人の好意には向き合ってくださいよ」

「…解ってるよ。そこから逃げるつもりはない。ていうか、逃げるつもりもないから悩んでんだよ」

「それもそうですね。逃げるつもりなら悩む必要もありません」
最後は笑みを向け合ってから、石上が前に出て扉を開けて中へ入る。続いて総司も中に入り、先に来ているはずのかぐやと白銀に挨拶をしようとして――

「うっわ、藤原先輩…。猫耳メイドってだいぶステレオなコスですね…」
「…」

出来なかった。生徒会室には何故か猫耳メイド服姿のかぐや。それと何故か気を失って倒れている白銀の姿があった。

「それ学校で着ますか？藤原先輩は恥というものが欠落…総司先輩、どうしました？」

「石上。あれ、かぐや」
「え？」

かぐやを千花と勘違いしたまま、石上は言葉のナイフをかぐやに突き立て続ける。羞恥が増すごとに頬を染める赤が濃くなっていくかぐや。

さすがに見ていられなくなった総司はソファに鞆を下ろす石上の肩を叩き、振り向いた石上にあの恥というものが欠落した存在がかぐやであると教える。

「…ええええええええ!?ど、どうしちゃったんですか!?すみません！イカれた格好してるからつい藤原先輩かと…」

「恥が欠落…イカれた格好…」
「あつ！いえ、それは言葉の綾で…！」

崩れ落ちるかぐやを見て、フォローの台詞のつもりが追撃の一撃となってしまう事を悟る石上。

ちなみに、追撃どころか止めになってる事までは気付いていない様子。

「…？何だこれ」

石上が必死にフォローしようと努める中、総司は白銀の左手辺りに変なものを見つけた。赤い文字、だろうか？遠くて判別できない。

総司は近付き、しゃがんでその文字を改めて見る。

「かわえ…河江？誰だ？」

この学園に河江なんて生徒はいたのだろうか。総司は脳内を巡らせ
思い出そうとする。

ちなみに、この学園に河江という生徒はいない。それにたとえば
としても、この文字とは全く関係がない。

何故ならこれは、『かわええ』と書こうとして途中で白銀が力尽きた
だけのだから。

「…後で赤木に調べさせてみるか」

しかしそんな事を知る由もない総司は無駄な行為を続けようとし
ていた。

その後、河江という名前について何も掴めなかったという赤木の報
告に頭を悩ませる事になるのはまた別の話である。

四宮かぐやは誘いたい

「あゝゝゝあ」

「…」

「あゝゝゝあ、あゝゝゝゝゝあ」

夜も更けた時間帯。東京都港区、四宮別邸のかぐやの部屋にて、二人の声が響き渡っていた。

その声には隠し切れない呆れの念が籠められており、ベッドに腰を下ろして縮こまるかぐやは罰の悪そうな顔をして黙り込んでいた。

「やっちまったなかぐや。これで暫くは白銀からデートに誘われなくなっただぞ」

「ズバツと断っちゃったんですから、仕方ないですね」

そんな小さくなるかぐやを見下ろし、容赦なく罵声を浴びせる二人は総司と早坂。

どうしてこんな状況になったのか、それには少し時間を遡る必要がある。

それは今から数時間前、授業が終わり放課後に入り、生徒会室にてかぐやと白銀が仕事をしていた時の事。

秀知院学園の近くにはもう一つ、公立の高校があるのだが、その高校の文化祭ももうすぐ行われる。正確には、秀知院の文化祭よりも先に行われるのだ。

そこで、白銀は勇気を振り絞った。偵察という名目で、かぐやを文化祭デートに誘ったのだ。自然を、軽いノリを装って。

しかしそれが災いした。自分がデートに誘われたと気付かず、かぐ

やがズバツと断ってしまったのだ。すぐに気付いても時既に遅し。別の話題へと移ってしまったという。

そして、冒頭のあの台詞に繋がる。かぐやの話聞いた総司と早坂のリアクションが、冒頭のあれである。

「仕方ないでしょう！今までの会長を考えてみてください！天と地が引っくり返っても自分からデートなんて誘わない人でしょ!?脳が理解するまでに時間が掛かっちゃったの!」

「気持ち解るがかぐや、その言い種は少し白銀が可哀想だぞ」

「まあ確かに、言われてみれば…。何でしょうね、心境の変化でもあったのでしょうか」

「早坂も酷い」

「じゃあ、総司様は会長さんがデートに誘った事を意外に思わないのですか?」

「いや思うけど。滅茶苦茶意外だけど。明日の天気が槍になるんじゃないかってちよつと怖いとすら思ってるけど」

「貴方が一番酷いわよ総司」

総司が一番屑だった。

「とにかく総司!早坂!どうか時間に戻す方法を探して!!」

「私達はドラ○ちゃんド○えもんじゃないのでちよつと…」

「相当錯乱してんな」

そんなタイムマシンに乗りたがるのび○君みたいな事を言われても、無理なものは無理である。それでもやれというのなら、世代交代しながら百年あれば出来るだろうか?

…無理な気がするが。

「まあ、さ。なあ?」

「はい。私もそう思います」

「…何よ」

「いえ。会長は勇気を振り絞って誘ってくれたんです。次はかぐや様から誘えば良いんじゃないやありませんか?」

「…」

かぐやの表情が引き締まる。視線を下に向けて俯き、何か考え込ん

でいる様子。

直後、顔が真っ赤に染まった。恐らく、自分からデートに誘っている姿を想像したのだろう。

しかし、かぐやは何も言わない。いつもなら『そんな事出来る訳ないでしょう!』と怒鳴っている所で、かぐやは踏み留まる。

かぐやは本気だ。

明日、かぐやは白銀をデートに誘う。

そして翌日。授業も終わって放課後。かぐやと白銀が生徒会室に向かっているであろう頃、総司は中庭のベンチに座っていた。

傍らの鞆から取り出した黒く四角い機械の電源を付け、機械に接続されたイヤホンを耳に着ける。

イヤホンから聞こえてくるのは大勢の人達の会話の声と足音。どうやら調子は良好らしい。総司は満足そうに口許を緩ませる。

「何をしてるんですか?」

総司の神経がイヤホンから聞こえる音に注がれる中、頭上から呼び掛けられたのが微かに耳に届いた。

見上げると、そこに立って総司を見下ろしていたのは早坂だった。

「珍しいですね、総司様が放課後に中庭で過ごしているなんて。…音楽でも聞いているんですか?」

「違うぞ?」

「え?...:それ、イヤホンですよね?」

「うん」

「音楽を聴いてるんじゃないんですか?」

「うん」

早坂が首を傾げる。

まあ、イヤホン着けた人を見たら普通音楽を聞いているのだと思うだろう。しかし、総司が聞いているのは音楽ではない。

「早坂も聞くか？」

「え？」

総司は左の耳からイヤホンを外し、早坂に差し出しながら問いかけた。

早坂は一瞬呆けた顔をして、一拍置いてから頷いた。総司からイヤホンを受け取り、総司が開けたスペースに腰を下ろしてからイヤホンを着けた。

「…？」

早坂が、総司が聞いているものと同じ音を聞く。イヤホンから聞こえてきたのは扉を開けた様な音。

総司は思う。どうやら、生徒会室に着いたらしい。

「…総司様、これはまさか」

「ん？」

「盗聴器、ですか？」

「正解」

「おい」

早坂の表情に影が差した。それも当然だろう。主人に盗聴を仕掛ける等、使用人として見過ごす事は出来ない。たとえ、主人の兄が相手だとしても。

「何をしてるんですか」

始めと同じ台詞だが、言葉に籠められた迫力が違う。ついでに言うなら早坂から黒いオーラが吹き出ている。

だが、総司は揺るがない。

「だつて気になるじゃん。あのかぐやが男をデートに誘うんだぞ？」

「…」

吹き出るオーラが収まった。どうやら、様子が気になるのは早坂も同じらしい。

「…聞こうぜ」

「…はい」

そして、早坂は悪魔の囁きに身を委ねてしまった。

二人はイヤホンから聞こえてくる音に集中する。

何か木製のものを叩いたような音。室内を歩く足音。何気ない世間話。

二人の表情が一変したのは、直後の事だった。

『こないだの北高文化祭の件なのですが…』

「――」

顔を見合わせる二人。遂にかぐやが仕掛けた。

二人は拳を握り、心の中で声援を送る。愛する妹が、主人が、想いを遂げる事を祈って。

『学園の代表足る者、やはり偵察に行くべきなのでしょうね！』

「…」

『…』

「…え、終わり？」

何という事か、次はいよいよ誘いの台詞に続く、と思われた所でかぐやは言葉を止めてしまった。まさか、これで誘ったつもりだろうか。

「言葉が足りない！」

「かぐや様…」

総司は膝に拳を振り下ろし、早坂が頭が痛そうに額に掌を当てる。

先程のかぐやの台詞では、白銀はこう言われたと思うだろう。北高の文化祭の偵察には行くべきだ。だから、一人で行ってこい、と。

多分、同じ立場なら総司もそう思う。

きつと、かぐや自身はかなり勇気を振り絞ったつもりなのだろう。

しかし、これでは足りない。これでは誘った事にはならない。

『こんちゃーっす』

「っー」

あと少し、もう一押し、かぐやの背中を押す何かがあれば。

そう切望する二人の耳に、希望の聲が届けられる。石上だ。生徒会室に石上がやって来たのだ。

何というタイミング、頼むからかぐやの…どうせなら白銀のでも良い。何か勇気が出る話題を頼む。

『ちよつと聞いてくださいよ。さつき滅茶苦茶面白い場面見ちゃっ

て』

すると石上が話し出す。

『さつき、廊下で文化祭デートに誘ってる奴いたんですよ』

「っ!!」

『しつたらにこやかに断られてっ』

「:」

何というタイムリーな話題、これは勝つる。そう力が籠った直後の叩き落とした。総司は背凭れにもたれ掛かり、早坂はがくりと前へと脱力する。

ダメだ、これではかぐやと白銀の勇気は大幅に減ってしまう。

頼む、誰でもいい。二人に救いの手を差し伸べて。

総司と早坂の思いはどこまでも一緒だった。

『こんにちは』

「っ:」

続いて生徒会室に入ってくるメンバー。今度は伊井野だった。二人の目に力が籠る。

しかし、先程の石上の話題からの流れ。そして伊井野の性格。二人は最早嫌な予感を感じ取っていた。

『ちよつと聞いてください。さつき凄く酷い場面見ちゃって:。女子を文化祭デートに誘う男子がいたんです。公衆の面前で異性交遊を持ち掛けるなんて信じられませんよね!私、ばっちり、取り締まってやりました!』

「:……」

二人の目が絶望に染まった。終わった、そうとさえ思った。これがかぐやと白銀の勇気がゼロになってもおかしくない。

万事休すか、そう思われた時、三度扉が開く音がした。

『こんにちはー』

「:」

入ってきたのは千花。この時、もう二人は諦めていた。これは帰ったらかぐやのフォローをしてやらなくてはダメだと思い始めていた。

『藤原は文化祭好きだよな!』

『えっ、何ですか突然』

『誰が北高の偵察に行くかって話だ!』

「――」

しかし、まだ諦めていない者がいた。白銀である。いや、もしかしたらかぐやもまだ諦めていないかもしれない。

だとしたら、早々に自分達が諦めるのは何と情けない話か。総司と早坂は顔を見合わせ、こくりと頷き合う。

こうなったらとことん付き合おうではないか。最後の最後まで諦めない。かぐやと白銀に声援を送り続けよう。心の中で。

『あー、そっか!明日は北高の文化祭でしたよね!私、去年行きましたよ〜』

「!」

『楽しかったか!』

『ええ、すっごく楽しかったですよ?』

「!!」

二人の顔が綻ぶ。これは来た。これまでの流れはこの時までの序章、これからが本当の勝負だったのだ。諦めなかったかぐやと白銀への神からのプレゼントなのだ。

『でも、少し残念な事もありました…』

『残念な事?』

しかし、どこまでも神は総司と早坂を、そしてかぐやと白銀を弄ぶ。

『お祭り気分で受かれてたのか、ナンパが凄く多かったですねー』

『最低ですね!』

『かぐやさんが行ったら大変な事になると思います!かぐやさんは絶対に行かない方が良いでしょう!』

「ばかああああああ…!」

二人は頭を抱えた。

何という、何という事をしてくれたのか。上げて落とされる、これはダメージ増だ。

かぐやと白銀のライフはもうゼロどころかマイナスの域に至っているのではなからうか。

さすがに、さすがにこれは――

『でも…、男の人がいればナンパされませんよね？』

「――」

総司と早坂はまだ解っていないなかった。かぐやの今回の作戦にかける思いの大きさを。決意の大きさを。

かぐやは諦めない。それに釣られるように、白銀も力を取り戻す。

『そ…そうだ！女一人で行くからそうなるんだ！一人は良くない！』
どんな逆境に立たされようと諦めない。ずっと片方を貶め、嵌めようとしてきた二人は今、繋がろうとしているのかもしれない。

総司と早坂は、ただその時を待つ。

『そうですよね！こういう時、男の人って頼りになりますから！』

『色々見て回るから体力のある男がいると便利だぞ！それで一人で行くより二人の方がより幅広くりサーチ出来る！』

『だったらら!!』

『だったらら会長と石上君で行ってくるのはどうですか？』

ぶつっ

何かが切れる様な音がした。これは形容ではない。物理的にそんな音がした。

総司と早坂がまるで打ち合わせていたかの様に同時に耳からイヤホンを外す。そして総司が早坂からイヤホンの片方を受け取り、コードを畳んで鞆の中へしまった。

「さて、帰るか早坂」

「はい、帰りましょう」

「今日のかぐやを誉めてやろうな。あいつは頑張ったよ」

「はい、誉めましょう」

「…千花にアホって送った」

「…私も送っておきます」

二人の背中から哀愁が漂っていた。神は何故、あの二人にあんな仕打ちをするのか。

流石に、かぐやと白銀が哀れでならない総司と早坂であった。

後悔は先に立たない

どうしてこうなった。

今の総司の気持ちを一言で表すとすれば、まさに上記の一言そのものである。

日付はいよいよ十二月、一年で最後の月に突入。それと同時に、文化祭の準備が本格化する。

それぞれのクラスの出し物は既に決定し、当然総司のクラスが行う出し物もまた、決まっていた。

総司のクラスが行うのは、簡単に言えば科学実験である。誰でも簡単に且つ、小さな子供でも楽しめる内容を考え、出し物として行うのだ。

ついでに言えば、何故だか知らないが科学実験を出し物として行うのに、教室の中心に某ピタゴラスな装置を作ろうと出し物が決まった際の盛り上がりとノリで決まった。

別にそれは良い。折角の文化祭、羽目を外さない範囲でなら自由に楽しんで良いと思っっている。だから、出し物が科学実験に決まろうがそれに関係ない装置を作ろうが何の文句もない。

しかし、しかしだ。

「うわあつ！可愛く出来てるじゃん！」

「えへへえへ、でしょお〜？」

「…」

総司の視線の先で、床に置かれた白く大きな紙に何かを描いている女子生徒の姿があった。そして、その紙に描かれたものを見て感嘆す

るその生徒の友人と思わしきもう一人の女子生徒。

総司にとつて文句たらたらな代物は、そこにある。

「四宮君はどう思う？」

「ちよつと。四宮君じゃなくて、そうじろう先生でしょ？」

「あつ、そうだった！そうじろう先生、これで良いですかー？」

「…ああ、良んじゃね」

それは良い笑顔で紙に描かれた文字と絵を総司に見せてくる女子生徒。確かに可愛らしく出来ている。真ん中に横向きに書かれた可愛らしい文字に、その文字を装飾する可愛らしい絵。

これで、書かれてる文字が『そうじろう先生の科学実験教室』でなければ、本当に何の文句もなかったのに。

「なあそうじろう先生、何かこれ上手くいかねえんだけど」

「…もつとゆつくりで良い。力加減ももう少し弱くて良い」

「…おお！音が出た！」

次に総司に声を掛けてきたのは男子の生徒。机の上に水が入ったグラスを載せ、その縁を指でなぞっている。

そう、これはあの有名なグラスハープである。そうじろう先生の科学実験教室の企画の一つである。

「おーいそうじろう先生ー」

「そうじろう先生、こつちに来てくれー」

「そうじろう先生、ここはこんな感じで良いかな？」

「――」

そうじろう先生、大人気である。

もう一度問おう。どうしてこうなった？

その理由を語るには、三日前まで遡る。

文化祭の準備は思わしくいかず、総司のクラスは少々ピンチに陥っていた。何しろ、実験の内容が三日前の段階で一つしか考え付いていなかったのである。

決して案が出てこない訳ではない。しかし、もっと面白いものは出来ないので、という拘りが進捗を遅らせていた。

『…グラスハープとかどうだ』

この状況の中、これまで全く会議に出席しながら参加しようとはしなかった総司が初めて口を開いたのだった。

『グラスに適量水入れるだけで済むし、文化祭に来る客を参加させられる』

この案が総司の想像以上にクラスの皆に受け、すぐさまその案は採用された。

更に総司は他に良い案はないかと問われ、その質問に、

『水、油、着色料、塩。これで出来る実験は面白いと思う』

そう言つて、総司はスマホで呼び出した実験の動画をまず代表者に見せる。

結果、先程のグラスハープの案よりも受けた。

その後、何やかんやで実験はグラスハープと水と油の実験、そして始めに決まった片栗粉のダイラタンシーとピタゴラな装置でいこうという事に相成った。

そして、行き詰まっていた状況を一瞬で打破した総司を祝し、出し物のタイトルが『そうじろう先生の科学実験教室』に決まったのだ。

「…」

文化祭当日になれば、大勢の客の前でこのタイトルが大々的に晒されるのである。まあ、この出し物にそこまで多くの客が来るかは定かではないが…。

少なくとも、総司と既知の者達は間違いなく来る。そして、タイトルのそうじろうとは誰の事なのか、すぐに悟られる。

ああ、笑われるのが容易く想像できる。何か当日は総司が当番の間は白衣を着せようとかいう不吉な話も聞こえてきた。それだけは断じて御免だ。絶対に嫌だ。

「あつ、総司君…」

「っ」

教室で準備が進む中、する事がなく省かれた形になった総司は教室を出る。どうせ何か聞きたい事があつたら探しに来るだろうと廊下に出た所で、総司は声を掛けられる。

声の主を確かめなくとも解る。声がした方に振り向けば、そこには

総司の予想通りの人物がこちらに歩み寄ってきていた。

「どうしたんですか、廊下に一人でいて…。あ、もしかしてサボリですか?」

「違う。やる事ないから邪魔にならない様に廊下にいるだけだ」

「…それはサボリじゃないんですか?」

それを、人はサボリという。

「…ち、かこそ、準備しなくていいのか?」

「…私はこの領収書を先生に渡しに行くところですけど」

声を掛けてきた千花は教室に残らなくて良いのか、問い掛けると、千花は総司に学園の近くにある100円ショップの領収書を見せてきた。

領収書には大量の風船を買った旨が記されている。どうやら千花のクラスでは風船を使った出し物を行うらしい。

「…」

「…何だよ。俺、何か睨まれる様な事したか?」

千花のクラスの出し物が解つたのは良いが、総司の中でまた一つ疑問が生まれる。

何故、自分は千花にじと目で睨まれているのだろうか?

「聞きたいのは私の方です」

「は?」

「私、総司君に何かしちやいましたか?」

ちよっぴり膨れた様子で聞いてくる千花に、疑問符を浮かべる。

何かしたか、と聞かれても。思い当たる事は何も無い。

「いや、別に」

「…なら、どうして私の名前を呼びづらそうにしてるんですか?」

「…」

ああ、解つてしまった。そして、悟られてしまった。

切っ掛けは例のあれである。千花と圭が総司に好意を持っているのでは、という疑いが生まれたあの日である。

あれから、どうも千花と圭を下の名前で呼ぶのが気恥ずかしくて仕方ない。先程も、千花と呼ぶ際に不自然にごもってしまった。

「総司君。もし私が何か気に入らない事をしちやつたのなら正直に教えてください。謝りたいですし、次からは注意したいですから」
「い、いや、ホントに何も無い。ち…千花が気にする様な事は何も無い」

「ほら！また言い淀みました！」

「まずい。こんな所で騒いでしまったては注目を浴びてしまう。」

逃げてしまおうか…、いや、ダメだ。それはただの問題の先伸ばしである。とはいえ、ここで話続けるのはもつと注目を浴びる羽目になる。

「…そんなに言いづらい事なんですか？」

「…千花？」

ぷんすかと怒った様子だった千花の表情が突然、悲しげに歪む。

違う。そんな顔をさせたい訳ではない。ただ、自分は――

「…何度も言うけど、千花が悪い訳じゃない」

「じゃあ、どうしてですか…？」

「…」

どうしよう、何て言おう。まさか全部ぶっちゃける訳にもいくまい。そんな事をすればどうなるか、考えられる未来は二つ。

『え…？』

と、千花に強烈な羞恥を与えるか、

『え…？』

と、千花にドン引きされるかのどちらかである。

断言しよう。どちらも御免である。特に後者。後者は総司が受ける精神的ダメージがとんでもない事になる。

「…総司君」

「ん、なに…」

どうするべきか未だに悩んでいると、再び千花に声を掛けられる。

千花は、笑っていた。

何か吹っ切れた様に。何かを、諦めたかの様に。

千花が口を総司の耳元に寄せてくる。

「私は、総司君の事が好きですよ」

「っ…」

千花の顔が離れる。千花は笑ったままだった。

「ごめんなさい。急に変な事を言つて」

「…」

「迷惑でしたよね？忘れてください」

「あ…、千花っ」

千花はその言葉を最後に走り去っていく。総司はその後を追おうとして――

「おい、そうじろう先生ー！ちよつと教えてほしい事があるんだけどー」

足を止める。

心が叫ぶ。そんなもの無視して、千花を追いかけると。

しかし反対に、頭が冷静に言うのだ。追いかけてどうするのか、と。解っているはずだ、と。自分にそんな資格はない、と。

あんなどこまでも純粹な女の子に想われる資格などないのだと。

それならば、千花の言う通り忘れるのが一番なのではないか。

「…」

どれだけ考えて答えは出ないが、総司は千花を追わずに教室の中から呼んできた生徒の方へと足を向ける。

だって、ここで千花を追いかけても、掛ける言葉が何も思い付かなかったから。

「…」

一階の階段の下、影となって遠くからは姿が見えない場所に、千花はいた。

思い返すのは先程の総司との会話。どうしてあんな事を言ってしまったのだろう。気付かないフリをしていれば、こんな事にはならな

かったのに。

違和感を抱いたのはもう二週間程前になるだろうか。どうにも総司の様子がおかしい事に千花は気付いた。自分の名前を呼ぶ際、必ず言葉が詰まるのだ。

始めは偶然だとスルーしていたが、何度も何度も続けば違和感へと変わる。そうして、千花は何か総司にしてしまったのではないか、という考えに至る。

そして今日、千花は総司に問い掛けたのだ。自分は何か気を悪くする様な事をしたのか、と。

返答は返ってこなかった。しかし、千花にはそれで充分だった。総司の返答に困る様子を見て、察したからだ。

——— ああ、バレている。

根拠はない。しかし、千花の第六感がそう告げた。

自分の気持ちは、気付かれていると。

だから千花はあまりに唐突に告白した。してしまった。どうせ気付かれているのなら、いつその事暴露してしまえ。

「っ…」

千花の脳裏で、告白した直後の総司の表情が過る。

悲し気に表情を曇らせて千花を見つめていた総司。それだけで解った。自分の想いが遂げる事はないのだ、と。

「うっ…うっえ…」

嗚咽が漏れる。止めどなく涙が零れる。何度も目を拭う。しかし流れる涙は止まらない。

千花は遂にしゃがみ込んでしまう。

どうしてあの時、どうせと踏み込んでしまったのか。逸らなければ、まだ総司とは友達でいられたのに。少しの恥ずかしさを我慢して、総司と変わらず接していられたのに。

「…仕方、ないじゃないですかあ」

自問自答。その理由を、千花はすでに悟っていた。

「だって、好きなんですから…。仕方ないじゃないですか…っ」

その答えはあまりに単純で、そしてあまりに複雑なものだった。

四宮総司の奉心祭Ⅰ

「いよいよ明日は文化祭ね」

「うん」

「総司のクラスは科学実験を出し物としたのよね？」

「うん」

「私も時間が空いたら見に行こうかしら」

「うん」

「総司、聞ってるの？」

「うん」

「…」

「うん」

「何も言っていないわよ」

四宮別邸の食堂にて、いつもの二人だけの夕食を摂っていた総司とかぐや。

今日が文化祭前日という事もあるからか、いつもより饒舌に喋るかぐや。しかしそれに対し、総司はただかぐやの話す言葉に空返事をするのみ。

それどころかかぐやが何も言っていないにも関わらず返事をする始末。

「総司、あなた本当に最近おかしいわよ。何度も聞くけど何かあったの？」

「うん」

「そう。なら、何があったのかしら」

「うん」

「…総司、私は何があつたのか聞いてるのだけれど」

「うん」

「…」

「う、いつてえっ!?!」

元々我慢強くないかぐやにしてはよくここまで我慢できたと言われるべきだろう。だがここでかぐやの限界は訪れた。

テーブルを挟んで対面して座る総司とかぐやの丁度中心、万が一床に落としてしまった場合に備えて置いてある予備のスプーンを手にとったかぐやは、総司目掛けて投じた。

かぐやの手から放たれたスプーンは総司の額にクリーンヒット。今日、かぐやは初めて総司の口からうん、と挨拶以外の言葉が聞く事が出来た。

「何すんだ!?!」

「目は覚めた?」

「は?…ああ、またか」

この会話から読み取れる通り、総司が上の空になるのはこれが初めてではない。ここ最近は毎日、暇さえあればそんな状態になる。

しかし仕事の方は何の問題もなく片付けられているのは公私がしっかりしていると言うべきか、それとも総司が抱えているであろう悩みがそう大したものではないと判断すべきか。

いや、そんな筈はない、とかぐやはすぐに断ずる。何しろ総司がここまで何かに引きずられている所をかぐやは初めて見る。総司をこらうさせた何かは、総司にとつてとても大きなものであるに違いない。

「総司」

「聞いても無駄だぞ」

「…」

総司の悩みを解消するのに少しでも協力したいと思うかぐやなのだが、当の本人がこの調子である。協力どころか、詳細を知る事すら出来ない。

「…おかしいといえば、最近藤原さんの様子もおかしいのよね」

「…」

ビンゴ。

ほんの僅かではあるが、総司の眉間が震えたのをかぐやは見逃さなかった。どうやら総司がこうなった理由は千花が関係しているようだ。そして、千花の様子がおかしくなった理由は総司が関係している。

「貴方のように上の空という訳ではないのだけれど、最近元気がないの。総司は何か知らない？」

「…いや、特には」

「本当に？」

「しつこいぞ」

「しつこくなるわよ。藤原さんと何かあったのでしょうか？そのくらい解るわよ。あまり私を舐めないでちょうだい」

総司が視線をそらす。

「大事な家族と大事な友達が仲違いしているのなら何とかしたい。そう思うのは当然でしょう？」

「…地球の癌とか言ってたくせに」

「覚えてないわそんな昔の事」

「覚えてんじやねえか昔の事って」

そう昔の事ではないが。もつと言えばほんの数ヶ月前の事だが。すると不意に総司が立ち上がる。まだだいぶ料理は残っているが、そのまま総司はテーブルから離れて出入り口へと向かう。

「総司」

「食欲ない。部屋に戻るわ」

かぐやの呼び掛けは無視して、最後に二言言い残してから総司は食堂を出ていった。

我が兄ながら何と頑固な事か、とかぐやは自身を棚にあげてため息を吐いた。

「全く…」

何があったのかは解らないが、恐らく総司が悪いのだろう。かぐやはそう確信していた。

何故ならかぐやと総司は今まで出会ってきた誰よりも共にした時間が長く、そして二人はどうしようもなく似ているのだから。

昔々ある所に、病で今にも死んじやいな姫がいた。彼女の父親である殿が姫の病が治るよう祈ると、天からお告げが来た。若者の心臓を火に燃べ、その灰を蘿蔔の汁に溶いて飲ませよと。

その噂はたちまち広がりある日、姫を愛する一人の若者が殿に申し出た。自分の心臓を使ってほしい、と。若者が捧げた心臓をお告げ通りに火に燃べ、蘿蔔の汁に溶き、姫に飲ませると、姫の病はあっという間に治ったという。

そんな昔話の舞台が実は秀知院学園高等部の校舎が建っている場所だという。そうした話に倣い、高等部の文化祭は《奉心祭》と呼ばれている。

(怖いわ。心臓の灰を溶かした汁とかやべえだろ)

学園の生徒の殆どが知っている昔話を思い出しながら、総司はただただ恐怖を覚える。

若者の姫への一途な愛がロマンチックだというのがこの昔話への大方の感想なのだが、総司は違う。怖い、これが総司の昔話への感想である。

いや、普通に怖い。確かに愛する姫のために命を捧げた若者はかっこいいと思うが、そのかっこいい若者の心臓を火に燃べて汁に溶かして飲むって。普通に怖い。えぐい。(個人の感想です)

(…思ってたより人多いな)

さて、そんな事を考えている総司がどこにいるかというのと、勿論というべきか、学園である。

時刻は朝の五時半。普通に考えてかなり早い時間帯だが、校舎にはすでに最終準備のために集まった生徒が大勢来ていた。

そんな中、総司はかぐやと並んで廊下を歩いているのだが、どうも

家から車に乗った辺りからかぐやの様子がおかしい。

初めは昨日の会話で機嫌を損ねたかと思っただがどうもそうではないらしい。かぐやは、自分の事で何かに悩んでいる。

(そういや、早坂が何か言ってた気がするけど…何だっけ?)

ここでふと思ひ出す早坂との会話。といっても、会話の内容は全くといっていいほど覚えていないのだが、かぐやが何かを自覚したみたいな事を言っていた気がする。

(自覚…自覚?何を?)

突如涙を浮かべたかと思えば頭を抱え、かと思えば不貞腐れた様に頬を膨らませるかぐやの情緒不安定っぷりを眺めながら早坂が何と言っていたかを思い出そうとする。

しかし靄がかかった様に思ひ出す事が出来ない。それも当然だろう。何故なら、総司はその時上の空で早坂の話を右から左へ聞き流していたのだから。

何か悩んでいるのなら相談に乗りたい所ではあるのだが、総司自身かぐやから差し伸べられた手を振り払ったばかりである。そんな自分がかぐやに相談に乗るなんて言えるはずもなく、結局触れず仕舞いで終わってしまった。

かぐやは一体何について悩んでいるのだろうか。まあ、ここ最近の傾向から考えれば白銀をどうやってコクらせようか悩んでいるのが一番しつくり来るのだが。

(…ん?白銀?...自覚?...)

ただの偶然、何の切っ掛けも前触れもなく、総司の中で一本の線が繋がった。

早坂が言っていたかぐやが自覚したという台詞と、今かぐやが悩んでいるであろう白銀との事。

まさか、かぐやが自覚したのは――

「おーい、四宮ー」

二人の前方から男子生徒が呼ぶ声がした。総司とかぐやはそれぞれ思考の渦から我に返り、顔を上げてその男子生徒の方を見る。

「あ、いや…。す、すいません、えっと…、兄の方です…」

「ああ、そうですか。…それじゃあ総司、私はここで」

「ん。かぐやのクラスの出し物、楽しみにしてる」

「私こそ、時間が空いたら貴方のクラスを覗きに行きますね」

男子生徒が呼んでいたのはかぐやではなく総司の方。よく見たらその生徒は総司のクラスメイトだったため、かぐやを呼ぶ方が不自然といえるが。

「それで、何か用か？」

「え？いや、別に。ただの挨拶だけ」

「…ああ、そう」

総司を呼んだ男子と並んで教室へと向かう。途中、自分を呼んだ理由を問い掛けたが、何の用事もないという。

戸惑いながら男子の顔から前へと視線を戻す。

最近、周囲の総司に対する態度が変わった気がする。正確にいえば、文化祭の出し物について意見を出した日から。あの日まではクラスメイトですら総司に話しかける生徒は殆どいなかった。生徒会メンバーが数少ない例外だった。

しかしあの日から、クラスメイトが少しずつ総司に話しかけるようになった。特に、出し物のタイトルが決まっただけからは総司と話さず態度が明らかに砕け始めたのが手に取るように解った。

こうしてクラスメイトと挨拶を交わす。それだけの事でさえ、今の総司には新鮮に思える。

ずっとあのままで良いと、一人のままで良いと考えていた過去の自分が今の自分を見たらどう思うだろう。

墮落したと考えるだろうか。自分も、と羨むだろうか。

前方から女子の集団が歩いてくる。その中の一人と、総司は視線が合った。

交わった視線はすぐに解かれる。どちらともなく、互いに視線を外して、二人は何も語る事なくすれ違う。

「千花ちゃん、どうかした？」

「え？別に何でもないですよ」

背後からすれ違った女子の集団の話し声が聞こえてくる。
総司は振り返る事なく、男子生徒とクラスの出し物について話しながら教室へと入っていくのだった。

四宮総司の奉心祭2

「…先生」

「四宮先生…」

「私に授業をしてください！」

「ちよつと何言ってるか解らない」

総司の目の前で頬を赤らめた女子生徒達が騒いでいる。

何故こんな騒ぎになっているのか、その理由は今の総司の格好にある。

白衣を身に纏い、度が入っていない眼鏡を掛けた総司は端から見れば完全に理科の教師である。ついでに容姿が整っているイケメン教師。男子からは妬みが、女子からは憧憬の視線が注がれる。

「おーい、そろそろ開場の時間だぞー」

「私、奉心祭回らないで総司様見てようかしら…」

「馬鹿な事言ってるやないでとつと出てけ。お前らのシフトはまだ先だ」

うっとりしたままの女子生徒達をシフト外の生徒と共に男子生徒達が追い出す。

あと五分もすれば一般の客達がやって来る。シフト外の生徒が教室に残っていたら、この教室の密度がとんでもない事になってしまう。

シフト外の女子生徒がブーイングしながらも教室から出ていく中、いよいよ一般の客を校舎に入れて、奉心祭が本格的に始まりを告げる。

開かれたゲートから入ってくる一般客であつという間に校舎が一杯になる。廊下を歩くだけでも一苦勞な程に賑わいを見せる中、総司達のクラスには多くの客が出し物を覗きに來ていた。

「ねえねえお兄ちゃん！これってどうしてこうなるの？」

「おう！これはだな！…これは、だな。…そうじろう先生！」

ビーカーの真ん中で境界ができ、その上で上半分に赤い玉が浮いている光景を見た男の子が近くにいた男子生徒に声をかける。男の子にこの光景はどうしてこうなるのか問われた男子生徒は答えようとして…、答えられずに総司に助けを求めた。

助けを求められた総司は男の子に水と油の関係についてと赤い色が浮く理由を教えるが、男の子には少し難しかったようで首を傾げられてしまう。

しかし、もう一度噛み砕いて説明して上げると水より油の方が軽いから二つの液体が上下に別れる事だけは理解できたようで、目を輝かせる男の子はビーカーの中をじっと見つめていた。

(…忙しい)

たくさん人が入ってくる今の光景は総司にとって嬉しいものではない。なのだが、それによって総司は多忙極まりない状態に陥っていた。

何しろ、実験について解らない所があれば殆どの場合で総司に聞いてくるのだ。総司の格好が眼鏡に白衣という明らかに博士を意識した格好なのだから当然といえれば当然なのだが。

「うおおお！すげえええええ！」

「ねえねえ！何でここで玉が曲がるの？」

この場に出した科学実験も好評だが、教室の中心にある目玉、ピタ○ラ装置も大好評のようだ。

何で科学教室でピ○ゴラ装置なんだと当初は疑問だったが、この盛り上がりを見ているとそんな疑問なんてどうでも良くなってしまふ。

子供だけでなく、一緒に来た大人も楽しんでる様子を見て総司の表情が和らぐ。喜んでもらえるのなら苦労した甲斐もあるというものだ。主に今のコスプレについて。

しかし盛り上がっているのは良いがあまり今の格好を知り合いに見られたくはない。特に石上に見られたら羞恥心が欠如しているとかわれそう。実際にかぐやがそう言われてたし。

なんて思ってたなら本当に知り合いが来そうなものだがそんなうまい……いやうまくないのだが、そんな話は現実であるはずもなく、総司は教室を見回して様子を――

「総司さんー」

訂正。そんな話はありません。フラグとか現実であるはずないと
思ってたけど、どうやらあったらしいです。

「圭さん……。来てたんだ」

「はいっー」

呼ばれた方へと振り返ればそこには白銀の長い髪を靡かせる圭が
立っていた。

唯一の救いは来たのが石上ではなく圭だったという事か。圭なら
容赦なく言葉のナイフでぐさぐさ刺しに来る事はない。はず。

「白銀のクラスには行ったか？ バルーンアートやつてるけど」

「あ、はい。看板はチラツと見えました。後で行ってきます」

どうやら最初にここへ来たらしい。哀れ白銀、愛する妹に後回しに
されてしまう。

「それでその…、総司さんはいつまでここにいますか？」

「ん？ 昼前に一旦休憩入るけど？」

「昼前…」

勿論、白衣姿のまま一日中教室にいる訳ではない。総司もまた一生
徒であり、奉心祭を楽しむ権利を持っている。とはいえ、そうじろう
先生がいなければタイトル詐欺になってしまうのも事実。

申し訳なさそうに他の生徒より短めの休憩になってしまう旨をお
願いされた総司は快く了承した。別に誰かと回る約束もしていない
し、というより別に回るつもりもなかったというのが正しい。むし
ろ、こうして教室で自分達が考え、作り上げた出し物を楽しんでくれ
ている客の姿を見ていた方が楽しいのではと思つてさえいる。

「そ、それじゃあ総司さん。休憩の間、私と一緒に回りませんか？…奉
心祭」

「え？」

「「！！」」

呆ける総司。それと同時に何故か緊張が奔る室内。

いや何故だ。何でそんなに目を見開いてこつちを見てくるんだ。

「…」

僅かに頬を染める圭もまた、緊張した様子で総司を見上げている。圭が緊張しているのは解る。断られたら、なんて思いが浮かんで緊張しているのだろう。しかし、何で圭以外の周囲も緊張しているのか。

「いいよ。回ろうか」

「っ、は、はいっ!」

「「「おおおおおおお」」」

誘いを受けた途端、圭の表情が一気に綻ぶ。同時に緊張に満ちていた教室が歓声で満たされた。いや、全く解らん何故だ。

「おい四宮。今行つてこい」

「は? いや、シフトはまだ…」

「そんなのはどうでもいい。今行け。すぐ。ハリー!」

「??」

さつきから解らない事だらけだが、クラスメイトに急かされ総司は白衣を脱がされ眼鏡をぶんどられ、圭と一緒に教室から追い出される。

「…なんで?」

「…」

本当に解らない。まだシフトは終わってないのに何で、それも強引に追い出されなければならないのか。そして、何で圭はどこか申し訳なさそうな顔をしているのか。

「…まあいいか。どこ行く?」

解らない事だらけだが、ここで突っ立っている訳にもいかない。総司は隣に立つ圭に視線を向け、どこか行きたい所はないか問い掛ける。

圭が顔を上げて総司を見返しながら口を開く。

「えっと…、それじゃあまず、かぐやさんのクラスに行きたいです」

「かぐやの? ならすぐそこだけど…」

かぐやのクラスの教室をある方へと圭と一緒に視線を向ける。

視線の先では行列が、そして列の最後尾では十分待ちと書かれた紙を持った女子生徒。

「見ての通り少し待つみたいだけど、行く?」

「はいっ!」

迷うことなく断言されてしまえば何も言い返せない。いや、圭の要望に不満等はないのだが、待ち時間があるため先に白銀のクラスから回ろうかと提案するつもりでいたのだが、こんな風に断言されると何も言えない。

とにかく、クラスからの許可は得たため、それに甘えてかなり早めの休憩に入らせてもらおう。休憩が終わる時間まで圭と一緒に奉心祭を回らせてもらおう。

「はい。コーヒー二つです」

「ありがとうございます」

という事で、早速圭の要望通りかぐやのクラスでやっているコスプレ喫茶に入ったのだが。単刀直入に言おう。空気が冷たい。

その理由は今、総司と圭にコーヒーを出しに来たメイドのコスプレをした早坂と、コーヒーを受け取りながら早坂にお礼を言った圭にある。

初めはメイド服姿の早坂を見て二人で驚いただけだった。いや、総司は驚きすぎて肝を冷やしたのだが。

しかし、早坂と圭の視線が交わってから空気が一変する。早坂の視線が鋭くなり、圭の顔がどこか誇らしげな風に笑う。

実際に声に出していないにも関わらず、女二人による舌戦が行われている様に見えるならない。これを、人は修羅場と呼ぶ。

「早坂さん、似合ってますね?メイド服」

これまではただ殺気をぶつけ合っていただけだったが、圭が先に仕掛けた。

にこやかに笑みを浮かべて、柔らかでありながらどこか刺々しさを

感じさせる声で早坂に話し掛ける圭。

「ありがとうございます。私自身、どこかしつくりとさえ感じています」

一方の早坂は総司にとっては慣れ親しんだ、周囲のクラスメイトにとっては違和感を感じるであろう無感情な声で返事を返す。

しかし、早坂もまた圭と同じく、その声の中に刺々しさを感じさせた。

「四宮くん」

「え？あ、はい？」

再び視線をぶつけ合い、火花を散らし始めた二人だったが、不意に早坂が総司の方を向き口を開いた。

馴染みのない呼ばれ方故に一瞬硬直してしまっただが、学校での早坂のキャラではこの呼び方が普通だろうとその一瞬の間で納得した総司は気を取り直す。

しかし、その声は無機質なままである。普段の早坂と同じままである。

「白銀さんとデートしてるんだ？」

「…早坂、落ち着け。何で怒ってるのか知らないが、とにかくお「私の質問に答えて」…まあ客観的に見ればデートではあると思われます」

「…ふーん」

理由は解らないが、早坂は総司が圭と一緒にいるのが気に入らないらしい。本当に理由はさっぱり解らないが。

その鈍感さが、早坂の機嫌を悪くさせる一つの要因なのだということを、この阿呆は知らない。

「早坂？」

「つ…。かぐやさ…ちゃん」

更に早坂が続けようとしたその時、早坂を呼ぶ声がした。その声の主は、町娘の格好をしたかぐやである。

振り返った早坂はかぐや様と言いかけた。総司にも圭にも解った。

仮面が剥がれる程に早坂の機嫌は底を突き抜けているという事なのだろう。

「何をしているんですか？お客様が待っていますよ？」

「…、…。はい、解りました。すぐに行きます」

ここでこうして話している間にも客は教室を行き来し、注文を待っている。

注意された早坂は数秒何か言いたげな表情でいたが、かぐやに従って仕事へと戻っていった。

そんな早坂の後ろ姿を眺めながらかぐやはため息を吐き、そして総司と圭へと向き直った。

「早坂がごめんなさい、圭」

「い、いえっ、気にしないでください。私も、早坂さんを挑発しましたから…」

頭を下げるかぐやに慌てて両手を振る圭。

「それにしても、最近のあいつ情緒不安定だよな。すぐ機嫌悪くしてさ」

「…貴方はもう少し早坂の事を見てあげなさい」

「え」

やり取りする二人を眺めながら総司は頬杖を突く。そして二人から客に飲み物をお出しする早坂に視線を向けてからため息混じりに口を開いた。

そんな台詞を耳にしたかぐやが呆れを全く隠さない口調で総司に言い返す。

「私も、今のはちよっと早坂さんが可哀想だと思います…」

「ええ」

更に圭までもが遠慮がちにかぐやの言葉に賛同する。

総司の味方は果たしてどこへ。

「とにかく、二人はどうぞゆっくりしていつててください。…といつても、あまり長く居座られると困りますけど」

「解ってる。これ飲み終わって少ししたら出るよ」

少し申し訳なさそうな表情で言うかぐや。本音は心行くまでゆっくりしていつてほしいのだろうが、この混みっぷりだとそういう訳にもいくまい。

総司もそれを察してかぐやに対して反論はせず、あまり長居はしないと返事を返した。

その返事を聞いて笑顔を浮かべたかぐやは、一度総司と圭にお辞儀をしてから仕事へと戻っていった。

「…圭さんはゆっくりしていきたかつたろうけど、悪いな」

「いえ。…いえ、ゆっくりしたいとは思いますが、それだと他のここに来たいお客さんに悪いので」

本当に圭は良い子である。憧れのかぐやが働いている所だ。じつくりとその場所を堪能したかつたろうに、その気持ちを抑えて他人の気持ちを慮る事ができる。

今時の中学生にこんな事ができる子が果たしてどれだけいようか。

「——さて、そろそろ出ようか」

そうしてリラックスしながら、且つ少し急いでコーヒーを飲み干した二人は席を立ち、傍にいた猫耳ウエイトレスの格好をした女子生徒に会計をしたい旨を伝える。

「五百円になりまーす」

「はー」

コーヒー二つの料金を払うべく、総司は制服のポケットから財布を取り、中から一万円札を出す。

「ま、待ってください。総司さん、自分の分は払いますから」

出そうとしたところで、総司が全額払おうとしている事を察した圭が呼び止めた。

「まあまあ、気にしない気にしない」

しかし総司はそんな圭に見向きもせず会計を済ませるべく一万円札を渡そうとする。

「総司さんっ、本当に私、大丈夫ですから！」

高々数百円程度、総司にとっては出費とすら言えないのだが、家庭事情が切迫している白銀さん家の圭さんにとってはそうではない。

数百円の出費が白銀家にとって明日を左右する時はこれまで多々あった。圭にとっての数百円とは大金なのである。その大金を他人に、それも想い人に出させるなど圭には耐えられないのである。

「いや、ここは年上として格好つけさせてくれよ」

そんな圭の気持ちも、全てとはいえないが総司は察しているつもりだ。だからこそ、総司はここで圭にお金を出させたくないのである。

ノブレス・オブリージュ、なんて言うときまるで圭を見下しているようにだが、似たようなものだ。

四宮の人間が、家庭事情が厳しい生徒、それも女子に割り勘とはいえ金を払わせた、なんて事、総司にとっては許されない事なのだ。

それに、たとえ総司の家庭が裕福でなかったとしても、そんなプライドがなかったとしても、総司は圭にお金を払わせたくはなかっただろう。

何しろ、四宮総司は身内に甘いからだ。

「…本当にありがとうございます」

「いいからいいから。それより、次はどこ行く?」

結局、圭を押し切った総司が二人分の金額を払って、二人は教室を出た。

総司の隣にはそれはそれは申し訳なさそうに身を縮める圭の姿。そんな圭に次の目的地をどこにするか問いかけたのだが――

「ああああ…。総司先輩にどんなお礼をすれば…。やっぱり、この奉心祭で何かお返しするべきよね…。でも何を…。私はコーヒーを奢ってもらったから…。食べ物とか…。外でたこ焼きとか焼きそばとか屋台たくさんあったからそこで…。ああでも総司さんの口にそんなザ・庶民な食べ物が合うのかな…。ああああどうしようおおおおおおおお…。」

「…」

どうやら総司の声は聞こえなかったらしい。頭を抱えてぶつぶつと呟く圭に、今、総司の言葉を無視した事を伝えたら顔を真っ青にして倒れるだろう。

それ程に、圭は追い詰められていた。

(…良かれと思ってしたんだが)

普通に割り勘するべきだったか。いやしかし、圭にお金を払わせるのは如何なものか。それに、ここまで追い込む事になるなんて思わな

かった。

「圭さん」

「…ふえ」

とにかく、まずは圭を正気に戻す。

総司は圭の名前を呼びながら、圭の頭にぽん、と手を乗せた。

「総司さん…?」

「奢った奢られたくらいで気にしすぎ。友達ならそれくらいは普通にするだろう?」

「それは…そう、思いますけど…」

「それとも、俺は友達ですらない?」

「っ、そ、そんなこと!」

恐らく圭はたとえ友人相手だろうと、そういった金銭のやり取りは行わないようにしていたのだろう。お金の貸し借りなんて以ての外。

しかし、友人同士で奢った、奢られたなんて別に珍しくもない。信頼できる相手とならば、という条件は付くが。

「じゃあ、もうこの話はおしまい」

「いや、でも…」

「ああ、お返しかもいらさないから」

「ええ〜!?そ、総司さん!?!」

「ほらほら、次は白銀のクラスに行くぞー」

背後から圭の呼び止めようとする声と、こちらに駆け寄ってくる足音が聞こえる。

総司はもうこの話を続けるつもりはなかった。圭としてはまだ納得できないのだろうが、総司の態度からこれ以上話を聞いてくれないと察したのか、以降この話を口にしなくなった。

それに、あんな言い方をされたら圭自身、納得するしかなかった。しまった。圭は、総司の事を信用しているのだから。

「兄のクラスの出し物はバルーンアートでしたっけ?」

「ああ」

「…兄さん、バルーンアート出来るのかな」

「?」

白銀のクラスの教室に向かうなか、改めて出し物の内容を聞いた圭が不安そうに俯いてしまった。

理由が解らず首を傾げる総司。未だ俯いている圭。

「あ」

そんな二人の耳に、聞き覚えのある声があった。

いや、圭にとっては聞き覚えのあるところではない。とても身近な、毎日聞いている声。

「あ」

次に声を出したのは総司だった。目の前にいる、こちらをじつと見つめる一人の男、恐らく先程の声の主だろう男の姿を見て、声を漏らしてしまった。

何しろ、そこに立っていたのは、白銀家の大黒柱…である筈の男だったのだから。

「お、お父さん…」

「娘が数年ぶりにお父さんと呼んでくれたぞ」

「お父さん！」

何やら、嫌な予感がしてならない総司だった。

四宮総司の奉心祭3

前方、目を丸くしてこちらを見る壮年の渋い男性一名。そして此方には同じく目を丸くして男を見る男子生徒一名と、顔を青くして震える女子生徒一名。

周りが奉心祭を楽しむ人達の明るい雰囲気に含まれる中、ここだけ奇妙な空気が発生していた。

目にしてはいけない何かを目にしてしまった様な、ここに存在する筈のない何かを見てしまった様な、何ともいえない奇妙な空気。

「おやあ…？おやおやおや…」

男、つまり白銀父は総司と圭の間で何度も視線を行き来させながら口を開く。そしてこちらに歩み寄ってくる。

「朝から随分急いで家を出ていったと思ったら…、こういう事か」「な、なに？別にお父さんには関係ないでしょ」

言い返す圭の声は震えている。相当動揺しているらしい。

「おいおい、つれない事を言うなよ。もしかしたら、彼が未来の義息子になるかもしれないんだぞ？」

「ちよっ…！変なこと言わないで！」

「変なこととは何だ。俺は知ってるんだぞ？お前が彼からのメッセーヂを見ながらにやにやしてr」ああああああああ！あああああ
ああああああああ!!!」

白銀父の台詞に圭が割り込んで叫び出す。更に叫びながら白銀父の口を両手で塞ぐ。

圭の背後では総司が首を傾げていた。

何しろ総司のメッセージがどうのと言っていたのだから。

「俺が何ですって?」

「ああ。圭は君からメッセージが来ると、とてもうれしs」だからやめてえっ!!」

再び圭による妨害。白銀父の台詞を総司は聞き取れなかった。

「はあ…はあ…」

「大丈夫か、圭?」

「だ、誰のせいでもこうなってる…」

連続で全力で叫んだせいか、圭の息が乱れている。その元凶は、全く原因が自分にあるとは思ってなさそうな顔で圭を眺めていた。

圭に睨まれても、素知らぬ顔である。

「総司くん、久しぶりだね」

「はい。お久しぶりです」

前に会った時にも思ったが、白銀父は相当なマイペースのようだ。圭の視線を受けながら、白銀父は総司に話し掛けてきた。

娘に鋭い視線を向けられながら、それを意に介さず他人に話し掛けるなど、普通の人間には出来やしない。

「…え?総司さん、父と会った事があるんですか?」

「ああ。三者面談の時にな」

「…」

総司と父のやり取りを聞いて、引っ掛かりを覚えたのだろう、圭が問い掛ける。

総司が白銀父と会ったのは、三者面談の順番をかぐや、早坂と待っていた時。

突如颯爽と登場した白銀父は、総司とかぐやに途徹もないダメージを残して去っていった。

「…総司さん。父は何か失礼な事をしませんでしたか?」

「圭。お前はお父さんを何だと——」

「黙ってて」

「ひびく」

有無を言わさぬとはまさにこの事。父の抗議をバツサリと切り捨

てた圭は総司を見上げる。総司の返答を待っているのだ。

「まあ、その…、うん。ユニークなお父さん、だよな」

「…」

総司の返答を受けた圭がゆっくりと俯き、全身がわなわなと震え出す。その内心を窺い知る事は出来ないが、まあ平常心ではないだろう。それだけは解る。

因みに、話しはずれるが以前の体育祭で白銀父が同じようなやり取りをした事があるという事を総司も圭も知る由もない。

「おっと…。年取ったおっさんがいつまでも若い男女の邪魔をしてはいいかんか」

「黙って…」

「総司くん、時間が空いたらで良い。いつか私の所に挨拶に来なさい」
「もう、黙ってええええええ…！」

限界に達した圭の絶叫は、それはそれは綺麗に響き渡ったのは言うまでもないだろう。

「…」

頭を抱える圭と、その隣で苦笑を浮かべる総司の姿をじっと眺める人影があった。

悲しげに、今すぐにもあの輪の中に飛び込んでいきたい欲求を抑えながら、ただただ二人の姿を見ているだけ。

「千花ちゃん、何してるの？早くいこー」

「…はいっ、すぐに行きます！」

誰かに呼ばれた人影は悲しげな表情を収め、笑みを浮かべて振り返る。

足取りは軽く、心持ちは重く、藤原千花は総司から離れていくのだった。

「…何で総司が圭ちゃんと？」

「さつき教室で会ってさ。奉心祭回ろうって誘われた」

「…」

所変わって、現在総司と圭の二人はB組の教室、つまり白銀のクラスへやって来ていた。

その後、白銀父は何も言わずに去っていった。圭の心に大きなダメージを残して。

まるで嵐のように、颯爽と去っていった。

頭を抱えて固まってしまった圭をフォローして、気を取り直させてから来たのがここ、白銀の所である。

が、どうも歓迎されていない様子。折角友人が顔を覗かせたもののにこの態度は如何なものか。

「圭ちゃん。俺には今日は行かないって言ったのに」

「そうだっけ」

白銀が少し悲しそうに圭に視線を向ける。しかし圭は白銀を見ようともしない。そっぽを向いたまま適当に相槌を打っている。

「おーい、いつまでも喋ってないで何か作れよ。ほらほらほらほら」

「…お前には巻き糞を作ってやろう」

「いらねえ、てか作れるのか」

「二人とも、女の子の前でそんな話しないで」

男同士特有のノリで話す総司と白銀だが、女子である圭にはついていけない様。圭の冷え切った声を、総司は初めて耳にした。

「ごめんなさい」

男二人は声を揃えて謝罪の言葉を口にし、揃えて圭に向かって頭を下げた。

幸いなのは周囲の生徒達が総司達の方を見ていなかった事だろう。四宮総司と白銀御行という学園で最も有名な生徒である二人が、中等

部の女子生徒に頭を下げるという光景を見られなかった。

もし見られていたら…、噂はたちまち広っていただろう。秀知院きつての天才二人を従える女番長現る、みたいな感じで。

「それで？何を作ってくれるの？」

「あ、ああ。この本に載ってる物なら一通り作れるから、選んでくれ」
白銀が言いながら、はじめてのバルーンアートと表紙に書かれた本を渡してくる。

総司がその本を受け取り、自身と圭にも見える位置に置いてページを開く。

「へえ…、結構色んな種類があるんだ。…これ、ホントに作れるの？」

「ふ、ふん。この程度、俺にかかればお茶の子さいさいだ」

疑わしげに視線を向ける圭に、白銀は胸を張りながらどこかの誰かさんが聞いたら激怒しそうな台詞を吐く。

この場にいる以上、本にある物を作れるというのは嘘ではないのだが、作れるようになるまで紆余曲折あった事を圭は見抜いていた。

一方の総司はそんな事を知ろうともせず、ただ何を作ってもらおうか本を見ながら考えていた。

「…ハート？」

「え？」

新しいページを開いた直後、総司の目に留まったのはハート型に整ったバルーンだった。

「何だ総司。ハートに興味があるのか？」

「いや…。これも頼まれたら作るのか？」

「ああ、勿論」

「…面倒な事になるんじゃないの？」

「…お前が気になったのはそっちか」

白銀が苦笑する。ハート、というのは、この奉心祭にとってかなり重要なキーアイテムになっていたりする。

この奉心祭の由来となった昔話に準えて、異性にハートのアイテムを贈るとというのが期間中の告白の仕方になっている。何でも、奉心祭中にハートを贈って結ばれると、永遠に二人は一緒になれるとか。

しかし、こんな中々にロマンティックな話が問題を引き起こす場合もある。無理矢理ハートを贈ったり、受け取ろうとしたりする輩もいるのだ。

先程総司が引つ掛かったのは、そうした輩を助長させてしまうのではないか、という懸念からだった。

「ほら、これを見ろ」

だが、それは杞憂に終わる。白銀が机の上にある白い紙を指で叩き、総司に読むよう促す。

そこには、「ハートのもの……1♥？」と書かれていた。つまり、ハートのもを受け取った場合、受け取った側もハートのもを渡さなければならぬという。

本気で相手が好きで、覚悟を決めた者ならば何の問題もない。しかし、そうでない者には効果がある、上手い牽制の仕方だ。

「で？総司はハートが良いのか？だとすれば、俺は断るが」

そう感心していると、白銀が口を開いた。

ここに来てからずっと白銀と話し続けていたが、さすがにそろそろ本題に入らなければ後のお客達に迷惑だ。

「ふざけんな。俺だって御免だ。…じゃあ、この花を圭さんに作ってくれ」

「え？」

白銀のからかいに言い返してから、総司は圭を見ながらそう言った。すると、圭が目を丸くしながら総司を見上げた。

「総司さん、また…！」

「いやあ、こういう時は男が出すのが定石だろ？」

「そういう問題じゃないですっ」

プリプリと怒る圭に苦笑いしながらも、総司は譲らない。

ここで譲るのは先輩として、男として格好悪すぎる。

「ほら、白銀。先払いだ」

「ちよっ、お兄い！受け取らないですよ!？」

「どっちの言う事聞きゃ良いんだ」

真逆の事を要求する二人に困惑するしかない白銀。しかし、総司が

言いながら代金を差し出したため、白銀はつい受け取ってしまった。

「受け取ったな？よし、作れ白銀」

「あー…、まあ、あれだ圭ちゃん。今日くらい、甘えたって良いんじゃないか？」

「…」

何故か偉そうにしている総司を無視し、白銀が圭を宥める。

頬を膨らませて不満です、と意思表示していた圭だったが、これ以上駄々を捏ねるのも時間をとって他の客の迷惑になると自分を納得させる。

「…解りました。ホント、総司さんはこういう所が狡いんです…。強引だし…」

「？何が狡いつて？」

「何でもありませんっ」

つーん、とそっぽを向く圭に総司は再び苦笑い。

普段は大人っぽい割に、ふとした時に年相応の可愛らしさを見せる圭を見てみると、つい気持ちが緩んでしまう。

常に冷静沈着な早坂と、常に明るく柔らかな雰囲気の花を足して二で割ったような――

(…花)

脳裏に浮かんだ、混じりっ気のない満面の笑顔。

花とはあの出来事から口を利いていない。いつもなら一日に一度は必ず花と話していたのが、今は姿を見る事すら難しい状況だ。

いや、そうじゃない。花と話そうとしていないのは、誰でもない総司自身。

花とこのままでいたいと思っている訳ではない。むしろその逆だ。しかし、花と顔を会わせたとして、何を話せば良い？何と言えば良い？

きっと、自分は花の望む言葉を返せない。

そんな呪縛が総司を縛り付けていた。

「総司さん」

「――」

傍らから聞こえてきた声で我に返る。気付けば、圭の手には黄色いバルーンで作られた花があった。いつの間にか白銀は依頼の物を完成させていたらしい。

「ふーん。白銀はこういう器用さを求める作業は苦手だと思ってただけだな」

「さつきも言っただろう。お茶の子さいさいだ」

「まあ、そういう事にしておいてやるよ」

白銀と軽口を叩き合ってから、総司が立ち上がり、圭も続いて席から立つ。

「じゃあな白銀。頑張れよ」

「ああ。総司も、圭ちゃんに何かあったら許さんぞ」

「シスコンうっぎ」

最後に今度は三人で軽口を叩き合い、総司は圭と共に教室を出ていった。

軽口を叩き合った直後、圭と白銀の視線が一瞬、交わった事には気付かぬまま。

「さて…。何か腹減ってきたし、次は外の出店でも回ろうか？」

隣で、自分の想い人が笑い掛けてくる。いつもなら心踊らせるその仕草が、今は悲しく見えて仕方ない。

それは、先程の総司の顔を見たから。兄がアートを作っている間に総司が見せた、複雑な表情の理由を知っているから。

「総司さん」

「ん？」

圭は立ち止まる。立ち止まった圭に呼ばれ、振り返った総司がその事に気付き、同じく立ち止まる。

迷いがなかったと言えば嘘になる。何しろ、今から圭がする事は、恋敵に塩を贈る事と一緒なのだから。

それでも、圭はこの選択に後悔はない。圭にとって、二人は掛け替えのない大事な人達だから。

「千花姉と、何かあったんですか？」

総司の顔を見上げながら、ハッキリと問い掛ける。

総司の表情が、固まったのが見えた。

四宮総司の奉心祭4

圭が千花に違和感を感じたのは、一週間程前からだった。毎日欠かさず交わっていたメッセージでの会話から、総司の話題が消えた。

初めは、その日は会わなかったのか、話せなかったのかと珍しく思いつつもそういう日もあるだろうと納得していた。

しかし次の日、そのまた次の日も千花から総司の話題を出す事はなかった。圭から総司の話題を出しても、千花からの返信はどこか素っ気ないものだった。

『千花姉、総司さんと何かあった？』

『ううん、何も無いよー（*・^・*）』

こんなやり取りを、一週間の間に何度した事か。千花は何もないと答えたが、そんなはずない。千花と同じ想いを抱いている圭は、そう確信していた。

だが千花は何も答えようとしなない。だから、圭はもう一人に疑問をぶつける事にした。

結果、総司の表情が僅かに驚愕に染まったのが見えた。

「…何か、あったんですね」

「いや、別に？」

「でも今、驚いてましたよね。どうして私が知ってるのかって思ったんじゃないんですか？」

「違うって。いきなり変な質問されたから驚いただけだよ」

さすが総司というべきか、表情の変化は一瞬、すぐに笑顔に戻った総司は圭の追求を平然と受け流す。

このままでは平行線だ。それなら、予定通りあの場所に連れていく

事にしよう。

「ついできてください」

「は？いや、ちよっ…」

圭は総司の手を掴み、そのままどこかへ歩き出す。後ろで総司が抗議の声を上げているが無視。振り返りもせず、総司を伴って歩き続ける。

いつしか総司からの抗議の声も聞こえなくなり、廊下を歩く生徒達の数も減っていき、そして、奉心祭を楽しむ生徒の姿は見えなくなる。

「…圭さん、ここは入れないよ」

「大丈夫です。兄から鍵を借りてますから」

そうして二人が辿り着いたのは、大きな両開きの扉の前。

扉を見上げながら言う総司に返事を返しながら、圭はポケットの中から鍵を取り出し、鍵穴に差し込む。鍵を回せばガチャリと解錠した音が鳴る。

圭が扉を開ける。扉の奥、正面には仰々しい木造の机。部屋の脇にはテーブルを挟んで置かれたソファ二つ。左側には壁に取り付けられたモニター。

圭が総司を連れてきた場所は、生徒会室だった。

「ここで少し待っていきましょう」

「…何を？」

総司が首を傾げている。圭はそんな総司にただ微笑みのみを返す。ここで誰が来るのかを言えば、きっと総司はすぐに立ち去ろうとするから。

まあ、ここに来る誰かさんもここで総司が待っている事を知れば逃げようとするだろうが。

「…」

「…」

沈黙が流れる。圭も総司も口を開かず、ここに来る誰かを待つ。

聞きたい事はある。でも、総司はそれを話したくない。それなら、圭は聞かなくても良いと思っていた。

だからといって、このまま放置して良いとは思っていない。これ

は、敵に塩を贈る様なものだ。

それでも――

ドアノブが捻る音がした。ゆっくりと扉が開くのが見えた。

開いた扉の向こう側には兄が、そしてその一歩後ろでは桃色の紙に黒いリボンを着けた女の子。

「…千花」

「総司くん…？」

呆然と視線を送ったその先に、総司の心に引つ掛かっていた少女、藤原千花は立っていた。

千花は総司と同じ様に呆然と視線を返していたが、突然表情を悲しげに歪めると、踵を返して走り去ろうと――

「待て」

「ぐえ」

出来なかった。

その前に白銀が千花の制服の襟を掴んで足を止める。それと同時に千花の口から蛙が潰れたような声が漏れた。

女の子にあるまじき声だが、あれは痛そうだ。仕方ないと思えない。

「な、何するんですか会長！窒息するところでしたよ！」

「藤原書記が逃げようとするのが悪い」

「そ、それは…」

白銀の手から解放されたと同時に勢いよく抗議する千花だが、即座に返された白銀の反撃に言い返すことが出来なかった。

横目で視線を送ってくる千花と目が合う。

目を逸らす事なく総司は千花を見続けるが、すぐに千花から気まずそうに視線を逸らされた。

「総司、見ての通りだ。最近藤原書記の元気がない」

「そ、そんなことないですよ?」

「その原因はお前にあると俺達は考えている」

「無視!」

千花の抗議を完全スルーして、白銀はまっすぐ総司を見ながらハツキリとした口調で続ける。

「藤原書記がこのままだと俺達の調子も狂う。そして、俺の計画も実行しづらくなる」

「…ん、計画って何だ?」

「だから、二人にはここで腹を割って、とことん話し合ってもらおう」

「無視すんな」

総司の質問も完全スルーして、白銀は振り返る。

すると、先程まで総司の隣にいた圭が白銀の後をついていく、と思いきや、千花の傍らで立ち止まると口を開いた。

「千花姉」

「圭ちゃん…」

「早く元の千花姉に戻ってね」

そう言葉を残して、兄妹は生徒会室を去っていく。

「言っておくが、外から見張ってるからな。盗み聞きは当然しないが、何も話さず出てきたら解るからな」

おまけに、白銀がそう言い残して。

「…」

「…」

ボタン、と扉が閉まった音を最後に沈黙が流れる。

二人は立ったまま互いを見つめ合い、何も言えないでいた。

何か言わなければ、しかし何て話しかければ?

そんな葛藤が二人の胸中で渦巻きながら時だけが過ぎていく。

「…こうして話すのは久しぶりだな」

先に口を開いたのは総司だった。総司はややぎこちない笑顔を浮かべて、千花に声を掛けた。

「は、はい。そうですね…」

僅かに間を置いてから、千花も同じ様にぎこちない笑みを浮かべて返事を返した。

気まずい空気が二人の間で流れる中、千花は総司から視線を逸らす。

しかし一方の総司は千花を見つめたまま、続けて口を開いた。

「あのさ、前の事、だけど…」

「っー」

千花の体が大きく震える。

前の事、とは言うまでもない。総司と千花がすれ違う切っ掛けとなつた告白の事である。

総司自身、あの時の事を話題に出したくはなかった。あの事を話に出しては更に空気が気まずくなるだろうし、第一千花が嫌がるに決まっているから。

だがあれが今回の仲違いの原因になっている以上、話し合わざるを得ない。仲違いの解決をするためには避けて通れない道だ。

「あ、あれはっ…い」

千花が勢いよく振り向き、何かを言いかける。

勢いはすぐに衰え、千花は小さくなつたと幻視できる程に縮こまつてしまう。

「…本気で、言ったのか」

口にしてから、すぐに自責の念に駆られた。

本気で言ったに決まっている。そうでなければ、あんな風になりはしない。

千花の告白を、総司は最悪の形で振り切つてしまった。

受け入れる事は勿論、断る事すらせず、総司は千花の告白を放置してしまった。

「…」

沈黙が再び部屋を包み込む。何を話せばいいのか解らない。何を言っても千花が傷付くだけ、そう思えてならない。

千花が、傷付くだけ。

そう考えた瞬間、総司の脳内で電流が奔った。

今更何を考えているのだろう。千花はもうとつくに傷付いている。それを今更、千花を傷付けたくないとしても？

傲慢にも程がある。

「…俺、さ。何となく察してたんだ」

「え？」

「千花が…、藤原が、俺の事を好きなんじゃないかって」

もう、自分に少女の名前を呼ぶ資格なんてない。そう考えた総司は呼び方を直して続けた。

千花の目が丸く見開き、総司を見る。

「察してたって…」

「知らないふりしてた。最低だろ？四宮総司って男は、そういう奴なんだ」

総司に出来る事は一つだけだった。

隠してた事をさらけ出す。それで千花が更に傷付こうとも、総司にはそれをする義務があった。

「藤原には俺がどう見えてるのかは知らないけど、多分思い違いをしてる。俺は、誰かに好かれる様な奴じゃない」

「そうじ、くん…？」

「ただの屑だよ。散々他人を弄んで、自分のために他人の全てを奪って、その上でのうのうと笑って生きていられる、屑だ」

顔を上げて千花の目を見た。その瞳は動揺故か、あるいは別の理由か、揺れていた。

「俺は、藤原みたいな綺麗な女の子に好かれる資格なんてない」

総司は、生まれて初めて、ほんの少しだけだけれど、本心を表に出した。

藤原千花が四宮総司と初めて会ったのは、中等部に上がってすぐの頃だった。

多分、総司はその時の会話を覚えていない。千花と会ったのはかぐやを通じて言葉を交わした、中等部二年の頃が初めてだったと思っ
ているはずだ。

総司にとつては何て事ない、ただ気に入らないから言った、それだけの一言だったはず。それでも、その一言は千花にとって大切で、重要で、今の千花を形作つた謂わば原点とも言えるもの。

それからだ、千花が四宮総司という人物に興味を持ったのは。テストでは常に一位をとり、運動神経も抜群で、だけど他人を寄せ付けない冷たい目をしていて。

何度も話しかけようと試みた。しかし、何者も寄せ付けられない冷たい目が、当時の千花をその度に躊躇させた。

何が切つ掛けだったか、ある日を境に次第に雰囲気は柔らかくなつていく総司を見ていて悔しかった。総司を変えたのは、自分以外の誰かなのだという現実が。

その悔しさがあつたから、あの頃の総司と同じ目をしていたかぐやに声を掛ける事が出来た。自分を突き放そうとするかぐやを諦めず、話し掛け続ける事が出来た。掛け替えのない親友ができた。

藤原千花にとつて、四宮総司は光だ。色々なものに呑み込まれそうだった自分を救ってくれた人。総司にはそんなつもりはなかったとしても、その気持ちかどれだけ自分勝手なものだとしても、藤原千花にとつて、四宮総司は――

「取り消してください…」

「え？」

総司が戸惑い、目を丸くする。その反応を見てようやく、千花は今、自分がどんな顔をしているか、どんな気持ちを抱いているかを自覚した。

「さっきの言葉を取り消してください」

「いや…、藤原？何を…」

「千花です」

「…」

「もう名前は呼んでくれないんですか？私の事を、そこまで嫌いになりましたか？」

「っ、そうじゃないっ！」

「それなら、名前で呼んでください！そんな風に他人行儀で呼ばないで！」

千花は許せない。他でもない総司自身が、千花の愛する人を貶める言葉を吐く事が。

「解った、解ったから…。すまん、これからは——」

「何が解ったんですか？」

「い、いや、下の名前で呼ぶって…」

「そうですか、それは良かったです。それで、さっきの言葉は取り消ししてくれるんですか？」

「——」

沈黙。まず、総司は千花が言ったさっきの言葉が何の事かすら解っていない様子。

それが、千花の神経を更に逆撫でした。

「だから！私の！目の前で！」

後に千花は語った。今まで生きてきた中で最も大きな声を出した瞬間だったと。

「私の好きな人を！貶さないでください！」

それは、藤原千花の二度目の告白だった。

氷の仮面は溶かされる

四宮総司は、四宮総司という人間が嫌いである。

自分のためなら他人を平気で傷つけられる自分が嫌いで、自分のためなら他人を平気で裏切る自分が嫌いで、自分のためなら他人を平気で見捨てる自分が嫌いで。

四宮総司は、四宮総司という人間が嫌いで堪らない。

四宮の極秘データに手を出そうとしたある男を、何も知らない家族ごと海外に左遷した事がある。

四宮の利益のためにある会社を潰し、多くの家族の生活を滅茶苦茶にした事がある。

四宮にとって損益になりそうだったから、それ以前まで懇意にしていた企業の救援要請を無視した事がある。

総司は常々思う。自分は屑だと。いつになるかは知らないがいずれ死んだ時、まず間違いなく自分の行き先は地獄だろうと確信している。

だからこそ、総司は妹と、その周りの光景が眩しかった。

総司とかぐやは似ている。双子なのだから当たり前と言えば当たり前だ。容姿は勿論、過こしてきた環境も境遇も同じなのだから性格も。しかしかぐやと総司とは根本的に違うものがあつた。

二人は自身の性格の悪さを自覚していた。かぐやはそれを直そうとした。

総司は、それを直す必要性を感じなかった。

総司もかぐやと同様、数年前と比べれば格段に丸くなった。だがそれは、総司自身が努力した結果ではない。

かぐやとその周囲の人達に巻き込まれ、そうなったに過ぎない。総司はそうなるうとしたのではなく、ただ染まっただけ。

今の自分になれた事を総司は感謝している。ほんの少しでも、たとえそれが自分が身内と捉えた相手に限ったものだとしても、他者に優しくなれる自分にくれた人達に、総司は感謝している。

しかし同時に、過去の自分がこうなるうとしなかった事に引っ掛かりを覚えた。自分は、かぐやとは違うのだと。

四宮総司は四宮くすなのだ、可愛くならうとするかぐやを見て、痛感させられた。

「だから！私の！目の前で！私の好きな人を！貶さないでください！」

そんな貶されて当然の屑を貶すなど、好きなんだと目の前の少女は叫んだ。

その叫びは情け容赦なく、千花を突き放すべく冷やした心に響いた。

「…俺は屑だ」

「屑じゃありません」

「何も知らないくせに」

「総司君が屑じゃないって事くらい知ってます」

「…、俺はっ」

「…どうして、そんなに自分を卑下するんですか」

怒りが籠った千花の瞳が瞬きと共に悲しみに染まる。

「逆に、何故藤原は俺をそこまで買い被る」

質問に質問で返す。普段の総司ならばばししない事だが、何故か自然と口から出てきたのはそんな言葉だった。

千花は一瞬悲しげに表情を歪めてから、総司の態度には触れずにゆっくりと口を開いた。

「総司君が言う屑が、そんな悲しい顔をするはずないです」

「言われて初めて気づき、自覚する。総司は今、苦々しい気持ちを抱いている。」

まさか、知られたくないと思っっているのか？過去の自分がしてきた所業を。どれだけ自分が四宮くすなのかを。

違う、そんな筈はない。千花の勘違いを正さなければならぬ。そうでなければ、千花は総司に誤った印象を持ち続け、後に大きく傷つく事になる。

そうなる前に、彼女を自身から離さなければならぬ。

そう、思っていた筈なのに。

「総司君、覚えてますか？私と初めて会った時の事を」

「…」

「あの時の私は、大好きなピアノを弾くのが苦しかった。そんな私に、総司君が言ってくれたんです。『苦しいのならやめちまえ』って」

ああ、覚えている。というより、思い出したというのが正しいか。

当時、総司は四宮の教育としてピアノを嗜んでいた。そして、天才と周囲に謳われていた千花と出会ったのだ。

確かに、そう言った。だが、違う。その言葉は、千花が思っている様な優しい言葉なんかじゃない。

「それは、目障りだったただけだ。お前の華やかな演奏だけを聞いて天才と持て囃しながら、お前の努力を見ようとしてもしない奴らが」

千花を天才と誉めちぎる周囲の人々は、総司の才能を見て嫉妬し、総司を淘汰しようとする本家の屑達とどうしても重なった。

そんな奴らが笑っているのが、あの時の総司は目障りで仕方なかった。だから、総司は千花にピアノをやめるよう勧めた。

もし千花がピアノをやめれば、奴らの笑顔は消える。ただ、それだけのためだった。

「別に、千花を心配して言った訳じゃない」

これ以上ない、突き放す言い方。だというのに、千花は嬉しそうに笑みを浮かべた。

「それでも、嬉しかったんです。だってそれはつまり、総司君は私が苦しんでいたという事を理解してくれたって事なんですから」

曇り一つない、嘘偽りのない笑顔でそう言い放った千花に、総司は

言葉を失った。何て都合の良い解釈の仕方をするのだろうか。

いや、千花の言った事は決して間違いではない。総司は千花の演奏を聞きながら、その演奏はただ天才だというだけで成り立つものではないと悟っていた。

「総司君は他人の苦しみを解ってあげられる優しさを持っています。だから、総司君は屑じゃありません」

先程の台詞は何も言い返せない、正論だと認めよう。だからといって、今の台詞を聞き流す事は出来ない。

「違う。俺は千花の演奏が作り出した笑顔を消すために、お前の苦しみを利用した。俺が気に入らないからという利己的な理由でだ。そんな俺が優しいと？」

「優しいとは言ってません。優しさを持つてるって言ってるんです」

「ただの屁理屈じゃねえか」

胸を張りながら何故か誇らしげに言う千花に呆れを隠せない総司。

確かに、心の中に優しさを持っている事と性格が優しいというのは別だ。先程総司が言った通り、屁理屈だが。

「それに優しさなんてねえよ。ただ、他人より観察眼が良いだけで…」

「観察眼が良いだけの人じゃ、他人の苦しみまでは見抜けませんよ」

つい、口の動きを止める。千花の表情から笑顔が消えたからだ。

「優しさを持つてるから、それが苦しいんだって分かるんです」

「…」

またも言い返せなかった。なるほど、優しさを持つているからこそ苦しいのだと分かる、か。

反論したい気持ちとは裏腹に、すつ、と胸の中にその言葉が収まってしまった。そしてそれと同時に悟ってしまう。もう、藤原千花は揺らがない。何を言っても、無駄に終わってしまう、と。

しかし、総司は認められない。長年抱いてきた自分の価値観はそう簡単に変えられない。

だってそうだろう。ここで負けを認めてしまえば、この少女は自分を好きなままできてしまうのだから。

「俺は屑だ」

「総司君」

「どれだけ都合の良い言葉を並べても、それだけは変わらないんだよ」
「反論の言葉が見つからなくなったからって意地にならないでください」
「い」

「屑なんだよ！」

千花の優しさに流されそうになるのを拒み、振り払うように総司は声を荒げた。

「たくさんの人の人生を滅茶苦茶にした！」

「驚くなよ？その中にはお前の友達もいる！」

「俺の都合で、俺だけのために、俺は他人を平気で蹴落とせる！」

「そんな奴に、藤原千花が好きになる価値なんてないだろ！」

総司の大声を、千花はただ黙って聞いていた。

一通り叫んで荒くなった息を整える総司に、千花は柔らかく微笑む。

「価値とか、そんなものは関係ないです」

「私は、総司君が好きです」

「だから、もうその顔に被った仮面は外してください」

ずっと被り続けてきた、誰にも外せず、誰にも壊せないはずだった仮面に、ピシリと罅が入る。

「…何で、そこまで俺に拘る」

「そんなの、好きになっちゃったからです」

誰にも、ずっと隣にいたかぐやでさえも外すどころか気付く事すら出来なかった、総司の仮面。

総司は平気で、と口にしたが、平気なはずがない。今までに耳にしてきた怨嗟の声は鮮明に覚えている。思い出す度に泣き叫びそうになるのを、我慢し続けてきた。

平気な顔を、張り続けてきた。

「あ——」

それを全て承知の上で、この少女は自分が好きだという。

他人を切り捨ててきた無慈悲な自分を。その癖、資格もないのに傷つけてしまう弱い自分を。

「あああ——」

掌で両目を押さえる。溢れそうになる熱を、決して外に出すまいと、痛みも気にせず力一杯押さえ込もうとする。

「ダメです」

しかし、それを許してくれない。力を込めていたはずの手はあっさり千花によつて顔から離され、総司の視界に千花の微笑みが現れる。

「もう、我慢しちゃダメです」

力を込めれば簡単に振り払える。なのに、出来ない。手が動いてくれない。まるで、振り払うのを拒むかのように。

「っ……」

声を出す事だけは耐えた。それでも、両目から溢れる雫は別で。

ずっと堪え続けてきた涙は、あっさりと堰を乗り越えて、総司の頬を伝った。

「ほら」

そんな総司を、千花は抱き寄せた。総司の顔を胸に埋め、髪を優しく撫でる。

「泣けるじゃないですか」

柔らかかな温もりが、溶かしていく。

「私の好きな人は、屑じゃありません」

千花の言葉が、総司の仮面を壊していく。

「誰かが貴方を屑だと罵っても……」

長年を通して形成され、強固さが増していった冷たい氷の仮面は、「私が違うって、相手に認めさせてやります」

たった一人の少女によつて、外されたのだった。

四宮総司の修羅場

総司と千花の二人を残して生徒会室を出て、十五分は過ぎただろうか。

生徒会室を出て少ししてから突然、今までに聞いた事のない声量の千花の怒鳴り声があったり、これまた聞いた事のない総司の怒鳴り声があったり、どうなる事かと思いつながら待っていたが、今は静寂を保っているらしい。

無論、実際に部屋の中にいる訳ではないため、本当のところどうなのかまでは解らないが。

生徒会室前の廊下、扉から十メートル程離れた所にて、白銀御行は妹である白銀圭と一緒に総司と千花が出てくるのを待っていた。

「…静かになったな」
「…」

先程までは何かしらの話し声が、内容までは聞き取れなかったものの聞こえてきた室内が、今では静かになっている。これは果たして、話し合いが終わったという事なのか。

そしてそれは、どういった結論を以て終わったのか。決別か、それとも。

「…圭ちゃん？」

「…なに？」

「いや、どこに行こうとしてるのかなー、と」

不意に、壁に背中をつけ寄りかかっていた圭が歩きだした。

それも、生徒会室の方へと。

「生徒会室に決まってるでしょ」

「あ、うん、そうだよ。そっちにあるの生徒会室だけだもんね。…じゃなくて」

今この場所から生徒会室の方に歩き出した人が、また別の場所に行こうとしていたら逆に驚く程である。しかし、本題はそこではない。

「話が終わるまで待つんじゃないやなかつたのか?」

「静かになつたし、終わったでしよ」

「いや、解らないだろ。平行線のまま話が進まないから一旦、つて事も考えられるだろ」

話が終わるまでここで待つ、と言い出したのは圭だった。その圭が、まだ話の途中かもしれない二人の元に行くと言いだした事に白銀は戸惑いを覚える。

圭は何かをやると決めたら絶対にそれを曲げない意思の強さがあった。そんな圭が、話が終わったという確証のない生徒会室に乗り込もうとしている事がどうしても引つ掛かる。

しかし、その理由はあっさりと圭の口から明かされる。

「嫌な予感がする」

「は?」

「このままじゃ追い付き様がない差をつけられる気がする」

「…は?」

明かされた、のだが、白銀はその言葉の意味を分かりかねていた。嫌な予感とは。追い付き様がない差とは。圭は一体、何を危惧しているというのか。

「ちよちよちよ、待て待て待て」

「止めないでお兄い。このままじゃ千花姉に総司さんかつ拐われる!」

「あつ、嫌な予感つてそれ!?てか言い方!」

かつ拐われるつて。さすがにツツコミを止められなかった。

「どけえ!」

「げふつ」

かくして、白銀は圭を止められず、圭は生徒会室の扉を勢い良く開け放った。その扉の向こうの光景を、圭の背後から白銀もまた目にしていた。

「…千花姉?」

「…いや、お前ら何がどうなってこうなった。何してんの？」

千花の胸に抱かれる総司という光景を目にし、圭の瞳のハイライトが消えていき、そして白銀の瞳もまた死んでいった。

というより、一番白銀が驚いたのは圭の予感が当たっていた事だ。適当に出鱈目を言っているだけだと、ただ総司と千花を二人きりにした事に不安が過っただけだと思っていたのに。

まさか、こんな事になっていたとは。

時は少し遡る。白銀兄妹が生徒会室に乗り込むよりも少し前、まだ総司は千花の胸に抱かれたままだった。

ずっと押し留めていた感情が溢れ出し、自分を包む温もりに縋りながら泣き続け、そしてようやく落ち着き始めていた時だった。

(いや、これどうなってんの?)

千花の胸の中でようやく我に返ったこの男は、状況の整理を始めた。

千花と話し合い、どれだけ自分が千花に相応しくないと言い続けても受け入れて貰えず、拳げ句の果てに言い負かされ、その上情けなく涙を流して抱き締められる。

(…はっずーいやはっずー何これきっしよーいやきっしよー!)

語彙力が喪失した。あまりの動揺に、すぐに千花から離れればいいものを、そのままの状態で総司は内心で悶えまくっていた。

しかし、この男として情けなさが限界突破してしまったこの状況、恥ずかしさによる機能停止は致し方ないのかもしれない。

「ん…」

「…」

だが、状況は何も変わらない。総司は千花に抱かれたまま。どころか、どうやら無意識に身動きしてしまっただけ、千花が小さく、擦ったように声を上げた。

総司は動けなくなる。この体勢で声を出せばまた同じ風に千花が悶えるだろうし、かといって無理矢理離れるのも千花に怪我をさせる危険がある。

決して今の体勢が心地好いとか、そんな事を考えている訳ではない。いや、普通に暖かいし心地好いのは間違いないが。

色々と混乱して総司の頭の中はぐちゃぐちゃになっていく。そのせいか、年相応の欲から来るもやもやが胸の奥から滲み出してくる。

しかし何もできない。動けば千花と密着してるが故に柔らかい感触が押し付けられるだろうし、さつきみたいに千花の悩ましい声がかかるだろう。

だからといってこのまままで居られる訳もない。完全なデッドロック状態だ。

(考えろ、思考を回せ。大丈夫だ。この状況から抜け出す方法が必ずある筈)

四宮の麒麟児と称された頭脳を限界まで回す。千花の胸に抱かれたまま。

(力づくは論外だ。千花を怪我させる危険がある)

必死に様々な可能性を手繰り寄せ、検証し、その先の結果を予測する。柔らかい千花の胸に抱かれたまま。

(さりげなく離れようとしても何故かその度に千花の腕に力が籠る…。くそっ、やはり駄目か…っ)

時に無謀と分かり切っていても脳内に浮かぶ可能性を試してみる。この世の極楽とすら思える程の千花の胸に抱かれたまま。

(ガアアアアアアアアアアアアアアアア!!思考が定まらねえっ!!どうすりゃいいんだっ!!!)

訂正。総司は全く自身の思考を回せていなかった。それどころか自身の顔を包み込む柔らかい感触に浸りかけてすらいた。

「…千花さん」

「はい。なんででしょう?」

「そろそろ離してくれませんかね」

そうだ。何を回りくどい事を考えていたんだ。こうやって正々

堂々と頼めばきつと離してくれ――

「嫌です」

「ませんでした。即答で拒否されました。」

「な、何故でしょう？」

「私がこのままでいたいからです」

「なんで!？」

「総司君が好きだからです」

「…」

黙り込む総司。総司からは見えないが、そんな総司の反応を受けて千花はご満悦そうに笑みを浮かべていた。

「だいたい総司君。これは全男子が憧れるシチュエーションですよ？」

女の子の胸に抱かれるなんてそうそうありません」

「俺は憧れてないから全男子という部分は訂正してくれ」

「…総司君てホモなんですか?」

「違う。何故そうなる」

「大丈夫です。総司君がホモでも私の気持ちは変わりません。むしろ絶対に総司君の心を私に振り向かせようって燃えてきますから」

「話を聞いて!」

「それと総司君。話がズレますが、くすぐったいので静かにしてほしいです」

「…」

再び黙り込む総司。そしてご満悦そうに微笑む千花。さっきの繰り返しだった。

くすぐったいなら離せと言ってもさっきと同じく「嫌です」の一言で即断されるのだろう。

(くそ…。屈辱だ、この俺が誰かに救いを求めるとは…っ)

こうなればもう総司に残された選択肢はもうこのまま誰かが来るのを待つ事だった。

それはつまり、自信の命運を第三者に委ねるという事。総司にとってはこれ以上ないほどの屈辱であったが、この状況では仕方ないと必死に自分に言い聞かせる。

千花の胸の中で。

恐らく、生徒会室からそう離れてない所で白銀兄妹が自分達の話が着くのを待っている」と総司は算段を立て、そしてその予想は当たっていた。

総司は彼らにこの状況を打ち破ってくれ」と期待した。してしまつたのだ。

「っ——！」

総司の期待に応える者は現れる。当然だ。遅かれ早かれ、総司と千花がいつまで経っても生徒会室から出てこなければ白銀兄妹は奇妙に思つて様子を見るに決まつている。

恨むべきはタイミングの悪さか、それとも彼女の勘の良さか。

「…千花姉？」

生徒会室の扉が勢いよく開き、総司と千花が振り向いた視線の先に立っていたのはハイライトが消えた瞳に二人を映す圭。

「…いや、お前ら何がどうなつてこうなつた。何してんの？」

そして続いて聞こえてきた声は圭の背後から。死んだ目をした白銀がそこに立っていた。

二人の——というより、圭の目を見た総司はこの時こう思つた。

選択を間違えたかもしれない——と。

「圭ちゃん。どうしたんですか？そんなに慌てて」

一見、いつもと同じくほんわか柔らかく鼓膜に届く千花の声。

だが何故だろう、その声から微かに険を感じるのは気のせいだろうか？

「うん、ちょっと嫌な予感がして。…とにかく総司さんを離して」

一方圭の方は千花とは真逆、声から怒りが滲み出していた。

ギロリ、と音が聞こえてきそうな程に鋭く睨み付ける圭の視線に対して千花は全く堪える様子はなく、ニコニコと笑顔を浮かべたまま総司を離す事はなかった。

「し、白銀…。助けてくれ…」

「はい。任せてください総司さん。今助けます」

「…」

圭の背後の白銀に視線を向け、か細い声で総司は助けを求めたが返事をしたのは兄ではなく妹だった。

違う、そっちじゃない。

総司はそう心の中で思ったが口には出せなかった。

「聞こえたでしょ千花姉。総司さんが困ってるから早く離してあげて」

「そうでしょうか？思春期男子達が夢見る至福の一時を早々手離そうとは思わないんじゃないですかねえ〜？」

「総司さんはそんな子供っぽい人達と一緒にしないで！」
「…」

ごめんなさい。今はともかく、少し前まではちよっぴりこの感触を堪能してる部分がありました。

総司はそう心の中で思ったが口には出せなかった。

「し、白銀！頼む、助けてくれ！お前しかいない！お前だけが頼りなんだ！だから頼む、白銀えっ！！」

「…仕方ない。圭ちゃん、藤原。一旦おちついで」
「お兄い（会長）は黙ってて（ください）」
「…すまない総司。俺は無力だ」

「白銀え——！！？」

秀知院学園全生徒の中で最も権力を持っている生徒会長は、二人の少女の迫力に圧されて引き下がるしかなかった。

そんな無情な現実を目の当たりにした総司は、最初の親友の名前をただ叫ぶ事しか出来なかった。

四宮総司の奉心祭5

「総司を離すのが嫌なら代わりの何かを要求すればいい」

白銀の口からその言葉が出てきたのは、白銀兄妹が生徒会室に入ってきてから十分ほど経った時の事だった。

その間、千花の胸に抱かれたまま千花と圭の口論を聞いていた総司の精神はもう限界ギリギリであり、全力で白銀の提案に乗った。

千花がここまで固執する事の代わりがどんなものになるかなんて想像しなかった。そんな余裕はなかった。

ただ、今のこの状況から抜け出せるのなら何でも良かった。とにかく早く解放されたかった。

「…総司君は今日、圭ちゃんと一緒に奉心祭を回ったんですよね？」

千花は白銀の提案を聞いた後、少しの間考える素振りを見せてから口を開いた。

総司がその問い掛けに頷いて肯定を返すと、千花は再び少しの間考えてから笑みを浮かべる。

「それなら総司君。明日は私と回ってください」

そして、千花は輝かんばかりの笑顔で総司にそう言った。

白銀の提案を聞いたばかりの、とにかく早く解放されたい気持ちばかり逸って混乱状態に陥っていた時よりはこの時の総司は幾ばくかの冷静さを取り戻していた。

だからこそ思う。そんな程度の事で良いのか、と。

「…もうしばらくこのままでもいいんですよっ？」

「回ろう。明日は千花と奉心祭を回る。回らせてください」

今の千花の一言は今の総司にとって脅迫にも近かった。総司に選
択肢などなかった。

総司がそう言うのと、千花はそれは本当に嬉しそうに微笑みながら総
司を解放する。

「約束ですよ？」

「ああ。約束だ」

一言交わしてから、千花が総司に小指一本向けてくる。一瞬何のこ
とか分からなかった総司だが、すぐに千花の意図が何なのかを察して
同じように小指を一本立てて千花のそれと絡ませる。

「ゆーびきーりげーんまんうーそつーいたら——」

知識としてはあつても、実際にその歌を初めて聞いた総司は心の奥
底で小さな感動を覚えながら千花の歌声に耳を傾けていた。

その直後

「だきしめるっ。ゆーびきったっ」

子供にとって馴染み深い約束の歌は総司にとって恐ろしい脅迫の
歌と相成った。

実際、指切りの歌の元は江戸時代まで遡り割と恐ろしい話なのだが
——そんなものは関係なく、ただただ総司だけに効く恐ろしい
脅迫と化した。

「針千本飲んだ方がマシかもな」

「関係ねえよ。約束は守る」

総司を解放して千花が離れた後、白銀が歩み寄ってきて総司に声を
掛けた。

その顔は疲労感を漂わす総司とは違ってどこか楽し気に、それでい
て何か微笑ましいものを目の前にする大人の顔をしていた。

まるで子供扱いされていると感じた総司は僅かにイラつきながら、
白銀の方を見ないまま短く言葉を返す。

「…あんな事言われたら、逃げる訳にはいかないしな」

千花の気持ちを確認しようとしないうちに自分に好きだと何度も言っ
てくれた。

四宮総司が言っただけで済んだ言葉は言ってくれた。

そんな彼女との約束を破る訳にはいかない。そして、彼女から向けられる気持ちから絶対に逃げてはいけない。

考えて考えて、その果てに総司がどんな答えを出そうとも、決して彼女の想いに背を向けてはいけないのだ。

奉心祭はここ数年一日開催だったが今年は白銀が奮闘し、二日開催を勝ち取った。

その二日目、事件が起こる。

朝、いつもの時間に起きて、いつものようにかぐやと朝食を食べ、いつもの時間に家を出る。

何も変わらない普段の日常。ただ、いつもと違うのは心の中で今日という一日がどんな風になるのか、少しだけわくわくしていた。

しかしこの時すでに、学園にて事件は起きていたのだ。

異変に気付いたのは車から降りて、かぐやと並んで校門を潜ろうとした時の事。やけに生徒達がざわついていた。

そして同時に、周囲の景色に違和感を抱く。何が、とハッキリとは言えないが、何故か周囲の景色に物足りなさを感じた。

「…ハートの飾りがない」

不意にかぐやが立ち止まり、目を見開きながらそう呟いたのを耳に

して総司もこの物足りなさの正体に気付く。

そう、飾りが無い。奉心祭の由来、心臓をモチーフにしたハートの飾りが一個もないのだ。

学園中に飾られたハートの数は間違いなく方は降らない。その途轍もない数のハートの飾りが一夜にして消え失せた。

「な、なんてことを！・TG部め！」

どこから謂れもない中傷が聞こえた気がしたが無視をする。

可哀想だが日頃の行いがあれだから仕方ない。…部員のとある一人だけには同情するが。

「犯行推定時刻は未明から朝方にかけて。昨夜は飾りつけの関係もあって各教室の施錠はされておらず、校舎内に忍び込めば誰でも犯行は可能だった、か…。四宮、どう思う？」

学園中を揺るがす大事件が起きた中でも、文化祭はスケジュール通りに進めなくてはならない。とはいえ、あれだけの数のハートの飾りが一夜にしてなくなればそれなり以上の話題になる。

今日の出し物の直前準備を進めつつ、学園新聞の号外を読みながら最近少し話すようになったクラスメイトが総司に質問してきた。

そう。この事件の厄介な所は誰でも犯行が可能だという事。学園の警備は巡回こそしていたものの教室の施錠がされてない以上万全とはいえず、侵入さえできれば学園の生徒以外の人物にも犯行が可能だった。

「…何でハートの飾りつけだけ盗ったんだろうな」

「は？」

「もつと盗りたくなるものはあるだろ。この学園には」

百五十年にも上る歴史があるこの学園には、もつと盗みたくなるような文化的代物が存在する。

しかし、事件が発覚してからやってきた警察や教師達の調査によってそれらの物は手を付けられていない事がすでに判明している。

犯人は正真正銘、ハートの飾りつけのみを盗んでいったのだ。

「…確かに。犯行声明にも『ハートを頂きに参上した』って書いてあったみたいだし、ハートだけを盗みに来たって事か。…何で？」

「知るか。それよりも早く準備しろよ。開場時間に間に合わないぞ」
その気持ちは総司にも分かっていた。総司とて、気にならないと言
えば?になる。

が、それ以上に優先すべき事がある以上、それを疎かにする訳にも
いかない。

総司に諫められたクラスメイトはハツ、とした後学園新聞を教室後
方のロッカーに置いてから準備に集中する。

その姿を見ながら、総司はふと思った。

突如大量のハートの飾りが消えた大事件。残された犯行声明。

彼女が好きそうな要素が勢ぞろいのこの一件。

(どうすんだろ、今日。一応約束通りに行くけど…来るのか?)

昨日、奉心祭を一緒に回ろうと約束した少女の顔を思い浮かべなが
ら総司は準備を進めた。

どんな事件が起ころうとも、生徒に全く被害が及んでいない以上文
化祭を中止にする理由はない。

予定に変更はなく、当初の時間通りに開場。奉心祭の二日目が始
まった。

開場から午前一杯、総司はそうじろう先生として教室で科学の説明
をし続け、シフトが終わるとほんの少しの疲労感を感じながら白衣を
脱いで教室を出る。

控室に白衣を置いてから、総司は約束の場所へと足を向けた。

「総司君ー」

生徒達の控室が並ぶフロア、一般客は立ち入り禁止となっている工
リア。その東階段付近で、千花は総司を待っていた。

「?どうしたんですか?」

「いや…。もしかしたら来ないかもって思ってたから」

いつもと変わらない様子で笑顔を向けてくるその姿に少し驚いて
いると、千花が不思議そうに首を傾げながら問い掛けてきた。

その質問に対し、総司は特に誤魔化す事なく正直に自身の気持ちを
打ち明けた。

すると、千花は不服そうにむっ、と頬を膨らませる。

「私が約束を破る子だと思ってたんですか？」

「違う、そうじゃない。ただ…あんな事があったら？だから、千花は調査に乗り出すんじゃないかって思ってたんだよ」

くるっ、と総司に視線を向けたまま背を返した千花に慌てて言い募る。

千花が約束を破る不誠実な人だと思っていた訳じゃないんだと。

千花は総司の台詞を聞いてすぐに合点がいった表情になり、宙を見上げながら口を開いた。

「あー。確かに、ハートが盗まれた事件には興味が惹かれましたよ？

マスメディア部の二人にも事件捜査の協力をお願いされましたし」

「…何で行かなかったんだ、なんて聞いたら怒るよな」

「勿論です。総司君が分かってくれてるようでしたら安心しました」

何で、なんて聞かない。何となく想像はついてるが、答えがハッキリしていない以上質問してみたい気持ちは小さくなかった。

それでも耐えて、総司はギリギリの所で正解を引いた。

「事件の捜査よりも私が惹かれる人が目の前にいるんですから」

両手を背後で組み、総司に体を向けて上目で見上げながら千花は淀みなくそう言い切った。

直後、千花は右手を伸ばし、総司の手を掴んでくいくいと引く。

「行きましょう、総司君。約束はちゃんと守ってもらいますからね」

「ここまで来て約束破るなんてある訳ないだろ。…どこか行きたい所はあるのか？」

「うーん…。いきなりで申し訳ないんですけど、ちよつとお腹空いてるんですよ。総司君はどうですか？」

「さつきまでクラスの出し物手伝ってたから昼飯はまだだ」

「それなら外の模擬店を見に行きましょう！」

早速足を向ける場所が決まり、総司と千花は並んで歩き出す。

一階まで下りて校舎を出た後、中庭まで伸びる通路脇に並ぶ屋台を眺めながら何を食べようか考える。

焼きそば、たこ焼き、お好み焼き、フライドポテト、クレープ等々。食べ物だけではなく、おもちゃを売っている模擬店も並ぶ道を千花と

一緒に歩く。

するとまあ、視線が集まる。四宮の後継者である総司とかつての総理大臣の孫でありピアノの天才と謳われた千花が二人で文化祭を回っているのだから当然と言えば当然だが。

が、二人はそんな視線をこれっぽっちも気にする様子もなく、お昼ご飯に何を食べるか話をしながらただただ歩いていった。

「たこ焼きは昨日食べたので他の物が食べたいです」

「俺は焼きそばを食べる」

「あつ、総司君！クレープも食べましょう！二人で別の味を頼んでどっちが美味しいか確かめませんか？」

会話が完全にデートである。そしてこの会話は周囲にも聞こえていない。恐らく今朝、ハートの飾りが消えた事件が発覚しなければこっちの方で号外が出されていたかもしれない。

「総司君、あーん」

「…ちぎってくれない？」

「総司君、あーん」

「…」

「あーん」

それぞれ昼食を済ませた後、食後のデザートにクレープを二つ、違う味を頼んで食べていた。

中庭のベンチに並んで座り、総司は抹茶小豆を。千花はストロベリーチョコを食べていたのだが、不意に千花が総司に向けて自身が持っているクレープを差し出してきた。

二人で別の味を頼んでどっちが美味しいか確かめる。総司もそれに了承はしたが、まさかこの方法で食べさせ合うなんて思っていなかった。

初めは抵抗した。だが、無駄だった。総司は恋する乙女の前で無力、ただ従うしかできない弱者に過ぎなかった。

「「きゃあああああああああああああああああああ!!!」」

差し出されたクレープを一口齧る。直後、周囲から巻き上がる歓声。

さつきまでは気にも留めなかった視線が気になり始め、途端胸に湧き上がってくる羞恥。

——俺達は人前で何をしてるんだ…。

かぐやに見られたらそれは面白いものを見たと言わんばかりの顔で『可愛い事』とか言われるのだろう。

伊井野に見られたら顔を真っ赤にして怒りながら『不純異性交遊は止めてください!』と怒鳴られるのだろう。

早坂に見られたら…見られたら…どうなるんだろう? とりあえず怒られる、気がする?

「総司君。今度は私の番ですよ?」

「…は?」

「あーん」

何だかんだクレープは美味しく、心地よい甘さを堪能してから飲み込む。

その時、隣から聞こえてきた言葉の意味を総司は数秒の間理解できなかった。

私の番。あーん。

「…千花、待て。流石にそれは——」

「あーん」

「…」

駄目だ、と総司は悟る。さつきと同じパターンだ。千花は絶対に譲らない。

総司にとって一番ダメージが入らない行動は今すぐここから立ち去る事だ。間違いなく周囲から罵られる事請け合いだ、自身と何の関りもない第三者から何を言われようとも総司にはノーダメージだ。

しかしこれをすれば千花が傷つく。故に、この方法は論外。

そのため、残される選択肢は二つ。千花を説得し続けるか、素直にあーんを行うかだ。

前者は望み薄。というより、最早後者しか選択肢がないに等しいくらいだ。

「…はあ」

腹を括るしかない。ただ自分が頼んで口をつけたクレープを異性の友人に一口食べさせるだけだろう。

何をそんなに尻込みする必要がある。

あーん？間接キス？そんなものは知らない。考えようとしなさい。総司が今しようとしているのは、ただクレープを友人に食べさせる事。そんな甘い行為なんて総司は知らない。

考えまいと努めなければ、耐えられなかった。

「んむ…。美味しいです」

「なら良かった」

「「「きやあああああああああああああああああああああああ
!!!」」」

さつきよりも上がった歓声が多い気がした。

総司は体を小さくしながら、千花はご満悦そうに、それでいてちよっぴり恥ずかしそうにしつつも残ったクレープを食べ切る。

「それじゃあ総司君。今度は校舎内で何か面白そうなものを探しましょう！」

「…そういえば石上のクラスの出し物が面白って噂で聞いたな」

「あつ、それ私も協力したやつです！興味あるなら行きますか？」

「お化け屋敷だっけか、何か普通のとは違うらしいけど。…行くか」

クレープの包みを丸め、近くのごみ箱に捨ててから今度は校舎へと足を向ける。

歩きながら次はどこに行こうと話に華を咲かせながら、隣の千花の顔を見る。

楽しそうに笑っていた。自分とただ文化祭を回っているだけなのに。

それとも、だから、なのだろうか。自分と一緒に居るから、そんなに楽しそうなのだろうか。

「行きましょう、総司君！」

「ああ」

千花の満面の笑顔に釣られて総司も笑顔になりながら頷く。

少し恥ずかしいが——悪い気分ではなかった。

四宮総司の奉心祭6

模擬店を見て回る大勢の生徒や一般客が行き交う中庭でクレープをあーんで食べさせ合うという公開処刑に等しい恥辱を乗り切った総司は、すり減らした精神を必死に立て直しながら千花に手を引かれて校舎へと戻る。

そう、千花に手を引かれているのだ。今、総司と千花の手は繋がっている。結果、どうなるか。

———なんで視線が集まる…？可笑しな事はしていない筈だ。先程のあーんのせいで総司の感覚は狂っていた。

千花が総司の手首を掴んでいるだけで、総司は手を握り返していないからというのもあるせいか、千花と手が繋がっている自覚が今の総司にはなかった。故に、中庭での一時とほぼ変わらない視線の集中に総司は内心首を傾げる。

が、それは鈍感スキル持ちの総司だからこうなるだけなのであって、他の者は別だ。

例えば、総司と手を繋いでいる張本人である藤原千花等。

———私、なんて大胆な事を…っ！

現在のこの状況に加えて、千花は先程の中庭でのやり取りを思い出し、自分がしでかした行動を自覚して恥ずかしさのあまり顔から火が噴き出そうになっていた。

昨日の総司への熱烈な告白に文化祭デートへの誘い。そしてデート中の大胆な千花の行動の数々を支えたのは、好きな人とデートでき

るという喜びによって高まりまくった謎のテンション。

常にテンションが振り切れているとあっていい千花であるが、それを考慮しても現在のテンションは異常であった。

そして今この瞬間、千花は我に返りかけていた。

総司の手を握っているこの瞬間の幸せに浸っていた千花だったが、ふと周囲の視線を集めている事に気が付く。

それは奇跡にも等しい偶然。だがその偶然が千花のテンションを一瞬にして叩き落すのだ。

ただ手を繋いでいるだけなのに。

そう思った千花は直後、悟る。だからなのだ。総司と手を繋いでいるから視線を集めているのだと。

同時に千花は思い出す。中庭での一時も自分達は周囲の視線を集めていた事を。その理由は、クレープをあーんで食べさせ合っていたからのだとすぐに察した。

そして状況は戻る。自分がしでかした行動を自覚した千花はこれまで生きてきた十六年と八か月の人生の中で最も強く羞恥の念を胸に抱いた。あの藤原千花が。

かの石上から実際に言われた訳ではないが、恥が欠落していると評されたあの藤原千花が、恥ずかしいと感じたのだ。

何故、なんて言うまでもない。総司好きな人と一緒に居る所を見られているからだ。

何も思わない第三者は勿論、友人相手とでもこんな気持ちにはならない。どうしても意識してしまう相手とだからこそ、こんな気持ちになってしまう。

しかし同時に千花は幸せでもあった。総司好きな人と一緒に居られて、またこうして、まだ恋人としてではないが、たとえ友人としてだとしても千花は幸せだったのだ。

「つばめ先輩…。なんで避け…僕何か悪い事…」

が、そんな幸せな一時はそう長くは続かなかった。

この世全ての絶望を背負っているかの如き黒いオーラを纏って何やら眩きながらふらふらと歩く石上が現れたから。

「い、石上? どうした?」

「そ、総司君っ! 今は――」

今の石上に関わってはこのデートは終わりを告げてしまう。そう予感した千花は何とか石上をスルーしようと思いを働かせた、が、その前に総司が石上に声を掛けてしまった。

「…総司先輩? 藤原先輩も…え、二人…?」

俯いていた石上の顔が上がり、闇が渦巻く瞳が総司と千花の姿を映すと、石上の体を包む黒いオーラが更に規模を増した。

「そうですね、お二人は文化祭デートですか、幸せそうでいいですね、僕なんてつばめ先輩に避けられてこんなにカナシイキモチニナツテイルノニ」

「石上…?」

「い、石上君…」

石上の様子に総司は戸惑い、石上の事情を聴いていた千花は目に同情の色を浮かべた。

「なんですか藤原先輩、その目は。そんなに僕が哀れですか」

「…その、石上君。どんまいっ」

「ちくしよおー! せいぜい末永く爆発してやがって下さいよ、ばかあー!!!」

まるで捨て台詞を残して逃げ去る三下モブキャラのようだった。泣きながら去っていく石上を、千花と総司は追わず離れていく悲しい背中を眺めるだけだった。

「…なんだったんだ?」

「石上君にも色々あるんです。今は放っておくのが一番だと思いますよ」

首を傾げる総司と頷きながら総司を諭す千花。

千花は石上が何故あんな状態になっていたのかに心当たりがあった。

それは昨日、文化祭一日目が終わって家に帰ろうとした時に耳に入った『石上優が子安つばめに公開告白をした』という噂話だった。

噂はそれなりに広まっていたのだが総司の耳には入っていなかった。

たらしい。

総司が知らないのならそのままでもいい。千花は総司に教えない事にした。流石に可愛い後輩に追い打ちをかけるような真似はしたくなかった。

それにもし教えたら総司は石上を慰めに行こうとするだろう。それは恐らく逆効果になるだろうし、何より総司と二人きりになれる時間を減らしたくはなかった。

「それより総司君。総司君は何か見に行きたいものはないんですか？もしあるなら付き合いますよ」

石上についてはもう気にしない事にして、千花は次に行く場所を総司に尋ねた。

もし総司に行きたい場所があるのならそこに行こう、と誘いの手を伸ばす。

「…あるにはある。ただ…、これに千花を付き合わせていいものか」
千花の問い掛けに総司は苦笑いを浮かべて言葉を濁しながら答えた。

そんな総司の反応に内心で首を傾げつつ、千花は笑顔を総司に向けて口を開く。

「それならそこに行きましょう！」

「…いや、でもなあ」

「遠慮なんてしなくてもいいんです。総司君が見たいものを私も見たいです」

「…分かった。それなら、そろそろ時間だし行くか」

行きたい場所があるというのに、何故かそこに行くのを渋っている様子の総司を千花は何ら不思議に思う事もなく、総司の足取りが微妙に重い事に気付かないまま、二人の足は体育館へと辿り着く。

体育館では事前に生徒達が有志で申し込んだ出し物が行われていた。

ある団体は劇を、またある団体はダンスを、そして今、体育館で行われていたのはライブだった。

「…総司君」

「待て、そんな目で見るな。分かっている。でも見に行きたいものはないのか聞いてきたのはそっちだろう」

「でも今、これを見に行く選択は最悪だと思います!」

ステージの上で可憐にステップを取りながら可愛らしい声で歌う少女がいた。

総司と千花が体育館に着いたのは、今行われているライブが始まる直前だった。その時はまだ、千花は何が始まるのかと楽しみな様子で笑顔だった。

が、ステージに現在歓声を浴びている少女が現れた瞬間千花は真顔になった。

「そんなに早坂さんのライブが見たかったですか…?」

「まあ、そこら辺でやってる出し物よりは」

「…」

悔しい、と千花は思った。

昨日、総司は圭と一緒に千花のクラスの出し物を見に来ていた。だがもし、早坂のライブが今日ではなく昨日だったら。

総司は千花のクラスの出し物と早坂のライブのどちらを優先しただろう。

話を聞く限り、総司はまだ石上と伊井野のクラスの出し物を見に行っていない。それでも早坂のライブを選んだという事は、総司にとって後輩二人の出し物よりも早坂のライブの方が大事だったという事だ。

なら————自分は何もし千花のクラスの出し物をまだ見に行っていなかったとしたら?総司はどうしていただろう。

勿論、タイムテーブルで決まっているのだからライブを見逃せば一大事だ。普通なら、ライブを見る事を優先し、その後で千花のクラスの出し物を見に行く予定を立てるのが自然だろう。

しかし今の状況なら————総司一人ではなく、千花と一緒に居る今の状況なら、どうしたのだろう。

千花を選ぶのか。早坂を選ぶのか。

「…あ」

「あ」

千花が深く意識を思考に埋めかけたその時、総司の間の抜けた声が
耳朵を打った。

その声に顔を上げたと同時、今度は総司がいる方とは逆の方から可
愛らしい少女の間の抜けた声が聞こえてきた。

総司の顔を見上げる。先程上げた声と同じ、間の抜けた表情で千花
が立つ方の更に向こう側を見ている。

千花もそちらの方に振り向くと、そこにはこちらを呆然と見てくる
二人の男女が立っていた。

「総司…、藤原さんも…」

「かぐや？…白銀」

二人の男女、白銀とかぐや。そして総司と千花、四人の視線が交わ
る。

その直後、総司の目が鋭くなる。鋭い視線はかぐや——では
なく白銀に向けられ、白銀がぴくりと僅かに震えながら体を硬く強張
らせる。

「総司…、こ、これは…」

「…俺も昨日は圭さんと一緒に回ったからな。何も言うつもりはな
い」

言外にとつと行けと、そう言うてから総司は視線を前へ、ステー
ジの方へ戻した。

「…総司。俺は——」

「白銀。二度も言わせるなよ？」

「っ…」

「お前の自由だ。好きにしろ」

白銀が何かを言い掛けた瞬間、その言葉を遮って総司は横目で白銀
を見ながら釘を刺す。

小さく息を吐いてから総司は再度視線をステージの方へ戻す。白
銀とかぐやの方には見向きもしない。

今度こそもう何も用はない、と。ここから早く消えろと、総司から
漂う雰囲気語っていた。

「四宮、行こう」

「…会長。すみません、私も言いたい事が一つあるんです」

目を瞑り、開いた時には白銀の瞳には迷いはなかった。総司達から離れようとかぐやを促す。

しかしかぐやはそれを断り、その場に居続けた。そして、彼女が言いたいその一言を口にする。

「藤原さん。貴女の好きなようにしなさい」

かぐやはその一言を残して、今度こそ白銀と一緒に去っていった。出口の方には向かっていないから、体育館のどこかで早坂のライブを見ているのだろうか。

「…かぐやさん」

かぐやはとっくに千花の気持ちを知っている。千花が明かすよりも早く、総司に対して抱いていた気持ちを見抜いていた。

かぐやは知っている。千花の他にも総司に想いを抱いている人がいる事を。

先程のかぐやの宣言は、千花に対するエール——ではないのだろう。

千花も分かっている。きっと、今の自分では——

華やかなライブは幕を閉じ、奉心祭は最後の宴へと時を進めていく。

「ごめんなさい、藤原さん。少しの間で良いから——総司を貸してちょうだい」

総司と千花の二人の時間は、突如現れたかぐやによって終わりを告げた。

四宮総司の奉心祭7

千花と文化祭を回っている途中、突如現れたかぐやに手を引かれ総司は歩く。

聞きたい事はたくさんあった。いきなりどうした、白銀はどうした、なんでそんなに悲しそうなんだ。

湧いてくる疑問を呑み込み、総司はただ黙ってかぐやに手を引かれていた。

そのまま辿り着いたのは、学園の最上階、屋上の入り口の前だった。総司よりも前にかぐやが呼んでいたのだろう、すでにそこには早坂が立っていた。

その場に三人が集まり、かぐやが語り始めたのはすぐだった。

かぐやに連れられる途中、何か白銀との文化祭デート中に何かされたのか、と総司は考えたりもした。結果的にそれは強ち外れでもなかったのだが——明確に総司の予想とは外れた答えを聞かされる。

「会長が留学…ですか」

「それもスタンフォード。…すげえな、あいつ」

かぐやの口から語られたのは、来年、白銀が飛び級でスタンフォード大学へ留学するというものだった。

海外の大学は日本とは違い、十月に入学が行われる。そして、秀知院学園は三年になると自由登校が始まり、すでに大学合格が決まっている白銀にとっては一年近く無駄な期間が出来る事となる。

それを考えれば、飛び級するのは合理的な判断とっていい。生徒

会長の任期を終えて、そのままアメリカへ移るといふ流れが出来上がるのだから。

しかし、白銀が留学するとなると黙っていられない人物が一人いる筈だ。その人物は今の所、そんな素振りは微塵も見せていないのだが。

「いいんですか？ 試しに行かないでって頼んでみます？」

「馬鹿言わないで！ スタンフォードは私でも入るのが厳しい…総司だって合格できるか分からない大学なのよ？ 誰が何と言おうと行くべきでしょう」

その人物——かぐやは、白銀の留学に賛成らしい。すぐさまあの手この手で妨害して、白銀を日本に留まらせようとすると、総司は思っていた。

「勿論、複雑よ…。だって、この私と過ごす高校生活よりもそっちを優先するんだもの。でも、これは凄い事なのよ？ 笑顔で送り出すのが筋でしょう」

「…」

「総司？ その笑顔は何？」

「いや。成長したなって思ってる」

「何ですかそれは…。とにかく、会長の人生が懸かっているんですから。邪魔をするつもりはありません」

去年までのかぐやなら、目的のためならばどんな手でも厭わないあの時のかぐやなら、白銀の留学を妨害していたかもしれない。

そんなかぐやの成長を兄として嬉しく思う反面で、それでも総司はかぐやへの同情の念を感じずにはいられなかった。

「…まあ、お前がそう決めたのなら俺は何も言わん。ただ——」

かぐやが決めた事に、何かを言うつもりはない。

ただ、兄として、妹の背中を押すだけはしてやりたい。

「今からでも遅くないぞ、かぐや。何しろ、白銀はアメリカに行くまではまだ、十か月あるんだからな」

「総司…」

「かぐや。白銀がアメリカに行くその時に、後悔しないための行動を

考える。お前が思い描く何かを実現させたいなら——」

「分かってるわよ。総司が…早坂だってそう。貴方達が言いたい事は想像つくわ!」

総司が言おうとした言葉を遮って、かぐやが宣言する。

「今日、会長に好きだって言う!告白すればいいんでしょう!」

そんなかぐやの力強い宣言を聞いた総司と早坂は——

(長かった…)

「総司…?早坂…!?何を泣いてるの!?!」

これまでの苦労を思い出しながら、ここまで辿り着いた事への感動を覚え涙した。

「でも…告白なんてどうしたら…」

「お任せください。すでに完璧かつウルトラロマンティックな告白方法を——」

「待て、早坂」

しかし、ずっと相手に告白させる事を考え続け、自分が告白する事なんて考えるどころか想像すらもしてこなかったかぐやが、いきなり告白なんて難しいだろう。

案の定かぐやは困り、そして早坂がそれに手を貸そうとする。

そして総司は、そんな早坂を制した。

「総司様?」

「かぐや。お前が考える」

総司の言葉を聞き、かぐやは目を見開く。

「俺も早坂も今回は手を貸さない。お前が一人で考えて、行動しろ」

「総司様、それは…」

「かぐや。お前は白銀のどんな所を好きになった?白銀とどんな未来を過ごごしたい?」

「会長の好きな所…。会長と過ごごしたい未来…」

「お前の気持ちを素直にぶつけければいい。…俺は、それでいいと思う」

かぐやはキャンプファイヤーの点火の時間が迫っていた事もあり、この場から去っていた。

一体、どんな答えを導き出すのか。…それを楽しみにしつつ、妹を見送った総司もまた、早坂と一緒に戻ろうとして――

「それで。一人で考えろとか言いながら、結局アドバイスをしちゃう優しいお兄様は、また藤原さんの所へ行くんですか？」

冷えた声を背に受けて、立ち止まった。

「…早坂、何を怒ってるんだ？」

「怒ってませんよ。ただ、これからまた、藤原さんの所に行くのか聞いてるだけです？」

怒ってる。何か知らないけど、早坂が怒ってる。

何故かさっぱり分からない。かぐやに手を貸そうとしたのを止めたからか。

総司は思い出す。先程チラツと、早坂がどこからか取り出した、？ バツチリプランと書かれた冊子を見たのを思い出す。

(そんなに自信あったプランだったのか…?)

もしや、その計画を披露する機会を潰されたのを怒っているんだろうか、なんて見当違いな事を考える総司。

「まあ…。今日一日は一緒にいる約束だからな」

「回りくどい言い方で誤魔化そうとしても無駄ですよ。戻るつもりなんですかね」

「…なあ。何でそんな刺々しいの？俺、何かした？」

総司は分からない。

何をしたのか分からないから、早坂の態度が刺々しいのだと。

しかし、早坂も総司にはどうしたって分かってもらえない事は見抜いていた。

そして、総司の行動を咎める権利は自分にはないという事も、分

かっていた。

分かっているても止められなかった。何故なら、早坂愛は、四宮総司の事が――

「…申し訳ありません。かぐや様のために考えていた告白計画の邪魔をされて、少しイライラしてました」

「やっぱりか。あの？バツチリプランとかいう奴だろ」

早坂は自分の気持ちを押し殺し、咄嗟に嘘を吐く。

「胡散臭いネーミングだけど、自信あったのか？」

「勿論です。あれを実行に移していれば、間違いなく告白は成功していました。それを総司様は…」

「それでも、これはかぐやが一人で臨むべき事だ」

大抵、早坂が機嫌を悪くしている時は総司が折れたり妥協したり、弱い立場にいる事が多かった。

だが今は違う。早坂が何を言おうと、総司は自身の考えを変えようとしなかった。

「かぐやの言葉で、行動で、白銀にぶつかっていくべきだろ。…そうは思わないか？」

「…そうかもしれませぬ」

早坂も、総司の考えに同意する。

総司がどういう意図を以て言っているのか、早坂には読み取る事が出来ない。

ああでも、そうだ。世のカップル達は、誰もが同じ試練を乗り越えてきたのだ。

不安、緊張、羞恥、全ての気持ちを振り切って、自分の気持ちを自分の言葉で伝えて、想いを通じ合う。

かぐやと白銀は自分達の気持ちを隠し続けてきた。隠し続けて、相手の気持ちを曝け出そうと、時に他人をも利用して画策をし続けた。

それならば、想いを伝え合う時くらいは、自分の力で行うべきじゃないだろうか。

「…戻ろう。もうすぐキャンプファイヤーだ」

「そうですね。…私は一人寂しく見えますけど、総司様は藤原さんと二

人で、楽しんで、キャンプファイヤーを見やがってください」

「ねえお前ホント何でそんなに怒ってるの？ねえ？」

総司よりも先に早坂が歩き出し、そのまま階段を降りていく。

問い掛けには一切答えない早坂を追い掛ける形で、総司もまた階段を降りる。

(かぐやが告白、か)

その頭の中で、一人の親友の顔を思い浮かべながら。

夜がすっかり更け、暗闇に包まれたグラウンドに生徒達が一斉に集まる。

グラウンドの中心には、丸太で組み上げられた井桁が、そしてその中にはキャンプファイヤーの火種が詰められている。

弓道部員の中から選ばれたかぐやが火矢を放ち、点火をしてキャンプファイヤーが始まる。これが、奉心祭の最後のプログラムである。

「かぐやさん、凄い集中力ですねえ…」

「あー、そうだな」

かぐや、早坂と別れた総司はその後すぐに千花と合流。その後、こうしてキャンプファイヤーを二人で見に来たという訳なのだが――

――番えた矢先に火が点り、鋭い視線で的――火種を見据えるかぐやを見て、千花が一言。

それに言葉だけ同意しながら、内心失敗しないだろうかとちよつぴり心配だったりする総司。

あの後、かぐやはどうしたのだろうと気にはしていたのだが――

——こうして矢を番えるかぐやを見て総司はすぐに見抜く。
まだ、かぐやは告白をするに至っていない。怖気づいたのか、それともただ白銀と会えなかったのか、理由は定かではないが。

とにかく、告白について頭が一杯で火矢を外す——なんて事もあり得そうで、ハラハラしてしまふ。

結論から言えば、そんな心配は全くの杞憂だったのだが。

火矢は見事に命中し、火種に点火。盛大に燃え上がったキャンプファイヤーに、生徒達は盛り上がりを見せる。

(さて、と…。火矢は成功した事だし、かぐやの事は一旦忘れて——)

千花とキャンプファイヤーを楽しもう、と考えた、その時だった。

頭上から一枚の紙が降ってくる。咄嗟に反応した総司は、手を伸ばしてその紙を掴み取る。

「総司君?…それって」

「…」

【文化祭は頂く。A r s e n e】

今日の朝、学園のハートを全て盗まれるという事件が起こった。その時にもハートを頂くという犯行声明が残されており、そこにも A r s e n e の名前は書かれていたという。

そして今、新たな犯行声明が、それも総司の手にある一枚だけではなく、無数の犯行声明がグラウンド中にばら撒かれていた。

「…この怪盗さんは一体、何がしたいんですかね?」

「さあ、な」

思いの外、犯行声明に対する反応が薄い千花に少し驚きつつ、朝もそうだった事と、その理由を思い出して内心湧き上がる羞恥の気持ちを抑えながら、無機質紙が使われた犯行声明を見つめる総司。

(一体どういうつもりなんだ、この A r s e n e とかいう輩は。傍迷惑な…。キャンプファイヤーに配慮して、無機質紙なんて使いやがっ

…て——)

待て。

今、自分は何を考えた?

(キャンプファイヤーに配慮して…?)

それだけじゃない。犯行声明に書かれた、怪盗の名前、A r s e n e。これは、日本語で訳すと男らしく、となる。

「…ハッ、ハハハッ!」

「総司くん?」

何だ。考えてみれば、何て下らない謎…いや、謎ですらない。

もうとつくに、犯人は名乗り出ていたのだ。

たった一人の、どこかの誰かさんに向けて。

(さて、と。その誰かさんは…?)

総司は視線を動かし、犯行声明をじつと見つめる誰かさんを見る。どうやらその誰かさんもまた、総司と同じ結論に至ったらしい。

小さく笑みを零してから紙をしまい、そのままどこかへと歩き去っていく。

「かぐやさん?…どこに行くんでしょう?」

「着替えに行くんだろ。いつまでも袴姿じゃ寒いだろ」

校舎の方へと歩き出すかぐやの姿を見て、千花が首を傾げる。

追い掛けようとはしなかったが、念のために誤魔化しを入れておく。

勿論、制服に着替えに更衣室にも寄るだろう。だが、その先の行動には、誰の邪魔も入れてはならない。

そう——例えば、カメラを持ってかぐやを追うマスメディア部にも。

「総司くん、どうかしましたか?」

「いや、ちよつとキャンプファイヤーを撮ろうと思って」

「あー、そうですね。私も撮ろうつと!」

総司はスマホを取り出し、瞬時にメッセージアプリを起動。そして赤木に向けて、メッセージを送る。

——マスメディア部を止めろ

メッセージを送った後はすぐにアプリを落とし、千花に言ったようにキャンプファイヤーを撮るべくカメラを起動。

その間、約十五秒。とんでもない早業である。

後の対処は全て赤木に任せ、気持ちを切り替え総司はキャンプファイヤーを楽しむ事にする。

この先は正真正銘、かぐやの戦いだ。誰の手も借りられない、干渉もできない、好き合う男女の聖戦。

ただそれは、総司にとつては何ら関係のないもの。だから、総司はそんな事など今は忘れ、ただ目の前のものを楽しむだけなのだ。

「綺麗ですね、総司くん」

「そうだな。キャンプファイヤーの為に奔走した伊井野に感謝だな」

「…違います、総司くん。そこは、それよりも千花の方が綺麗だよ、つて言う所です」

「…それさ、言つてて恥ずかしくないか？」

「それを言わないでください！恥ずかしいですから！」

恥ずかしいんかい、と一言ツツコミを入れると、千花は顔を真っ赤にしながらかつぽを向いてしまう。

こういう仕草を意図なく天然で行ってしまう所も、藤原千花という女の子がモテる理由の一つなのだろう。

「…総司くん？」

そんな、学園でも指折りの美少女が、男子生徒が涎を垂らす程に魅力にあふれた女の子が、ゆつくりと再び顔をこちらに向けて、潤んだ瞳で見上げてくる。

「本当は少し時間を置いてから改めて…つて思ってたんですけど…。やっぱり、今すぐに聞きたいんです」

いつでも元気滂刺で、底抜けに明るい千花が、緊張と不安で声を震わせながら発したその言葉を聞き、総司は思う。

出来る事ならば、その言葉は聞きたくなかった、と。

「告白の返事を、してもらえますか？」

体を総司へ向け、真っ直ぐに総司の顔を見上げて、千花は勇気を振り絞つて告げたのだった。

四宮総司は止まらない

真つ直ぐに言葉を向けられて、想いを寄せられて、嬉しかった。その気持ちは決して嘘じゃない。本当に……こんな俺を、こんなにも魅力的で、優しい女の子が好きでいてくれて、嬉しかったんだ。だけど、嬉しかったからこそ思う。

千花は俺を優しい人だって言ってくれたけど、どうしても俺は俺を許す事が出来ない。

四宮総司は、藤原千花の隣に居てはいけない。

「ごめん。俺は、千花の気持ちに寄り添う事はできない」

「でねっ！でねっ!!大きな風船がパーンって割れて！中から小さな風船がワーツなって！すっごくすっごく綺麗だったのっ！」

「…」

「凄く嬉しくて…頭の中がか——つてなっちゃって…」

「それで…どうなったんですか？」

「うん、それでねっ」

奉心祭は最後の最後にアクシデントがあつたものの、むしろそれが奉心祭のラストを綺麗に彩り、生徒達の心に確かな思い出を残して終了した。

総司はその後、赤木が運転するリムジンでかぐや、早坂と別邸へと戻り、制服から着替えて今へと至る。

かぐやが話しているのは、火矢を射てからその後の事。白銀と出会う事が出来てから、何があつたかをそれは楽しそうに、嬉しそうに話していた。

その話を早坂が興味深そうに耳を傾ける一方、総司は今、無の境地にいた。

——何だって妹の生々しい恋愛話を聞かなきゃならんのだ。

いや、正確にはまだ生々しいとまではいつていないのだが——

—この話の流れから、それからどうなったのか、その結末を総司は察していた。

早坂も薄々勘付いているようで、僅かに頬を紅潮させながら、真剣に耳を傾けていた。だが総司は——一刻も早くここから離れ

たかった。

先程、総司が内心で思った事もそうだが、今日、総司はとある女の子をフツたばかり。可愛い妹の朗報と一緒に喜んでやりたい気持ちはあるのだが、正直今のかぐやの話は総司にとって毒だ。

しかし、そんな総司でも、次のかぐやの言葉には意識を向けざるを得なかった。

「会長が…スタンフォード大学を私に受けろって…。一緒にアメリカに來いって言うのよ」

「!!?」

無理だ。

咄嗟に突いて出そうになったその言葉を、総司は今は呑み込んだ。

何故なら、それはかぐや自身が一番分かっている事だろうから――

「思わずOKしちゃって!」

「…」

「思わずキッスしちゃって!」

「……」

――本当に分かってんのか、この女。

総司は今のかぐやを見て、心配になった。しかも、現実的に考えれば分かりそうなものを、早坂もかぐやの雰囲気当てられているのか、キスはどうだったのか、なんて質問している始末。

――もう駄目だこいつら、今はほつとこう。

総司は一先ず諦めた。

というより、かぐやも早坂も話に夢中で、総司の存在が目に入っていない様子。…今、部屋を抜け出してもバレないのでは？

総司は気配を消した。近くに段ボールがないのが残念だが、気分は某デイ○ツド（本名）なあいつ。

物音を立てず、総司は二人に気付かれず、部屋を抜け出し自室へと足を向ける。

危なかった。総司自身、かぐやをシスコンとまではいかずとも、溺

愛している自覚はある。だが、だからといって誰が妹の初キスの詳細なんて知りたいものか。

それでも、例の件は抜きにして、割と精神的にダメージが入っている。あのままでは白銀に殺意を抱きそうだった。

なお、この総司の選択は大正解だったと言っているだろう。

何しろ、かぐやは初めてのキスで、ディープな方のキスを盛大にやらかしていたのだから。

総司は知らぬ事が、総司が部屋を去ってからかぐやはその事を話し、早坂に叱られている。

もし総司がその話を聞いていたなら——精神を壊していただろう。

「ふう——」

自室へ戻り、大きく息を吐きながらベッドへと倒れ込む。

二日間で募りに募った疲労と、先程まで聞いていた妹の恋愛話を聞いていた事による精神的ダメージ。

そして、大切な人を傷つけてしまった、感じる事さえ許されない強い悔恨。

「…」

こんな所をもし、雁庵に見られたら叱責ものだろう。ただ、そんな事を気にする余裕はない。二日間の奉心祭だけでなく、普段の生活による疲労も相まって、総司は限界だった。

眠りに落ちる総司。次に目を覚ます時には朝になっているだろう。

そして、その時になって、着替えもせず眠るといふ今の選択を後悔するのだ。

文化祭が終わり、機材の片付けも終えた秀知院学園はいつもの日常へと戻っていく。

朝早く学校へと来た生徒達は、六限の授業を熟し、帰る或いは部活がある者は練習へ。

生徒会も同じく、また穏やかで、騒がしくて、楽しい日常へと戻る――
筈だった。

「…」

生徒会室には今、三人の生徒がいた。白銀、石上、そして千花である。しかし、室内は物音が殆どない、それこそ人の呼吸の音が聞こえてきそうな程に沈黙が流れていた。

普段は話し声が絶えない生徒会。だからこそ、その沈黙には理由がある。

「藤原先輩は、一体どうしたんですか…?」

「分からん…」

「…」

生徒会室に最初に来たのは白銀と石上の二人だった。偶然道中で合流した二人は、そのままの流れで生徒会室へと来て、先日の文化祭について話していた。

千花が来たのは、二人が生徒会室に入ってから数分経った時である。

普段しないノックなんてして、初め、二人は来客かと勘違いをした。

「どうぞ」なんて言ったりして、入って来たのは千花である。

が、千花の姿を見て白銀と石上は硬直した。

いつもは底抜けに明るい千花が、出会ってからこれまでで見た事がない、暗い雰囲気を漂わせて来たのだから。

か細い声で白銀、石上と挨拶を交わした千花はソファへと座り、それから一言も発さない。

それにしても、二人には千花がここまで暗くなる理由が分からなかった。文化祭最終日、キャンプファイヤーで千花が何をしてたのかを知らないのだから、当然だが。

(くそ…。今日は四宮とキツチリ話し合いをするつもりだったが、これは――)

今日、白銀はかぐやとある話し合いをするつもりでいた。その内容とは、これまた文化祭最終日の夜、かぐやと交わしたキスについて。そして、今、自身とかぐやの関係性についてだ。

白銀はあの夜、言葉には出さずともかぐやに気持ちを伝えた。そして、かぐやはその気持ちを受け取った。その筈だ。

その後、二人はキスをして――　こんなの、言葉に出さずとも互いがどう想い合っているのかなんてハッキリしている。

しかし、繰り返すが、実際に言葉で伝えた訳ではないのだ。

白銀はかぐやに好きだとは言っていないし、かぐやも白銀に好きだとは言っていない。勿論、付き合っても言っていない。

つまり、キスはすれど告白をした訳ではない。これでは、自分達が現在、どういう関係性なのかが分からない。

(これは恋人と言っていない…。いやだが、ここで距離感を間違えれば…！)

かぐやに「お可愛いこと」なんて、軽蔑の笑みと共に言われてしまうに違いない。と、白銀は思っている。

とにかく、それを避けるためにも、何より今のハッキリしないかぐやとの関係性を確かにするためにも、白銀はかぐやとの話し合いを望んでいた。

の、だが…千花の現在の状態である。

かぐやと話をしたい。しかし、千花のこの状態を放って置きたくもない。

千花に対する態度が雑になる時はあるが、白銀は千花を大切な友人だと思っっているのだから。

「会長…。もしかして藤原先輩、総司先輩と何かあったんじゃ…？」
「…むしろ、それしか藤原がこうなる理由が想像つかん」

確かな理由は分からない。分からないが、想像なら出来る。

二人は、文化祭二日目に千花が誰と何をしていたのかを知っているのだから。

「喧嘩ですかね…？」

「それなら藤原はこうなるんじゃないやなく、怒りそうなものだがな…」

千花の耳に入らないよう、声を潜めながら話す。

その光景を思い浮かべるのは難しいが、考えられる可能性としては喧嘩というのがまず浮かぶ。

しかし千花の性格上、本当に喧嘩をしたのなら、凹むというよりはむしろ怒って感情が昂つていそうだというのが白銀の率直な印象である。

「石上、お前から聞いてみてくれよ」

「いや、ムリでしょ。今の藤原先輩に話し掛けるなんて、地雷だらけの地面の上でタツプダンス踊るようなもんですよ」

酷いと白銀は思った。それと同時に、その表現に訂正を入れる事が出来ない自分を、的を射ていると感じている自分を恥じた。

結局、何があつたのか尋ねる事も出来ずに時間だけが過ぎていく。

ただ、白銀と石上が各々仕事を進める音だけが鳴り響く生徒会。

(…こんな静かな生徒会は久し振りだな)

意外にも、そんな空間を白銀は不快には感じていなかった。むしろ、どこか懐かしさすら覚えていた。

まだ白銀が生徒会長になりたての頃。まだ、今みたいに生徒会メンバーが親しくなく、かぐやともまだコミュニケーションが成り立たなかった頃は、毎日がこんな感じだった。

といつても、千花がやって来るまでの間、という条件付きだが。

(四宮との事もそうだが…、まずは藤原書記のケアだな。四宮との事はその後で良い)

自分の事を後回しにする。度が過ぎれば話は変わるが、そうでなければそれは美点となる。白銀が生徒会長として支持を集められたのは、その美点があつてこそ。

(藤原書記と総司の間に何かあつたのは間違いない。その何かが分かれば、話をする事ができるんだが——)

そうして、千花のケアをすべく考えを巡らせる白銀だったが、まず千花がああなつた原因が分からない現状では何も思い付かない。

それならば、まずはその原因を探る。問題はその方法だが、手取り早いのは当人に尋ねる事だ。

千花に聞くのは愚策だ。先程石上が言ったように、それは最早地雷を踏みに行くようなもの。

しかし、当人は千花の他にもう一人いる。

(総司に聞く。答えてくれれば良いんだが)

方針は決まった。それでも、総司が答えてくれるか否か、という問題が残るが、そこは考えていても仕方ない。行動に移さなければ、何も始まらないのだから。

(それなら早速――)

総司にメッセージを送ろうと、白銀がスマホを取り出したその時だった。

生徒会室の扉が開き、そこから一人、かぐやが部屋へ入って来たのは。

「おう、四宮か。…?」

生徒会室に入って来たかぐやが、てつてつと、と軽い足音を立てながら白銀の前までやって来る。

そんなかぐやの様子を見て、白銀は首を傾げた。

「なんか…今日、雰囲気違くない?」

「言われてみれば…いつもより印象幼いですね」

「なあ、藤原書記。どう思う?」

石上の言う通り、今日のかぐやの雰囲気は普段と比べて幼い。

かぐやの背丈、顔立ちから考えても絶対にそんな事はある得ないのだが、どうしても三歳児が歩いているようにしか見えない。

白銀がかぐやと交流を持つようになってから一年と少し、こんな事は初めてだった。だから、白銀は自分よりもかぐやとの付き合いが長い、千花に尋ねてみる。

「…かぐやちゃん」

「かぐや、ちゃん?」

無言で顔を上げ、かぐやの方を見た千花が細い声でかぐやを呼んだ。

ただ、普段はさん付けで呼んでいた筈なのに、なぜか今はちゃん付でかぐやを呼んでいる。

「かぐやさんは、その日その日の精神状態で性格が変わる人です。かぐやちゃんはハッピー六割、現実逃避四割、それでいて睡眠不足という条件全てを満たしている時にしか出会えない…レア…かぐや、なんです…ぐすつ」

「レアかぐやって…。いや、それよりも、大丈夫なのか…?」

「すみません…。今、かぐやさんというか…四宮を見れなくて…——うえええええええええん!!!」

千花は白銀の問いに答え、現在のかぐやの状態を詳細に教えてくれた。それでも、話してくれた内容の半分も理解できたか怪しい所だが。

だがそれよりも、白銀も石上も、話す内に目に涙を溜める千花の事が気になりだし、代表して白銀が気遣った直後、遂に決壊した。

「四宮を見れないって何ですか…」

「四宮の顔を見てると総司を思い出すんじゃないか…?とりあえず、総司と何かあったのは確定だな…」

盛大な泣きっぷりに、どう触れていいのか戸惑う白銀と石上。

しかし、ここには現在、良い意味で空気が読めない三歳児がいる。

「だいじよぶ?」

「かぐやちゃん…?」

「いいいいいい」

トコトコと号泣する千花に歩み寄り、優しく頭を撫でるかぐや。

そんなかぐやの顔を見て、千花は更に目に涙を溜めて——

「うわあああああああん!!かぐやちゃあああああああん!!」

かぐやを抱き締め、再び泣き始めた。

千花に抱きしめられたかぐやは、一瞬無表情になるが、すぐに幼い笑顔を浮かべて千花の頭を撫でる。

「ホント、何があったんですかね…?」

「分かん。…ここまで号泣するとなると、想像もつくがな」
「え?」

「決まった訳じゃない。それを確かめるためにも、総司に聞くとしよう」

視線を泣き続ける千花から、取り出したスマホの画面へと落とし、総司へとメッセージを送る。

素直に総司が答えてくれればいいが、と薄い期待を込めて、白銀は総司からの返信を待つのだった。

今日は生徒会を手伝わず、授業が終えた総司は真っ直ぐ家へと帰ってきていた。

帰った総司がする事は、当然、当主から降りてくる仕事である。

送られてきた四宮傘下の企業の業績が記された資料に目を通しながら、更にその企業が行ってきた経営についてが纏められた資料も一緒に目を通す。

前者は雁庵から送られ来たものだが、後者は総司個人で調べ上げたもの。これら二つを見比べながら、矛盾がないかを確かめる。もし矛盾が見つかれば、徹底的に調べ上げ、仮にその矛盾が後ろめたいもの

であるのなら——総司が何をするかは想像するに難くないだろう。

「?」

仕事モードの総司の集中力は計り知れない。誰かが扉をノックしても気付かない事も多く、もし反応がなければ勝手に入ってきていいと、総司自身からこの屋敷に住む者達に許可を出す程である。

そんな総司でも、流石に部屋の中でスマホの音が鳴れば気付く。

誰かからメッセージが来たとすぐに悟った総司は、軽く腰を右、左と回してからデスクの端に置かれたスマホを手取る。

もし、仕事についてのメッセージだったらすぐに確認、返信をしなければ。

そう考えながらアプリを開いた総司の目に入ったのは、白銀からの一件のメッセージだった。

『藤原書記の様子がおかしい。何かあったか知らないか?』

その簡潔な文章を見て、総司は小さく笑みを零す。

知らないか、と尋ねてはいるが、恐らく白銀はもう何があったかを読んでいる。この問い掛けは、ただの確認だ。

どうせ知られているのなら隠す事は出来ないし——隠すつもりもない。

『千花に告白された』

『それでフット』

総司もまた簡潔にメッセージを送ってから、スマホをスリープモードにして再び集中を仕事へと戻す。

今年も、もうすぐ終わる。それまでに、ある程度片付けておかなければ、正月実家に帰ってから当主に何を言われるか分かったものではない。

ただでさえ、時代錯誤な長男と戯けな次男に毎年ストレスを掛けられているんだ。正月の父親との会話くらい、普通にしたいという情緒はまだ、総司には残っていた。

平穏な年末年始、その為にも、今の総司は止まらない。

「」

何度も、何度も、何度も何度も、脳裏に、大切な少女の泣き顔が過つたとしても、止まる事は許されないのだ。

四宮総司は変わりたい

「ただいま」

「ああ。お帰り」

ムスツと、機嫌が悪そうに帰って来たかぐやとすれ違ったのは、区切りの良い所まで仕事が進み、外の空気でも吸いに行こうと総司が部屋の外へ出て、少ししてからだった。

玄関の方から歩いて来たかぐやは普段着けているリボンを外していた。

外は寒いのだろう、かぐやの頬が赤くなっている。やっぱり、外に行くのは止めようかなと総司は思った。

「外へ行くつもり？」

「そのつもりだったけど…寒い？」

「冬のだから、当然でしょう」

「だよな」

うん、おとなしく部屋に戻ろう。それで、赤木を呼んでコーヒを入れて貰おう。

総司はそう考えた。

「…総司」

「ん？」

踵を返し、総司が部屋へ戻ろうとした、その時だった。

かぐやに呼び止められ、総司は振り返る。

かぐやは鋭い眼差しを真っ直ぐ総司に向けている。

もしかしたら、かぐやの機嫌が悪いのは自分のせいなのか、とここ

最近の行動を思い返す総司。

しかし、思い当たるものは何もない。心当たりがあれば、何か言われるよりも先に謝るつもりだったのだが、ないものは仕方ない。総司は次のかぐやの言葉を黙って待つ。

「藤原さん、泣いていたわよ」

「…そうか」

かぐやの言葉に対し、簡潔に返事をする総司。

「怒ってるのは、それが理由か？」

「違う。…何も思わない訳じゃないけれど、総司が出した答えがそれであるなら、私は何も口出ししない。私が今、怒っているのは別の理由」

かぐやが怒っているのは千花との事が原因か、と思いきやどうやら違うらしい。

総司から視線を外して、「本当、どうして私の周りの男は意気地が――

――」なんて呟いているかぐや。

何を言っているのか、今日、かぐやに何があったのかさっぱり分らず、総司は首を傾げた。

「…会長との事は今は関係ないわね」

「白銀と何かあったのか」

「貴方には関係ない事よ」

どうやら白銀と何かあったらしい。

昨日はあんなに嬉しそうに白銀との進展を話していたのに、今日は一体どうしたというのやら。

かぐや自身、話すつもりはないようで、それなら総司も無理に聞くとは思わない。

「総司。私は、貴方が藤原さんをフった事に怒ってはいないわ」

「そうか」

「でもね。それで貴方が答えを出した気になっている事が、私は気に入らない」

「どういう意味だ」

かぐやが言わんとしている事が、総司には理解出来ない。

「そうね。貴方には分からないでしょうね。藤原千花という女の子を——貴方を好きになった女の子達を見ようともしない貴方には、絶対に分からない」

更に続くかぐやの言葉。それを聞き、考える。

見ようとしていない、とはどういう意味なのか。

「：総司。貴方は藤原さんに告白された時、何を考えたの？」

「何を、って——」「当ててあげましょうか？」っ……」

「自分には藤原さんと恋仲になる資格がない、といった辺りでしょうか。：本当、こんなくだらない理由でフラれた藤原さんが可哀想ね」何も言い返せない。何故なら、かぐやが言った事は何も間違いない、まさにそう考えて、総司は千花をつつたのだから。

それでも、一つだけ、言い返さなければ気が済まない台詞があった。

「くだらないだと」

「ええ。何が資格がない、ですか。貴方はただ、藤原さんの気持ちと向き合わずに逃げた臆病者です」

「…」

かぐやに徹底してこき下ろされる総司。だが、自分でも理由は分からないのだが、臆病者という単語が、妙に胸に嵌る感じがしてならなかった。

「貴方は藤原千花という女の子を見てきたと言えますか？藤原さんと一緒に過ごす日々を、想像した事がありますか？」

「…」

「ないでしょうね。貴方は藤原さんをただの友達としか——いいえ、それすらも疑わしい。いつか貴方が四宮の当主になればいずれ会わなくなる、そこらの人間と殆ど同じように見ているんですから」

「っ、そんな事——」「ないと言えますか？」…」

かぐやに問い詰められ、言葉を失う。ない、と即座に答えられなかった、もうそれが答えなのだろう。

「フラれて泣く程に愛されて、その気持ちを言葉で伝えられて、なのに貴方は資格がないという戯言を言い訳に、彼女の気持ちにすら向き合わなかった」

「…」

「だから藤原さんが可哀想だと言ったんです。…何しろ、勇気を振り絞ってした告白が、考えなしに振り切られたのですから」

「…俺は」

「告白をされてから貴方は、藤原さんともし付き合ったらどうなるだろう、とは考えませんでしたか？藤原さんの告白を断ったらどうなるのか、とは考えませんでしたか？…考えなかったでしょう？何故なら、四宮総司の未来に、藤原千花がいるという設定を貴方はしていませんから」

ああ、その通りだ

秀知院を卒業して、いずれ入るどこかの大学も卒業して、それから四宮を継いで。

その先の未来に、藤原千花はいない。もし彼女がいたら、なんて未来を、総司は想像すらもしなかった。

恋人としてじゃなくても良い。友達として、大人になってからも付き合ひがあつたつて可笑しくないのに。

総司は初めから、藤原千花を、友達とすらも思っていなかった――

「…違う」

「なんですつて?」

筈がないだろう。

「確かに、俺は千花と――白銀や石上、伊井野…圭さんとの付き合いがどこまで続くのかなんて考えた事はなかった。高校を卒業してから、あいつらと交流があるなんて…していききたいとも思っていなかった」

そこはかぐやの言う通りだった。四宮総司の未来に、今いる掛け替えのない友人達はいない。

彼らが総司の周りにいる未来を、総司は考えた事すらなかった。

だが、一つだけ、ハッキリと違うと言える。

「俺は、あいつらを友達だつて思っている」

「…総司の未来に、皆はいなかったのに?」

「そこを言われると言い返せないが————それなら、こうだ。たった今から、俺は本当の意味で、あいつらを友達と思えるようになった」

「それじゃあ結局、私の言葉は正しいという事になりますね」

「…それもそうだな」

つくづく総司は思う。四宮総司という男は、どうしようもない屑野郎だと。

それを今、かぐやにこれ以上なくハッキリと、突きつけられている。

…そんな自分を変えたいと、総司は今、生まれて初めて思っていた。

「…やっと、ですか」

「かぐや、お前——」

「時間を戻す事は出来ませんが、まだ挽回できる事はたくさんありますよ。精々頑張るんですね」

先程までの凍り付く様な冷たい顔とは打って変わり、柔らかい笑顔を浮かべるかぐや。

その表情の変化を見て、総司はまんまと自分が嵌められていた事を悟る。

ここまで見事に誘導されたのは久し振りで、しかもその相手がかぐやだとは。

悔しいという感情は湧いてこない。むしろ、愚かな自分に大切な事を気付かせてくれて———今の自分を変えたいと思わせてくれた事に、総司は感謝を覚えている。

「ありがとう、かぐや」

「…いつも貴方には助けられていますから。このくらい当然です」

「そうか。それよりかぐや、顔赤いけど、大丈夫か？」

「うるさいわね！仕事があるんでしょう？とつとと部屋に戻りなさい！」

総司が素直にお礼を言うと、微かに頬を赤らめて照れるかぐや。

この状態は久し振りだけど、やっぱりどのかぐやも可愛いものだ。

総司は改めて、かぐやへの感謝と、これからこの可愛い妹を守らなければと決意も添えて、もう一度お礼を口にした。

お礼を言いながら掌をかぐやの頭に乗せると、コンマ数秒後に勢いよく手を払いのけられたのだった。

なんていう経緯もあり、四宮総司は十六年の人生で、初めて自分を
変えようと考えようになる。

四宮総司を壊し、新たな四宮総司を築き上げる。かぐや以上に四宮
の教育が染み着いた総司には、極めて困難であるなんて、考えるまで
もない。

それでも、総司は変える事が間違っているとは思っていないし、諦
めるつもりも毛頭なかった。

その一方で、総司にはやらなければならぬ事があった。

藤原千花との関係の修復である。

総司自身にそのつもりはなくとも、現在総司と千花の間にあった友
好の線は断絶している。

四宮総司にとって、藤原千花は必要な存在である。

それを伝えたいのだが、考えれば考える程、その難しさを総司は実
感させられていた。

つまり、何が言いたいのかというところ——かぐやとの会話から
すでに三日。その間、何もなかった。

——だって、俺には千花が必要だとか、そのまま言ったらた
だの告白じゃん！俺は別に千花を女の子として好きな訳じゃない…。

ていうか、どう伝えたって、俺がただの屑に成り下がっちゃう！
というのが理由である。

何しろ総司は、千花の告白を断ったばかり。そして、千花はそれによつて耐え難い程の心の傷を負っている。

そんな千花に総司が何を言おうとも、第三者から見たら最低野郎にしか思えない光景になってしまう。

——まずい……。何をどう切り出しても千花を泣かせる未来しか見えない……。何だこれ……。

ただ、これからも友達としてよろしくと言いたいだけなのに。いや、それですら言葉の凶器となる事は総司にも分かつてはいるが、それでも千花との関係が終わる方がもつと嫌だ。

千花に断られたならば仕方ない。それでも、何もせず関係が消滅するのだけは御免だった。

総司は何も行動に移せずにいたが、何も考えていなかった訳ではない。

しかし、どうすればいいのか、どうすれば少しでも千花を傷つけずに済むのか、それが分からないままただ時間が過ぎていった。

もう、藤原千花を傷つけない事など、出来る筈がない。それを分かっていたながら、総司は理想を追い続けていた。

本当は一日中、千花との仲直りの方法について考えていたかった。ただ、総司の立場がそれを許してはくれない。

満足に思考に集中出来ない。時間は有限で、その時間の中で総司には他にもやらなければならぬ事がある。

総司個人で留まらない、もつと多くの人を巻き込む、放棄すれば多くの人間が路頭に迷う事だつてあり得る。

四宮の後継者としての仕事、総司の思考を阻害していた。
「どうすりゃいいんだか……？」

とにかく、授業も終わった以上、もう学園に留まる理由はない。

生徒会の手伝いも、暫くは頼まれる事はないだろう、と総司は考える。総司と千花の現在の状態は、もう向こうに伝わっているだろうか。

そう思い、生徒玄関へ降りる階段の方へ足を向けた時だった。

窓の外でちらりと光る、赤いランプ。視線を向ければ、学園の敷地内に救急車が入り込んでいた。

総司が何事か、と思ったその直後、マナーモードのスマホがバイブを鳴らす。

バイブのパターンから、メッセージが来たと察した総司はアプリを起動して届いたメッセージを確認。

「かぐや…?」

メッセージの送り元はかぐやだった。どうしたのかと、かぐやの名前をタップしてメッセージを表示する。

「

そこに書かれた内容を見て、総司は足を止める。

その内容に驚くのと同時に、やはりそうだったか、と納得もしていた。

『会長が倒れた』

そこには敷地内に救急車が入ってきた理由と、気を張り続けてきた白銀に限界が訪れた事を総司に伝えてくれた。

四宮総司は背中を押したい

秀知院大学医学部付属病院。白銀が搬送された病院の名前であり、以前かぐやが倒れた時もその病院に運ばれた。

白銀が搬送された、と言ったがそれは飽くまで総司の予測であり、実際にその病院に白銀がいると聞いた訳ではなかった。

しかし白銀が倒れた場所が秀知院学園内である事を鑑みて、搬送された病院はそこで間違いないと当たりをつけた。

その予測はまさに当たっており、受付で総司は自身の名前を知らせ、白銀御行という男が運ばれてきた筈だと確認を取ると、すぐに是の返答が来た。

看護師に白銀がいる病室の番号を教えてください、すぐに向かう。
「？」

看護婦に教えてもらった番号を含めた病室が並ぶ廊下に差し掛かった時、総司は見覚えのある人物を二人見つけた。

その二人はとある病室——白銀の病室の扉の前でじっとしている。

——何してるんだ、あいつらは。

二人——かぐやと早坂は扉に何かを当てながらじっとしている。その何かが分からないまま、総司は足を進める。

そして次第に近づく程に、総司の目に二人が持っている何かがハッキリと映るようになっていって、それが何なのかを察した瞬間、総司の背筋に寒気が奔った。

「おい」

総司は二人の背後に立ち、声を掛ける。

真剣な様子で立ち尽くしていたかぐやと早坂は、驚いた様子もなく平然と振り返り、総司の方を見る。

「あら総司。来たのね」

「来たのね、じゃねえ。お前ら、そのその聴診器は誰のだ」

「さつき歩いてた医者から拝借したわ」

「今すぐ返してこい」

「嫌」

かぐやと早坂が持っていた何かとは、聴診器であつた。聴診器を扉に当てて、病室で行われている会話を盗み聞きしていたのだ。

それを察した総司は率直に、気持ちが悪いと感じた。白銀が気になるとはいえ、そこまでするのか、と恐怖を覚えた。

「ったく…」

引き下がるつもりが全くないかぐやに溜息を吐きながら、総司はドアノブに手を掛ける。

「医者がまだ話し中よ」

「知った事じゃないな」

申し訳なさはある。ただ、総司は今すぐ白銀と話をしたかつた。

何しろ、今日も総司は忙しい。スケジュールが詰まっている。ここでゆっくりはしてられない。

中にいる医者には悪いが、少し時間を貰う事にする。

ノックもせず、横開きのドアを開けて病室の中へ無遠慮に入る。

中にいた白銀、医者と看護婦が驚いた様子で中へ入って来た総司の方へ視線を向ける。

「総司…!?!」

「よお白銀。気分はどうだ?」

白銀に軽く手を上げて挨拶してから、総司は白銀の近くにいた白衣の医者へと視線を向ける。

「こうして話すのは久し振りですね、田沼さん」

「ええ。お久し振りです、総司様」

以前、かぐやが運ばれた時には話をする事が出来なかった、四宮家のお抱え医師とも挨拶を交わす。

毎年総司とかぐやは学園で行われている健康診断の他にも、この田沼が管理をする健康診断も受けている。その健康診断を行っているのが田沼だとは、かぐやは知らない事だが。

「すみません、診断の途中でしよう？でも、どうしてもこいつと話がしたくて」

「いいえ、診断はたった今終わった所です。私達は席を外すので、時間が許す限り、お話をなさってください」

そう言つて、田沼は看護婦を伴つて病室を去っていく。

開いた扉の間からは見えなかつたが、恐らく、扉の影でかぐやと早坂が聴診器を使ってこの会話も盗み聞いているのだろう。そして、これからの総司と白銀の会話も。

身内の行動に覚える恥ずかしさを隠しながら、総司はベッド横の丸椅子に腰掛けた。

「…こうなるだろうとは思つてたよ。思つたよりも粘つたけどな」

「…すまん。お前からも忠告されたのに、俺は——」

「謝る事はないさ。…最近はかなりストレス掛かる事があつただろうし」

きやつきやきやつきやと白銀とのキスについて自慢していたかぐやの顔を思い出す。

「…あれだ。愚妹が馬鹿な事をして、悪かつた」

「お、お前…まさか、知つて…!?!」

まさか、文化祭での事を総司に知られているとは思わなかつたのだろう。明らかに白銀が狼狽する。

「とりあえず、あれだ。おめでどう。これからも、妹の事をよろしく頼む」

かぐやと白銀の関係について、総司が何故知っているのかという経緯は言及せず、総司は兄として、信頼できる相手に掛け替えのない家族を託そうとしていた。

「…総司」

「どうした？」

「俺は、四宮の隣に並び立つに相応しい男なんだろうか」

そんな総司の気持ちは伝わったからなのか、息を詰まらせた白銀は、弱々しい声で総司に尋ねる。

「何だよ、急に」

「俺は…ずっと、虚勢を張り続けた。虚勢を張り続けて——人よりも時間を掛け続けて、俺は四宮の気を引いてきた。だから思うよ。今の俺を見られたら、四宮が離れていくんじゃないかって…」

「…不安か？」

弱音を吐く白銀に、今度は総司が短く尋ねた。その問い掛けに対し、白銀は無言で頷く。

「…まあお前、才能ないしな」

「…それは俺が一番分かってる事だが、もう少しオブラートに言ってくれても良いんじゃないか」

「お前が一番分かってるならオブラートに包んでも変わらねえだろ」

白銀御行には才能がない。とんでもなく不器用で、何事にも、習得するまでに人よりも多く時間が掛かる。

そんな白銀が何故、勉学という一分野においてかぐやに勝利、一度でも総司を上回る事が出来たのか。

答えは簡単だ。虚勢を張り、自身を騙して限界を超えて、時間を掛け続けたからだ。

しかし、今の白銀は虚勢を張り続け、学園の頂点に立った生徒会長ではない。ただの一人の凡人——或いはそれ以下の高校生だ。そんな自身の姿を、天才である想い人に見られたらどうなるのか。もしかしたら、軽蔑されるかもしれない。

「四宮が好きになったのは、いつでも全力で、虚勢を張ってる俺だ」
「だから、これから先も虚勢を張って、また今日みたいに倒れると」
「それくらいしないと、四宮の隣には並べない。ありのままの自分を好きになってもらうなんて奇跡は、きつとない」

俯く白銀に気付かれないように、総司は小さく溜息を吐いた。

白銀が大きな社交性の仮面を被っている事にはとつくに気付いて

いた。自身の才能では届き得ない領域に手を掛け、時間を費やし続ける事で天才達の居場所に留まり続ける。

その代償は大きい。いずれ、白銀は壊れる。総司はそう悟り、忠告をしたがそれは聞き入れられず、以降二度と、同じ忠告はしなかった。何故なら、白銀自身が頑張り続ける事を選んだからだ。切り詰めて、切り詰めて、切り詰め続けて、かぐやと同じステージに立ち続ける事を選んだ。

それが白銀の意志ならば、何を言っても無駄だと悟った総司はこの件に二度と触れなかった。

しかし、総司が思っている以上に、白銀はかぐやを大きく見ているらしい。神格化、とは違うが、それに近しくかぐやを見ていると、総司は今、感じていた。

「白銀。確にかぐやは天才だ。俺には劣るが」

「…最後の一言いる?」

「だがな。お前が思っている以上にあいつは普通の女の子だぞ」

白銀に言つてやりたかった。

かぐやはお前の悪い目つきが好きらしい、と。

かぐやはお前の底抜けに優しい所が好きらしい、と。

かぐやはお前の猫耳姿が可愛くて仕方ないらしい、と。

切っ掛けは白銀が虚勢を張り、かぐやの気を引いた所からなのは間違いない。しかし、それは切っ掛けに過ぎない。

今のかぐやはそんなのは関係なく、白銀御行の人柄に触れ、そして好きになった。

「お前はかぐやの側面しか見えてない。かぐやも、ありのままのお前を知ってる訳でもない」

白銀に教えてやりたかった。

かぐやは、お前が思っている以上に、白銀御行という男が好きだぞ、と。

「他人に見られたくない部分でも曝け出して良いと思える、そんな人と一緒になれたら、それは素敵な事だと思わないか?」

でもそれは、総司の役目ではない。総司がすべき事ではない。

だから、総司は白銀に問い掛けるだけ。

「…それは、持つてる奴だからこそ言える台詞だよ」

白銀から返って来た答えを聞いて、総司は目を瞑る。

「そうか」

分かり切っていた事だが、やはり総司では駄目だった。

それでもこんな事をしたのは——総司が白銀を、大切な友人だと思っているからだろう。

大切な友人だから、このもどかしい男の背中を押してやりたくなつたのだ。

「総司?」

「帰るよ。いつまでもここにいたら休めないだろう?」

これ以上話しても、総司が望む結果は得られない。それならば、もうここに居る意味もないし、何より白銀の体が休まらない。

時間的にもそろそろ帰らなければ、今日中に済ませておきたい仕事を明日に持ち越さなければならなくなる。

椅子から立ち上がり、白銀に声を掛けてから足を扉の方へと向ける。

「良い機会だろ。病院に居る間だけはしっかりと休んどけ」

「…ああ。ありがとう、総司」

まさか流石に、入院してる身でいつもの狂気染みたスケジュールの一日を過ごす事はないだろう。

日中ならばともかく、夜中は看護師が巡回しているし、見つければ大目玉喰らうだろうし。白銀も、そのくらいの分別はつく筈だ。

最後に軽く手を上げてから白銀に背を向けて、扉を開けて病室を出る総司。

背後から扉が閉まる音を聞いてから、軽く溜め息を吐き、天井を見上げながら口を開いた。

「で?..どうするんだ、かぐや?」

「...」

総司の傍らには、聴診器を使って病室の中の話を盗み聞いていたかぐやと早坂がいる。

二人は耳から聴診器を外す。かぐやは少しの間俯いたままだった。「仮面はそう簡単に外せない。臆病なのはお互いさまという事ですか」

ポツリと、呟きを漏らす早坂と、総司の視線がかぐやに注がれる。

「…私は、会長の頑張る姿が好き。だけど、それが全てじゃない」

「…」

「会長に伝えるわ。私の気持ちを——全部、あの人に曝け出す」

ああ——大丈夫だ。

かぐやの顔を見て、総司は確信する。

四宮かぐやは臆病だ。総司と一緒に怖がり、仮面を被り、他人を遠ざける。

そんなかぐやが初めて、総司以外で仮面を外した姿を見せても良いと思える人が出来た。

(覚悟しとけよ、白銀。こうなった四宮かぐやからはもう、逃げられないぞ)

さて、未だに仮面を被り続けようとする白銀はこのかぐやに対してどうするのだろうか。

きつと、尻尾を巻いて逃げようとするのだろう。情けない自分を見せたくなくて、本当の自分を見せるのが怖くて仕方ないまま、逃げ出すのだろうか。

しかし、かぐやからは絶対に逃げられない。結末はもう見えていく。

だから総司は、少しだけ同情しながら、心の中でエールを送る。

(年貢の納め時だ白銀。観念して、全部かぐやに曝け出すんだな)

ちらりと白銀の病室の方を見遣ってから、総司はその場から離れる。

もう出来る事は何もない。早く帰って、仕事を片付けてしまおう。

「やあ、総司くん。久しぶりだね」

「うっわ」

なお、エレベーターの中から現れた変な中年のせいで一部仕事は明日に持ち越されたのは、別の話である。

早坂愛は単純

「クリスマスプレゼントって、何をあげたら正解なのかしら？」

こうして総司がかぐやに呼び出されたのは何度目か、両手どころか
いよいよ数字の桁が四つくらい行くんじゃないかとすら思えてくる。
「心が籠もってたら何でもいいんじゃないですか？」

しかし、総司よりももつと大変なのは、かぐやの質問に答える早坂
だ。

総司への呼び出し回数は相当なものだが、仕事の関係で話し合いに
参加できない事もそれなりにある。だが早坂は違う。本当に、早坂が
かぐやの相談に乗った回数は千を超えているのではなからうか。

「はあ…、全く早坂は。今はそんな低いレベルの話をしてるんじゃないの」

「低いレベル…」

相談を持ち掛けてきた相手に言葉の刃を突き立てられ、傷つけられ
ても毎回親身になってかぐやに寄り添うその姿はメイドのお手本と
いっていいだろう。

かぐやが吐いた一言を反芻しながらハイライトを失う早坂の瞳を
見ながら、総司は改めて早坂への尊敬を抱いた。多分、総司が同じ立
場ならかぐやを引っ叩いている。

「これを貰ったらついテンションが上がって、ついついキッスをして
しまうような———そんなプレゼントを私は求めてるのよ。：
キッス未経験の早坂にはこの話は早かったかしら」

「…」

早坂が総司を見る。まるで、何かの許可を求めているかのように。総司は首を横に振った。

心情的には早坂に味方をしてやりたい所だが、早坂が求めている行動を実際にしてしまえば、早坂に待つてゐるのは破滅である。

一時の激情に流されてもいい事ではない。総司は心を鬼にして、早坂の要望を振り払った。

「でも一応貴女にも聞いておこうかしら。早坂はどんなプレゼントが欲しいの？」

「ノイズキャンセリングヘッドホン。もしくは耳栓ですかね」

「…早坂の趣味は特殊だから参考にならないわね」

言外に、かぐやの声をノイズと言われている事に当の本人は気付かない。

(ヘッドホンか…)

そして、ここまで一言も発さず会話に参加していなかった総司は、早坂が口にしたヘッドホンという一言を頭の中で繰り返した。

「ちなみに総司は——」

「自分で考えろ。俺はこの件に手を貸さんぞ」

「…なら、どうしてここに来たのかしら？」

「お・ま・え・が、ひたすらメツセージを投下してくるからだろうが!」
元々、総司はこの話し合いに参加する気はなかった。かぐやと白銀の関係について、これ以上介入するつもりはなかったからだ。

それが何故、この場に総司が来ているのか。それは、先程の総司の台詞の通りだ。

初め、早坂を通しての呼び出しを総司は断った。それからというもの、総司のスマホに一分毎に送り付けられるかぐやからのメツセージ。総数、およそ三十件。

総司は耐えられなかった。

「男心をくすぐるようなプレゼントが欲しい…。男に聞けば手っ取り早いと思っただのに…」

「なら丁度いい奴がいるだろ。気軽に相談が出来て、もしかしたら今

頃、お前と同じ悩みを持つてるかもしれない奴が」

「そんな都合のいい男が居てたまるもの——」

ハツ、と目を見開いたかぐやは、何かを思案するように口元に手を当てる。

「どうやら、総司が言った丁度いい奴が誰なのか、思い当たつたらしい。」

(さて、かぐやはもう大丈夫として……)

これなら、もう総司と早坂の手は必要ないだろう。

その代わり、一人巻き込まれる事となつたが——まあその人も今頃かぐやと同じように悩んでいるだろうし、結果オーライという事で、と誰にも届かない言い訳を心の中でしながら、総司は早坂の方へ歩み寄つた。

「早坂。お前、今日の仕事は全部他の人にやつてもらえ。引継ぎは俺がしとくから」

「え？ど、どうしたんですか急に」

かぐやの方はかぐやに全部任せるとして、総司も総司で悩んでいる事があつた。それは、かぐやには相談しづらい悩みだつた。

何しろ総司は、かぐやからのプレゼントに関する相談を突っぱねたのだから。

「出掛けるぞ」

「へ？」

「プレゼント。俺も買わないといけないから、手伝つてくれ」

「——」
この時、総司は早坂の目が死んだ事に気付かなかつた。

かぐやの総司を見る瞳が虚無に染まつた事にも気付かなかつた。

二人の心情など知らぬまま、総司はかぐやの部屋を出る。

「…かぐや様。私は喜ばばいいんでしょうか。それとも、怒ればいいんでしょうか」

「…さあ？とりあえず、貴女には同情するわ」

さて、出掛ける準備をするか——なんて考えている総司には、この二人の間で行われた会話など知る由もなかつた。

クリスマスイブ。夜になれば街はジングルベルとイルミネーションで彩られ、恋する者達はロマンティックな時間に沈み込んでいくのだろう。

だが、現在の時刻は午後二時。まだそんなロマンティックな雰囲気になるには早い時間帯。

とはいえ、早くも街は恋人、或いは乗りに乗った友人と思われる集まりで賑わっていた。

さて、そんな賑わう街並みの中を、総司は早坂と並んで歩いていた。傍から見れば、大抵の人は恋人同士かと視線を向けるだろう。

「でき。今日の藤原家のパーティーでプレゼント交換があつて。それとは別に、千花にちよつと何か贈ろうと思つててさ」

「へー、そおなんですか」

「だけど、お前とかぐや以外にプレゼントなんてあげた事ないし。異性の友人に贈るプレゼントはどんなのが良いか、意見が欲しいんだ」

「へー、そおなんですか」
今の会話で分かるだろうが、総司はクリスマスイブである今日、予定がある。その予定とは、藤原家にて行われるクリスマスパーティーに参加するのだ。

千花から直接誘いを受けた訳ではないのだが、総司と違って誘われていたかぐやからその話を聞き、自分も参加出来ないかと千花に尋ねて貰い、了承を得て総司もパーティーに参加する事となった。

つい最近、告白されて振った相手の家で行われるパーティーに参加するなんて、第三者から見れば正気を疑う行為だろう。

総司も内心気まずさを覚えているし、何より自分でもどうなんだと思っている。

ただ、それを振り切つてでも、総司には千花に伝えたい事がある。

「どーして私なんですかね？他に相談できる女子の友人は——
居ないんですね、総司様には。忘れてました」

「…お前、さつきから何で怒ってるの？」

「これつつつつつつつつつつぽちも怒ってませんけどっ!?」

「怒ってんじゃない。絶対怒ってんじゃない」

しかしプレゼントを渡すといつても、総司は異性へ贈り物をするなんて、かぐやと早坂くらいにしか経験がない。

一応、四宮家の客人に何かしらの品物を贈った事はあるが、総司の中でそれはカウントされていない。

あれと、かぐやや早坂へのプレゼントを同列に扱うなど、総司にはあり得ない事だから。

話が脱線したが、要するに総司は、異性へのプレゼントは家族にしか贈った事がないのだ。異性の友人なんて、千花や圭以外に出来た試しがない。

伊井野とは少し話すようになったが、まだ友人といえる程親しくはない。つまり、総司は異性の友人が二人しか——

(やめよう。ただでさえ同性の友人だって少ないのに、悲しくなる。それよりも今は——)

精神が傷つく前に思考を切り、総司は横目で隣を歩く早坂を見る。理由はさっぱり分からない。だが、どうやら早坂は怒っているらしい。

女心は複雑だとよく聞くが、早坂の心は複雑すぎやしないだろうか。ただ、異性へ贈るプレゼントの相談をしただけだというのに。

相談くらい乗ってくれたって良いじゃないか、器が小さい女めと、殴りたいこの鈍感系主人公は思った。

(…やばい)

なお、一方の早坂だが、実のところ総司が思っている程怒ってはいなかった。

いや、怒ってはいいるのだが。何しろ想い人が他の女に贈るプレゼントについて悩んでいて、ましてやその相談をよりにもよって自分にしてくるのだから。

しかし、しかしだ。

今日はクリスマススイブ。街中はまだ昼間故にイルミネーションこそ光っていないものの、それでもロマンティックを感じさせる飾り物に彩られている。

そんな中を想い人と、二人並んで歩いている。

(これって、デートっぽい…っ！)

こんなの、第三者から見ればデートでしかないだろう。

相手がこれっぽっちもそんな意識をしていないのが少し気に食わないが。

この場に来ている理由もかなり気に食わないが、それを打ち消すに足る充足を今、早坂は感じていた。

だが、心を満たすその気持ちに浸っている訳にもいかない。

気に食わないが————本当に気に食わないが、従者として主人の悩みの解消に協力するのは義務だ。

それに、総司の中で何かが変わろうとしているのを、かぐやと同じく早坂もまた、感じている。

その変化の予兆を、これもかぐやと同じく早坂も、嬉しく感じている。

だから、早坂はこの場にいる。

二人はショッピングモールの中へと入り、エスカレーターで目的のフロアへと向かう。

そこにはたくさんさんの雑貨がずらりと並んでおり、恐らく総司と同じ目的と思われる人達が多くいた。

「さて、と…。どれにすればいいんだか…」

「かぐや様にも言いましたけど、心が籠もっていれば何でもいいと思いますよ。特に、あのお二人には」

「そう、なのか…？」

あまりピンと来ていない様子の総司に、早坂は小さく溜息を零す。

変わろうとしているのは確かなのだが、まずはその鈍さを変えて欲しいところだ。

「ええ。かぐや様や…私へのプレゼントを選ぶ時くらいに気軽に考えれば良いと思います」

総司は毎年、クリスマスにはかぐやと早坂にプレゼントを買ってくる。

そのプレゼントが嬉しくない訳じゃない。むしろ逆だ。しかし、自分のプレゼントを総司が選ぶ時、今のよう真剣に思案しているのと問われれば——恐らく、していない。

それが少し複雑で、早坂は自分で言っていて悲しくなった。

「気軽について。まるで早坂のプレゼントを俺が適当に選んでるみたいに言うな」

「適当に選んでる、なんて思っはけません。ですが、今みたいに真剣に考えて選んでるのは、疑わしく思っています」

「真剣に選んでるに決まってるだろ。ただ、お前とかぐやはずっと一緒にいるんだから、何を欲しがってるかなんて自然と知れるし、分かるんだよ」

早坂自身にそんなつもりはなかったが、どうも言葉が刺々しくなっていました。しまった、と思い、訂正しようとする前に、総司は商品棚から猫の貯金箱を手に取りながら言った。

その思わぬ返答に、早坂の呼吸が一瞬止まる。

「かぐやは勿論だけど、お前とも何年同じ家で過ごしてると思ってるだ。…言つとくけど、お前が思ってる以上に俺は、お前の事を知って

ると思うぞ?」

ああ――。

その言葉の中に、早坂が望むような、色のついた意味なんてないと分かっていくのに。好きな人に、自分の事は分かっているなんて、そんな自信過剰ともとれる単純な言葉を言われるだけで、こんなにも嬉しくなるなんて。

「おい。何で後ろを向く?」

「すみません。ちよつとそっぽを向きたくなくなってしまった」

「…まあいいけど、何か良いのがあったら教えてくれ」

想い人が選んでいるのは自分へではなく、恋敵へのプレゼントなのに。

(私って、こんな単純だったんだ)

ちよつと想い人に良い事を言われるだけでこんなに嬉しくなって、さつきまで抱いていた怒りなんて、どこかに行ってしまった。

まるで、浮気DV男に振り回される駄目女じゃないか。

だけど、嬉しいと感じてしまう心は止められない。

(どうして…。私は、早坂なんだろう)

だから、思う。

(私も、藤原さんや会長の妹さんみたい…。この人の友達になれてたら――)

総司の家族ではなく、友達になれていたら――

(少しは女の子として、意識されてたのかな?)

今頃、自分はどうなっていたのだろうか。

今みたいに、真剣な顔をしながら、自分へ贈るプレゼントについて悩んでくれていたのだろうか、と。

「助かったよ、早坂。お陰で良いのが買えた」

「お役に立てたのなら良かったです」

総司と早坂が選んだプレゼントを買い終えて、デパートの外に出た時には辺りは暗くなり始めていた。

ここへ来る途中では光っていなかったイルミネーションも、今は点灯しており、クリスマスの街並みを美しく彩っている。

これから総司は、パーティーに参加するため、買ったプレゼントを持って藤原家へと向かう。

一方の早坂は、総司と別れて屋敷へと帰る。今日の仕事は総司の口添えによつてなくなり、半休を貰ったに等しい状態なのだが、早坂はパーティーには参加できない。

千花は早坂の立場を知っているが、白銀兄妹と千花の妹、萌葉は何も知らない。

友人としてパーティーに誘った、という体で連れていかうかとも総司は考えたのだが、結局は止めておいた方が良いという結論に至った。

「それでは、私はこれで」

「ああ。そんじや、これ」

それぞれ、この後の目的地は別々だ。早坂の方にはもつと一緒に居たかった、という名残惜しい気持ちがあったりもするのだが、総司に約束がある以上、邪魔をする訳にもいかない。

一度お辞儀をしてから踵を返そうとして、総司が先程買ったプレゼントが入った紙袋から何かを取り出し、差し出してきた為に早坂は歩こうとした足を止める。

「…これは？」

「プレゼント。中身はノイズキャンセリングヘッドホンだ」

紙で包装されたそれは、総司から早坂へのプレゼント。

そして、こういう時プレゼントを贈る側は中身を公表するのを避けて、「中身は家に帰ってから確かめて」とか言うのだろうか——
総司は例外だった。

「…何でヘッドホンなんですか？」

「早坂が使ってるヘッドホン、買ってから結構経ってるだろ。安心しろ、そのヘッドホンは最新式で結構する奴だ」

「…そう、ですか」

「んじや、俺はもう行くわ。早坂は気を付けて帰るんだぞ」

「…はい。総司様も、お気をつけて」

総司の背中が離れていくのを、早坂はその場で立ち尽くしたまま見つめていた。

やがて、総司の姿が見えなくなってから、早坂は総司がくれたプレゼントに視線を落として——

「…ふふっ」

小さく笑みを零した。

プレゼントを貰ったのは初めてではない。先程も言ったが、クリスマスは毎年、それに誕生日にだってプレゼントは貰っている。だから、これは毎年同じなのだ。

「♪」

総司にプレゼントを貰ってからは必ず、舞い上がる程に嬉しくなる。

そしてこれまた、早坂は毎年同じ事を思うのだ。

早坂^{自分}愛は、何て単純な女なのだろう、と。

先程と同じように、しかし今度は笑みを浮かべながら、再び早坂は思った。